平成30年度

学生による授業改善のための
授業評価結果に関する
報告書

公表用

西九州大学
短期大学部
NISHIKYUSHU UNIVERSITY JUNIOR COLLEGE

目　次

1.　「学生による授業改善のための授業評価」の取り組みについて
…　2

2.　実施方法/平成30年度学生による授業評価アンケートの調査用紙等
…　3

3.　学生による授業改善のための授業評価アンケート結果の考察
…　12

4.　平成30年度授業評価アンケート評価結果の総括
…　147

・FD委員会・FD専門委員会構成
…　161

「学生による授業改善のための授業評価」の取り組みについて

「学生による授業改善のための授業評価」の取り組みの目的は、各授業に対する受講学生の意見や自己評価等の情報を収集し、それらの集約データを各科・教員一人ひとりが分析を行い、授業を振り返り、反省、考察するなかで今後の教育方法などの改善策を立案、実施することである。

本学における「学生による授業改善のための授業評価」の取り組みは、平成13年度より実施され、学生のニーズにあったより質の高い授業の実施を目指し少しずつ改善がなされてきた。平成21年度からは、西九州大学と同一内容の授業評価アンケート調査が実施されるものとなり、教員間及び大学との教育内容の共有を図りながら授業の質、学生の能動的・主体的学修その成果を高めるための様々な取り組みの実現に向けて改善を行っている。平成29年度から、授業参観が実施され、更なる改善が期待されたため、平成31年度より実施方法を変更し実施するものとなった。

本年度も、学生による授業改善のための様々な取り組みの実現に向けて各科・教員が授業を振り返り考察を行った。以下、その考察を行い学内用報告書としてとりまとめる。報告書の公表においては、授業担当者を伏せてとりまとめる。

平成30年度　FD委員会・FD専門委員会

平成３０年　５月

授業担当教員　各位

西九州大学短期大学部
ＦＤ委員会
委員長　　平田　孝治

学生による授業改善のためのアンケートの実施について（お願い）

平素より本学ＦＤ活動につきまして、先生方におかれましては、多大なるご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今年度も学生による授業改善のためのアンケートを実施いたします。

今年度前期は、学期の中間に１回、学期末に１回の計２回実施いたします。学期の中間（第１回目）に実施するアンケートは、自由記述式の調査のみを実施し、学期末（第２回目）にＷＥＢアンケートを実施します。学期の中間に実施する自由記述式の調査は、当該学期の授業の改善に役立てることを目的とし、先生方に結果を返却いたします。

つきましては、下記のとおりアンケートを実施したいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

なお、ＷＥＢアンケートの質問項目には、先生方が自由に質問できる項目を設けております。質問したい事項（４段階評価で集計されます。）があれば実施日までにご検討ください。特になければ、ご検討いただく必要はございません。

また、本アンケート実施結果（自由記述除く）については、集計後、各先生方へ周知するとともに学生も閲覧できるよう本学図書館でも公開し、授業評価実施報告書作成のため集計結果の分析と次年度に向けての取り組みについて報告書作成のご依頼をさせていただきたいと存じますので、ご了承をお願いいたします。取りまとめた報告書は、学内外に公表いたします。

記

１．アンケート項目　：　学期の中間（第１回目）：自由記述（匿名式）
※別紙「学生による授業改善のためのアンケート（中間調査）」参照
学　期　末（第２回目）：別紙「学期末調査　評価項目」参照

２．授業評価実施期間：　学期の中間（第１回目）：平成３０年５月２２日（火）～平成３０年６月８日（金）
学　期　末（第２回目）：平成３０年７月９日（月）～平成３０年７月２７日（金）

３．実施依頼書締切：　学期の中間（第１回目）：実施前日までに実施依頼書（別紙）を教務課迄提出してください。
学　期　末（第２回目）：学生ポータルサイトでの Web 調査になりますので、期間内に随時実施していただくか、アンケートへの回答を促していただくようお願いいたします。学生には掲示板及び学生ポータルサイトで回答要領を周知していますが、学生用の回答要領（別紙）が必要な場合は実施日３日前までに教務課に依頼をお願いいたします。

４．授業評価実施方法：　別紙の「学生による授業改善のためのアンケート実施要領」をご参照ください。

５．授業評価対象科目：　学期の中間（第１回目）については、任意の実施となります。学期末（第２回目）については、全科目が対象となります。

以上

平成３０年　５月

授業担当教員　各位

西九州大学短期大学部
ＦＤ委員会
委員長　　平田　孝治

学生による授業改善のためのアンケートの実施について（お願い）

平素より本学ＦＤ活動につきまして、先生方におかれましては、多大なるご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今年度も学生による授業改善のためのアンケートを実施いたします。

今年度前期は、学期の中間に１回、学期末に１回の計２回実施いたします。学期の中間（第１回目）に実施するアンケートは、自由記述式の調査のみを実施し、学期末（第２回目）にＷＥＢアンケートを実施します。学期の中間に実施する自由記述式の調査は、当該学期の授業の改善に役立てることを目的とし、先生方に結果を返却いたします。

つきましては、下記のとおりアンケートを実施したいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

なお、ＷＥＢアンケートの質問項目には、先生方が自由に質問できる項目を設けております。質問したい事項（４段階評価で集計されます。）があれば実施日までにご検討ください。特になければ、ご検討いただく必要はございません。

また、本アンケート実施結果（自由記述除く）については、集計後、各先生方へ周知するとともに学生も閲覧できるよう本学図書館でも公開し、授業評価実施報告書作成のため集計結果の分析と次年度に向けての取り組みについて報告書作成のご依頼をさせていただきたいと存じますので、ご了承をお願いいたします。取りまとめた報告書は、学内外に公表いたします。

記

１．アンケート項目　：　学期の中間（第１回目）：自由記述（匿名式）
※別紙「学生による授業改善のためのアンケート（中間調査）」参照
学　期　末（第２回目）：別紙「学期末調査　評価項目」参照

２．授業評価実施期間：　学期の中間（第１回目）：平成３０年５月２２日（火）～平成３０年６月８日（金）
学　期　末（第２回目）：平成３０年７月９日（月）～平成３０年７月２７日（金）

３．実施依頼書締切：　学期の中間（第１回目）：実施前日までに実施依頼書（別紙）を教務課迄提出してください。
学　期　末（第２回目）：学生ポータルサイトでの Web 調査になりますので、期間内に随時実施していただくか、アンケートへの回答を促していただくようお願いいたします。学生には掲示板及び学生ポータルサイトで回答要領を周知していますが、学生用の回答要領（別紙）が必要な場合は実施日３日前までに教務課に依頼をお願いいたします。

４．授業評価実施方法：　別紙の「学生による授業改善のためのアンケート実施要領」をご参照ください。

５．授業評価対象科目：　学期の中間（第１回目）については、任意の実施となります。学期末（第２回目）については、全科目が対象となります。

以上

平成　　年　　月　　日提出

平成３０年度前期学生による授業改善のためのアンケート（中間調査）実施依頼書

本依頼書には、授業科目名を正確にご記入いただき、実施日（時限）をご記入ください。

【１回目（学期中間実施分）：平成３０年５月２２日（火）～平成３０年６月８日（金）】（任意）

授業担当教員氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【実施授業科目】

No.	授業科目 ※科目名は正確にご記入ください。	学科・専攻・コース等	学年	開講曜日	開講時限	受講者数	調査実施日			
							月	日	曜日	時限
1	（例）日本国憲法	全学科	1	水	1	８０	6	１５	水	1
1										
2										
3										

提 出 先：教務課
提出締切：実施前日迄

平成３０年１０月

授業担当教員　各位

西九州大学短期大学部ＦＤ委員会
委員長　　平田　孝治

学生による授業改善のためのアンケートの実施について（お願い）

平素より本学ＦＤ活動につきまして、先生方におかれましては、多大なるご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今年度も学生による授業改善のためのアンケートを実施いたします。

今年度後期は、学期の中間に１回、学期末に１回の計２回実施いたします。学期の中間（第１回目）に実施するアンケートは、自由記述式の調査のみを実施し、学期末（第２回目）にＷＥＢアンケートを実施します。学期の中間に実施する自由記述式の調査は、当該学期の授業の改善に役立てることを目的とし、先生方に結果を返却いたします。

つきましては、下記のとおりアンケートを実施したいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

なお、ＷＥＢアンケートの質問項目には、先生方が自由に質問できる項目を設けております。質問したい事項（４段階評価で集計されます。）があれば実施日までにご検討ください。特になければ、ご検討いただく必要はございません。

また、本アンケート実施結果（自由記述除く）については、集計後、各先生方へ周知するとともに学生も閲覧できるよう本学図書館でも公開し、授業評価実施報告書作成のため集計結果の分析と次年度に向けての取り組みについて報告書作成のご依頼をさせていただきたいと存じますので、ご了承をお願いいたします。取りまとめた報告書は、学内外に公表いたします。

記

１．アンケート項目　：　学期の中間（第１回目）：自由記述（匿名式）
※別紙「学生による授業改善のためのアンケート（中間調査）」参照
学　期　末（第２回目）：別紙「学期末調査　評価項目」参照

２．授業評価実施期間：　学期の中間（第１回目）：平成３０年１１月７日（水）～平成３０年１１月２９日（木）
学　期　末（第２回目）：平成３１年１月７日（月）～平成３１年１月２５日（金）

３．実施依頼書締切：　学期の中間（第１回目）：実施前日までに実施依頼書（別紙）を教務課迄提出してください。
学　期　末（第２回目）：学生ポータルサイトでの Web 調査になりますので、期間内に随時実施していただくか、アンケートへの回答を促していただくようお願いいたします。学生には掲示板及び学生ポータルサイトで回答要領を周知していますが、学生用の回答要領（別紙）が必要な場合は実施日 3 日前までに教務課に依頼をお願いいたします。

４．授業評価実施方法：　別紙の「学生による授業改善のためのアンケート実施要領」をご参照ください。

５．授業評価対象科目：　学期の中間（第１回目）については、任意の実施となります。学期末（第２回目）については、全科目が対象となります。

以上

学生による授業改善のためのアンケート調査の実施要領

【中間調査】（任意）

〈調査期間〉
平成 30 年 11 月 7 日（水）～平成 30 年 11 月 29 日（木）

〈調査当日の主な流れ〉
アンケートの実施に際しては、配布・記入・回収時間等を考慮し、授業時間内に回収できるよう時間を調整ください。

1．事前に回収担当学生を最低 2 名指名する。
2．アンケート用紙を学生に配布
3．アンケートの記入について指示
4．記入時は教室から退出
5．回収担当学生が回収後、教務課に提出
6．後日、教務課から教員レターケースへ配布

【学期末調査】（学生ポータルサイトでの Web 調査）（全科目対象）

〈調査期間〉
平成 31 年 1 月 7 日（月）～平成 31 年 1 月 25 日（金）

〈調査当日の主な流れ〉
アンケートの実施に際しては、配布・ポータルサイトアクセス・回答入力時間等を考慮し、授業時間内に回答できるよう時間を調整ください。アンケートの回答入力に際し、学生ポータルサイトへのアクセスが必要となります。授業時間内に回答させる際は、学生のスマートフォン等の端末使用を許可願います。調査の実施に際しましては、先生方からのご指導をお願い申し上げます。

1．「学生による授業改善のためのアンケート調査の実施について」を学生に配布
※既に掲示板及び学生ポータルサイトで周知していますので、必要なければ省いて結構です。
2．アンケートの回答について指示
質問 1～18 は共通の質問項目です。質問 19～25 は、各先生方の任意の質問枠となっておりますの必要に応じてご準備いただき、学生に指示ください。
※学生が ID･パスワード忘れ（学生支援課窓口で対応しています）ほか、時間内に回答できない場合、回答入力締切日（実施期間）を学生にお伝えください。
3．FD 委員会（教務課）で集計確認の後、集計結果を公開（お知らせ）いたします。
4．集計結果は、学生ポータルサイトの教員管理画面上のタブ「IR」→「授業評価」からアンケート結果を閲覧・ダウンロードすることができます。

※ 授業時間中 Wi-Fi に接続できず、学生ポータルサイトにアクセスできない場合等においては、授業時間外に各自で回答するようご指導をお願いいたします。（学内においては、情報処理室・図書館の PC を使用することができます。）

以上

学生による授業改善のためのアンケート（中間調査）

【西九州大学・西九州大学短期大学部】

アンケート実施日	平成　　年　　月　　日実施		
授業科目名		担当教員	先生

このアンケートは、授業の内容をより充実したものに改善するための大切な資料です。

あなたの成績評価には一切影響しません。また、オムニバス（複数の先生が担当される）科目で本日担当以外の先生についても何かお気づきの点があれば、以下にご記入下さい。

【この授業について気づいたことや要望等を自由に記入して下さい。】

ご協力ありがとうございました。

平成　　年　　月　　日提出

平成３０年度後期学生による授業改善のためのアンケート（中間調査）実施依頼書

本依頼書には、授業科目名を正確にご記入いただき、実施日（時限）をご記入ください。

【１回目（学期中間実施分）：平成３０年１１月７日（水）～平成３０年１１月２９日（木）】（任意）

授業担当教員氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【実施授業科目】

No.	授業科目 ※科目名は正確にご記入ください。	学科・専攻・コース等	学年	開講曜日	開講時限	受講者数	調査実施日			
							月	日	曜日	時限
1	（例）化学（生活の化学）	全学科	1	水	2	４０	１１	１５	水	2
1										
2										
3										

提 出 先：教務課
提出締切：実施前日迄

授業評価アンケート（学期末調査）　評価項目

（学生ポータルサイトでの質問項目）

（あなた自身の授業参加態度について）

□Q1.　授業は何回欠席しましたか。

【Q1 の評価基準：４⇒０回、３⇒1 回、２⇒2～3 回、１⇒4 回以上】

□Q2.　シラバス（授業計画）を活用しましたか。

□Q3.　授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。

□Q4.　あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。

（例えば、ノートをまとめる。テキスト・参考書の活用。教員への質問。予習・復習等）

【Q2～4 の評価基準：４⇒そう思う、３⇒だいたいそう思う、２⇒あまりそう思わない、１⇒そう思わない】

□Q5.　あなた自身の総合自己評価

【Q5 の評価基準：４⇒良い、３⇒やや良い、２⇒やや悪い、１⇒悪い】

（授業内容・方法について）

□Q6.　シラバス（授業計画）について説明がありましたか。

□Q7.　教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。

□Q8.　授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。

□Q9.　授業は分かりやすくする工夫がされていましたか。

□Q10.　視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。

□Q11.　教科書・配布資料等は役に立ちましたか。

□Q12.　声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。

□Q13.　授業の進む速さは適切でしたか。

【Q6～13 の評価基準：４⇒十分、３⇒だいたい十分、２⇒やや不十分、１⇒不十分】

（教員の対応について）

□Q14.　学生の質問等に誠実に対応しましたか。

□Q15.　公平に学生に対応しましたか。

□Q16.　教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。（コメントを付したレポートの返却、学生からの質問を授業で取り上げるなど）

□Q17.　教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。

【Q14～17 の評価基準：４⇒そう思う、３⇒だいたいそう思う、２⇒あまりそう思わない、１⇒そう思わない】

（総合評価）

□Q18.　この授業を総合評価してください。

【Q18 の評価基準：４⇒良い、３⇒やや良い、２⇒やや悪い、１⇒悪い】

（教員による自由項目）※授業担当教員からの指示に従ってください。（指示があれば記入すること。）

□Q19.

□Q20.

□Q21

□Q22

□Q23

□Q24

□Q25

【Q19～25 の評価基準：４⇒良い、３⇒やや良い、２⇒やや悪い、１⇒悪い】

（自由記述）

平成３０年１２月

授業担当教員　各位

西九州大学短期大学部
ＦＤ委員会
委員長　平田　孝治

平成 30 年度前期「学生による授業改善のためのアンケート」の実施結果について

平素から本学の教育活動にご指導・ご鞭撻を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、今年度前期に実施していただいた「学生による授業改善のためのアンケート」につきまして、集計結果を取り纏めましたので、各自ポータルサイトでご確認をお願いいたします。

このアンケート結果により、学生の授業に対する理解度や問題点を把握し、授業改善にお役立ていただければ幸いです。

また、アンケート結果の分析及び評価の報告依頼につきましては、後期授業科目のアンケート結果が纏まり次第、年度末にご案内差し上げる予定ですが、今回結果が出ている前期科目についてはコメント入力ができる状態になっておりますので、前もってご提出いただいても結構です。その際のマニュアル・参考資料は下記の通りですので、よろしくお願いいたします。

記

＜コメント入力用マニュアル・参考資料＞

・集計結果の分析及び評価コメント入力 Web マニュアル
・授業評価アンケート質問項目
・学科別平均値

＜マニュアル・資料格納場所＞

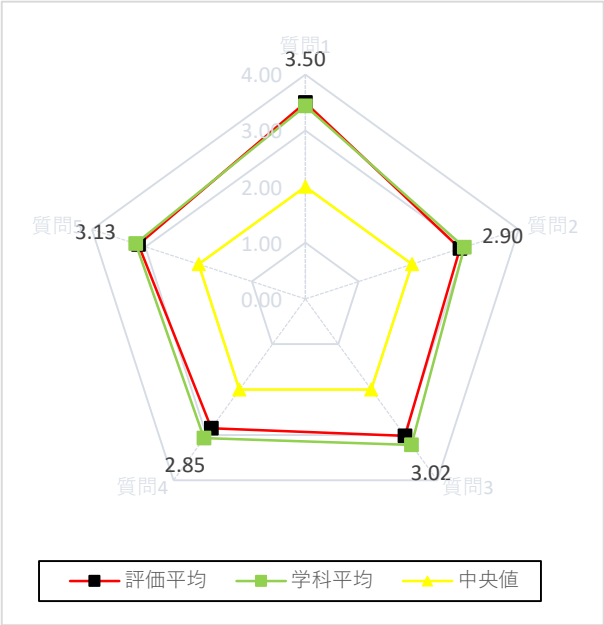
全学教職員（¥¥nobita（x:））　⇒　●●●【短大】授業評価に関する報告書●●●
⇒　報告書様式&記入マニュアル等　⇒　H30 年度

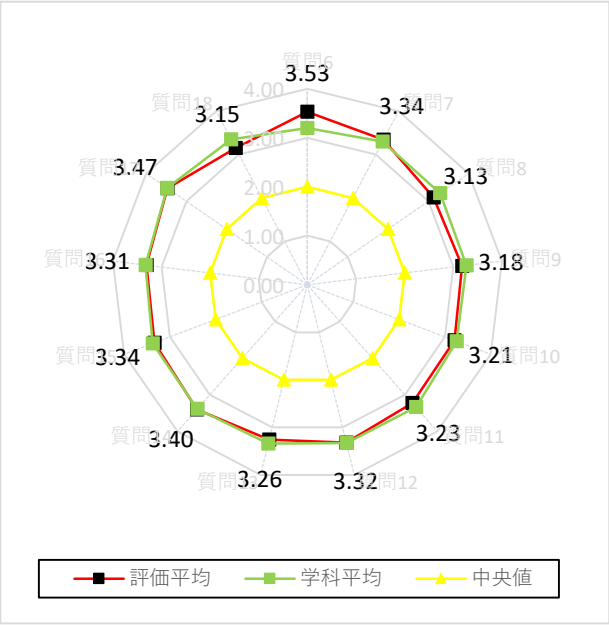
以上

学生による授業改善のための授業評価アンケート結果の考察

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		あすなろう	71名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

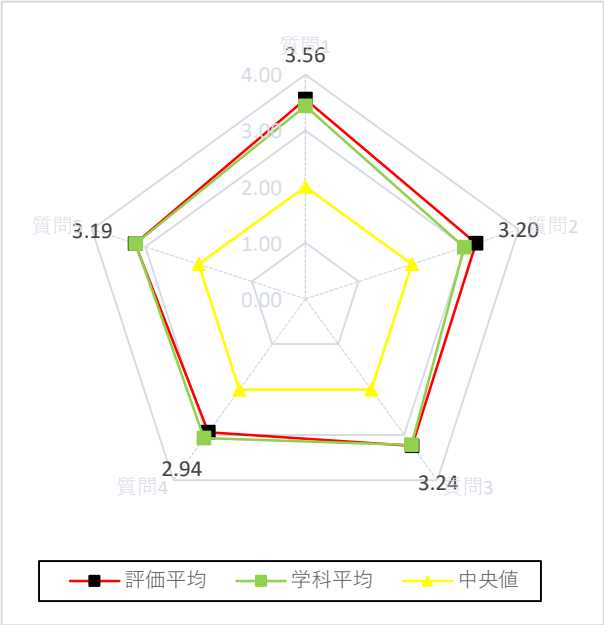
学科の平均とほぼ同じ評価である。自己評価には1や2が多くつけられてたが、教員側への評価については1や2の評価はなかった。シラバスについては以前と違い認識してもらうことができている。2についた項目は、興味関心、わかりやすい工夫、視聴覚、板書、公平さ、双方向からのやり取り、授業の総合評価であった。自由記述には、いろいろな事が学べた、楽しかった、役に立ったという記述が多かったが、数人は学べたかどうかわからない等の記述も見られた。記述の欄は半数以下の学生が質問がない項目にも回答をしているので、よく読まずに回答していることもありえる、

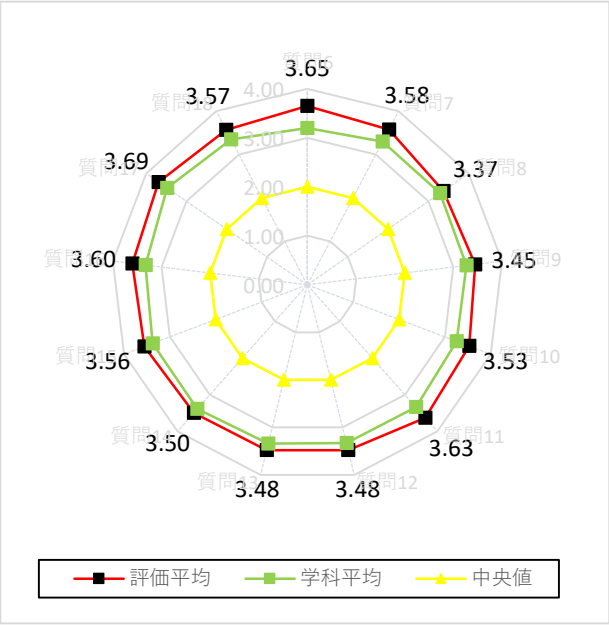
（３）次年度に向けての取り組み

大まかな授業の流れはこのままで行う。よりわかりやすい内容になるように工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		あすなろう	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。
本授業は、授業内容に応じて、短大全体、学科別、小グループとさまざまな学習形態をとっている。
シラバスで学習内容や学習形態を確認しながら受講を進める必要があるため、
シラバスの活用は学科平均より高い結果となっている。

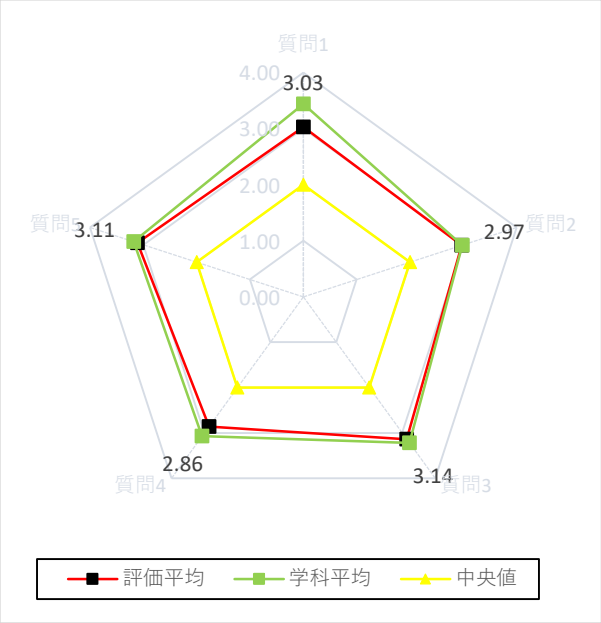
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
全体的に学科平均よりも高い評価結果となっている。
興味・関心を持たせる工夫、学生の質問への対応などを見直すことで、
さらに高い評価を得ることができるだろう。
引き続き、教材研究にもとづく授業準備、学生中心の授業の在り方を模索する必要がある。

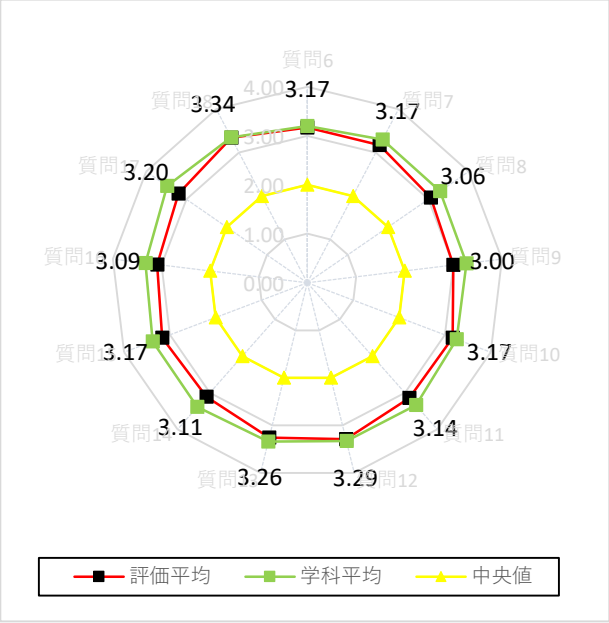
（３）次年度に向けての取り組み

全体で行う授業内容であっても、同じ学科・コースの学生間での関わりが多い。
留学生も増えていることから、学科・コースを越えた学生間のつながりが生まれるよう工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅰ	24名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

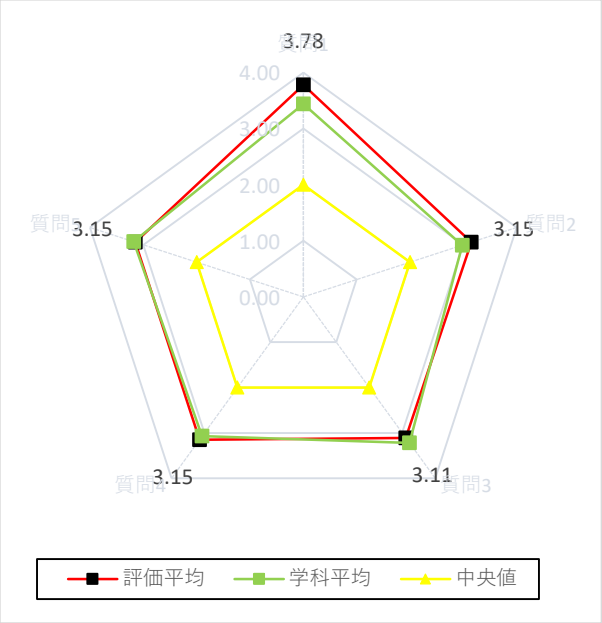
共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅰの授業評価は共通科目平均と比較すると若干低い値であった。この評価の中で高い評価が「公平に学生に対応している」であった。この科目は食育推進活動と学生自身のキャリア教育等も含まれているので対応する教員が一律でないため評価のコメントが難しい。

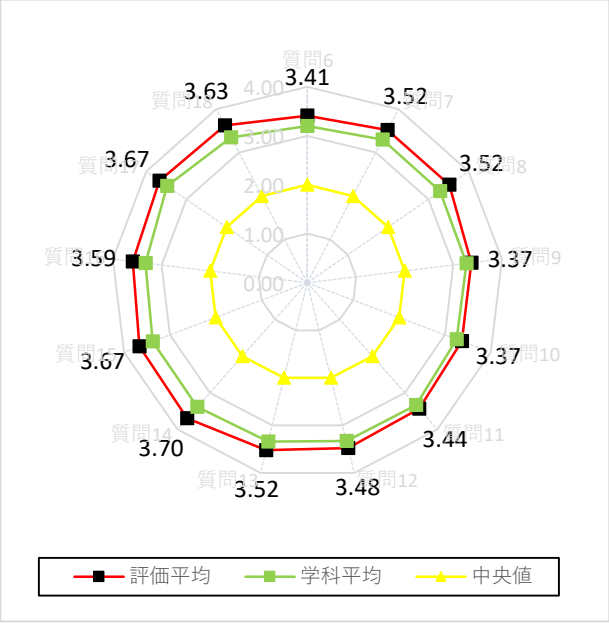
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みは次の通りである。
①学生が積極的に学ぶことができるように目的意識を明確にさせる。
②授業を計画的に準備しすすめさせる。
④課題発見（気づき）とその問題解決ができるようになる。
⑤授業を通してコミュニケーション能力、協調性、連帯感、社会性を身につけさせる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅰ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

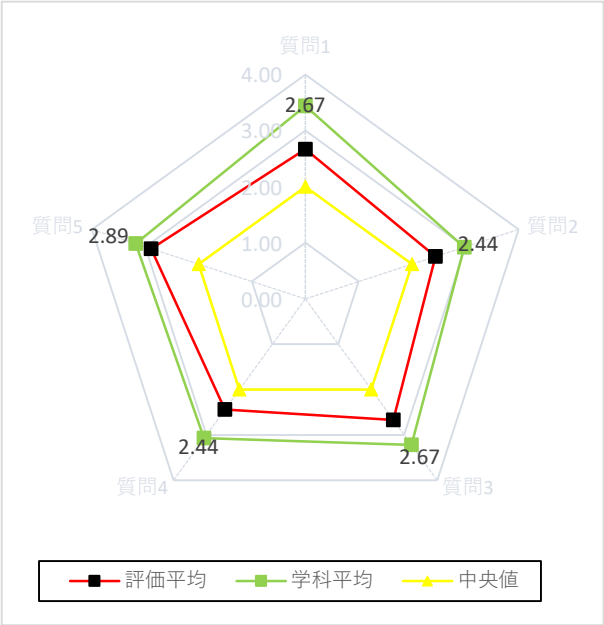
本科目は、1・2年生合同の縦割り授業で体験的学習を主体として、学生同士が互いに学び合いながらコミュニケーション能力、協調性、連帯感、社会性を身に付けるものである。質問３居眠り・私語をせず真剣に取り組んだかと質問５総合自己評価は、学科評価平均より低い。この科目は学生同士で話し合う機会は非常に多く、教員も学生の自由な発言を促し認めいたため学生らはリラックスした雰囲気でディスカッションしていた。そのことを私語と勘違いした学生もいるのではないかと考える。また、この科目は2年生が主導して1年生との共同作業を進めていくことが多く、1年生は、2年生の指示のもと行動することがほとんどだが、自主性や主体性の視点から自己評価して、質問５の総合自己評価を低くした学生もいたのではないかと推測する。質問８興味・関心が持てる工夫があったかか、質問９分かりやすくする工夫があったか、については、学科評価平均より若干高いものの、評価を２とした学生がそれぞれ2名おり、教員の工夫が不十分だったことがわかる。また、質問１０、１１、１２についても、評価を２とした学生が2名ずつおり、教員の配慮が不足していたことがうかがえる。

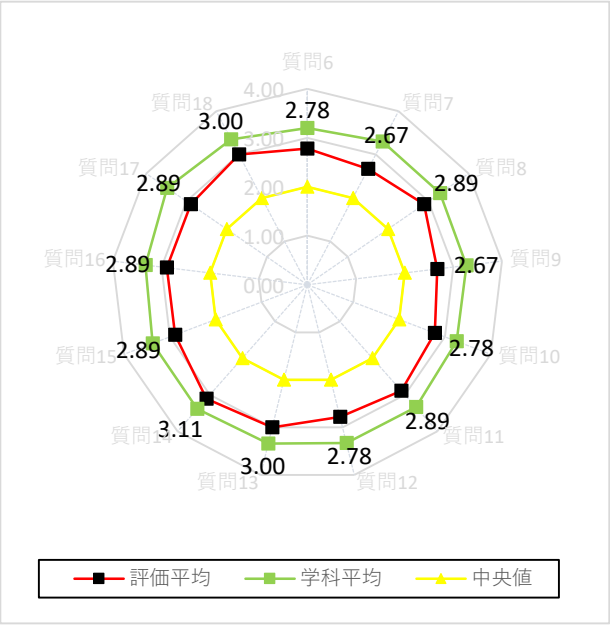
（３）次年度に向けての取り組み

この科目は、学生主体で行うことを重視してはいるが、やはり、教員が学生の言動を隈なく確認しサポートすることが重要だと気付かされた。特に、当該年度の1年生には留学生が多く在籍していたが、2年生はそれまでの下級生への指示・サポートの仕方では不十分であることに学生同士の関わりを重ねるごとに気づき改善していた。教員は、2年生が十分にシーダーシップを取ることができるようなフォローが必要である。授業に向けた学生との事前打ち合わせを十分に行うことはもちろん、教員は、学生全体の言動や状況確認について把握し、学生全員が満足する活動（授業）になるよう教員同士の認識を確認し合い、学生と共に良い授業を作り上げていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅰ	13名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

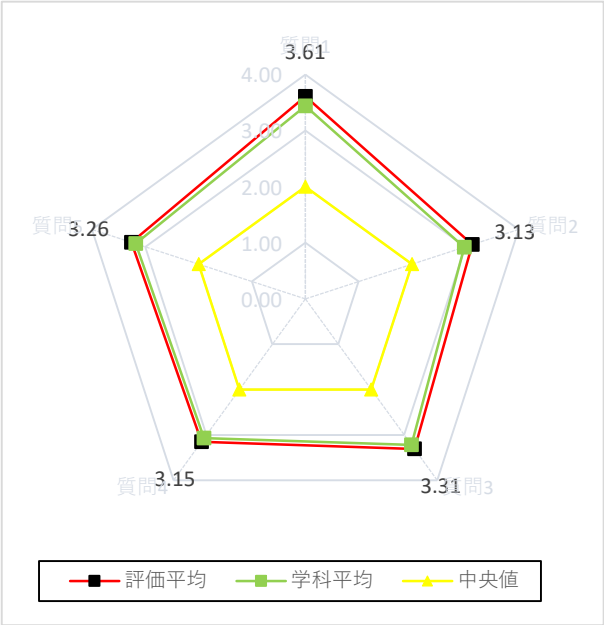
学生自身の自己評価、教員の授業評価とも学科平均値を下回る結果となった。
本科目のキャリア教育の意義、重要性が学生に充分に伝わらず、満足度、評価に繋がらなかったことが一因と考える。
少人数のコースであり留学生も半数いるため一人一人に多くの支援が必要な授業であるが、今年度はコース担当教員不足し教員サポートが充分にいき渡らなかった。

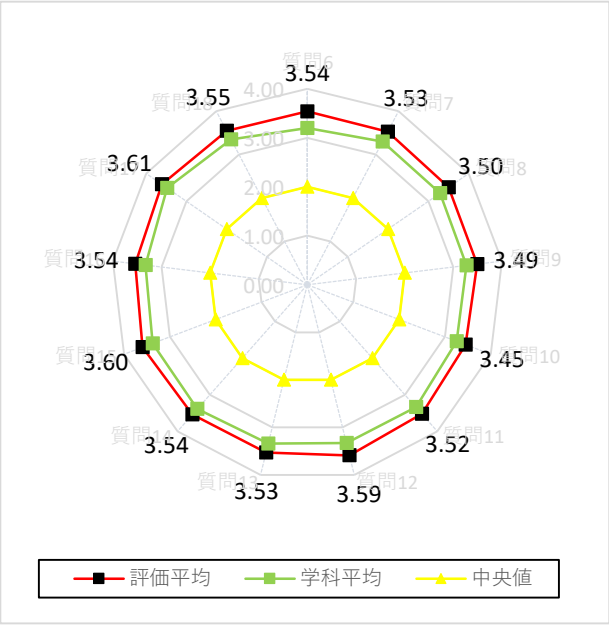
（３）次年度に向けての取り組み

多文化コースの特性を考慮したキャリア教育を実施する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅰ	187名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

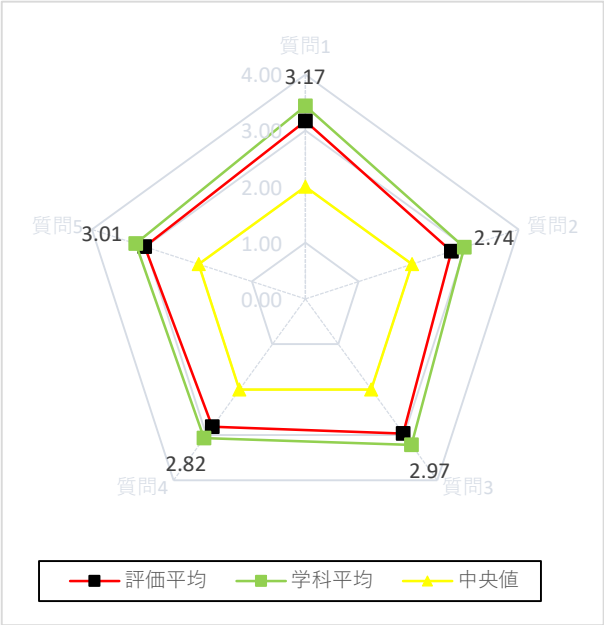
授業アンケート結果の分析と評価として、全体的の学科平均と比べ、高めの評価を得ていた。その中でも、質問１２「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」、質問１７「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」について高い評価を得ており、担当したすべての教員による積極的な取り組みが高い評価につながっていたことがわかる。

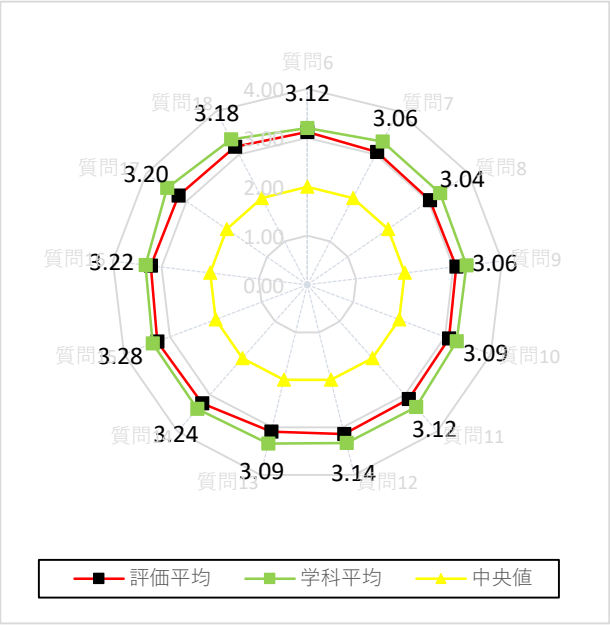
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、効果的な学習に向けてシラバスの内容整理と教員の担当内容の分析・評価、さらにはキャリア教育につながる科目としてICTの活用方法について検討することが求められる。さらに、小グループの再編成と実践的な取り組みへの導入的な位置づけとしての事前準備の効率性をさらに高めていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅱ	75名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

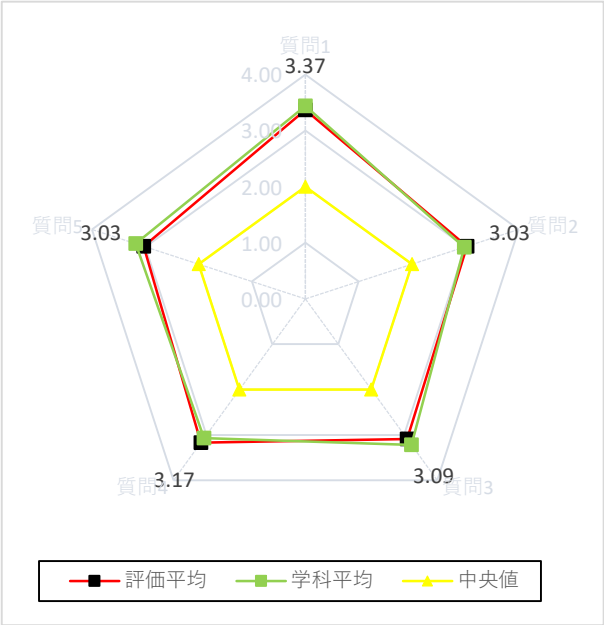
共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅱの授業評価は共通科目平均と比較してやや低い値であった。学生自身の総合評価は3.01であった。教員評価の中では「授業は興味・関心が持てる工夫がされていた」が3.04と低く、「学生の質問等に誠実に対応しましたか」が3.24と高く評価されていた。もっと興味が・関心がもてるように内容を検討し実践力に繋げいけるよう計画を見直す必要がある。またこの科目は各職域の地域連携推進活動と学生自身のキャリア教育等も含まれているので対応する教員が一律でないため評価のコメントが難しい。

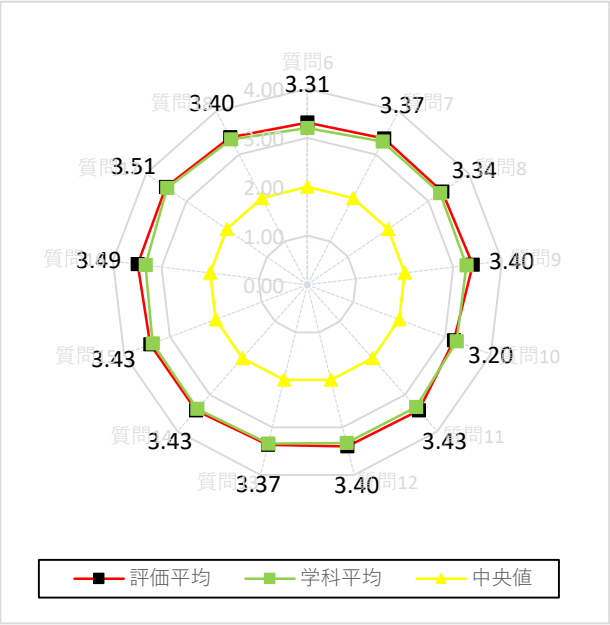
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みは次の通りである。
①シラバスが理解できように説明する。
②学生が積極的に学ぶことができるように目的意識を明確にさせる。
③授業を計画的に進めることができるように準備をさせる。
④課題発見（気づき）とその問題解決ができるようになる。
⑤授業を通してコミュニケーション能力、協調性、連帯感、社会性を身につけさせる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅱ	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

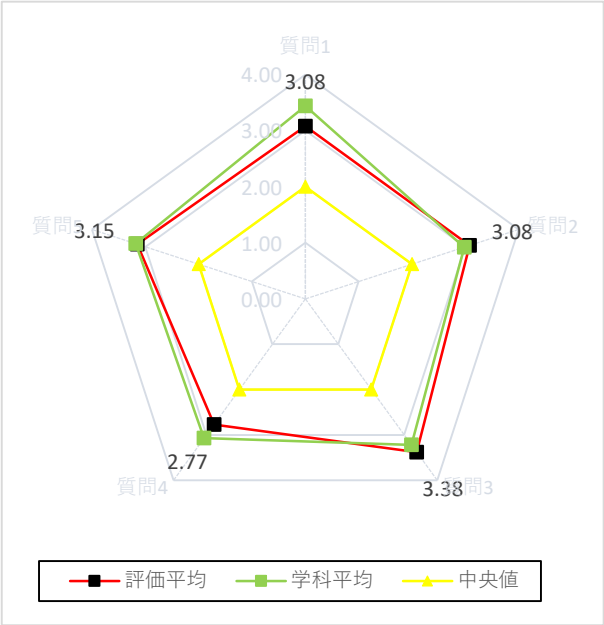
評価はほぼ学科の平均であった。1をつけた学生が1～2名いる。自由記述の欄には特に書かれていない。1がついていないのは唯一５の本人の工夫についてのみであった。2と答えている項目は、視聴覚教材や資料についてと声の大きさ、話す速さ、進進度であった。4と答えた学生の人数が一番少ない科目は、学生自身に対する評価以外では、視聴覚教材・板書についてであった。しかしこの教科は視聴覚教材や板書をあまり使用しない教科であるので、そういう意味で4にはあまり当てはまらないのかもしれない。この教科はイベント等の企画準備等が主である。

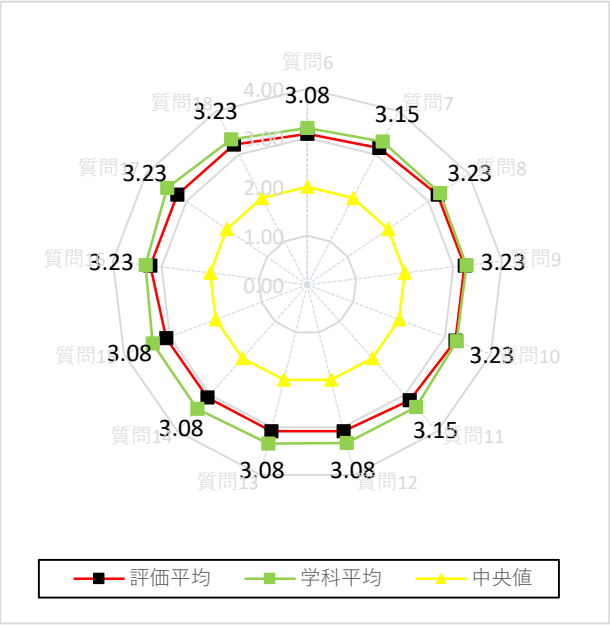
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスで説明したことは覚えているがその内容まではよく理解できていないと思われるので、コース別にしっかりとシラバスの説明をする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅱ	16名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

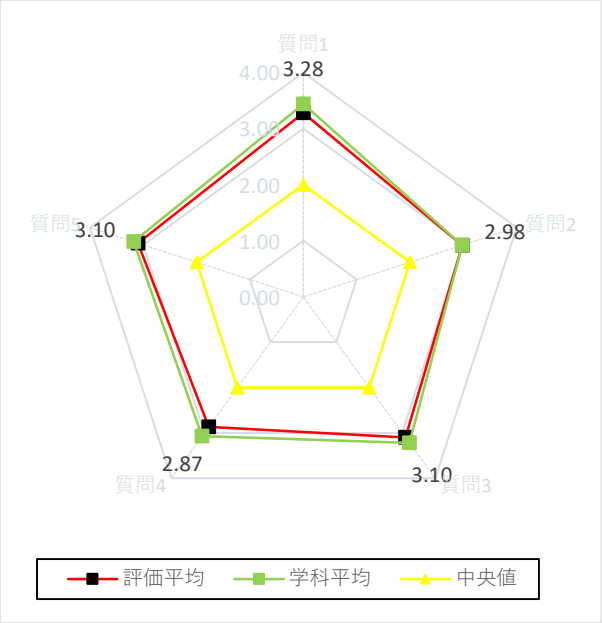
学生の自己評価は概ね学科平均値を同等であった。Q1がやや低い要因として学生の中には他の学生と比べ出席率が低い学生もいたことが反映したと考えている。教員授業評価は学科平均値とほぼ同等、やや下回る評価であった。一期生の最終学年のキャリア教育であるが、就職指導、留学生対応など他コースと異なり新規でありノウハウがなかったため、指導する側、される側、両者とも新たな試みを取り入れながら試行錯誤の一年であり、このような結果となった。

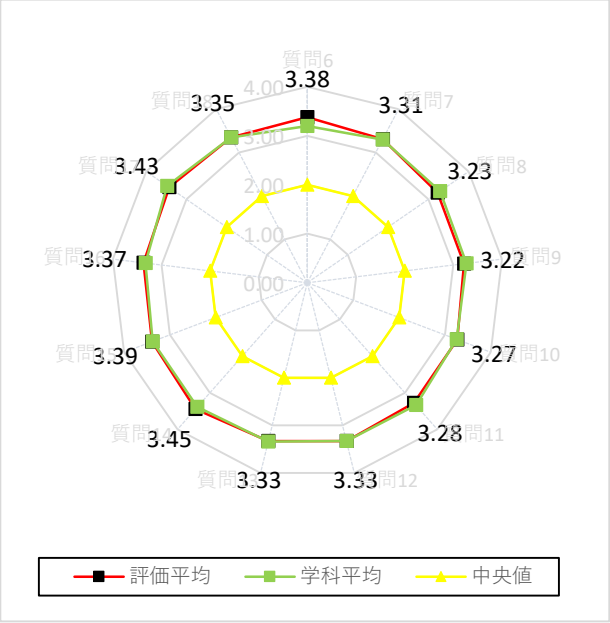
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の経験をもとにコース独自に就職支援、キャリア教育を充実させる。コースの地域連携活動、TOEICなど英語力、留学生の日本語力などの向上と資格取得、就職情報の提供や就職活動のサポートによって学生のモチベーションアップを図る。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅱ	184名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

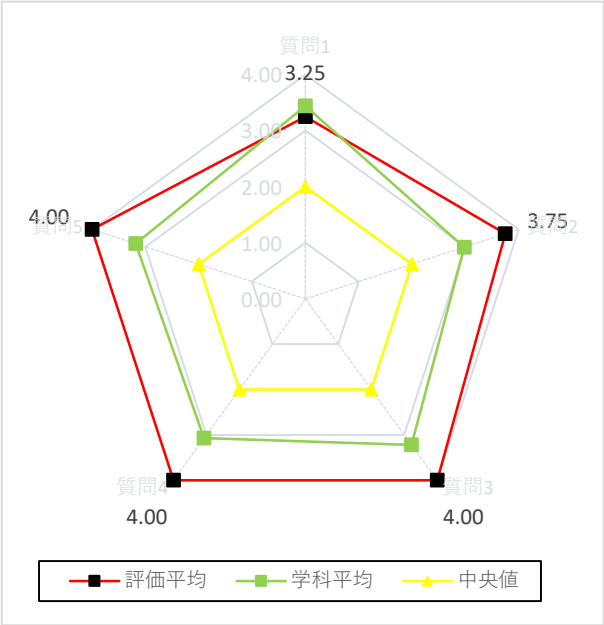
授業アンケート結果の分析・評価として、全体的の学科平均と同程度の評価を得ていた。しかしながら詳細にみていくと、質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問３「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問４「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」、質問１１「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」の項目が低く推移していた。これらの傾向は、共に学ぶあすなろう（キャリア）Ⅰの内容と比べ、１・2年合同の縦割り授業などで1年生に教えるなど自らが主体的に実施することが求められるが、授業の目的通りにはその効果が得られていないことがわかった。

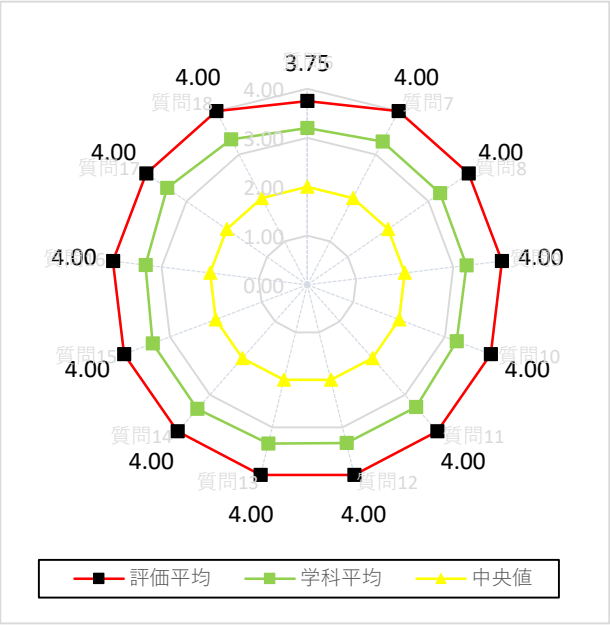
（３）次年度に向けての取り組み

比較的評価が低かった質問項目は学生の主体性に関するものが中心となっているため、グループワークなどの演習における事前・事後学習の充実を図り、本科目の特徴である １・2年合同の縦割り授業のあり方と小グループの再編を検討していく。また、各回の学習課題を明確にして、就職後のキャリアパスに繋がる学習内容をさらに充実していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		あすなろう体験	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

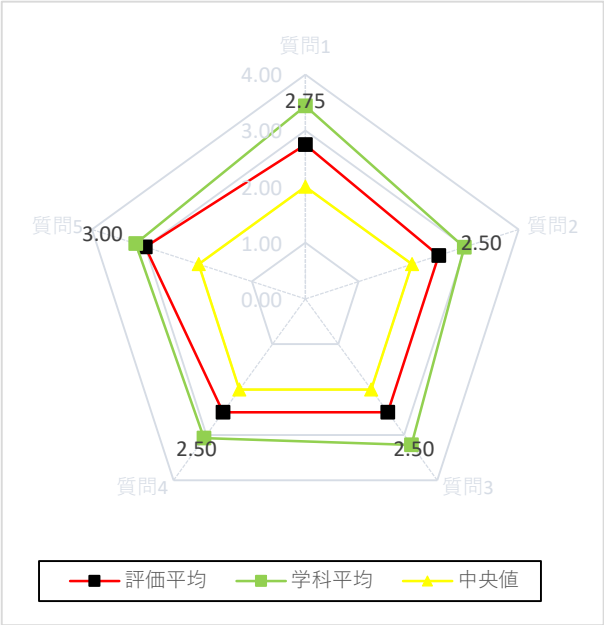
評価だけを見る限り学科平均値よりも高い評価を得ている。しかしながら、今回の受講者は1名であり、正確な評価とは言い難い。

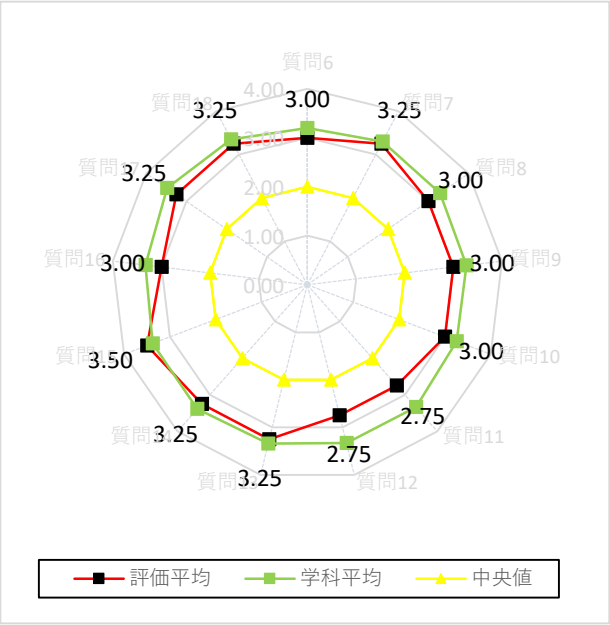
（３）次年度に向けての取り組み

まずは授業内容の理解促進とそれに伴う受講者数の増加が必須の課題といえよう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		ボランティア活動	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本科目は共通教育科目の選択科目の一つで2年間の通年科目である。授業計画の説明は1年次前期の履修説明時に行い、主として学生支援課から発信されるボランティア募集情報を見て活動登録し、実際に活動することになる。2年間の活動のなかで時間数が60時間を満たした者にレポートを課し、ボランティア活動としての単位を認定する。

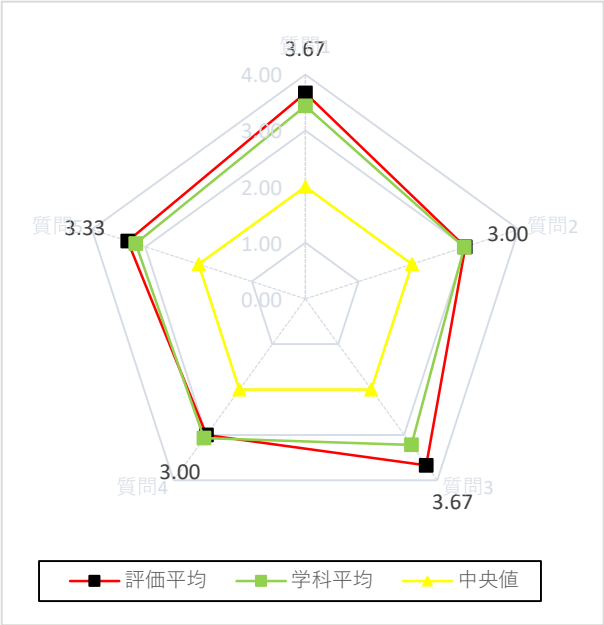
履修登録時は9名であったようだが、年度末の履修者（授業評価実施時の登録者）は2名であり、そのなかでも1年生と2年生と混在した評価結果となっており結果の分析が難しい。また、実際のボランティア活動が中心となるために、通常の評価項目では判断が困難であると考える。

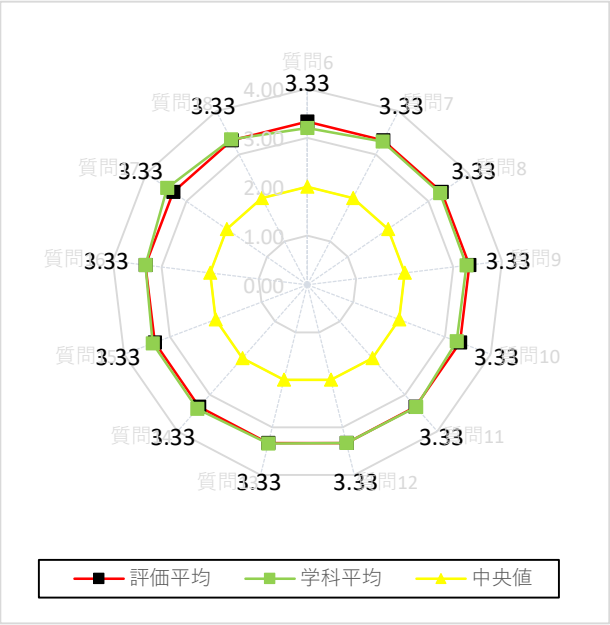
（３）次年度に向けての取り組み

1年次前期の授業計画説明時に、活動内容や単位取得のための条件を確実に伝え、学生個々人の状況把握を定期的に行う。募集窓口である学生支援課との連携を強め、学生が安心してボランティア活動に取り組むことができるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		ボランティア活動	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

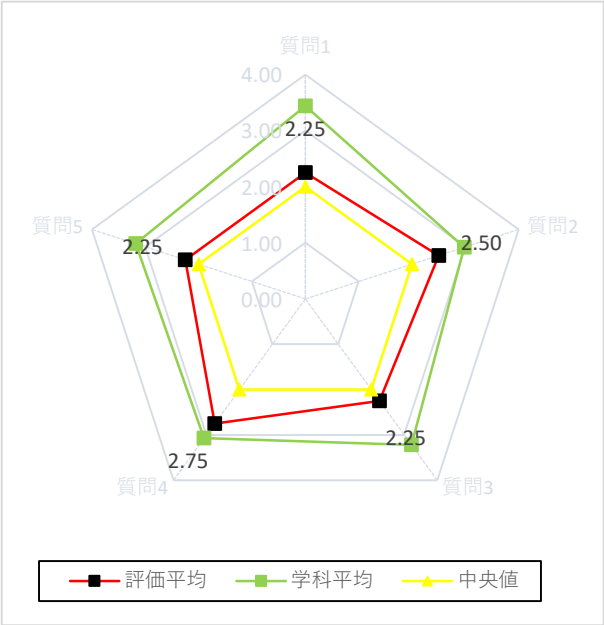
授業評価は平均並みである。受講者は4名となっているが、本科目は2年を通してボランティア時間を加算していく仕組みとなっており、実際には2名が単位取得して卒業している。残りの2名については現在の履修中である。
基本的にボランティア活動については、本人たちの意思やスケジュールに沿って行ったものである。また、情報提供は授業担当者からしたものの、最終的には学生自身が探してきた（興味のある）活動へ参加して時間数をクリアしている。評価は授業者の効果というよりもボランティア活動内容の質に関係していると思われる。

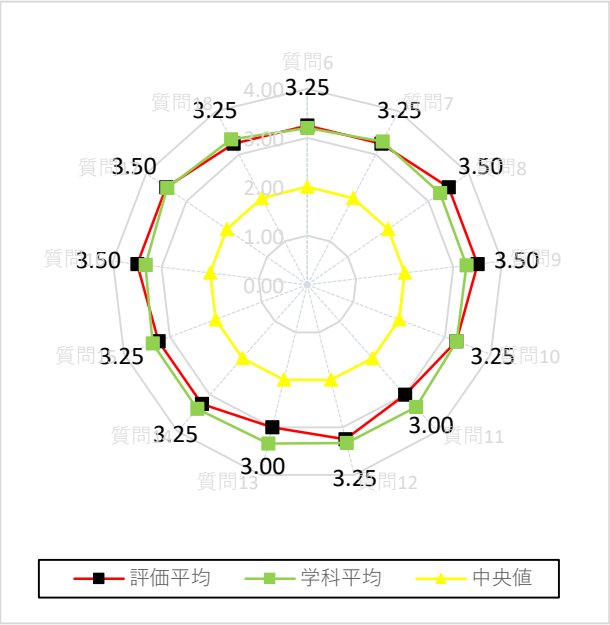
（３）次年度に向けての取り組み

これまでもそうだが、まず受講者が少ない。そのために今後は説明会などを別途開催するなどの工夫が必要である。また、短期大学は2年間の学修のため、ボランティアに費やす時間の確保が難しい。そのために、専門的な、職業体験に近い活動を紹介するなどの配慮も必要となる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援 幼児保育		化学（生活の化学）	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

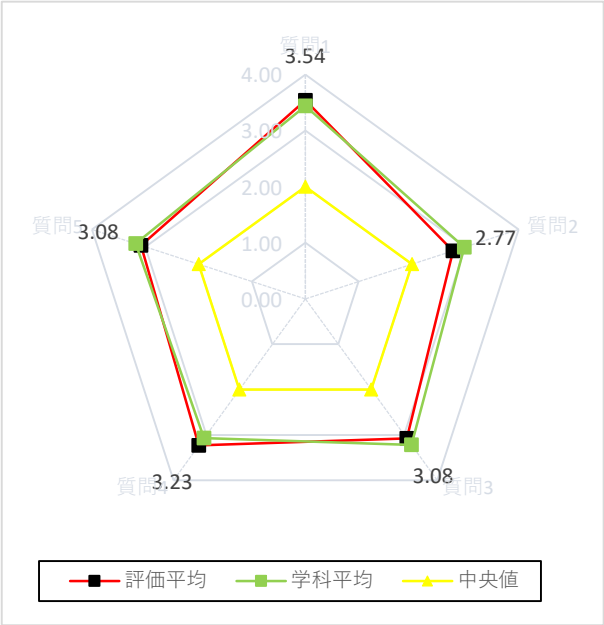
学生による自己評価はかなり低い。問13の評価がやや低かった。学生の関心度や理解度にも差が見られ、授業の進度について調整に戸惑ったことが結果としてあらわれた。

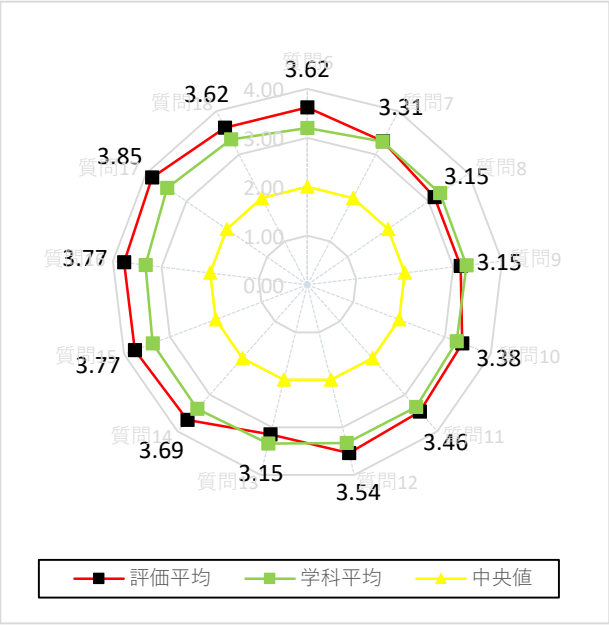
（３）次年度に向けての取り組み

化学を苦手とする学生が多い中にこの授業を選択してくる学生の興味関心が大きくなるよう化学を身近なものとして生活に密着してわかり易く説明していく。選択科目、少人数授業を活かし、次年度はより学生参加型の内容を加え、学生自身の自己評価の向上を目指した授業を考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援 幼児保育		生命科学	14名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

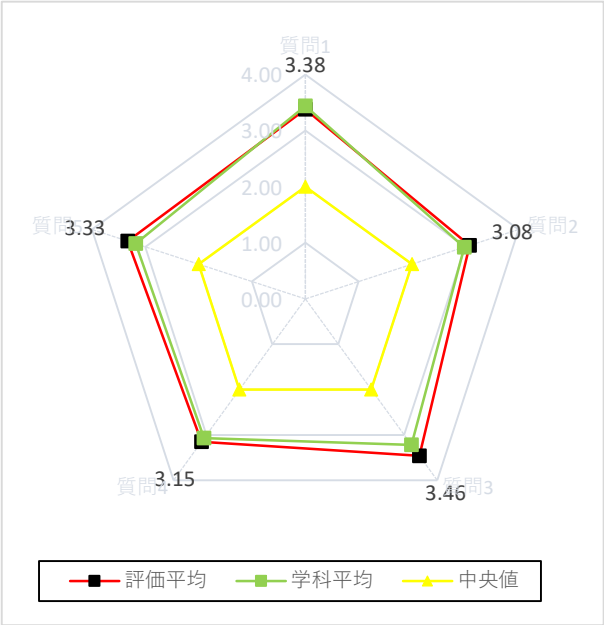
学生自身の学習評価は、比較平均的であるが、強いてはシラバス活用ができていないことが判断される。一方、授業に対する評価では、授業のアクティブラーニング導入によって質問14-17の評価が高かったと考える。授業方法では、日常の生活や将来専門職として働く場などをイメージさせ、実際に学習内容をどのように考えるか、日々の生活に活かしていくかを考えていくよう展開を進めてきたが、質問8-9の評価は平均よりも低いものであった。このことは、そもそもが生命科学への関心が低いということが考えられた。また、学習内容は基本的なものばかりであるが、授業のスピードが速いとの評価は、予習が十分でないことも考えられる。

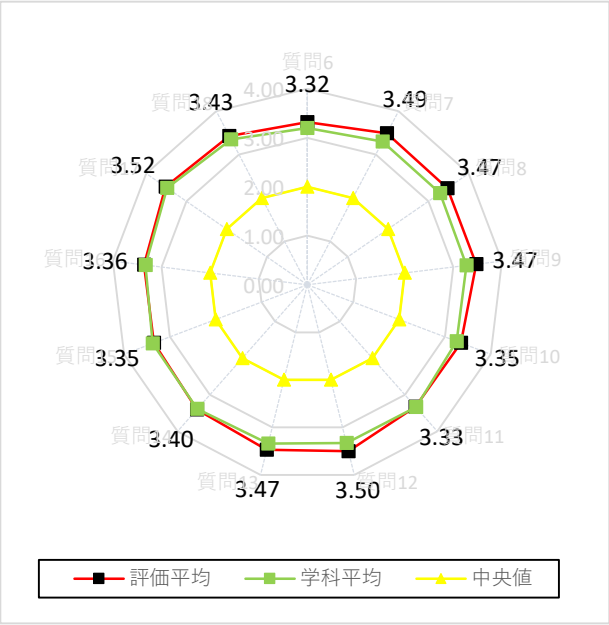
（３）次年度に向けての取り組み

予習する内容を毎回明確に指示し、事前学習を強化することで、授業の展開についてこられるようにしたい。生命科学自体への興味関心を高めるために、より生活に密着した具体例を示す。また説明内容の絞り込みを行い、より焦点化して学習を展開する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援 幼児保育		健康スポーツ	290名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

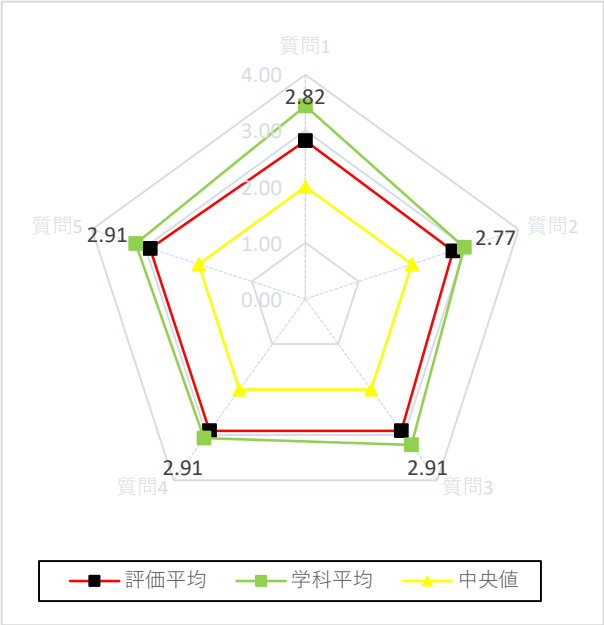
本授業は、スポーツ教材（種目）を実践する「実技」が中心的な学びである。授業参加度・行動に関する項目（質問3）の評価が高く、学生の能動的な学修姿勢が発揮されたことがうかがえる。学生の運動能力や運動経験、運動に対する志向性を考慮した教材選定、運動課題設定、授業展開に努めている。この点について、「質問7～10において肯定的な評価が得られている。また今年度は、前期に「個人の学び」、後期に「集団の学び」に焦点を合わせた授業を実施した。質問14～16の評価に対しても肯定的な評価は得られているが、学生が「学びやすさ」を感じられるようにするためにも、双方向的なやり取りを充実させるなどの改善が必要である。

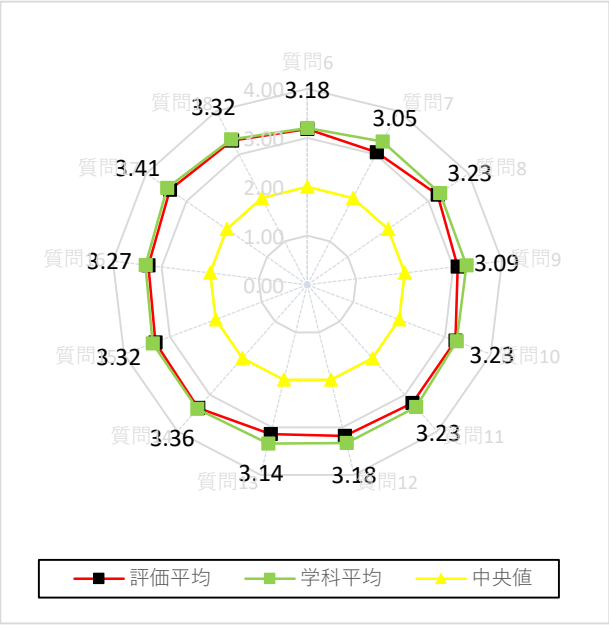
（３）次年度に向けての取り組み

施設・設備、教材などの都合上、学生の「やりたいスポーツ」を授業で実施することは難しい。本授業で実施可能なスポーツの実践を学生が受け入れられるような工夫が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		生化学	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

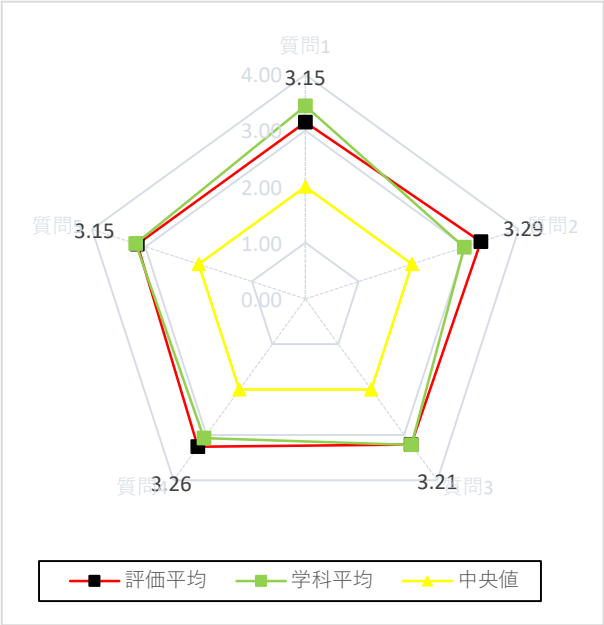
自己評価の結果は平均よりも低かった。この結果が示すように、例年生化学は比較的苦手とされる科目である。授業での学習内容はもとより展開方法も、履修者の基本的な学習意欲が低いことが、平均よりも低い結果を与えているものと推測する。

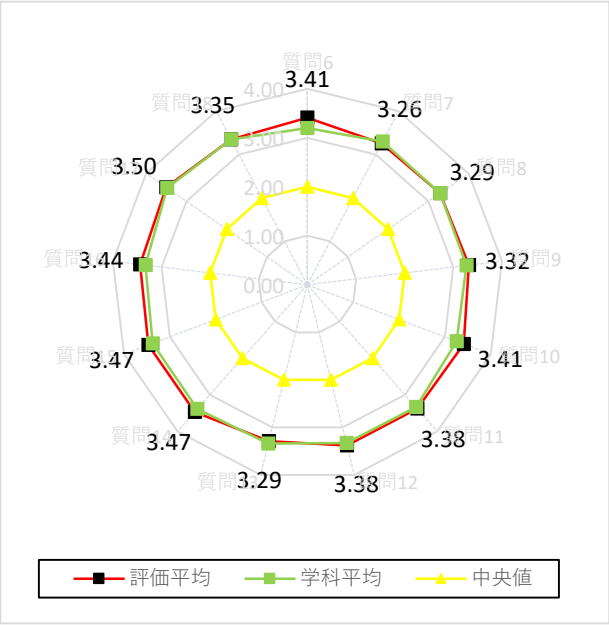
（３）次年度に向けての取り組み

導入時の展開では、毎回のねらいを板書するなどして明確に示したい。また、何よりも生化学自体への興味や関心を引き付けるよう、いっそう日常の話題から導き出したい。また、栄養士として必要な最小限度のポイントなど、実力認定試験などを参考により絞り込みをしたい。またテキストの採用についても、学習の流れがよりよいものを検討していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		生化学実験	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

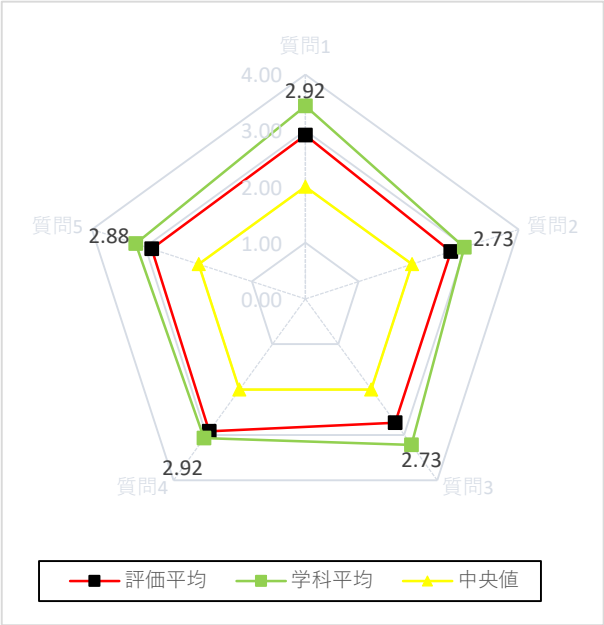
学習の自己評価と授業方法に関する評価はいずれも平均なみであった。ほぼ毎回の実験とレポート作成を行っているが、近年の生化学実験に対する学生の関心は、低くなっていると実感する。実験の授業では、実験技術だけでなく学んできた生化学内容を振り返る場として、学習内容とのつながりを大切にしているが、生化学自体への関心も低いことから、生化学実験での教育をより効果的にする方策を検討したい。

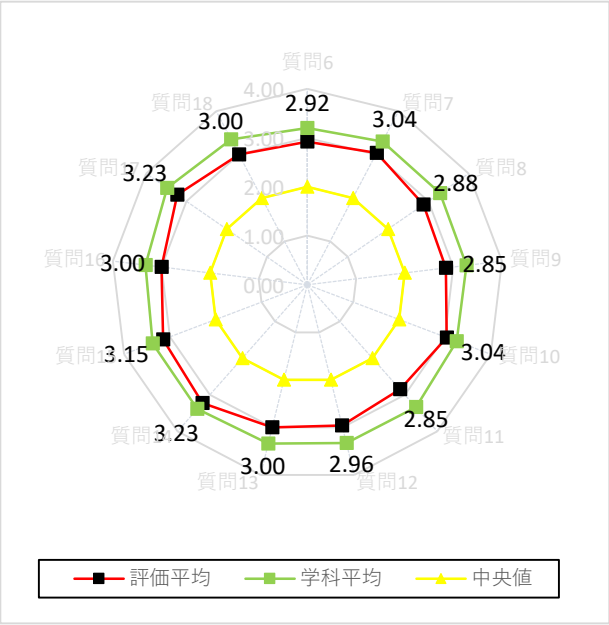
（３）次年度に向けての取り組み

毎回の実験用配付プリントを、実験の記録レポートにもなるように工夫する。学生と同時に演示しながら説明していく。生化学学習内容の振返りを充実させる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		食品学Ⅰ	34名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

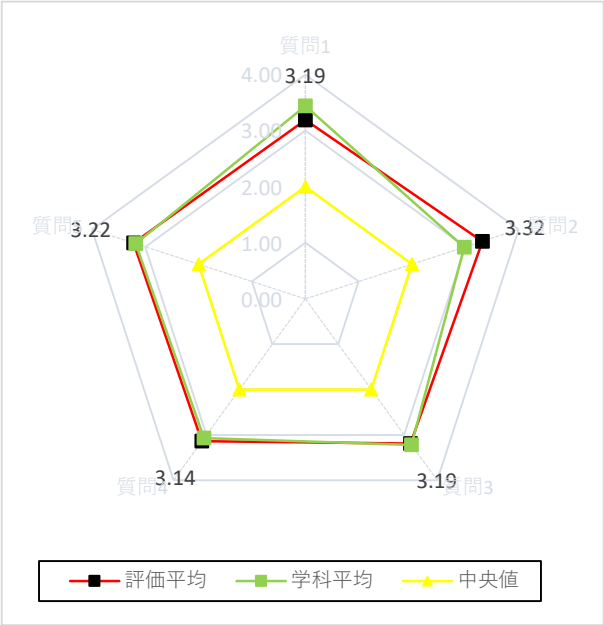
学生による自己評価、教員授業評価とも学科平均を下回った。

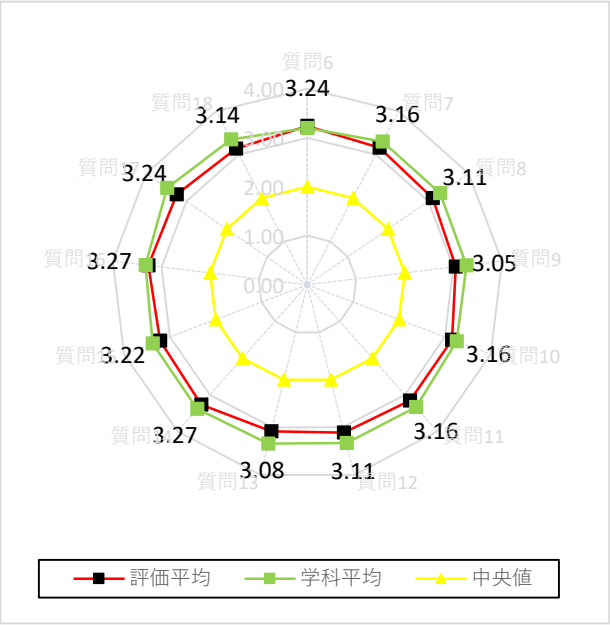
（３）次年度に向けての取り組み

より関心を持ってもらえるよう、また食品学の理解が深まるよう、授業の資料等を改定していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		食品学実験	37名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

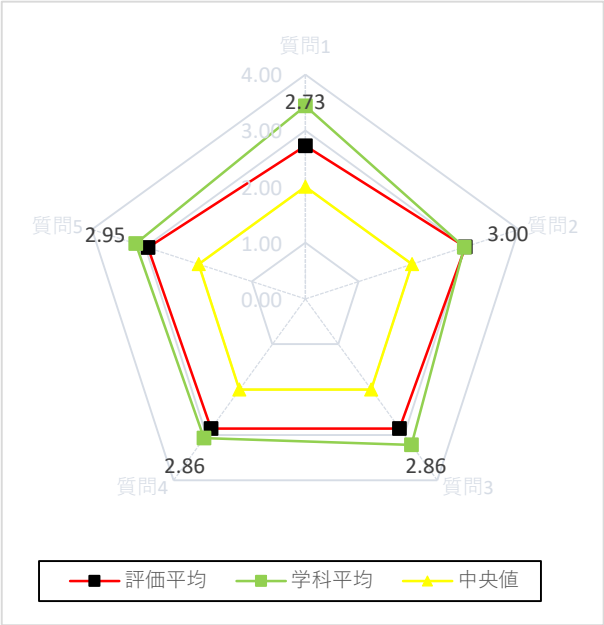
学生自身の自己評価は学科平均とほぼ同等であったが、Q1がやや低めであり、これは学生の出席状況に起因する。
教員評価は学科平均を下回っていた。シラバス、到達目標の説明は初回の授業で実施しているが学生の意識は低い。化学系の実験ということ、食品分析のデータ処理、計算など多くの学生にとって苦手な分野であり、わかりやすい工夫が必要である。

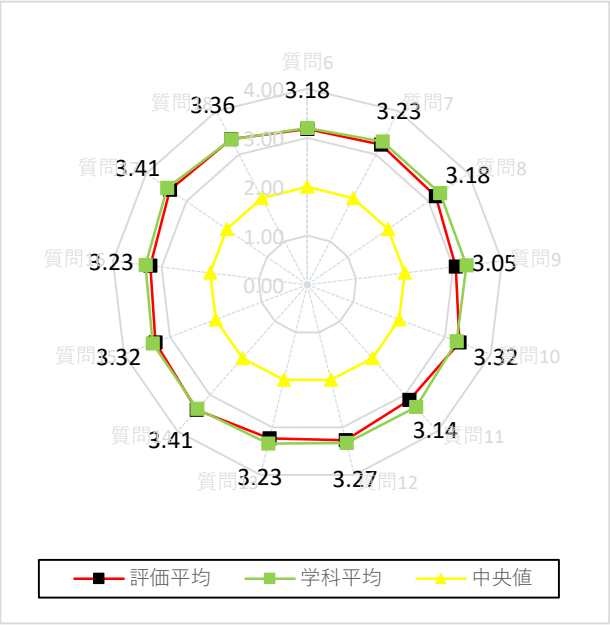
（３）次年度に向けての取り組み

実験内容の見直しを行い、苦手な計算などは資料を工夫したり、理解に時間をかけていくようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		食品学Ⅱ（食品加工学を含む）	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

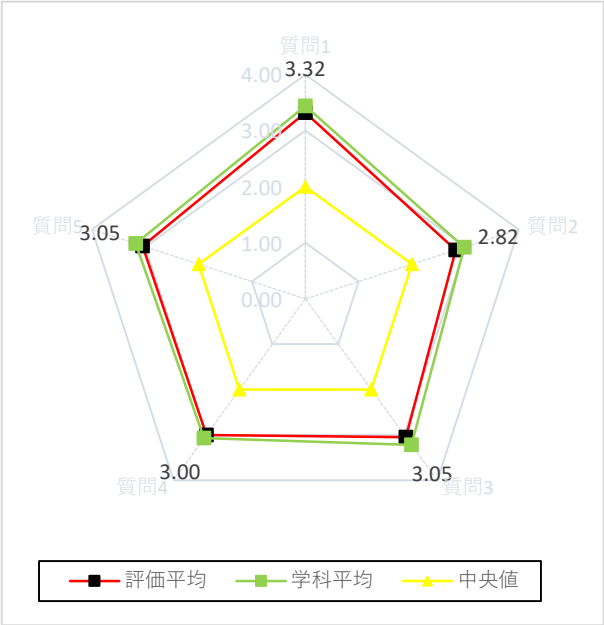
学生自身の自己評価は全て学科平均を下回っていた。Q1の授業の欠席について評価が低く、今年度の学生の欠席率の高さが学生の自己評価に繋がっている。本科目の授業時間はⅣ限目でⅠ限目ではなく寝坊、遅刻ではない。栄養士を目指すにも関わらずなぜこの時間の科目を欠席するのか、他の自己評価と併せて学生の学修意欲が例年に比べても低く思われ憂慮される。
教員の授業の評価はほぼ平均かやや低い結果となった。Q6,7は毎回、章が変わるごとにシラバスと到達目標、授業のキーワードなど説明したにも関わらず、やや数値が低かった。

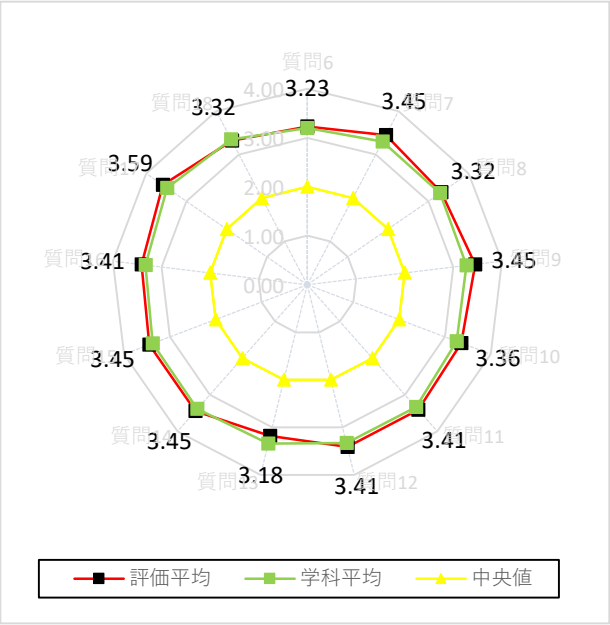
（３）次年度に向けての取り組み

次年度はまた学生が入れ替わるが新１年生の自己評価と学習意欲の向上のための何らかの仕掛け、工夫を検討したい。多くの内容を伝えるために大部分をパワーポイントのスライドで行っているが、内容の印象づけのため板書も取り入れ学生に書かせる、グループワークなどの主体的な内容を取り入れるなど工夫を重ねたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		基礎栄養学	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

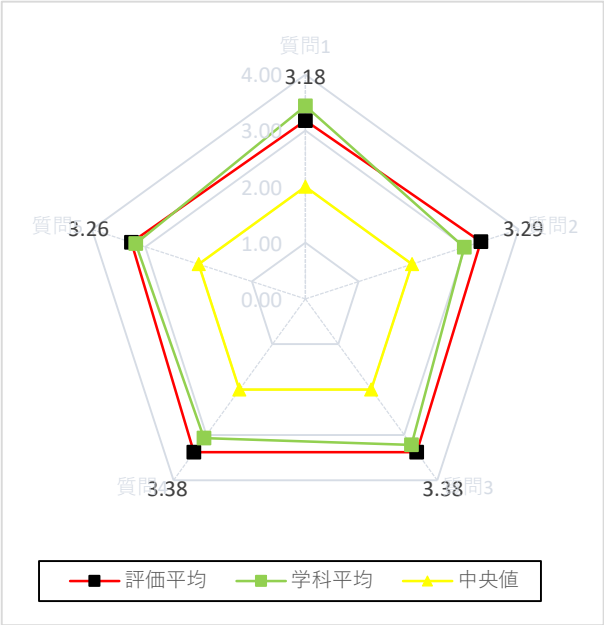
学生の基礎栄養学への興味関心は比較的高いと考える。しかし、自己評価は実際には平均より低いため、自学自習に向けた強化策が必要と考えられる。授業方法については平均であり、学生の学習意欲の喚起が必要と考える。

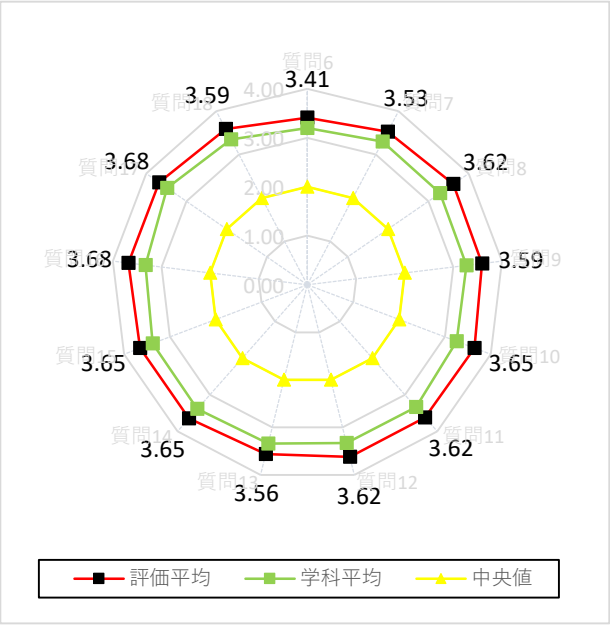
（３）次年度に向けての取り組み

日常の話題と学習内容のつながりをいっそう高め、理解しやすいよう工夫する。ポイントを絞り込み、印象付けを強化する。実力認定試験問題を取り上げているが、解説をするのではなく、学生が解説できるよう授業を展開する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		臨床栄養学	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

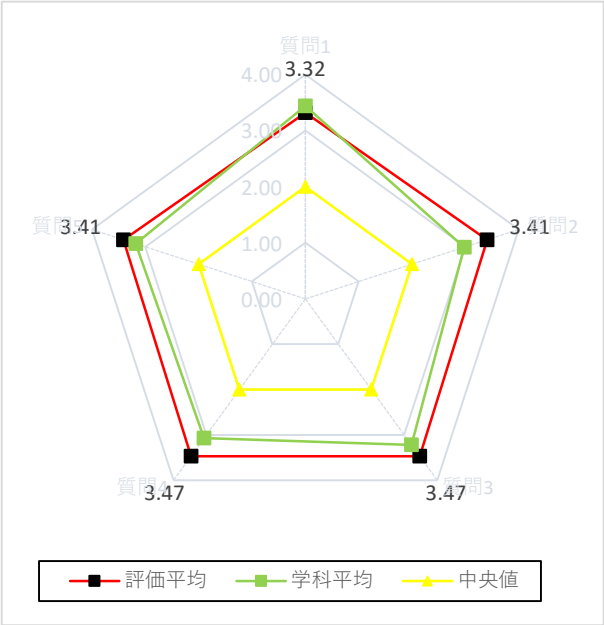
今回の結果は、すべての項目において学科平均よりも上回っていた。授業の内容や指導方法について、板書や資料、質問対応や公平対応等については概ね高評であることが分かった。本授業では学生の授業中の学修態度を見ながら理解度を推察し進めるように心がけてはいるが、この科目の基礎となる解剖生理学や生化学、基礎栄養学、食品学などに苦手意識をもつ学生が多く、興味・関心を抱かせるのに苦労する。ここ数年の学生の傾向を見ているとやはりビジュアル化し単純明快に解説するほうが学修態度はよく、理解が進むようなので今年度はカラーでの資料配布とポイントをしぼり分かりやすい解説に努めた。

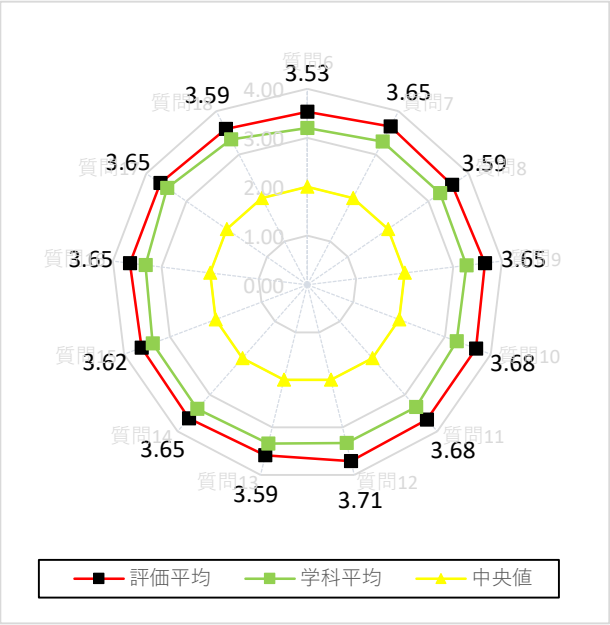
（３）次年度に向けての取り組み

限られた時間の中で全学生に同じ様に理解させることはなかなか難しい。例年、学修意欲が低下しないように、いかに分かりやすく、おもしろく授業をするかということを心がけてはいるがまだまだ十分とはいえない。今年度はカラーでの資料配布とポイントをしぼり分かりやすい解説に努めた結果、「配布資料がカラーで分かりやすい」、「解説が分かりやすかった」、「プリントにポイントがまとめてあり分かりやすい授業だった」という学生の評価であった。本授業の全体的な評価としては高評であるが、もっと学生の理解度と知識の定着を図るために、来年度はパワーポイントを活用し、理解しやすい授業を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		臨床栄養学実習	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

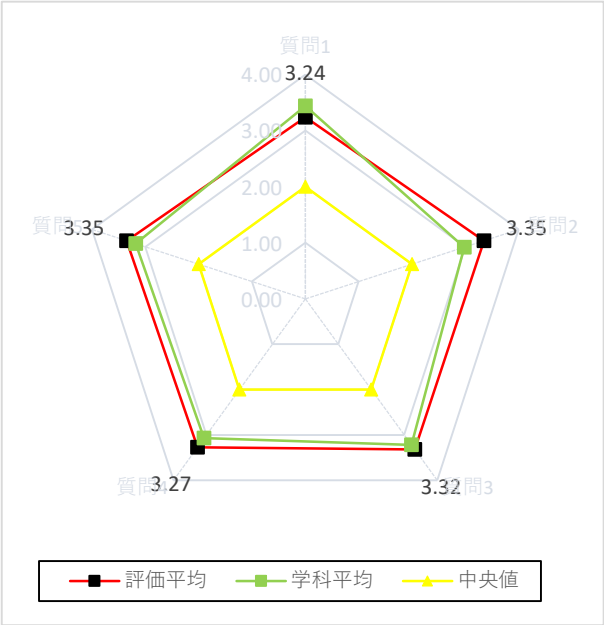
昨年度から、各回の授業ごとに「どういうねらいで、何をするのか」を説明してから実習を行っている。これを行うことで、ほとんどの学生が授業の到達目標を理解できるようで、この点は今後も継続していきたい。評価については、学科平均と比較しても全項目において平均を上回っており本授業における教育指導法は概ねよかったと思われる。

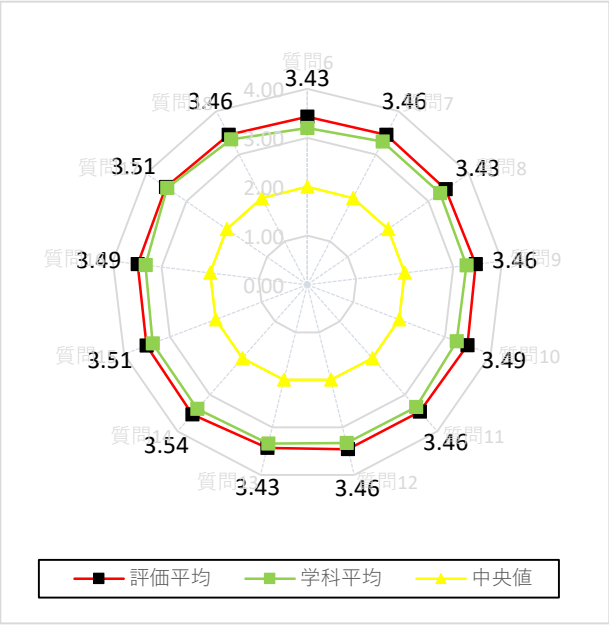
（３）次年度に向けての取り組み

学生からの評価は概ね高評であった。学生からは「病態に合わせた献立作成は難しかったけど自分なりに考えることができたように思う」、「普段の食事とは違う病気に合わせた食事を知ることができもっと知っていきたいと思いました」とのコメントがあった。しかしながら、まだまだ献立作成や常食から治療食への展開を苦手とする学生も多く、教材の工夫が必要であると感じている。また、本授業を開始するにあたって調理の基礎の理解が不足している学生が多いため、来年度の授業では調理の基礎の振り返りの回を設けてから授業に入りたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		栄養学実習	37名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

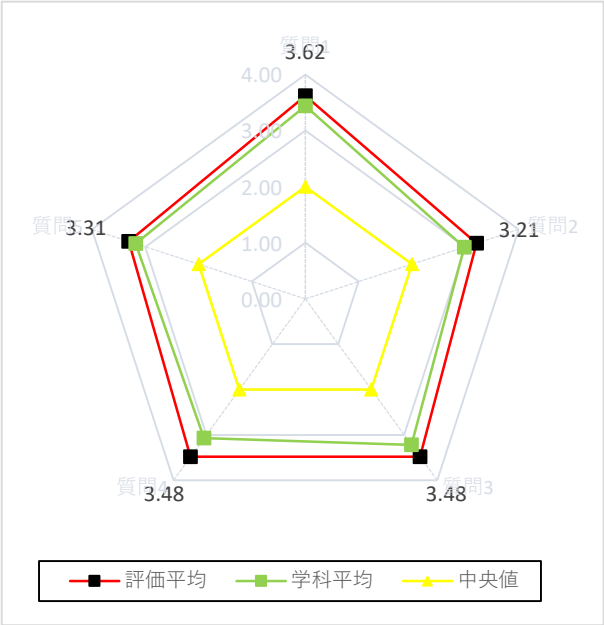
本授業は、複数科目間の垣根を越えた広義の実習を開講している。主に病態に合わせた献立の立案や展開、栄養ケアマネジメントについて、ＰＯＳについて等他の授業内で教えることが出来なかった内容を組み合わせて展開している。学生の授業評価結果は、全項目について学科平均並みであった。授業内容が栄養士というよりも管理栄養士が実務で行うような授業内容であるため、学生には難しかったのかもしれない。授業の開始時にはなぜこういう内容にしているのか等丁寧に説明を行い取り組むように努めたい。

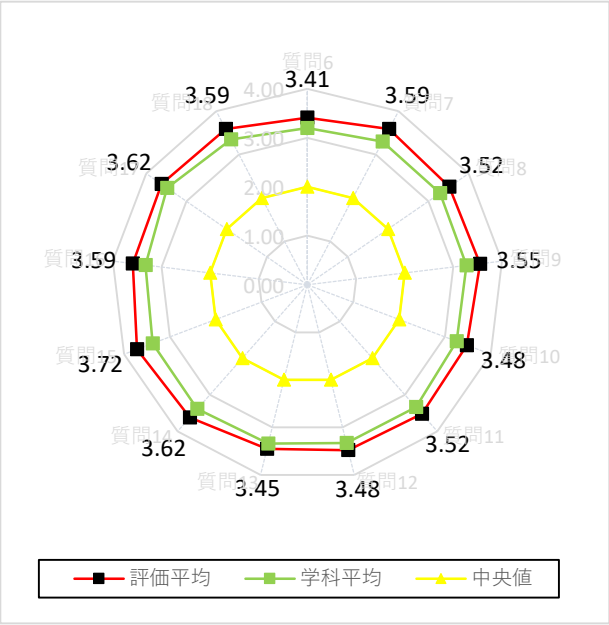
（３）次年度に向けての取り組み

毎年学生の反応を見ながら理解度に合わせて資料を修正し活用している。学生からは「字が大きくて見やすい」、「マイクを使っていて聞きやすい」、「説明がすごく分かりやすい」などのコメントがあった。その年によって学生の理解度も変化するため今後も改善を重ねて学生の理解度向上に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		発達と老化の理解Ⅱ	31名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

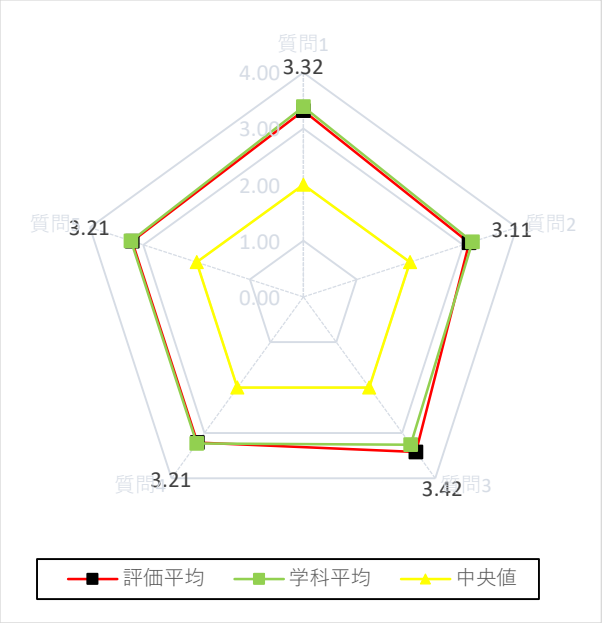
もともと福祉を目指していない多文化の学生にとっては専門外の教科なので難しかったと思われる。学生の自己評価は低い。授業の進む速さも早いと感じている。福祉の学生の自由記述には、多くのことが学べたとある。1と評価する学生はいなかった。2と評価したのは学生自身に対する評価でシラバスの活用、私語、理解するための工夫、総合自己評価であった。授業に対して2の評価となったのは教科書･配布資料、声の大きさ、明瞭さ、話す速さ、授業の速さ、総合評価であった。質問がない番号にも評価があり、質問等を読まずに回答していることがうかがえる。4の評価が少なかったのは、シラバスの活用、視聴覚教材・板書について出会った。

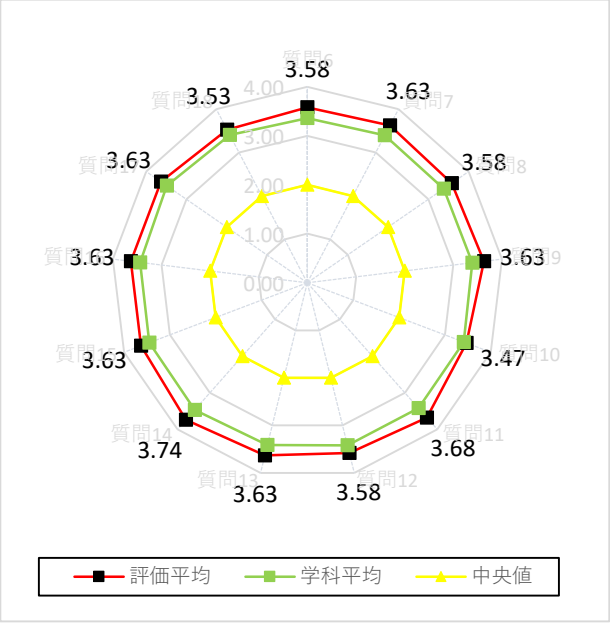
（３）次年度に向けての取り組み

国家試験や介護福祉士として知っておくべきポイントを絞って、教える内容をセーブし、また、できるだけ無駄な時間を排除し、話すスピードや授業の進行を調節する。視聴覚教材をもっと活用する。学生が活用しやすいシラバスにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		認知症の理解Ⅱ（高齢者と健康）	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

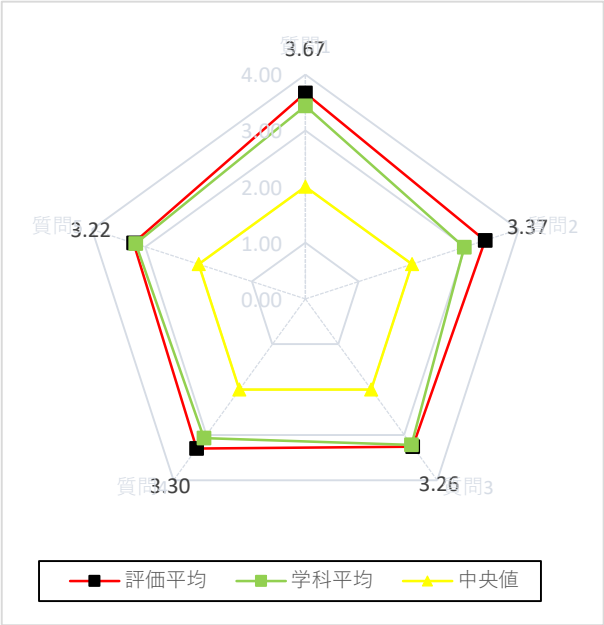
質問1から質問５のうち、質問３以外は、すべて学科評価平均より低い。これは、学生の本科目の取り組みへの意欲の低さの表れだと推測するが、一方で、質問６から質問１８の評価平均は、どれも学科評価平均よりは上回っている。また、質問３の授業中の居眠り・私語をせずに真剣に取り組んだかも、若干ではあるが学科評価平均を上回っている。これらの結果から、学生の意欲が低いというわけではなく、教員が学生の意欲を十分に引き出せなかったのではないかと考える。本科目が開講されたのは2年次後期で、学生は介護福祉士国家試験を控え、自分自身の知識の習得の不十分さをよく口にしていたが、本来は、授業を受けることでそれまでに不足していた知識を補い、教員は学習方法の工夫を促し、学生に自信を持たせるべきであったと反省するところである。

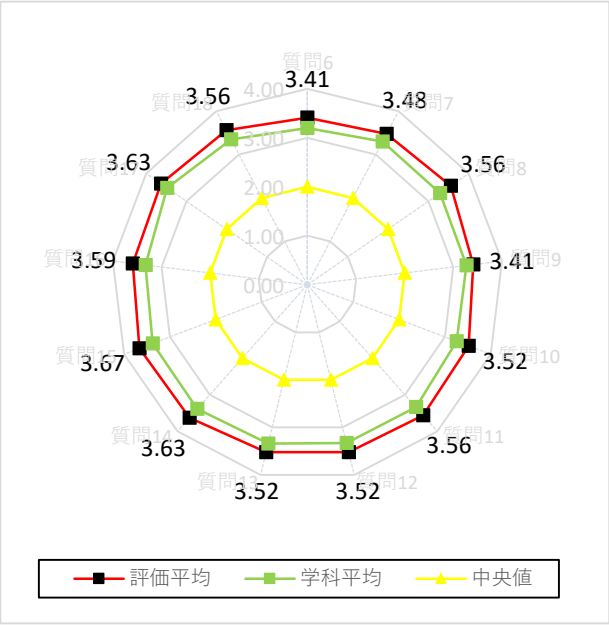
（３）次年度に向けての取り組み

教員は、学生の学ぶ意欲を引き出すことが重要だと考える。学生が自分自身の学びに肯定感を持ち、授業に対して積極的になって各自で理解を深めるための工夫をするよう促す必要がある。そのためには、授業内容をわかりやすく解説し、学生の反応を丁寧に確認しながら授業を進めているか、あらためて自己点検したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		障害の理解Ⅰ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

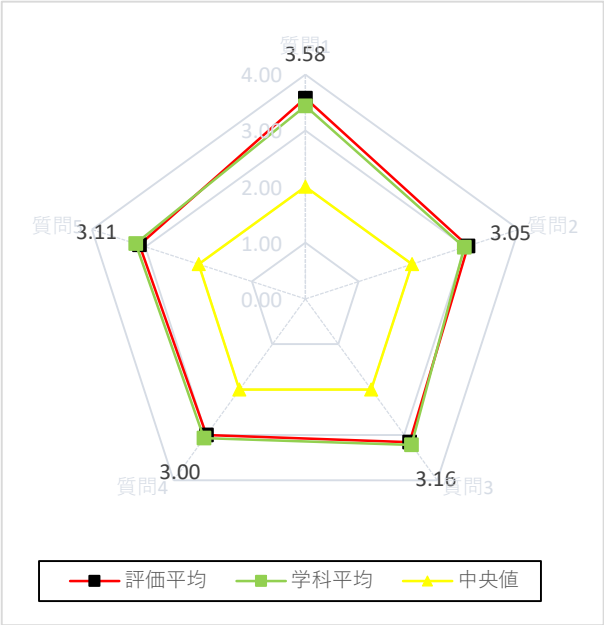
授業アンケート結果の分析・結果として、学科全体と比較しても高い評価を得ていた。具体的には、質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問８「授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。」、質問１４「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」、質問１７「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」の項目も学習の効果として高い数値となっていた。特にこれらの項目は教員からの主体的な働きかけの結果であり、これまでの授業改善が効果的に影響したものと考えられる。また、留学生への学習支援として、事前に学科教員と協議し、準備を進めてきた効果が得られたものと考える。

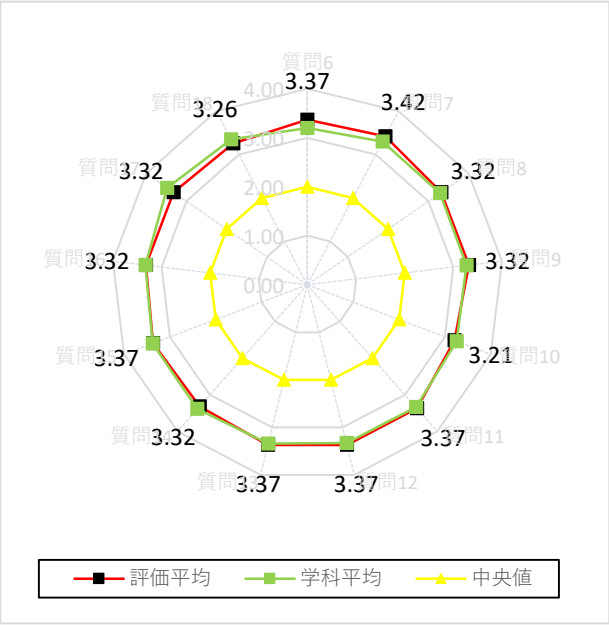
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、これまでの授業改善の流れを踏襲しつつも、新たな取組として留学生と日本人学生が合同で行う演習要素を取り入れたグループ学習を積極的に導入したい。また、教育課程の変更により、配当年次の調整が行われているため、その影響を考慮した授業展開を心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		障害の理解Ⅱ	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

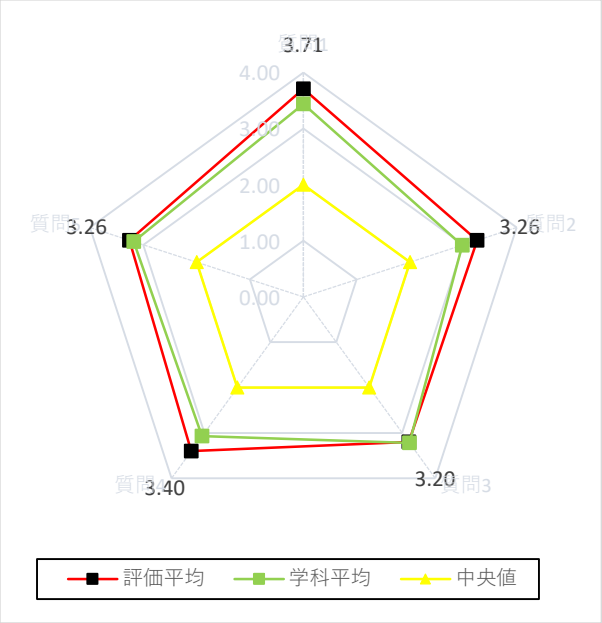
自己に対する評価ではシラバスのみ、学科平均より評価が高かった。授業自体に対する評価も平均か若干下回った。2人の学生が主に1につけておりそのことで評価が下がっていると思われる。自由記述にはほとんど記入がないため、詳しい理由はわからないが、難しかったとの記述のみあった。今までは特にこのようなことはなかったので、しっかり改善することが必要と思われる。2についている項目としては、板書、視聴覚教材。声、話す速さ、授業の進む速さ等が挙げられている。次年度は留学生が受ける教科なので特に改善が必要である。

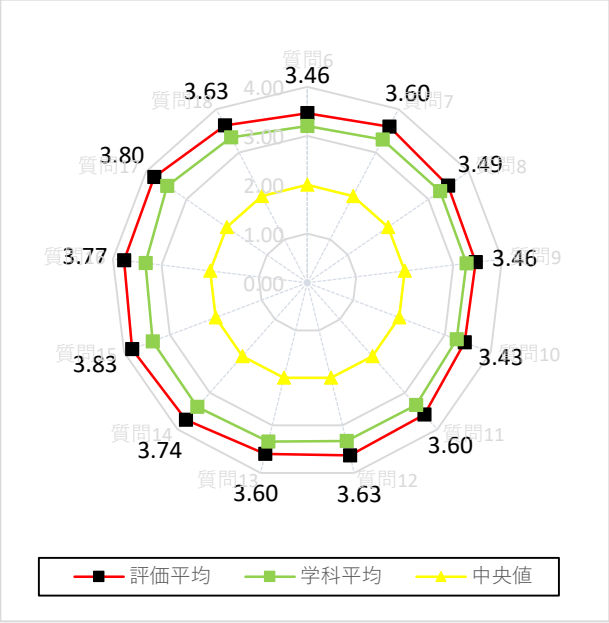
（３）次年度に向けての取り組み

板書を分かりやすく行う、視聴覚教材を多くする、度々、意見を求めながら改善していく。留学生に対してもわかりやすく説明する。特に日本人でも難しい語句が多いので、可能な限り語句の説明も行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		こころとからだのしくみ A	35名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

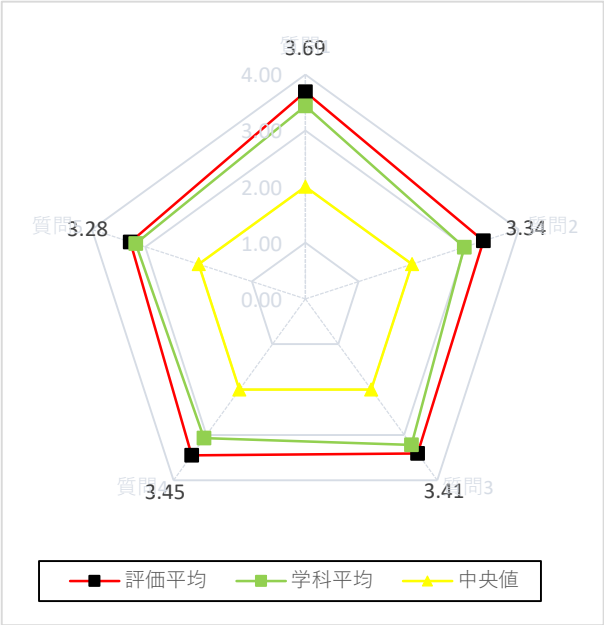
学生自身については、欠席は少ないが、私語は少ないとは言えない状態である。シラバスについては以前より説明を受けたことが意識に残る状態にはなっている。学科の平均より少しは良いが、8の興味関心のための工夫。視聴覚機器、板書、教科書や資料については評価が2の学生もおり、改善は必要である。4の割合を見てみると、15の公平な学生の扱い、1の出席が83%であった。次に17の教員の熱心さ、公平な対応が挙げられている。4の回答が少なかったのは、学生自身の総合自己評価で27%であった。自己評価以外では、興味関心への工夫、授業の進むスピードに改善が必要のようであった。自由記述では、留学生にとって大変難しい教科であることを再認識しました。自国の言葉ではわかっていても、日本語で何というのかがわからなくて苦労したようです。途中で学生に意見を求め資料の改善もしましたが、十分ではなかったと思います。学生の回答の仕方については、質問がないところにも評価がされており，この評価の仕方自体をよく理解していない可能性があるとも感じた

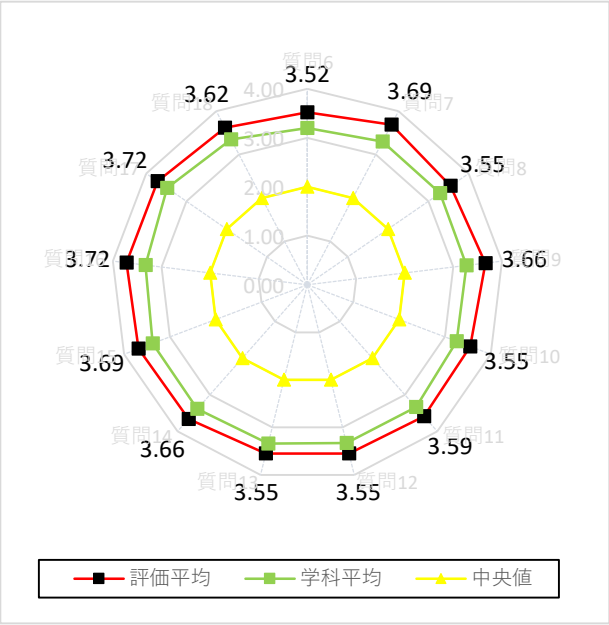
（３）次年度に向けての取り組み

今までより多く教科書の絵や図と照らし合わせながら説明を行う。板書はわかりやすく書く。プリント自体の工夫は続ける。勉強の仕方についても指導を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		こころとからだのしくみC	32名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

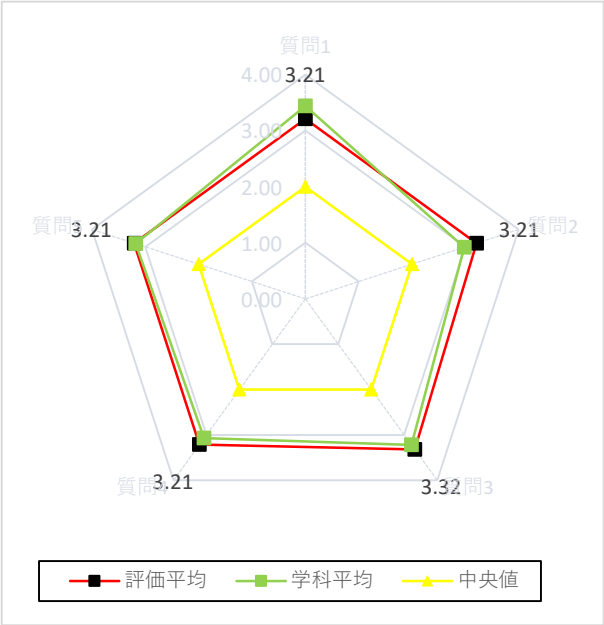
全体的に学科の平均より少々高い評価であった。福祉の学生は、自己評価は高かった。1の評価はなく、2の評価があったのは、視聴覚教材、板書、声の大きさ、明瞭さ、話す速さ、授業の進む速さ、誠実な対応、公平性であった。4の率が一番低かったのは、自分自身の総合評価であった。他に低かったのは、興味関心のための工夫、教科書や配布資料、声の大きさ、明瞭さであった。

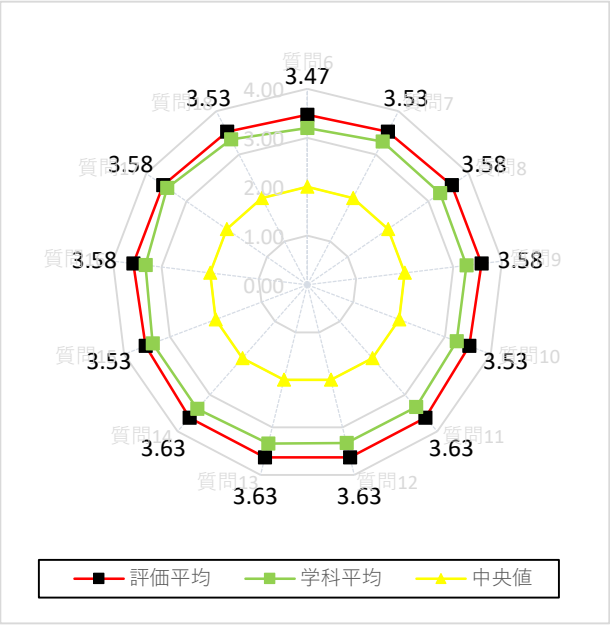
（３）次年度に向けての取り組み

視聴覚教材をより使って理解を深めさせる。板書を分かりやすく丁寧に書く。言葉ははっきり少々ゆっくり大きな声で話す。これらのことを改善し、留学生への対応を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		こころとからだのしくみD	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

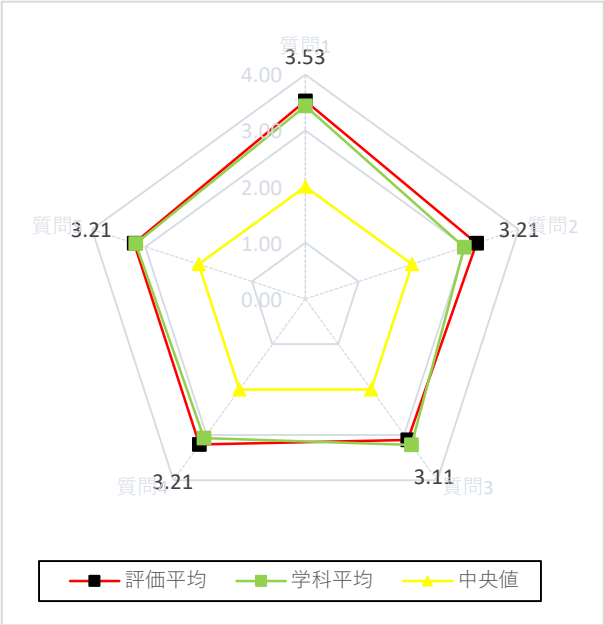
全体的に学科の平均より少々高かった。1の評価があるのは学生の自己評価の授業への欠席、シラバスの活用であった。2の評価は一人であるが多くの項目で見られた。4の評価が少なかったのは学生の自己評価のシラバスの活用と私語、工夫であった。次に授業の総合評価公平性、熱心な取り組みであった。公平性はいつも気をつけているがさらに気を付けていかなくてはならないと思った。質問項目がないところにも回答している学生はいる。

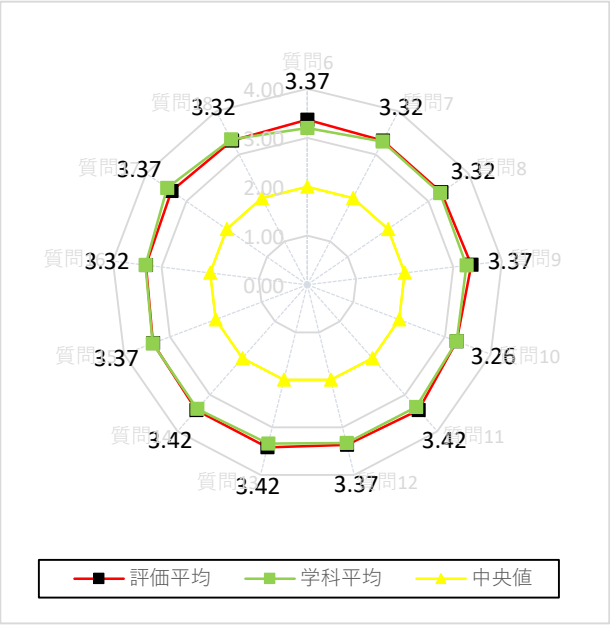
（３）次年度に向けての取り組み

学生が活用しやすいシラバスへの改善、私語への対応、興味関心のための工夫、公平ではないと思われないための行動・発言への注意。評価時によく質問項目を読み、意見はできるだけ自由記述に書いてもらうように伝え改善へのヒントとしていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		医療的ケアⅠ	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

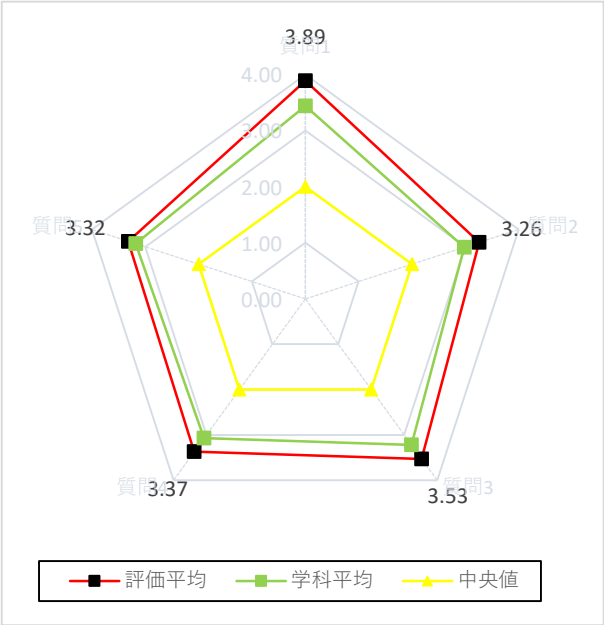
ほぼ学科の平均点と同じ評価である。1をつけている学生が1～2名いる。内容的に観察点等覚えることも多かったと思われる。2がついている内容が多かったのは、自分自身の取り組みに対してであった。教員側に対しては。声の大きさ、速さ、授業の進む速さ、全体評価であった。次年度の留学生に対してより気を付けるべき点でもあるのでしっかり改善する必要がある。自由記述には、演習に向けての知識を蓄えることができたとあった。

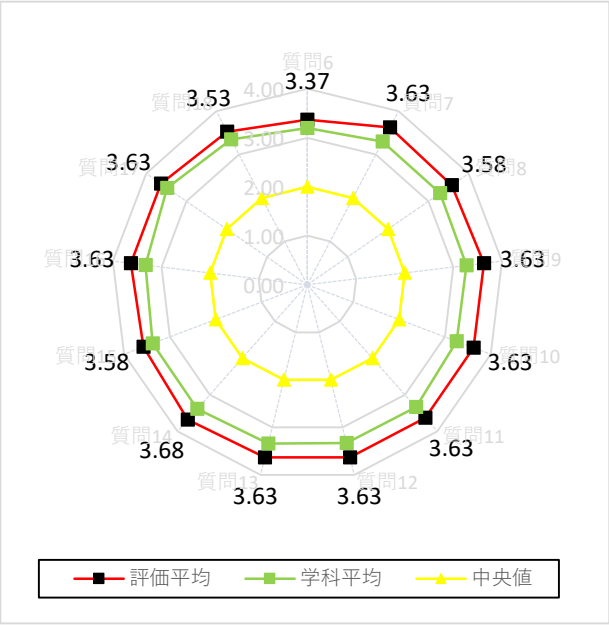
（３）次年度に向けての取り組み

声を大きく、板書は丁寧にはっきり書き、可能な限りゆっくりと進める。教科書の挿絵等をさらに利用し分かりやすくする。内容を整理してポイントをよりはっきりさせる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		医療的ケアⅢ	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

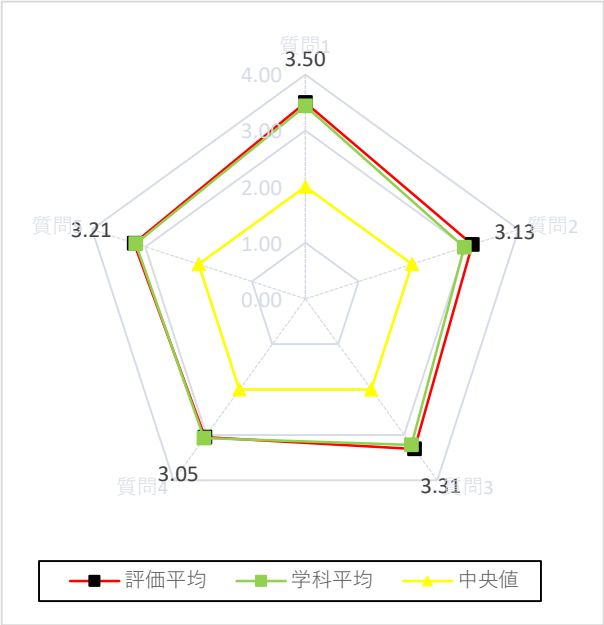
実技が主なためか、学科の平均よりも少々高い評価であった。1の評価は学生自身のシラバスの活用と総合自己評価であった。2の評価があったのは、興味関心への工夫、わかりやすい工夫、教科書資料の活用、授業の進む速さ、公平性、総合評価であった。4の評価が少なかったのは、学生自身のシラバスの活用、総合評価、授業の総合評価であった。質問項目ではないところにも評価があり、よく読まずに評価をつけている学生がいることがうかがえる。自由記述の中では、実際に器具を使って行うことで楽しく学べたとある。

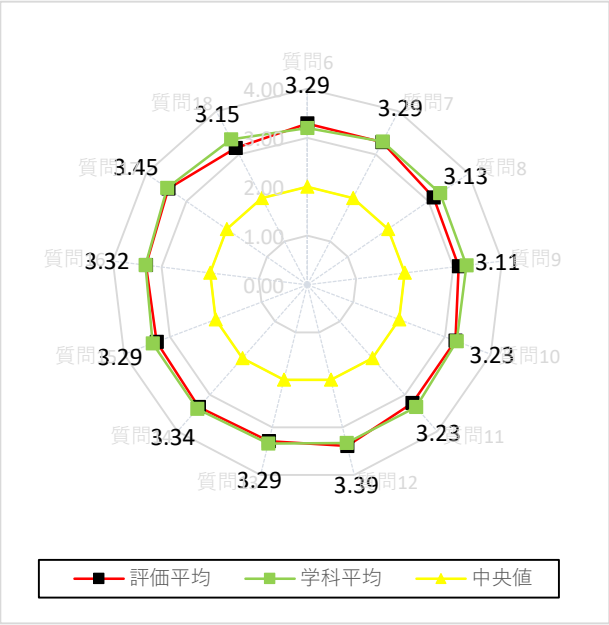
（３）次年度に向けての取り組み

授業で活用しやすいシラバスの作成、わかりにくい学生には十分時間をかけて説明を行う、評価時は質問をよく読んで回答することの声掛けを行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援学	71名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

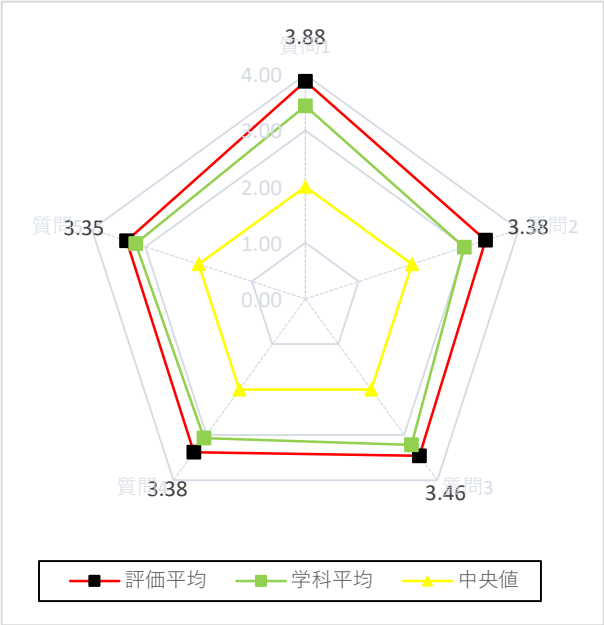
評価は学科の平均より少々低かった。一人が出席状況に1と評価している。2と評価しているのは学生自身に対する評価で、シラバスの活用、授業への関心が持てる工夫、視聴覚教材や板書授業自体補総合評価であり，見直す必要がある。4の評価が少なかったのは、学生自身の授業理解のための工夫、授業の分かりやすい工夫、興味関心への工夫、総合評価であった。授業はアクティブラーニングを用いたが、課題自体は毎回変えたが手法が同じであったため少々飽きてしまったのかもしれない。自由記述では、ほかのコースの学生と多くのコミュニケーションが図れたり、ほかの人の考えを多く知ることができた、楽しかったとの記述があった。他に、授業の課題の内容についての意見もあった。

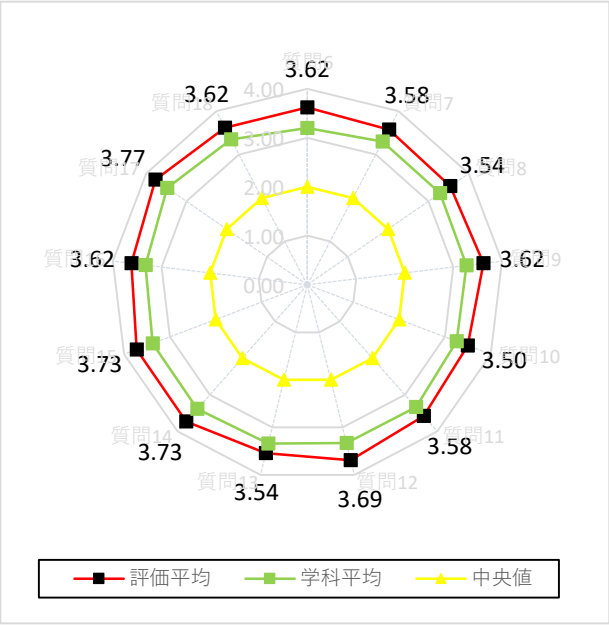
（３）次年度に向けての取り組み

他のコースとのかかわりはそのままにして、課題や回数を工夫する。シラバスを活用できる書き方に工夫する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅰ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

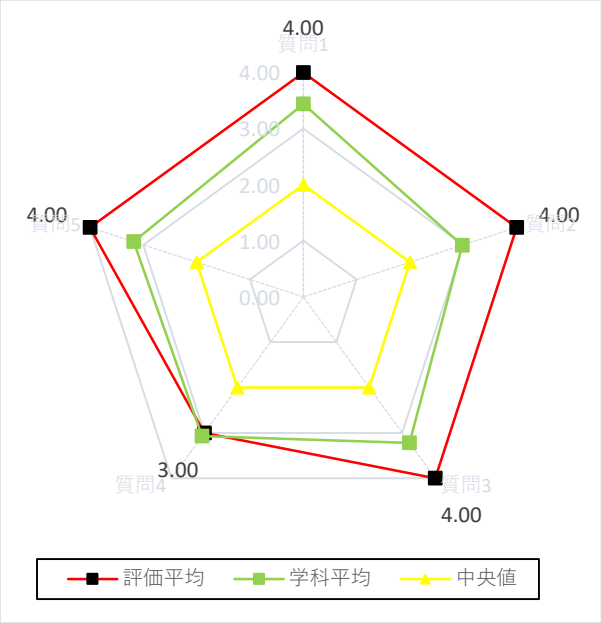
全体的に学科の平均より高い評価である。自由記述には、楽しくて勉強になったとある。1の評価はない。2と評価したのは、自身のシラバスの活用と理解のための工夫であった。教員側に対しては、到達目標の明確さと展開、興味関心のための工夫であった。4と評価した率が高かったのは出席したかどうかで、楽しかったこともあり、欠席は少なかった。4の率が低いのは質問5の自分自身の総合自己評価でた惜しくていろいろ動いたが能動的であった様子がうかがえる。他に低かったのは、視聴覚教材の活用や板書の使い方、授業の進む速さ、わかりやすくするための工夫であった。

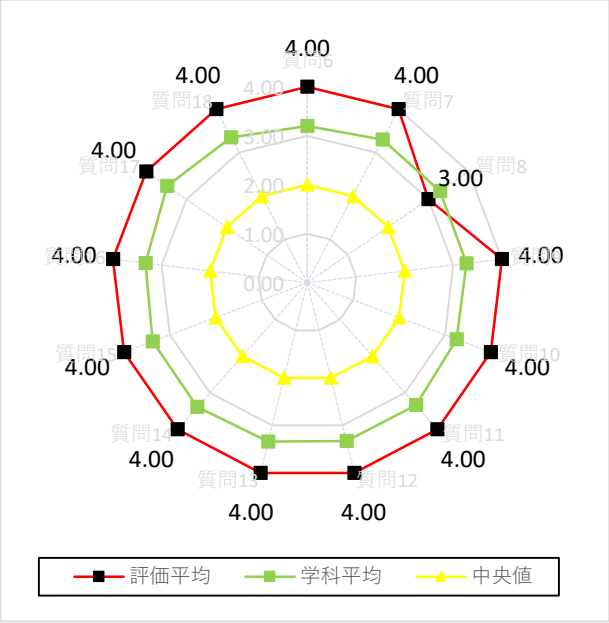
（３）次年度に向けての取り組み

1年の後期ではあるので、もう少し自己評価が上がるような授業の展開にしていく必要がある。内容的に視聴覚教材が特に必要な教科ではないので須賀、わかりやすい説明のために少々視聴覚教材の使用を増やしていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅰ	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

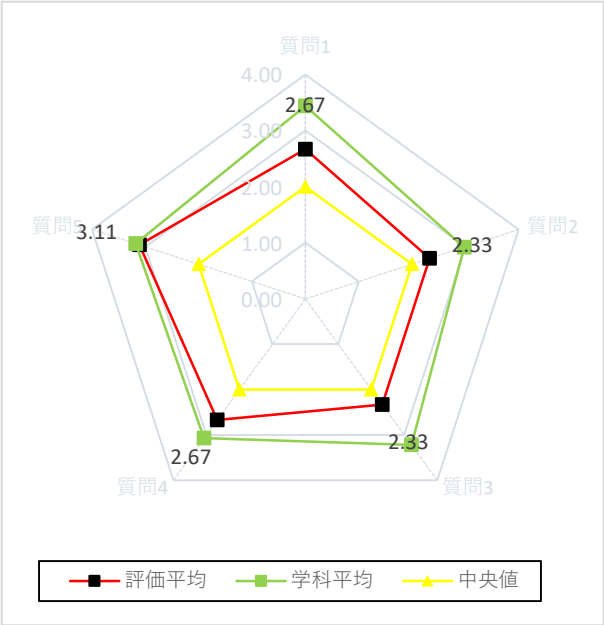
履修者5名中1名のみの評価であるため、結果の分析が難しい。本講義は2年次の地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）へつなげるための科目であるが、該当学生にとっては興味・関心が持ちにくかったようで、質問4と質問8においては学科平均を下回る結果であった。その他の項目については学科平均を上回っており、改善の余地はあるものの本講義の指導方法は概ね良かったと思われる。

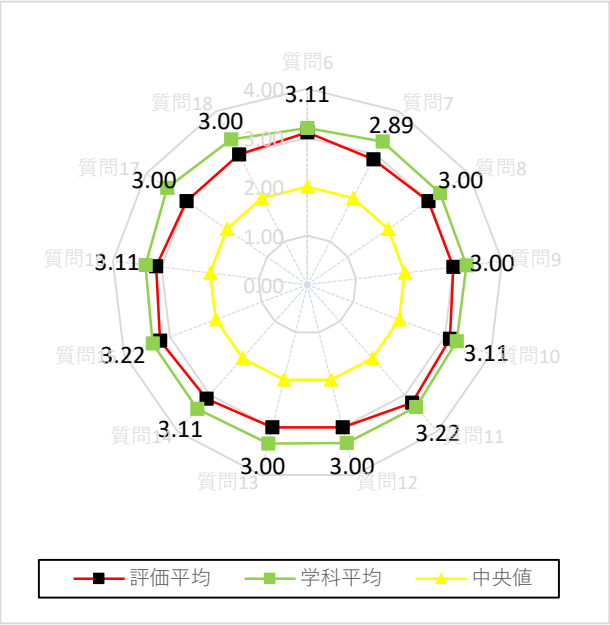
（３）次年度に向けての取り組み

授業に対する学生からの評価は概ね高評価であったことから、次年度も今年度同様の指導方法を継続していきたいと考える。しかしながらまだ不十分な点もあるため、受講者の興味・関心を探り、講義のなかに適宜取り入れることで、主体的な学びへとつなげられるよう改善を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅰ	14名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

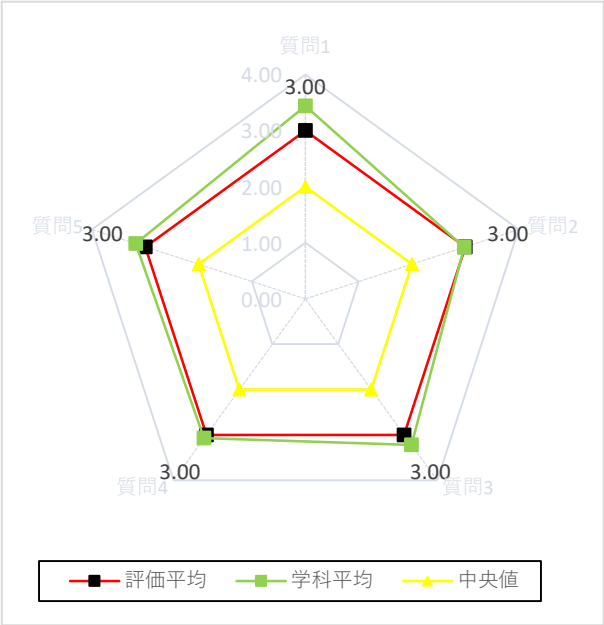
この科目は、地域生活支援学の実践的知の獲得を目指す学内外活動を含める演習であり、地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）につなげる半期開講科目である。学習計画の位置づけには十分な検討が必要である。学習の自己総合評価は、授業評価と比較して高くなっており、学習内容の高度化や意味づけをより明確にしていく必要があると考えている。

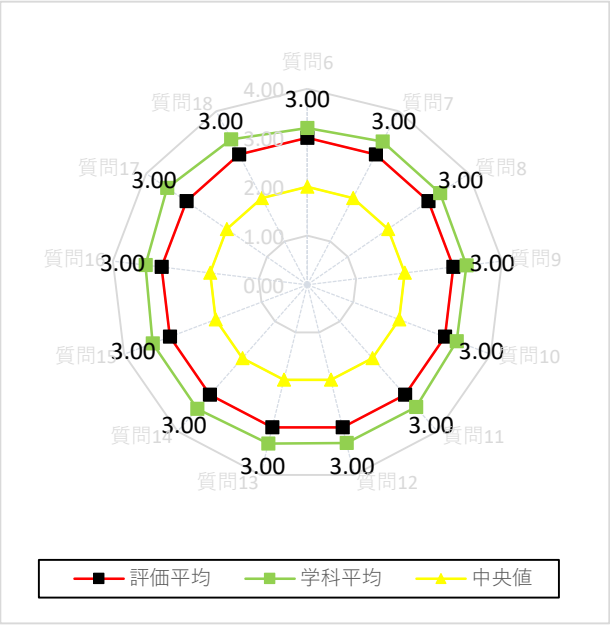
（３）次年度に向けての取り組み

学習の意義を明確にするために、講義・演習のなかで他分野への理解を深めさせ、実際の活動に臨めるよう計画する。また、主体的に学習が進められるように、ワークシートの作成などを検討し、必要に応じて活用していく。ゼミ活動であり、2年生と合流する際には、役割担当をより明確にしていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅰ	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

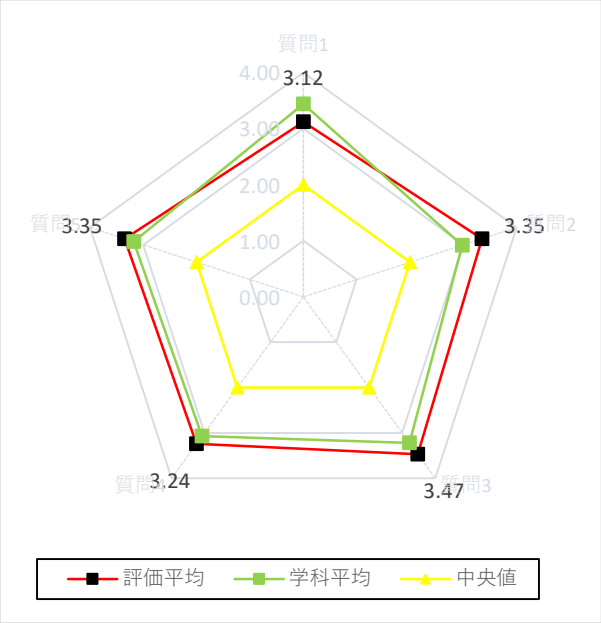
全ての項目の評価が3であった。この結果をみる限りでは「だいたいそう思う」ということで「ふつう」ということであろうと思われるが、履修者数のうち回答者数が1名であるため評価が難しい。

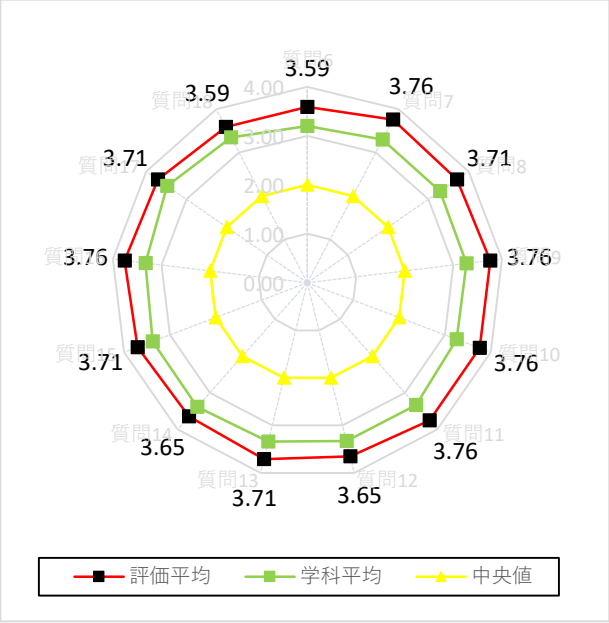
（３）次年度に向けての取り組み

本科目では、地域活動へ向けての計画と実施を主として行っている。受け身ではなく学生が自主的に行動できるような教育の展開に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）	18名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

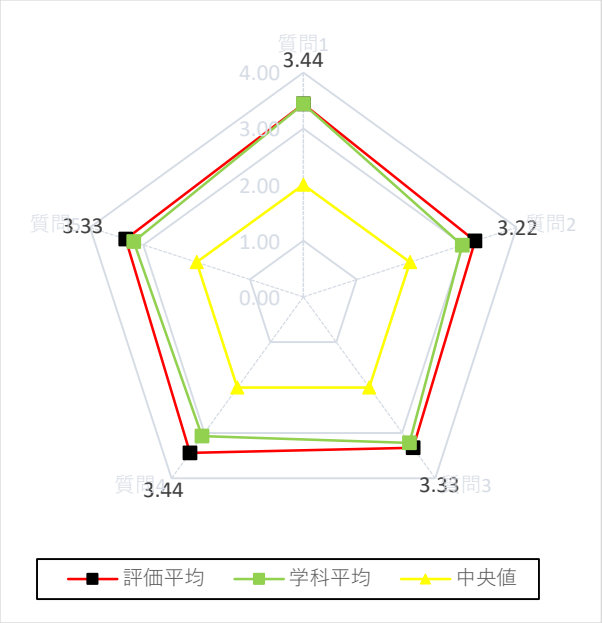
全項目について学科平均よりも高評価であった。本科目は卒業研究であるため、例年、学生が希望する研究テーマで実施している。今年はある地域での古民家レストランを活用した活動を予定していたが、夏の猛暑の影響で使用予定の作物が収穫できず地域での実施が不可能となるハプニングが生じた。しかしながら、学生は臨機応変に対応し場所を変更して実施し当初の目的はきちんと達成することができた。

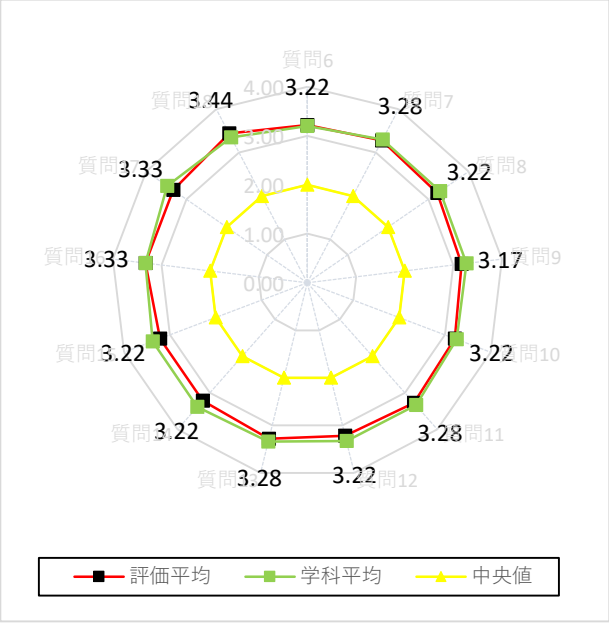
（３）次年度に向けての取り組み

本ゼミでは、例年、学生が取り組みたいテーマで研究を行うようにしている。毎年学生は熱心に自主的に取り組み各々の研究結果をまとめあげている。今年度は途中でハプニングがあったものの、学生は臨機応変に対応し目的を達成することができた。自分自身で考えやり遂げることができた達成感、満足感が高評価の要因ではないかと思われる。今後も学生の意思を尊重し学生の力で最後までやり遂げさせるという姿勢で取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）	20名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

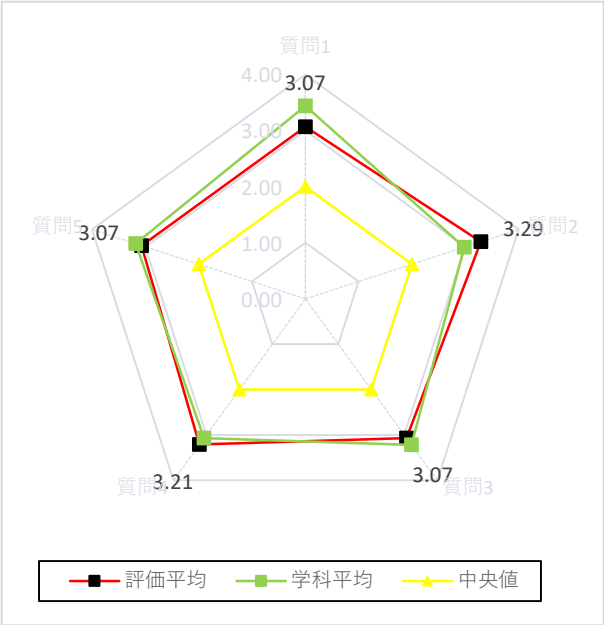
学生の自己評価及び教員授業評価共に中央値を上回っており、又学科評価平均値近傍にほぼ位置している。Q.6～Q.18のいずれも学生からの授業評価としては概ね肯定的に捉えられていた。
学生の自己評価では、学科平均とほぼ同等、やや高い評価となった。教員の授業評価については学科平均とほぼ同等、やや低い評価となった。
今年度は予定していた取り組み2つのうち、後半の１つは日程調整ができず中止となった。食・多文化コース合同で活動を実施したが、食に対して多文化コースの参加度が低く、卒業研究として取りまとめが難しく、「多文化」としてコース独自でのテーマを取りまとめることができなかった。

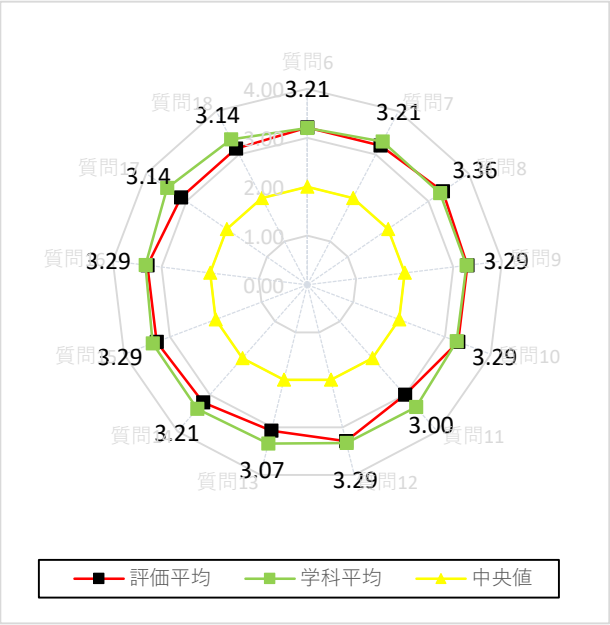
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、多文化コース単独で卒業研究を実施する予定である。学生がより関心を持てる「多文化」らしいテーマ設定と主体的に取り組める工夫をしていき、学生の興味を喚起したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）	17名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

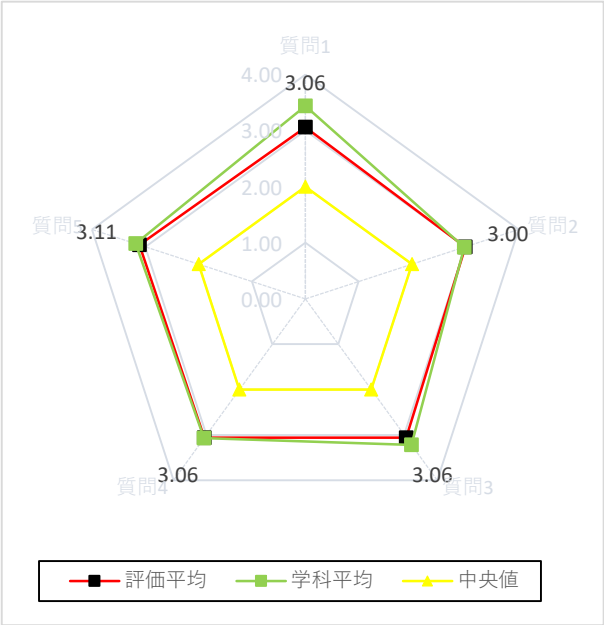
卒業研究の評価結果は学科平均と比較すると若干低い評価であった。この授業の特徴は学生自らテーマを設定し目標を立ていくため、グループ内でのコミュニケーションが重要になっている。この結果を真摯に受け止めて次年度に向けて改善する。

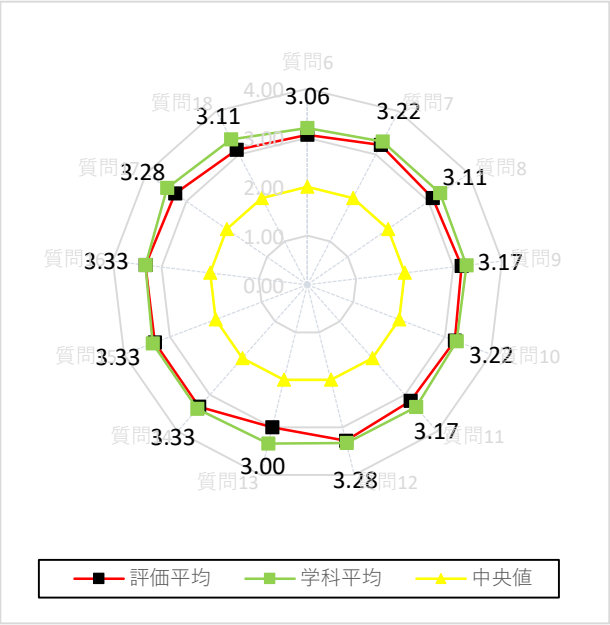
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みは次の通りである。
①評価が低かったシラバスの活用についてはしっかり確認し活用させる。
②グループ活動では互いが意見を出し合い、ディスカッションできる環境をつくっていく。
③机上・学内だけでなく地域との連携ができるような体制で実施し実践力を高めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）	18名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

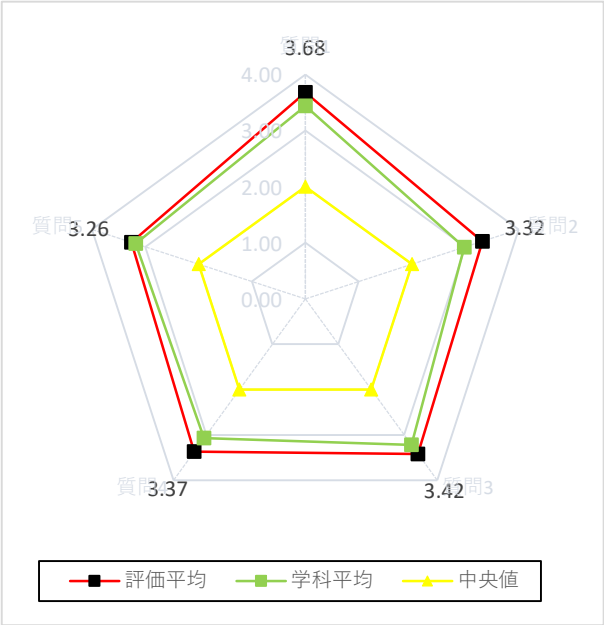
全般に高い評価を与えているが、平均との比較では低いものとなっている。より主体的に活動するよう促し、また学習活動の意義を十分理解せるよう指導の改善が必要と考えられる。

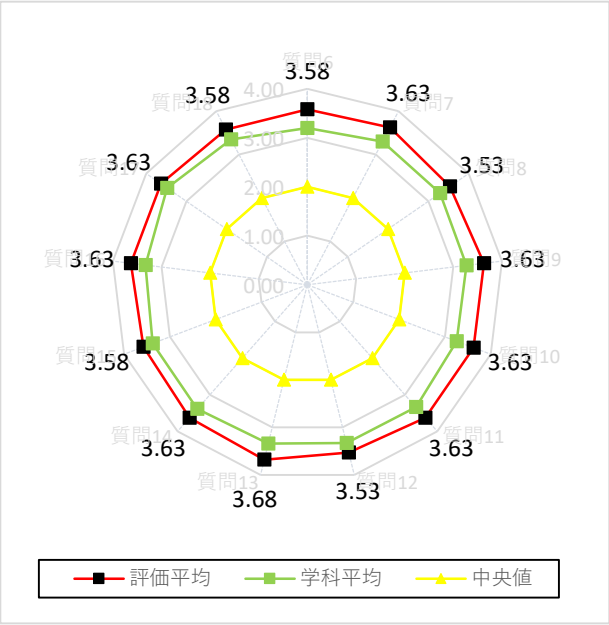
（３）次年度に向けての取り組み

最終的到達指標とする創造力・行動力に対する具体的成果目標を理解して自らの目標を設定させ、学生一人ひとりが目的を決めて主体的活動ができるように指導を行っていく。この際、師弟同行という考えのもとで、学生と共に実際の活動に加わることで、人間性への高揚も図っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		地域生活支援演習Ⅱ（卒業研究）	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

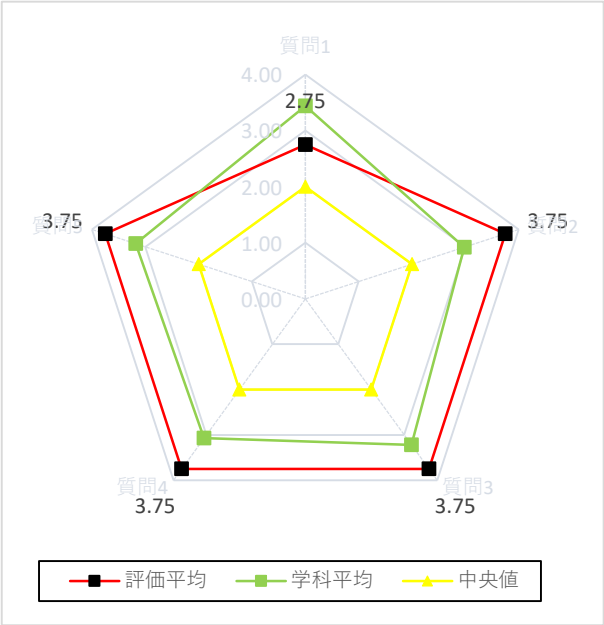
全体的に、学科の評価の平均に近い。自己評価は記述はなし。評価の１がある。1がついている内容が多かったのは、11の板書や資料の配布についてであるが、この教科はあまり資料の配布や教科書を必要としない科目であるので、内容をあまり見ずに回答した可能性もある。4が少なかった項目としては、８の興味関心への工夫であった。学生が興味のあることについて調べる教科であるが、そのことで害としないと感じたとも考えられる。

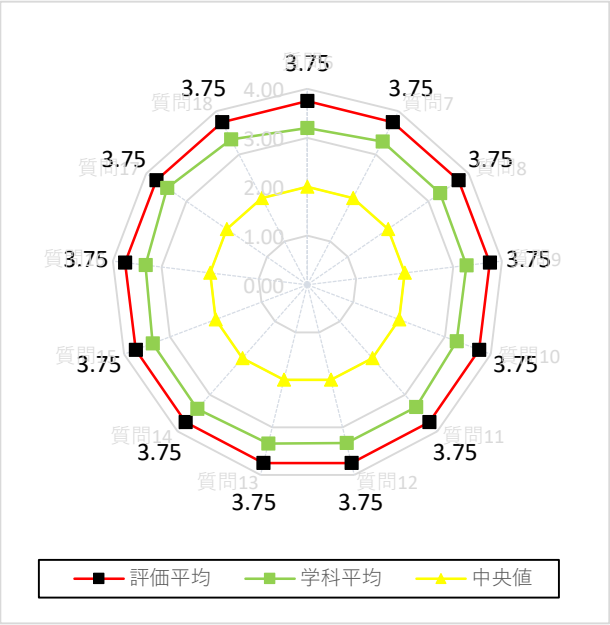
（３）次年度に向けての取り組み

学生が興味関心があることを、楽しく研究することができるようによりわかりやすく説明を行う。評価の仕方についても、評価をする前に確認しておく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		食文化コミュニケーション	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

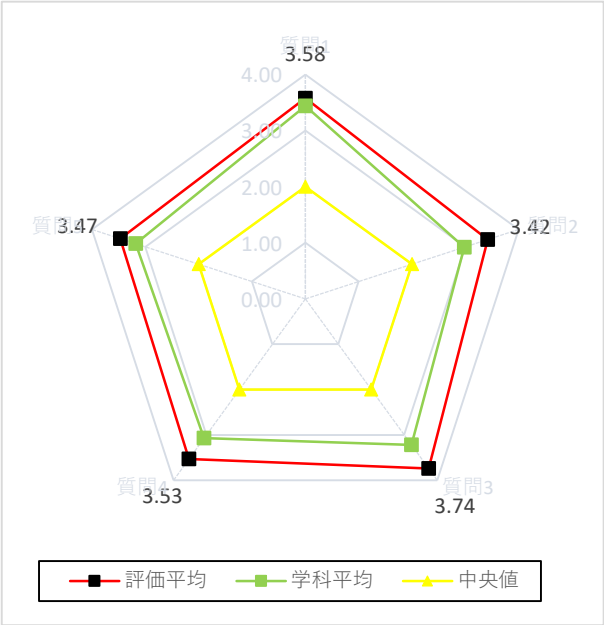
授業に対する学生からの評価では、全項目で学科平均を上回っており、本授業における指導方法は概ね良かったと考えられる。学生の自己評価のなかで質問1についての評価が低いのは、留学生の出席状況が良くなかったためと思われる。休まずに参加したいと思ってもらえるような授業を心がけたい。

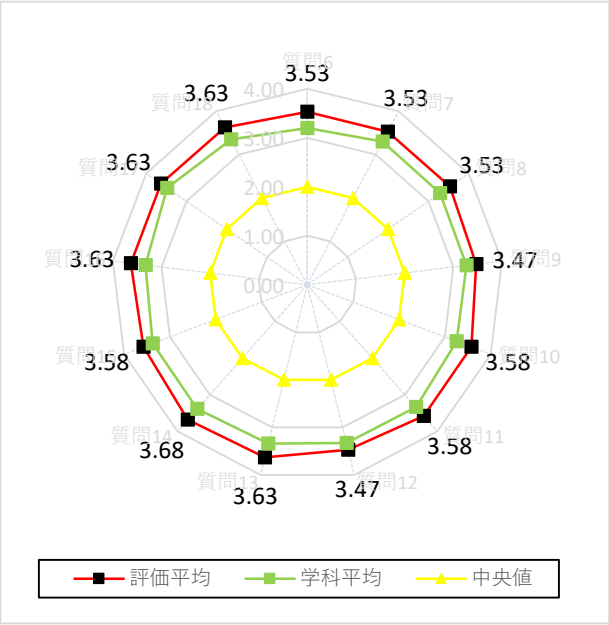
（３）次年度に向けての取り組み

学生からの評価は概ね高評価であったことから、次年度も今年度と同様の指導方法を継続していきたいと考える。全体の出席率を上げるため、日本人学生も留学生も共に学びあえるような雰囲気づくりを心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		日本語Ⅱ	21名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

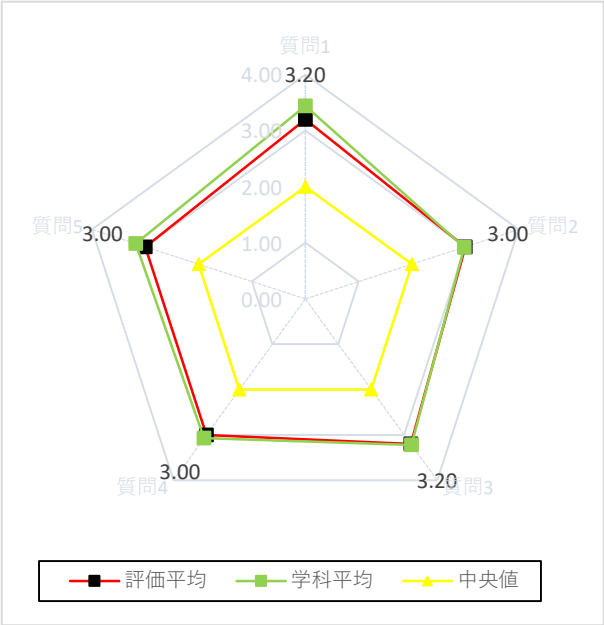
①学生の自己評価及び教員授業評価共に学科平均値をやや上回る評価であった。
②Q.6～Q.18のいずれも学生からの授業評価として肯定的に捉えられていた。
多文化コースに加え、福祉コースの受講生が加わり日本語クラスのレベルは格段に上がり、学生の授業への参加度、理解度も向上したことがよい効果をもたらした。担当初年の昨年の経験を今回の授業に生かすことができた。

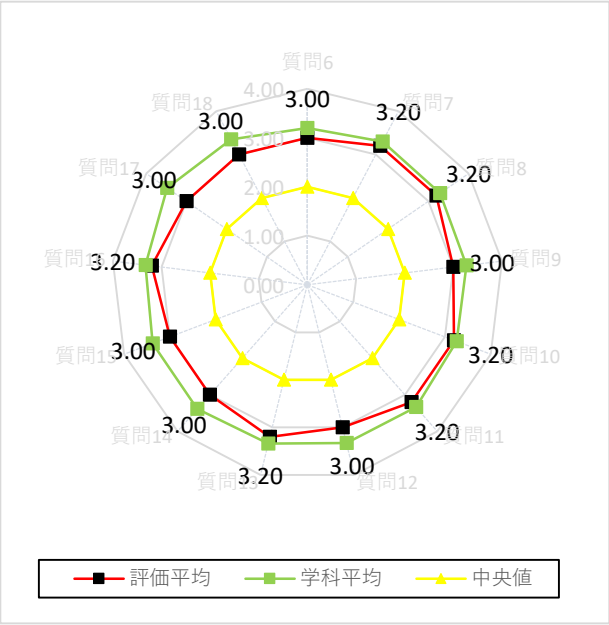
（３）次年度に向けての取り組み

新カリキュラムとなり、日本語のレベル分け授業も始まる。日本語Ⅰと日本語Ⅲは上級と初級のレベル分けで実施の予定であり、日本語Ⅱはその橋渡し役をなる科目に設定しているので連携をうまく取り実施したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		日本語Ⅳ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

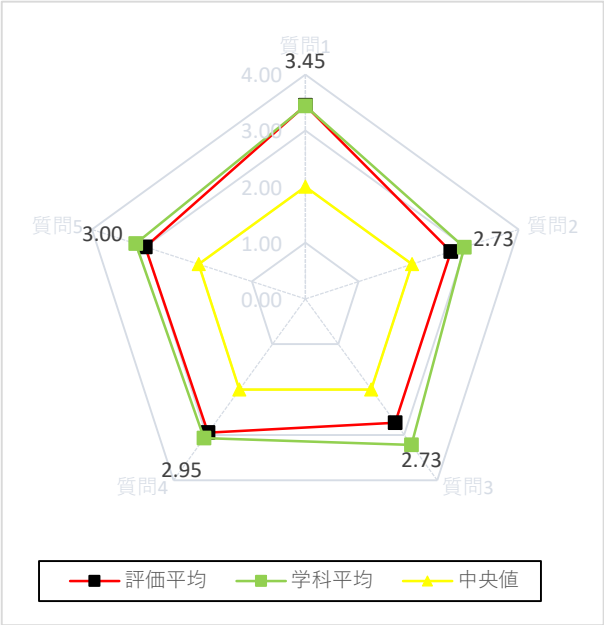
この科目は昨年度初めて開講し今年度は2回目の開講であった。昨年度もそうであったが、履修学生である外国人留学生の日本語レベルと理解度、学習意欲は各々違う。昨年度の経験からより生活に密着した日本語、日本語レベルもより簡単なものとし授業を展開してみたが、評価結果を見る限りは教育のやり方をもう少し工夫する必要があったのではないかと思われた。

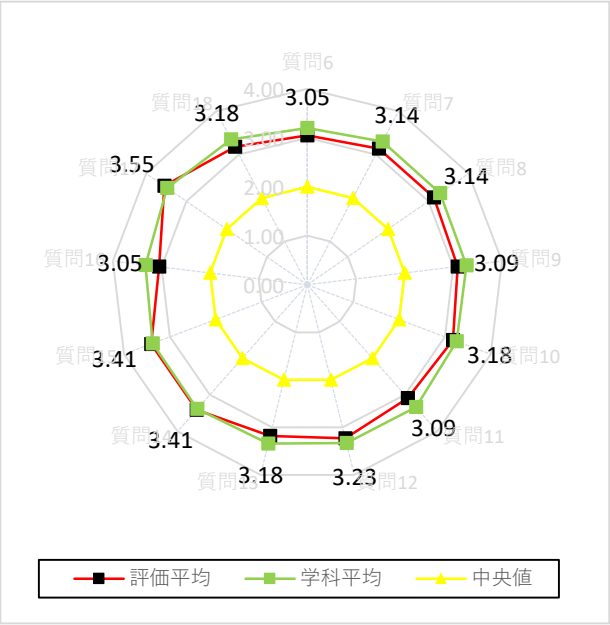
（３）次年度に向けての取り組み

本科目はカリキュラム変更により今年度で終了となった。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		食品衛生学	28名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

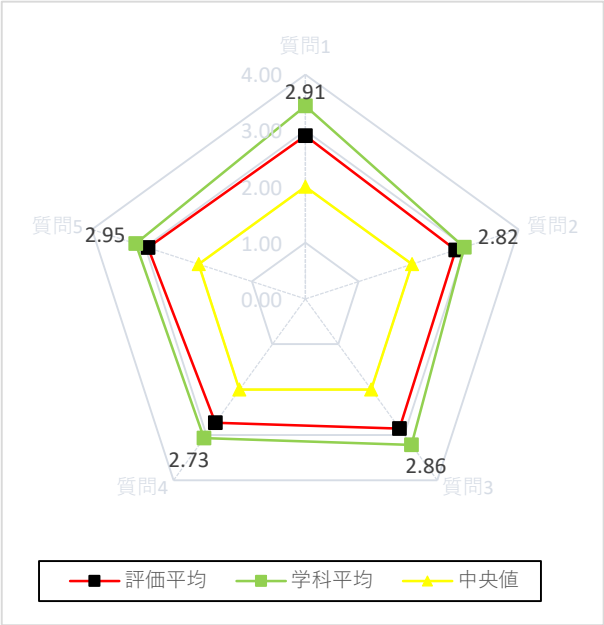
学生自身の自己評価はQ1以外、学科平均よりやや低い結果となった。
教員の授業の評価は平均よりやや低い結果となった。Q6,7は毎回、章が変わるごとにシラバスと到達目標、授業のキーワードなど説明したにも関わらず、やや数値が低かった。毎回の授業でその日の到達目標を具体的に明示し、学生がしっかり把握するように行っていきたい。

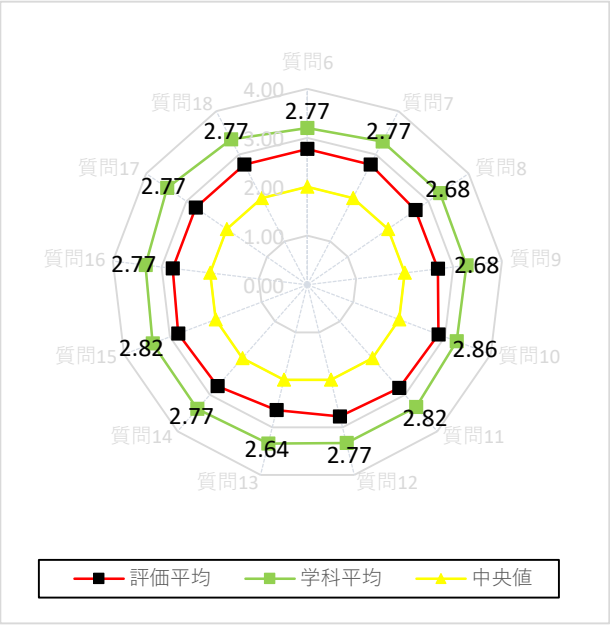
（３）次年度に向けての取り組み

多くの内容を伝えるために大部分をパワーポイントのスライドで行っているが、内容の印象づけのため板書も取り入れ学生に書かせる、グループワークなどの主体的な内容を取り入れるなど工夫を重ねたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		栄養指導論Ⅰ	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

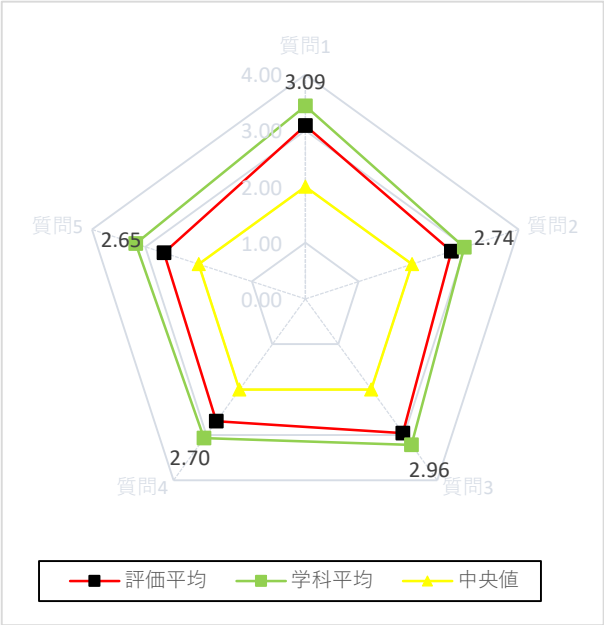
栄養指導論Ⅰは、人々の健康・維持増進をはかるため、食生活の視点から問題解決を図ることを目的に指導対象者に対して具体的な方法により指導を行い、正しい食生活を確立させるための実践的な取り組みやすい学問である。今回の評価の結果から全ての項目は学科平均と比較し低い値であった。その中でもQ8.9.13.の授業のやり方に関する項目ではもっと興味・関心が持てる分かりやすい工夫がまされた授業展開が必要であることが分かった。学生コメントは「教科書の文章を板書されていたので、どこが重要なのかよく分からなかった」「実力試験の過去問を教科書とノートを見て解ける内容ではなかった」その一方では「分かりやすかったです」といったコメントもあった。この結果を真摯に受け止め改善していきたい。

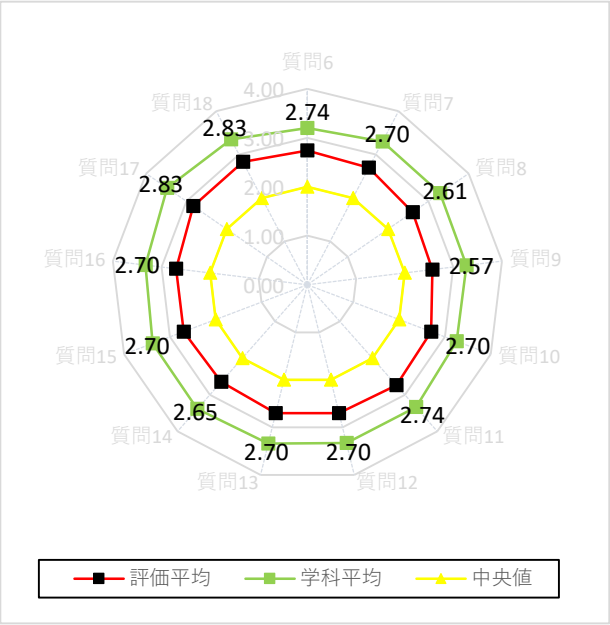
（３）次年度に向けての取り組み

興味・関心が持てる授業内容にし分かりやすく工夫を栄養士実力認定試験受験に向けて連動した学習ができるようにしていく。そのためにも予習・復習を習慣化させ積極的に学ぶ力を修得させる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		栄養指導論実習Ⅰ	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

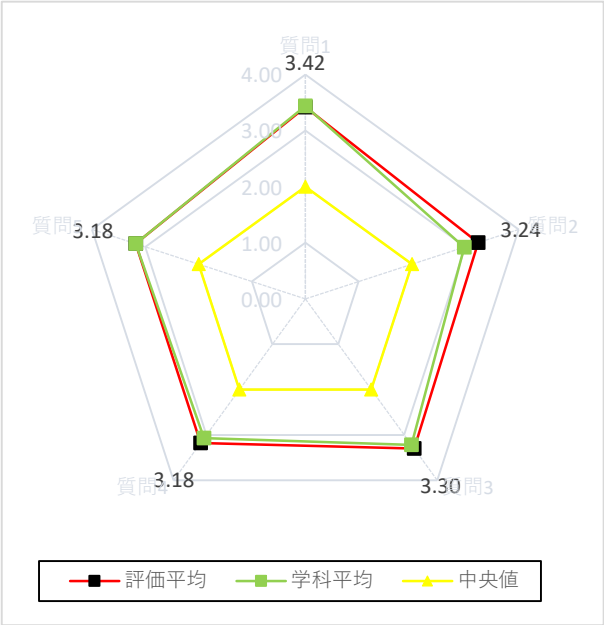
この授業は栄養指導論で習得した知識を実地または実物について実際に学ぶ、そして将来現場での栄養指導で役立てるように学んでいく授業である。評価の結果は、学科平均と比較すると低い評価であった。学生コメントには「分かりやすい授業であった」その反面「他の授業と同じような内容のところがあったので、なにを学ぶのかよく分からない部分があった」とあり、学ぶ教科の目的等を明確に示す必要がある。この結果を真摯に受け止めて次年度に向けて改善する。

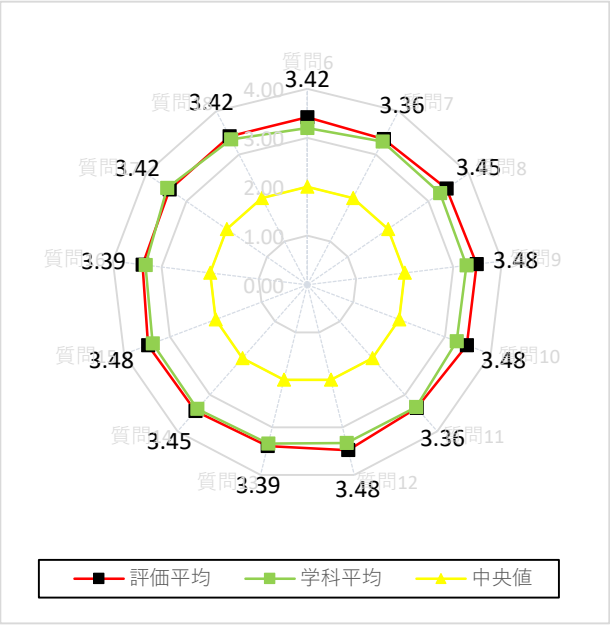
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みは次の通り丁寧に教育する。
①授業内容を事前に理解させるためにシラバスの活用を習慣化させる。
②授業の進め方は双方のやり取りを密にし確認しながら進めていく。
③グループでの課題作成は互いが意見を出し合って積極的にディスカッションできる環境をつくっていく。
④媒体作成では対象者にあった内容で作成し栄養指導ができるようにする。
以上の内容で授業を分かりやすく進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		栄養指導論Ⅱ	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

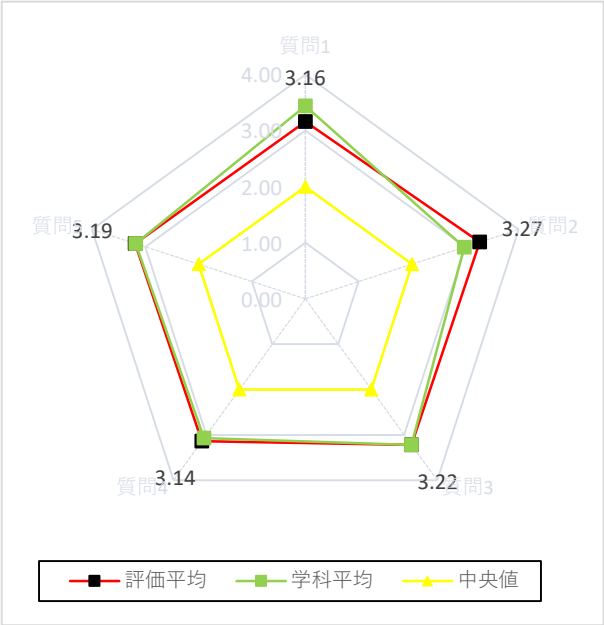
栄養指導論Ⅱの科目は栄養士資格必門科目である。授業の概要は栄養指導論Ⅰの内容を踏まえライフステージ別に日常生活に即応した内容である。学生に評価は学科平均と比較すると若干ではあるが高い値であった。その中でもQ9.10.12.15の授業評価は授業工夫、視聴覚機器、話す速さ、公平な対応など高い評価であった。学生のコメントは「スライドショーにまとめてあり、分かりやすかったです」と書かれており概ね満足いく授業であったことがうかがえた。

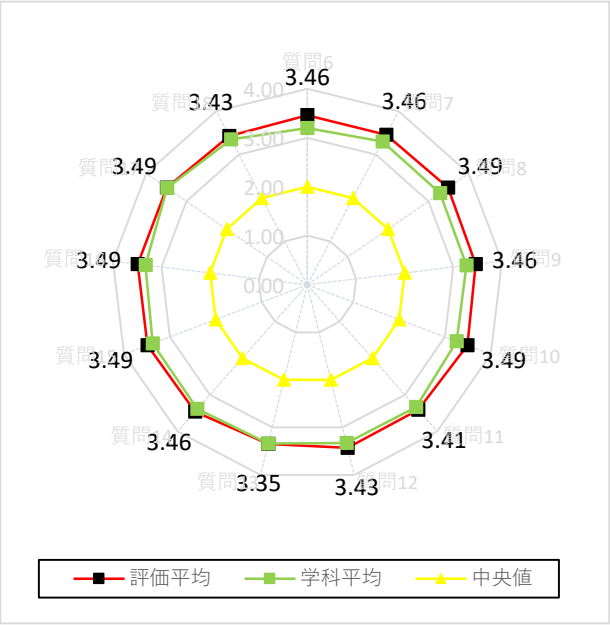
（３）次年度に向けての取り組み

授業内容、方法、教員の対応については問題点は感じられなかった。次年度も本年度同様、学生の質問等に回答しながら進めていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		栄養指導論実習Ⅱ	37名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

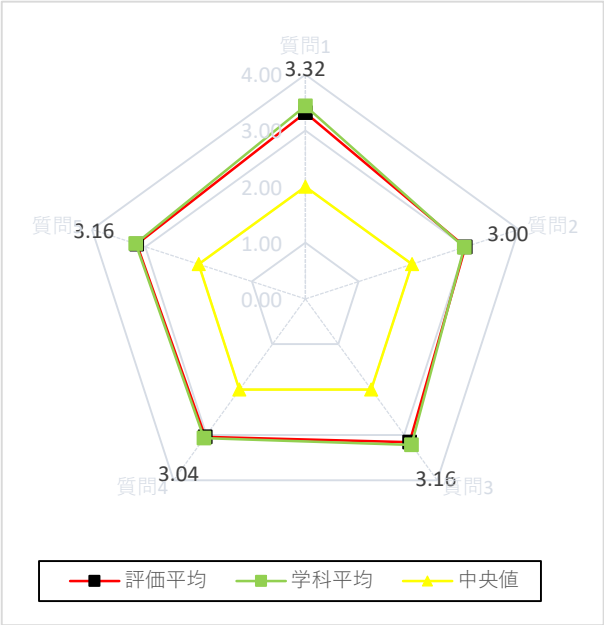
今回の結果は全項目において学科平均並みであった。本授業は、栄養指導論で学んだ知識を実際の栄養指導の現場で活かせるように集団栄養指導の模擬実習や栄養食事調査や統計処理について実習をしている。自由記述ではプリントを見ながらの学習ですごく分かりやすかったという意見があった。

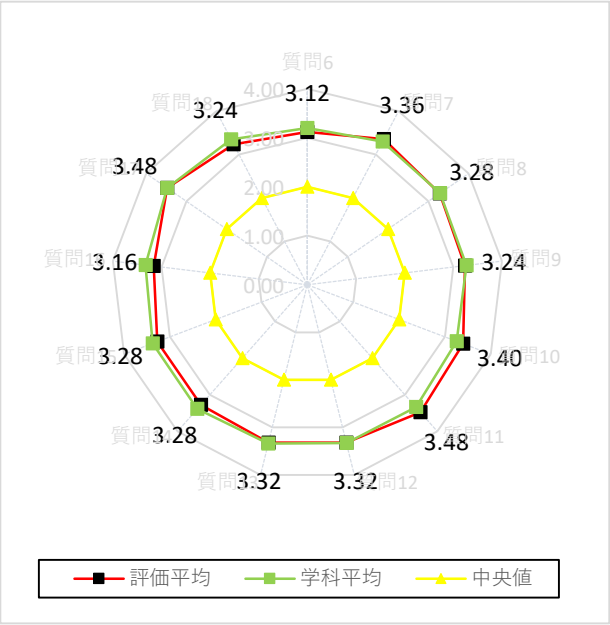
（３）次年度に向けての取り組み

全体の評価としては概ね良いと考えられる。毎年改善を重ね配布資料等もより分かりやすくする工夫をしている。その点については、自由記述に肯定的な意見があったため今後も継続していきたい。また、理解度向上のため学習内容が実際の現場でどのように活かされるのかがイメージできるような授業展開としたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		調理学	33名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

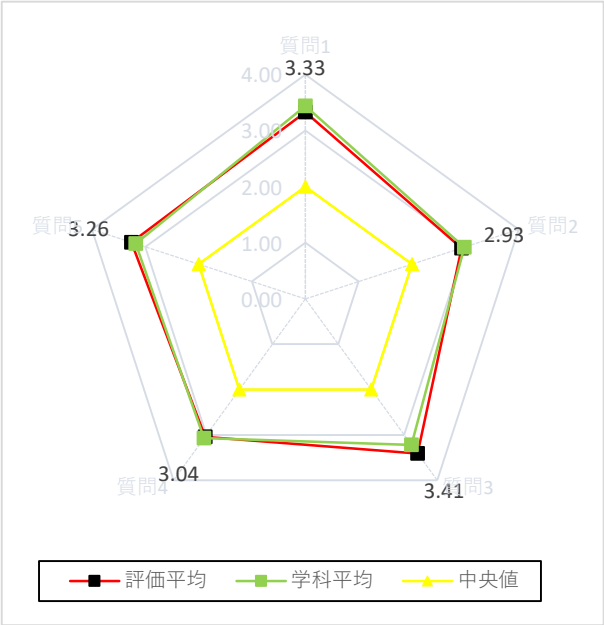
調理学は日常的な調理操作の基礎を科学的に学んでいく科目であるため、調理実習に結びつけることができるような内容で授業を進めていった。評価の結果は学科平均と比較すると学生自身の自己評価は上回っており特にシラバスの活用が高い値であった。教員に対する評価では、すべての項目が高い値であった。特に「教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していたか」「教科書・配布資料等は役に立ちましたか」「教員は熱心に授業に取り組んでいたか」の評価は3.36～3.48であった。学生の記述は「プリントの配布で勉強しやすくなりよかった」「食品のことについて学べたのでよかった」といった記述があった。

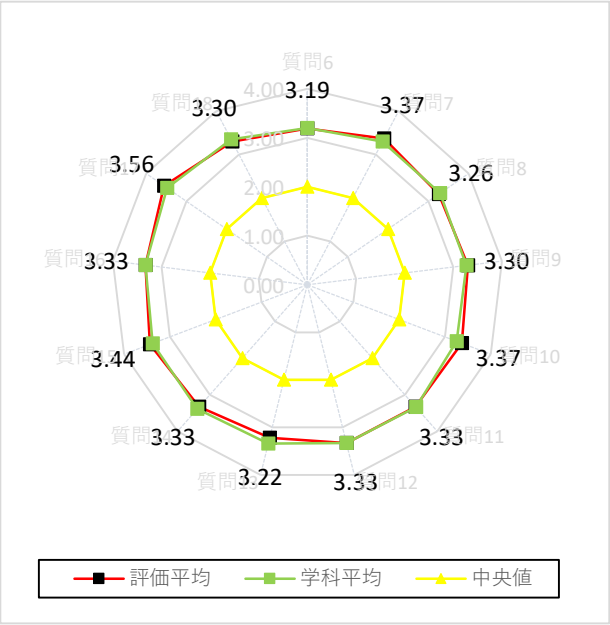
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、これまでと同様に、学習の基本となる予習復習が確立できるようにシラバスの活用を習慣化させる。さらに授業の進め方については双方のやり取りを密にし確認しながら興味が持てる内容で進めていきたい.

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		調理実習（日本料理）	33名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

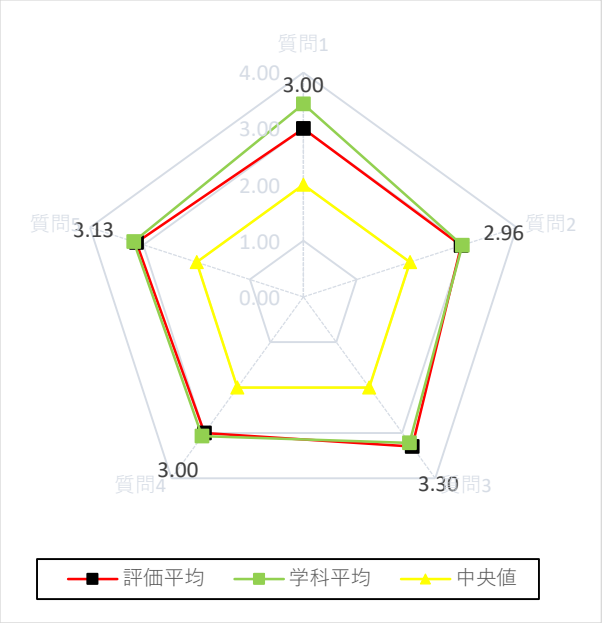
この授業は栄養士として即戦力を高めるために必要な調理技術等を習得させる基礎調理である。技術を習得させるために、材料の特殊な切り方や調理操作が理解で出来るように出来る限りデモストレーションをおこないながら授業を進めていった。評価の結果は学生自身の授業参加態度以外の項目おいて肯定回答であり良好であったことが伺えた。学生のコメントは「授業を一回も欠席せずに頑張って取り組むことができた」「たくさんの料理を作れて楽しかった。もっと技術を上げていきたい」である。このことから調理実習は栄養士に役立つ科目であると認識しており、今後は家庭での復習調理ができるように課題等の工夫をし、調理技術の向上に努めなければならない。

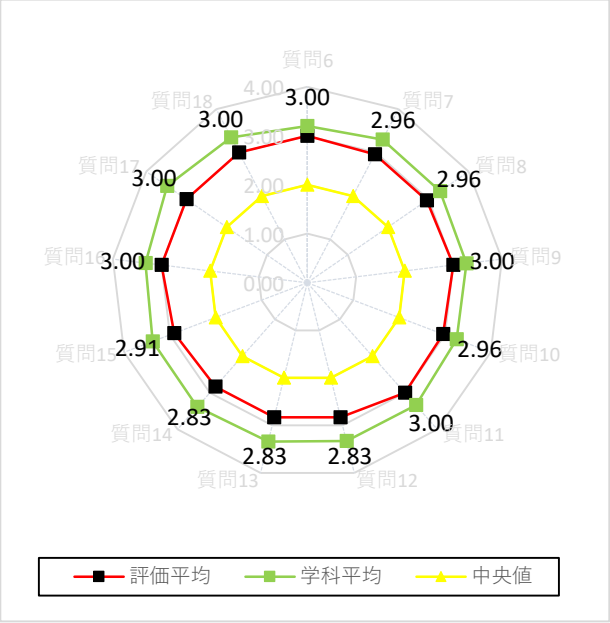
（３）次年度に向けての取り組み

今回の授業評価では概ね良好であったことから、これまでと同様に下記の内容を中心に実習を展開していく。
①授業の理解のための自己工夫としてこれまでと同様に実習カードを事前に配布し予習させ、実習後は家庭で必ず再実習を行なうなど、実習前後は、家庭学習が出来るよう指導する。
しかし、過去の経験で実習時にカードを“忘れる”“紛失する”といったことから、カード管理も十分にできるよう指導する。
②学生の学習意欲、技術能力、生活環境により個人差が大きいため、技術能力を習得させるだけでなく、グループ実習を通し、積極性、協調性、指導力、マナー等も併せて学ばせる。また、人間形成の場と して互いに学びあいながら、実践実習が出来るよう、指導していく。
③包丁扱いなど調理技術の向上努めると同時に大量調理へスムーズに展開できるように訓練していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		調理実習（西洋料理）	26名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

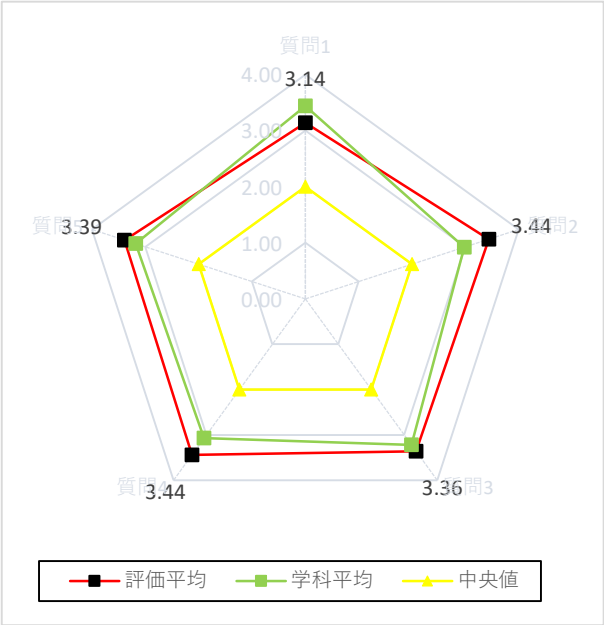
この授業は栄養士として即戦力を高めるために必要な調理技術等を習得させる基礎調理である。技術を習得させるために、材料の特殊な切り方や調理操作が理解で出来るような説明をしイメージさせながら、特殊操作についてはデモストレーションと併用しながら授業を進めていった。評価の結果は学生自身の授業参加態度以外の項目おいては殆どが肯定回答であり授業内容は概ね、良好であったことが伺えた。しかし、前期の日本料理と比較すると評価が若干低く、その理由に前期はデモストレーションを中心に、後期の西洋料理は調理操作の説明を中心にし、説明でイメージしながら操作していく力の修得に視点をおいて授業を行ったため、イメージと実技実践を結びつけるのが困難であったことが分かった。学生から「師範がエアーなのにとても長い。長く説明するなら実際にして欲しい。」のコメントに対し真摯に受け止め改善していきたい。また「美味しかったです。」のコメントは調理操作等が上手くいき上手に仕上がったと判断できる。

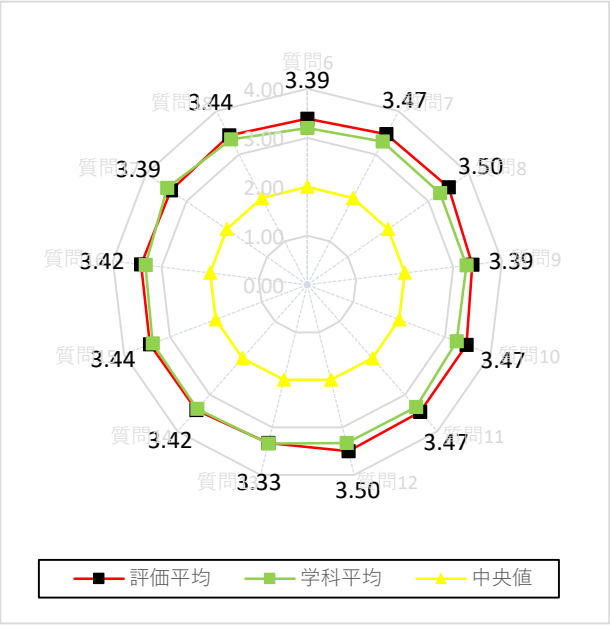
（３）次年度に向けての取り組み

今回の授業評価では概ね良好であったとは言え、説明中心より具体的に示すデモストレーションでの進め方が効果的に学ぶことができることが分かったため、これまでの内容に追加して実習を展開していく。
①授業の理解のための自己工夫としてこれまでと同様に実習カードを事前に配布し予習させ、実習後は家庭で必ず再実習を行なうなど、実習前後は、家庭学習が出来るよう指導する。
②学生の学習意欲、技術能力、生活環境により個人差が大きいため、技術能力を習得させるだけでなく、グループ実習を通し、積極性、協調性、指導力、マナー等も併せて学ばせる。また、人間形成の場と　して互いに学びあいながら、実践実習が出来るよう、指導していく。
③包丁扱いなど調理技術の向上努めると同時に大量調理へスムーズに展開できるように訓練していく。④食材の切り方、加熱操作法についてはデモストレーションで具体的に示していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		調理実習（中国料理）	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

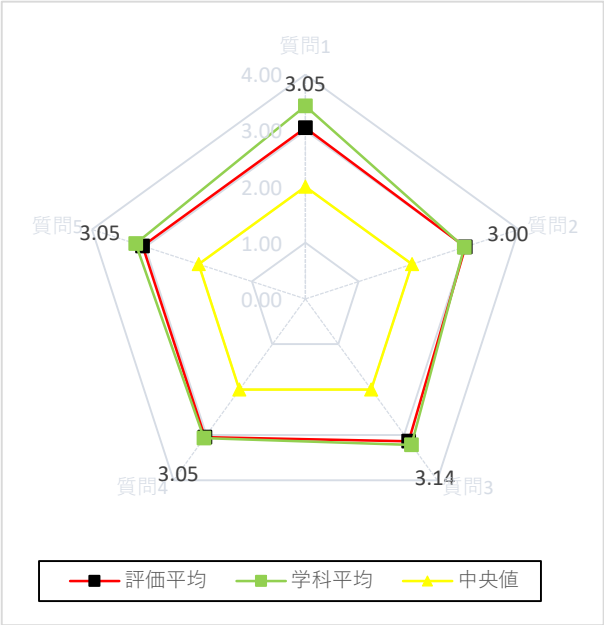
この授業は2年後期に開講される。栄養士として即戦力を高めるために必要な調理技術等を習得させる基礎調理である。技術を習得させるために、材料の特殊な切り方や調理操作が理解で出来るように出来る限りデモストレーションをおこないながら授業を進めていった。評価の結果は「学生自身の自己評価」は3.41、「この授業の総合評価」は3.47であった。学生のコメントは「色々な料理が作れて勉強になりました。」とあり調理知識と技術の向上は料理の数とあわせて調理回数が多いほど効果があり満足できる授業となることが分かった。

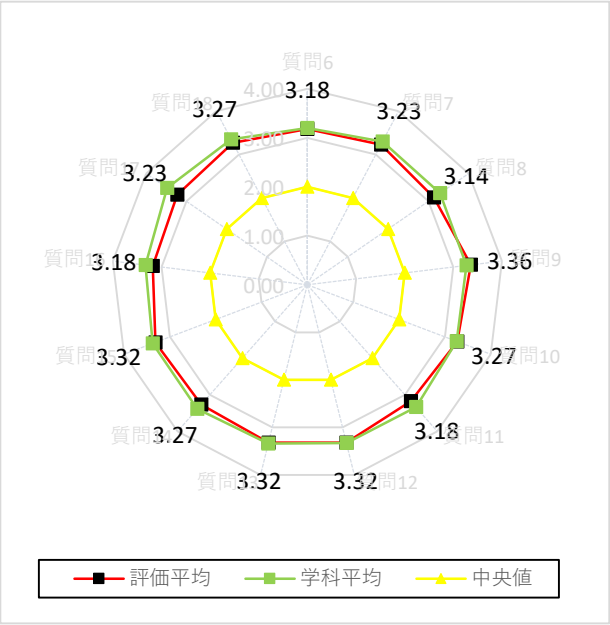
（３）次年度に向けての取り組み

今回の授業評価では概ね良好であったことから、これまでと同様に下記の内容を中心に実習を展開していく。
①授業の理解のための自己工夫としてこれまでと同様に実習カードを事前に配布し予習させ、実習後は家庭で必ず再実習を行なうなど、実習前後は、家庭学習が出来るよう指導する。
②学生の学習意欲、技術能力、生活環境により個人差が大きいため、技術能力を習得させるだけでなく、グループ実習を通し、積極性、協調性、指導力、マナー等も併せて学ばせる。また、人間形成の場と して互いに学びあいながら、実践実習が出来るよう、指導していく。
③包丁扱いなど調理技術の向上努めると同時に大量調理へスムーズに展開できるように訓練していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		実践食育	23名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

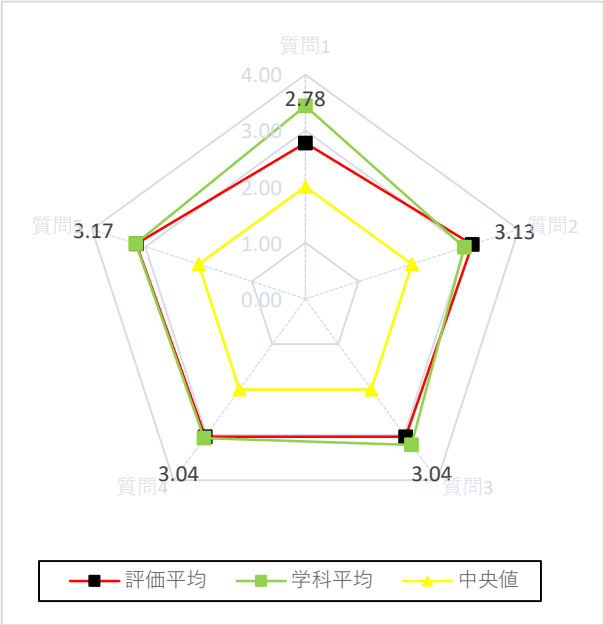
今回の結果は全項目において学科平均を下回っていた。しかし総合評価としては3.3であり「ふつう」に相当すると思われる。今年度は幼児保育学科から親子いきいき教室で食育教室をやって欲しいとの依頼があったため、急きょ内容を実践型の授業に変更して行った。学生にとっては食育の現場を経験するまたとない機会であり、座学で学修するよりも何倍も勉強になったのではないかと思われた。親子いきいき教室に参加した保護者からも肯定的な意見、お褒めの言葉をたくさんいただき、学生の自信にもつながったのではないと考えられる。

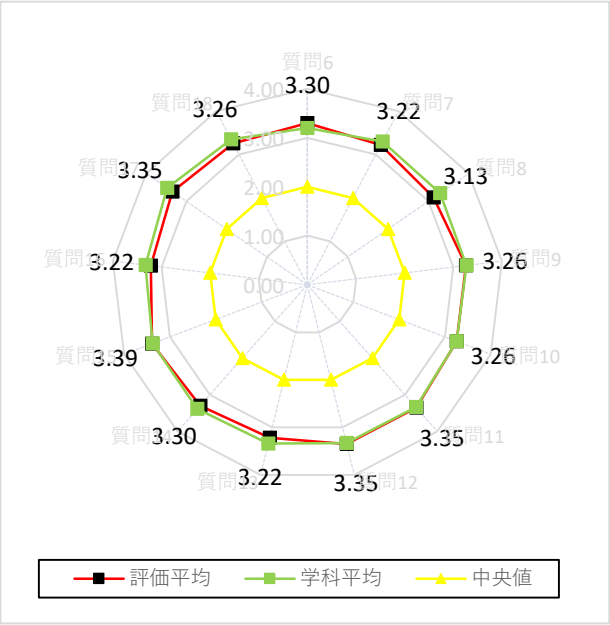
（３）次年度に向けての取り組み

授業担当科目の変更に伴い、来年度は本授業を担当しないことになった。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		給食経営管理論	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

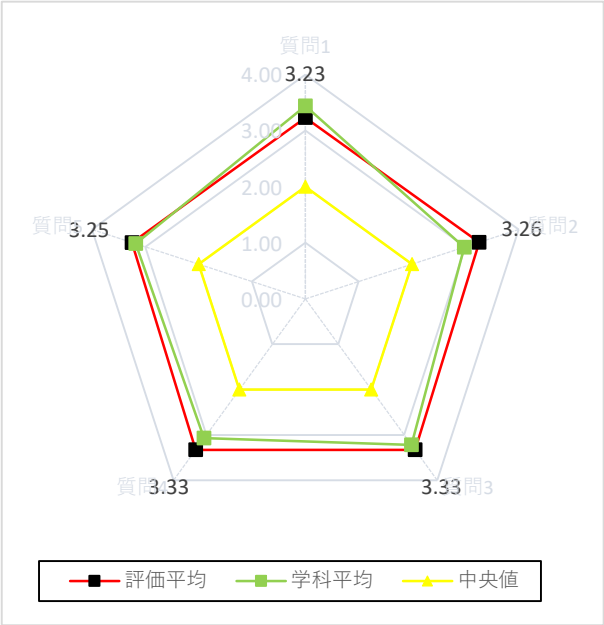
本科目は今年度から担当し始めた。総合評価は3.21でやや良いに相当する。学生からは「難しい内容でしたが、まとめの小テストなどが定期的にあって勉強しやすかった。パワーポイントも分かり易かった」とのコメントがあり、これからその年の学生の理解度や意欲にあわせて教育の方法を改善していけばよりよいものになるのではないかと思われた。

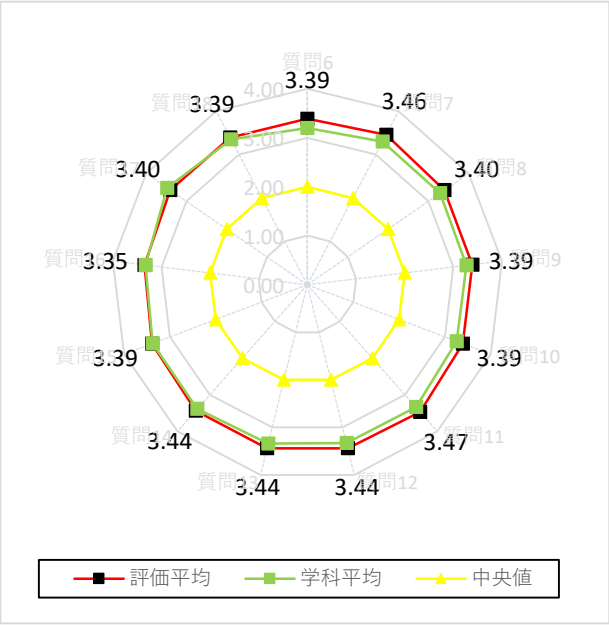
（３）次年度に向けての取り組み

今年度は担当初年度ということで手探りの状態で授業準備をし展開していった。学生からの評価はやや良いであったため、知識の定着をみる小テストの導入は変えず、内容をもう少し肉づけして展開していこうと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		給食管理実習Ⅰ	63名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

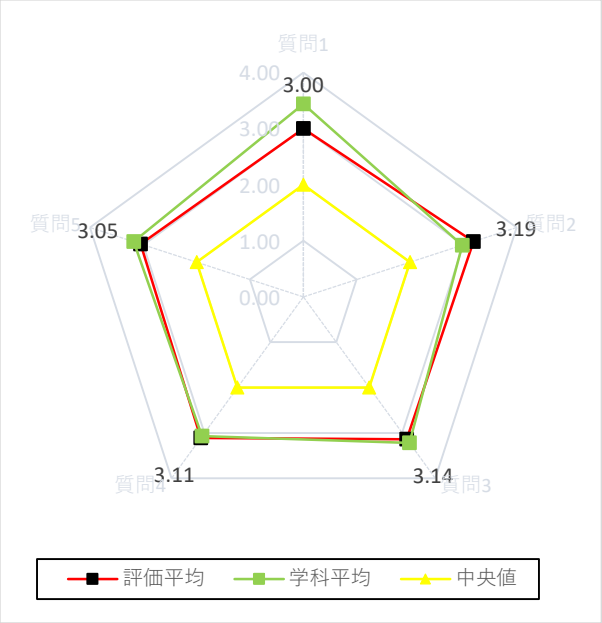
本授業は、栄養士の実務である給食の運営を実践体得することを目的としており、1年後期から2年前期の1年間に渡って行うものである。1年後期には給食の運営に関連する演習形式の座学と附属の幼稚園での見学実践実習をし、2年前期には1年次に学んだことを基礎として学食を使って給食の運営（大量調理）を実践する。この授業は1年間の履修ではあるが、授業評価は半期毎で行うため対象学生の学年が事なる。そのため授業評価は一括で集計するのではなく、1年後期と2年前期と別々で集計してほしかったが、今回は1年を通しての平均としての評価となった。総合評価の平均値は3.39でありやや良いに相当していた。

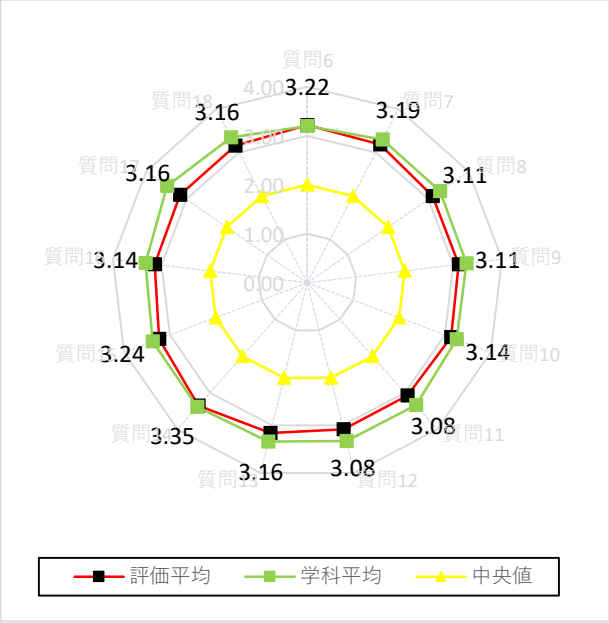
（３）次年度に向けての取り組み

本授業は２年後期の学外実習の基礎としての位置づけもあるため、学外実習へスムーズに入っていけるように給食の運営に関する座学（演習）→附属幼稚園見学実践実習→学食での給食の運営（学内給食）という流れを大事にしている。評価結果から、全体としては学生からの肯定的な意見が多く、授業そのものはおおむね上手く展開できているのではないかと思われた。やや良いから良いに評価が上がるように今後も教育内容と方法の改善に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		給食管理実習Ⅱ	37名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

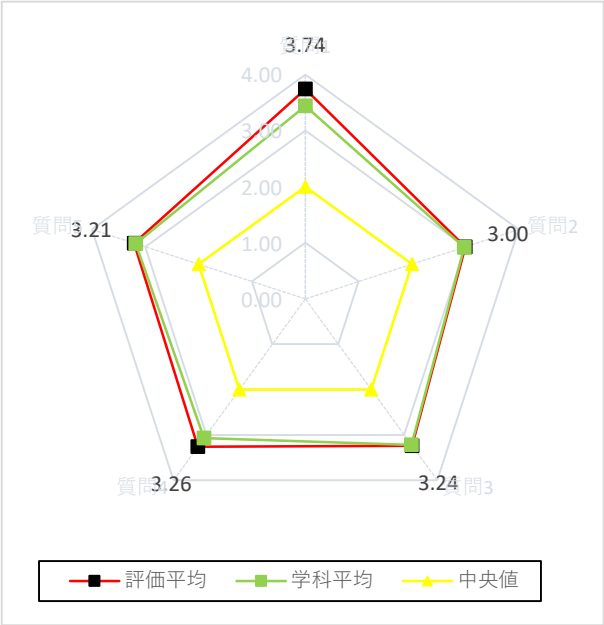
給食管理実習Ⅱが学外実習で行う実習で特定給食施設における給食管理の実際を体得すると共に特定給食における栄養管理のあり方を習得する科目である。評価の結果は学科平均と比較すると、すべての項目が若干低い値であることがわかった。しかし教員に対する評価では「学生の質問に誠実に対応しましたか」が高く、次いで「公平に学生に対応しましたか」であった。総合評価は3.14であった。

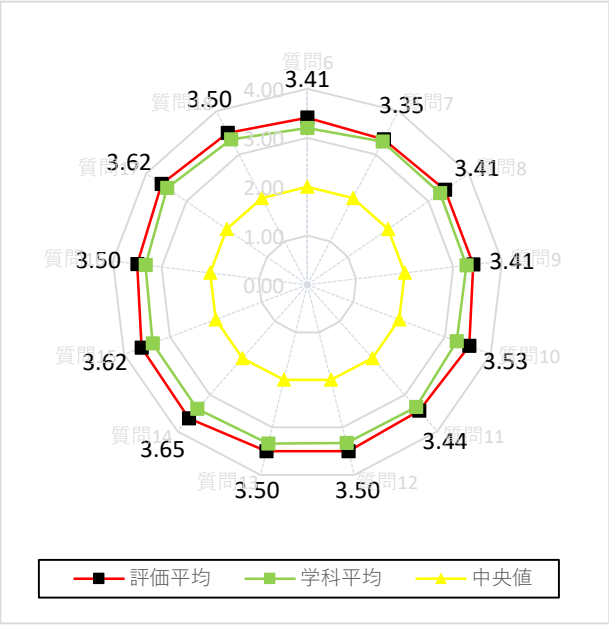
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も前年と同様に次の通り取り組む。
①学生が積極的に学ぶことができるように目的意識を明確にする。
②実習に向けて計画的に準備をすすめさせる。
③実習では学内で学んだ専門的知識と技術が発揮できるようにする。
④実習先での課題発見（気づき）とその問題解決ができるようになる。
⑤実習を通してコミュニケーション能力、協調性、連帯感、社会性を身につけさせる。
以上の内容で学外実習を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		社会の理解Ⅰ	35名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

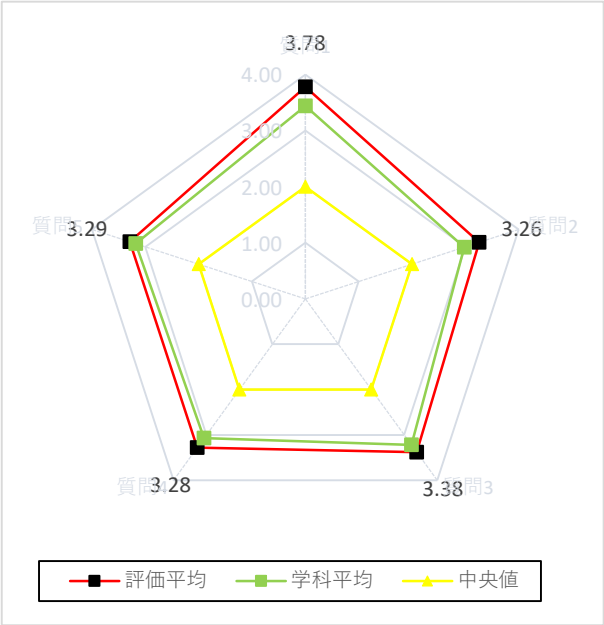
授業アンケート結果の分析・評価として、全体的の学科平均と同程度の評価を得ていた。その中でも、質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問１０「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」、質問１４「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」、質問１７「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」については平均よりも高い評価を得ているが、その一方で質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」については低い評価となっていた。本講義においては初回の講義時にシラバスに関する資料の配布とともにパワーポイントを使用して一項目ずつ丁寧な説明を行っている。全体的には主体的な活動への取り組みにつながっていたことがわかる。

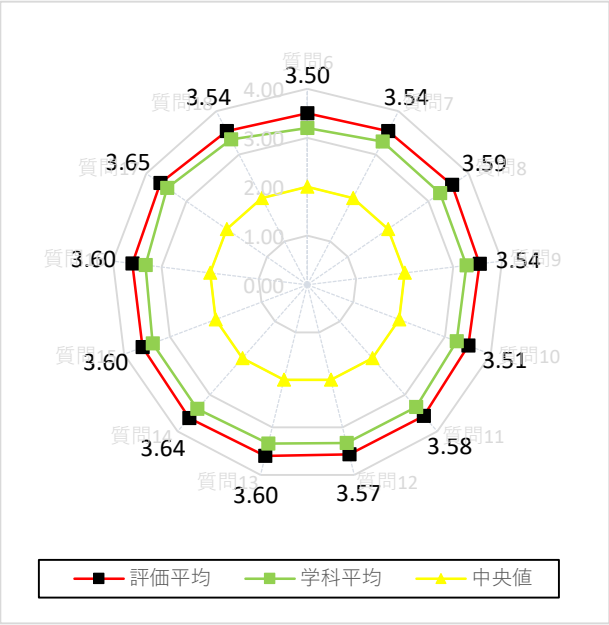
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、これまでの授業改善の流れを踏襲しつつも、新たな取組として留学生と日本人学生が合同で行う演習要素を取り入れたグループ学習を積極的に導入したい。また、教育課程の変更により、配当年次の調整が行われているため、その影響を考慮した授業展開を心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護総合講座	98名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

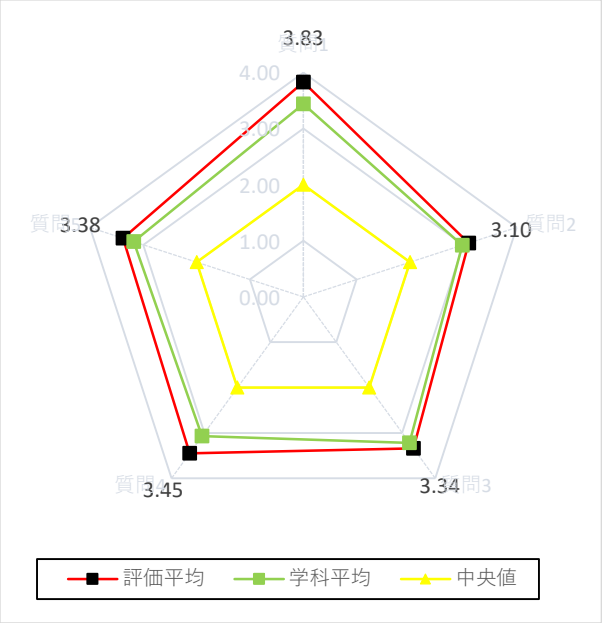
介護総合講座の評価であるが、自由記入を見てみると、介護総合演習と間違って記入している学生が多かったと思われる。全項目において、学科平均より少々高めの評価であった。自己評価に2や1をつける学生は3名いるが、授業に対する評価に1はなかった。2がついている内容を見てみると、視聴覚教材、板書、教科書、配布資料についての項目であった。

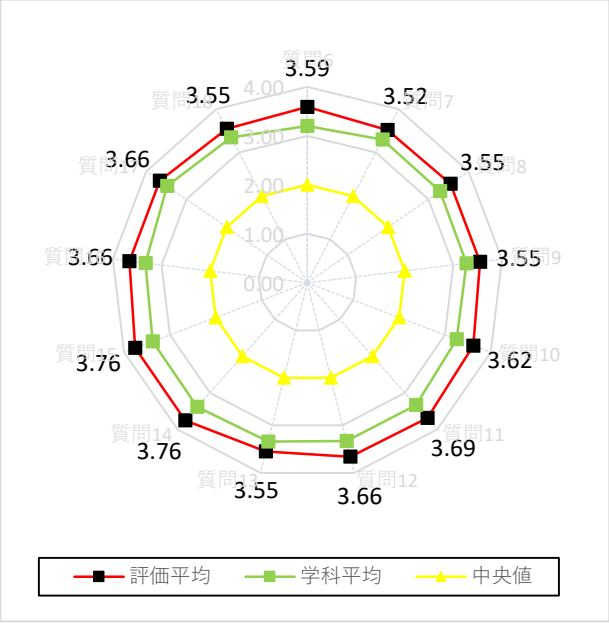
（３）次年度に向けての取り組み

この教科についての正しい評価であったかどうかはわからないが、まずは教科名をきちんと認識させるという基本的なことを配慮する。評価をする時点でも、教科名をきちんと確認して評価をするようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護の基本ＩＡ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

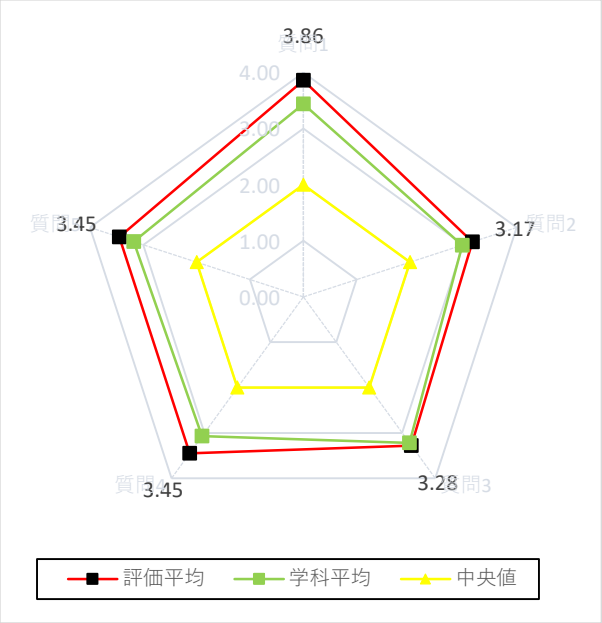
この科目は1年前期に開講され、介護全般の基本を学ぶ。特にＩＡでは人々の生活・家族といった自分の身近にあることから理解を深める。学生自身の自己評価において質問１・３からもわかるように本授業では出席率が高く、居眠りや私語も少なかった。また、質問４の「授業を理解するための工夫」についても比較的評価が高い。クラスの半数が留学生であることから、授業の配布資料以外にまとめのノートを作成するなど、それぞれが授業を理解するための工夫をしていた。授業内容・方法についてと教員の対応についての評価は、全体的に概ね高い評価であったが、「到達目標を明確にしていたか」に対する評価がやや低かった。毎回配布するプリントには、到達目標を記入し、読み上げていたが、学生に浸透していなかったと思われ、今後の課題となった。自由記述には「試験範囲を3週間前に教えてほしい」との意見があった。計画的に学習し試験に臨みたい学生もいることから、早めの連絡を心掛けたい。

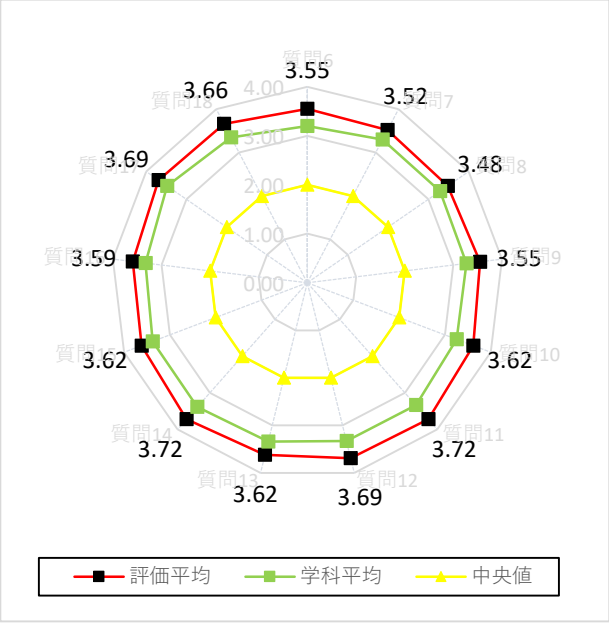
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの説明は明確であったが、学生が上手く活用できていない状況が分かった。よってシラバスの活用の方法や意識づけ、さらには到達目標の確認等を習慣づけできるように授業を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護の基本ＩＢ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

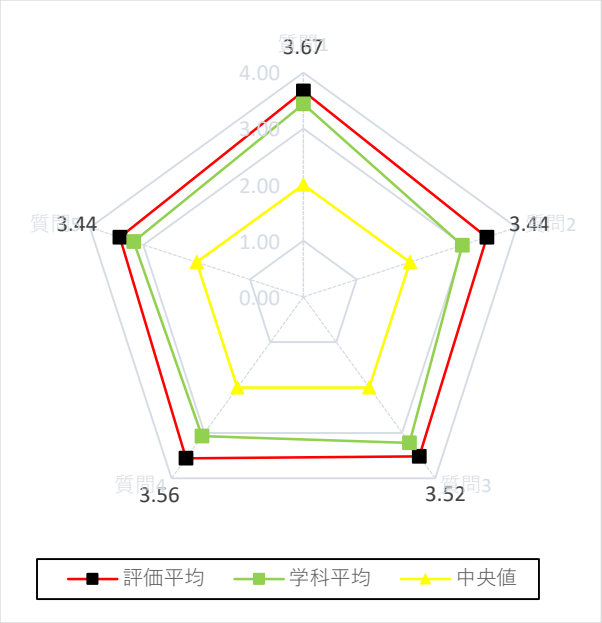
この科目は1年前期に開講され、介護全般の基本を学ぶ。ＩＢでは、介護福祉士の位置づけや具体的な業務内容が中心となる。学生自身の自己評価においては、介護の基本ＩＡと同じく出席率が高く、留学生の多くは、それぞれでノートを作成するなど授業を理解するための工夫をしおり評価も高い。この科目についてもシラバスの活用において課題が残った。授業内容・方法についてと教員の対応についての評価は、全体的に概ね高い評価であった。項目中最も高値を示したものは、質問11「配布資料等は役に立ったか」、質問14「質問等に誠実に対応したか」に対する評価であった。毎回配布したプリントによって、学びやすい授業となったと思われる。

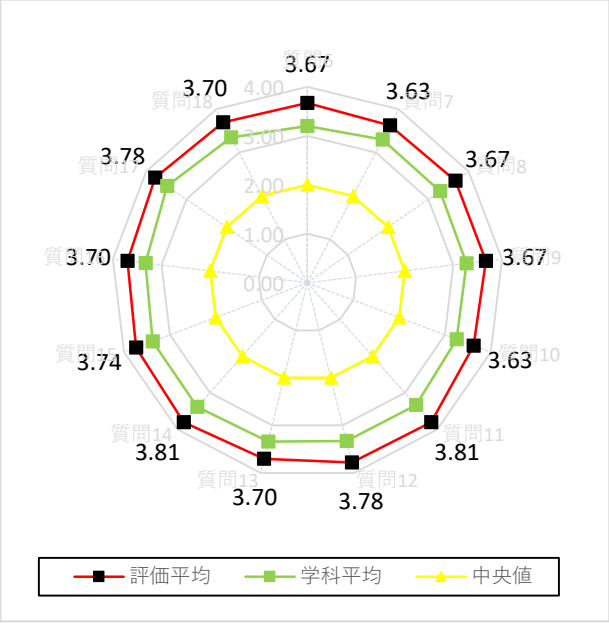
（３）次年度に向けての取り組み

学生のシラバスの活用が課題であることから、活用の方法や意識づけ、さらには到達目標の確認等を習慣づけできるように授業を展開していきたい。高評価であった配布資料においても、さらに工夫し学生の理解度向上に向けた授業展開に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護の基本ⅡA	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

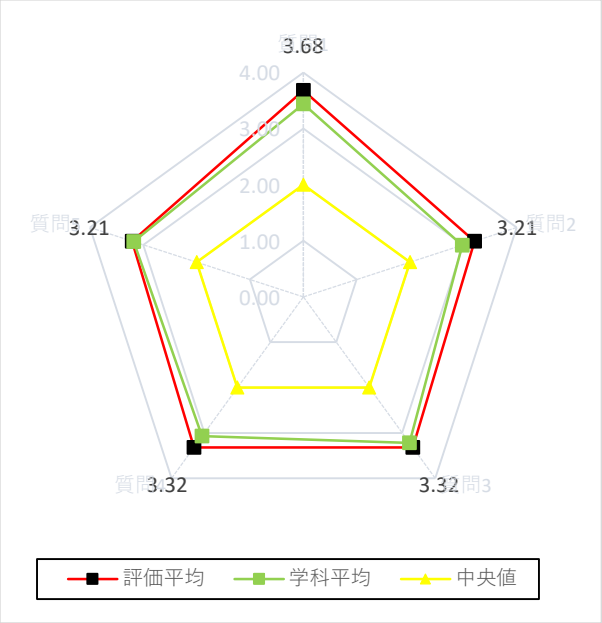
質問１から質問５までの評価平均は学科平均よりも高い。質問４の授業を理解するための工夫は、学生が行った具体的内容知りたいところだが、自由記述にもコメントがなく実際はわからない。ただ、授業中や授業後の質問は少なくなく、学生は疑問点を授業中に理解しようとしていたことは確かと言える。質問１４の評価平均が３．８１と高いことも学生と教員間で質疑応答が行われていたことの表れであると考えられる。質問２の学生自身のシラバスの活用の評価平均は３．４４、質問６教員がシラバスについて説明したかは３．６７で、１名の評価は２である。シラバスの説明は必ず行ってはいるが、全員がシラバスの内容を理解し、なおかつ十分に活用できているとは言えない。

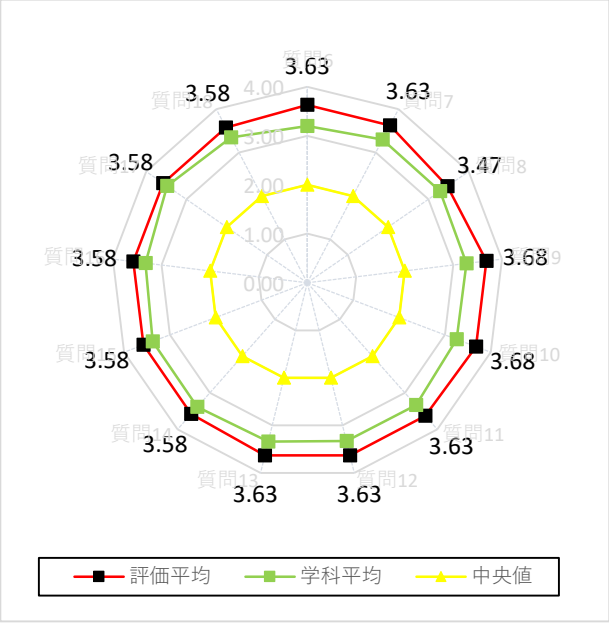
（３）次年度に向けての取り組み

学生に不安を持たせず計画的に授業を展開していくためにシラバスの活用は有効であると考える。しかし、留学生も多く受講することから、今後はシラバスにもルビをつけるなどして、多様な学生への配慮を工夫し、誰もが学びやすい環境・資料づくりに努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護の基本ⅢB	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

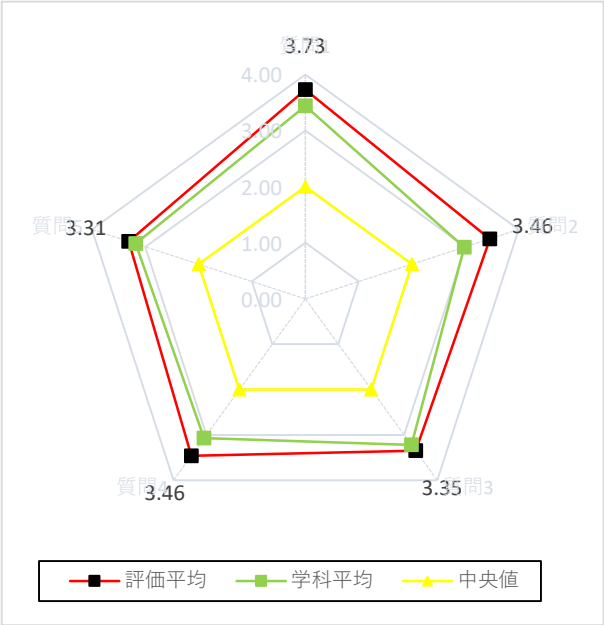
質問１から質問５の学生自身の評価は、ほとんどが学科平均に近い評価であるが、質問５の学生自身の総合自己評価の評価平均は、学科平均を下回る。質問６から質問１８においても、全体的に学科平均に近い。しかし、質問７、８、１１、１３、１５、１６については、それぞれ１名が評価を２としていることから、学生の中には授業の満足感が低かったものがいることがわかる。また、質問８の「授業への興味・関心が持てたか」の評価は、授業担当者としては気になるところであるが、評価平均は３．４７と高くはない。授業内容は、介護におけるリスクマネジメントで、介護現場で活かせる事柄を多く含んではいたが、学生が積極的に興味関心を持つには不十分な内容だったのではないかと考える。

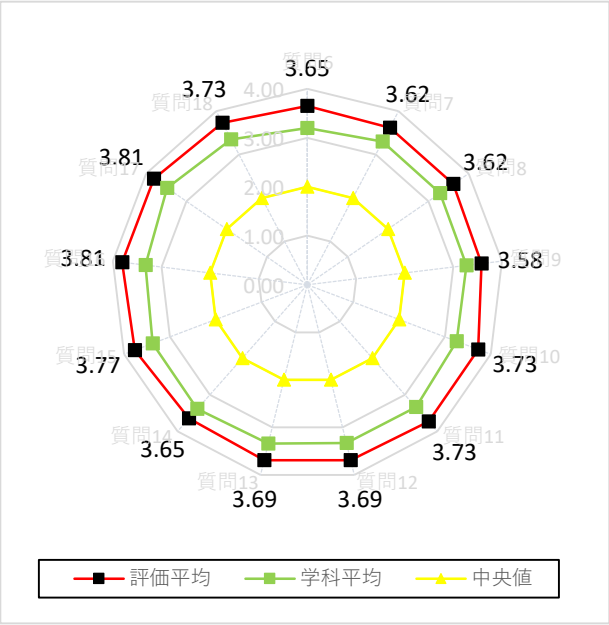
（３）次年度に向けての取り組み

この授業の内容は、介護福祉士としては必要不可欠であり、なおかつ介護現場で役立つものが多い。虐待や身体拘束、介護事故なども扱うためか「難しい」と言う学生もいるが、今後は、これまで以上に双方向的やり取りを増やして学生にわかりやすく解説し、学生自身が更に知識を深めたいと意欲をもって学習する雰囲気づくりに努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		コミュニケーション技術A	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

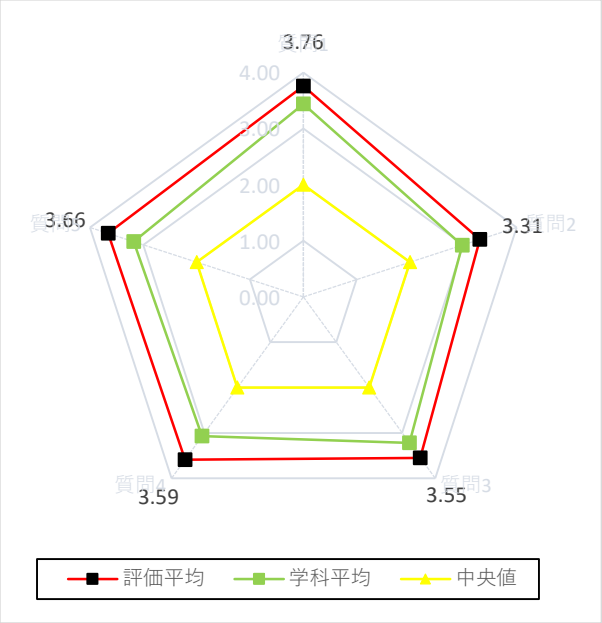
学生自身の自己評価は、質問１にあるように本授業においても出席率が高い。後期開講の科目であったためか、学生がシラバスを活用したことに肯定的な評価がみられた。教員によるシラバスの説明が明確であったと察する。授業内容・方法についてと教員の対応についての評価は、全体的に概ね高評価を得ている。項目中最も高値を示したものは、質問16「双方向的なやり取りで授業を行っていたか」と質問17「熱心に取り組んでいたか」であった。双方向のやり取りの大切さを教える授業だけに、この項目は重要と考える。学生から高評価を得ることができたのは、介護の実践につながるような取り組みの成果と思われる。

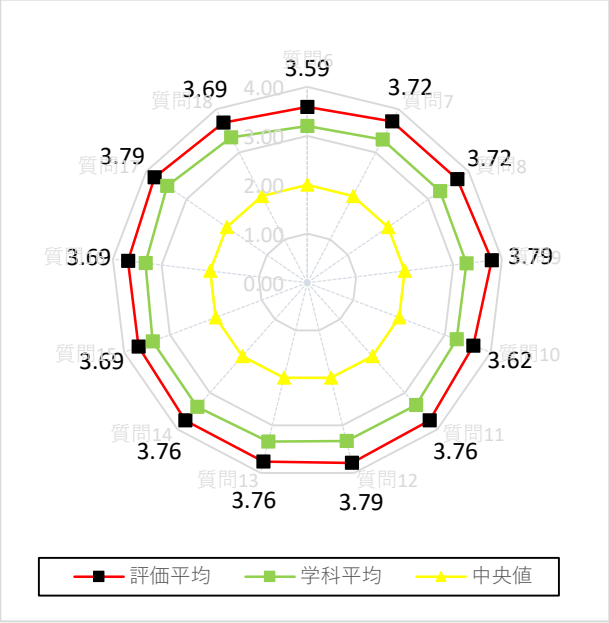
（３）次年度に向けての取り組み

授業内容・方法についてと教員の対応についての評価に大差はないが、評価がやや低かった「分かりやすくする工夫する」については、より能動的なわかりやすい学習ができるよう工夫を心掛けるつもりである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		生活支援技術A	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

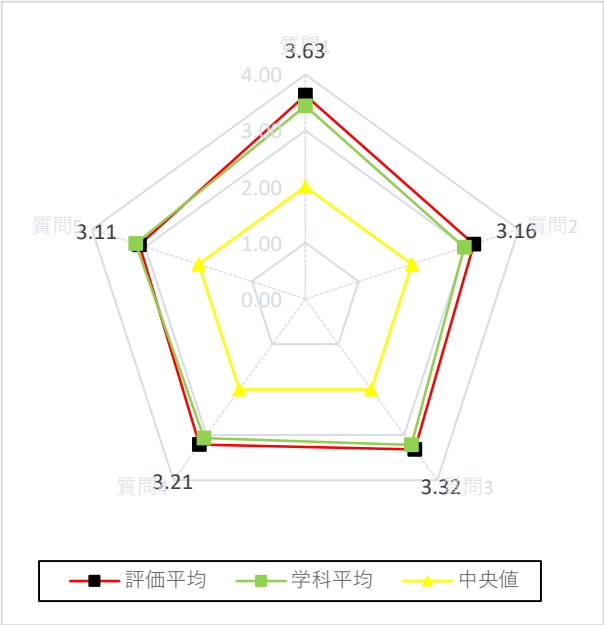
質問１から質問５の学生自身の評価は、全体的に学科の評価平均よりも高い数値である。しかし、質問２のシラバスの活用は５名が、質問３の授業中の居眠り・私語の有無は２名が評価を２としている。また、質問４の授業理解のための学生自身の工夫、質問５の学生自身の自己評価でもそれぞれ１名ずつが評価を２としている。一方、質問６から質問１８については学生の評価は３以上であり、学科の評価平均よりも高い結果であった。このことから、この授業の内容にはさほど不満はないものの、自ら積極的に学習したくなるほどの内容だとは感じなかった学生が少なくとも数名は存在したと推測できる。特に、シラバスの活用については、課題である。

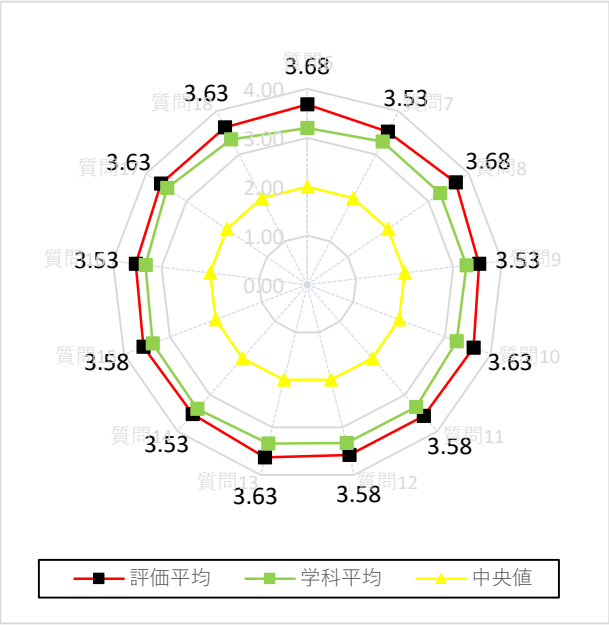
（３）次年度に向けての取り組み

この生活支援技術Aは生活支援技術Bと連動させた授業展開で、本科目で介護技術の実践に向けた知識を事前に修得することで科生活支援技術Bでの実技演習をスムーズに行うことができると考えている。生活支援技術の技法・内容は多岐にわたり、前期中にその内容をある程度網羅するためには、授業のスピードも決して遅くはない。今後は、授業の度にシラバスで学生自身に授業の到達目標を意識させ、学生が目標を意識して積極的に学びたくなる授業になるよう工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		生活支援技術F	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

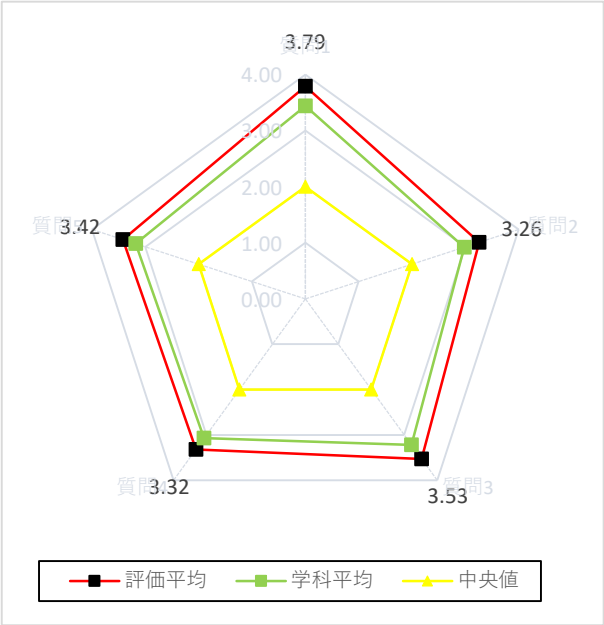
この科目では、障がいの基礎知識をもとに障がいのある人への適切な障がい形態別の生活支援技術を学ぶ。学生自身の自己評価においては、欠席は少なく真剣に取り組んでいるが、シラバスの活用ができていない。授業終了時には、次回の授業の内容を連絡していたが、シラバスの活用には至らなかった。授業全体の流れが把握できるようシラバスと連動させる必要があったと反省している。授業内容・方法についてと教員の対応についての評価は、質問6「シラバス（授業計画）について説明」と質問8「興味・関心が持てる工夫」が高評価を得ている。比較的評価が低かったのは質問7「授業の到達目標を明確に」であった。シラバスも説明しており、障がい形態別の授業展開だったため、到達目標は十分に伝わっていると思っていたが、認識不足であった。もっと学生に意識づけできるよう安全が必要である。

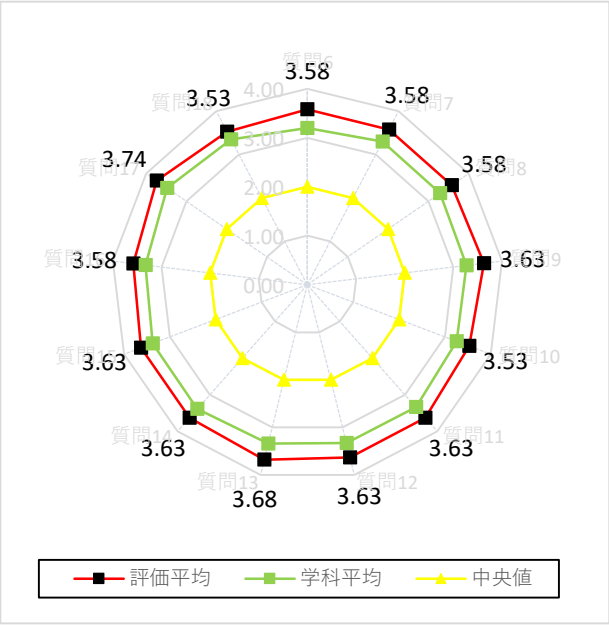
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの説明にとどまらず、学生に活用させるように仕向けること、また到達目標を念頭において授業を受けるよう働きかけを行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		生活支援技術G	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

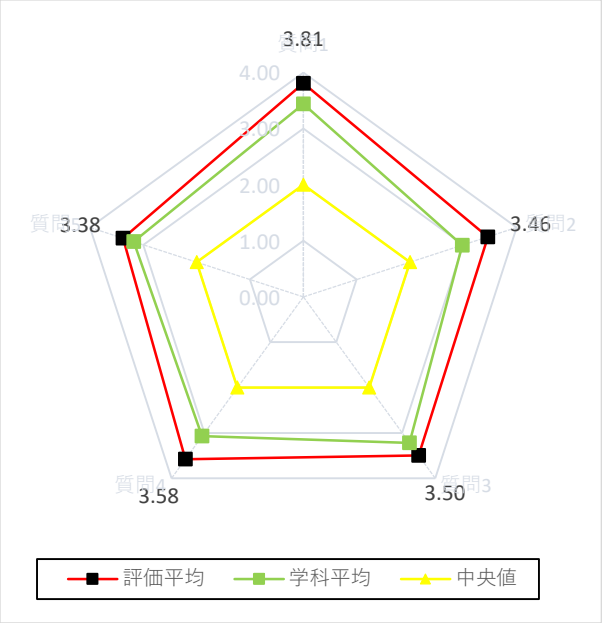
学科の平均評価と比べ全部の項目において少々高かった。学生の自己評価のシラバスの活用以外は1の評価はない状態である。資格に直結する科目講義と実技が半々の授業であることも影響していると思われる。2の評価があるのは、シラバス、興味・関心への工夫、視聴覚教材、板書、公平さ、熱心さであった。評価が4が多いのは、教員のの熱心さであった。回答は、質問がない分までなされており、質問文を読まずに回答をしている可能性もある。

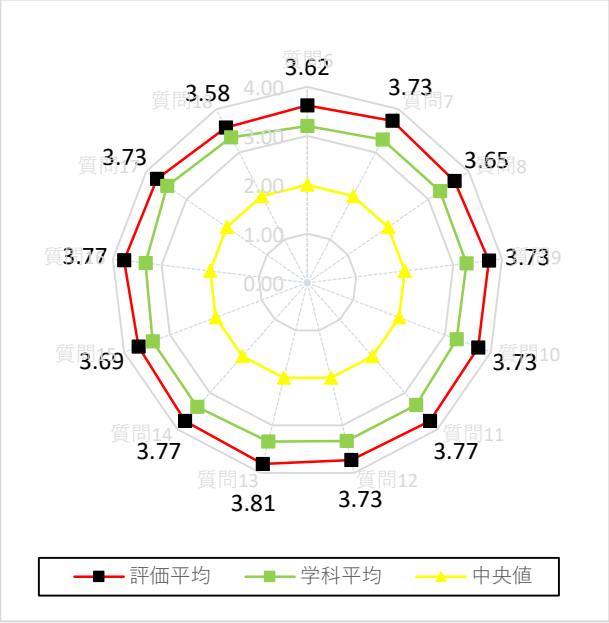
（３）次年度に向けての取り組み

改善点は、評価が2であったシラバス、興味・関心への工夫、視聴覚教材、板書、公平さ、熱心さを少しでも改善する。評価時は質問をよく読むようにアナウンスをしっかり行なう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護過程Ⅱ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

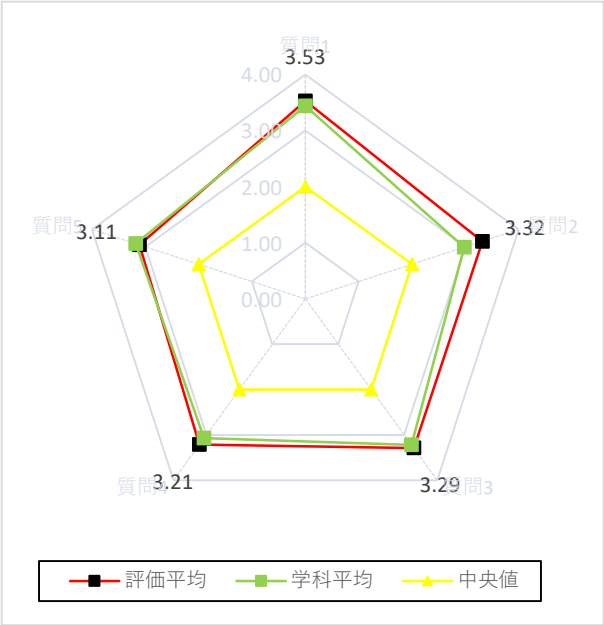
全体的に学科の評価平均値よりも高い数値であり、どの質問項目も評価点は３以上であった。質問１から質問５も、学科評価平均より高いものの、質問５の学生の総合自己評価は、それほど高い値ではない。しかし、教員は学生の授業態度は、非常に良かったと感じている。実際、授業には熱心に参加している学生がほとんどで、授業の中での質問もよくあり、事例問題の演習の時などは列を作って教員の指導を待っていた。ただ、学生はこの科目を「難しい」と言うことが多く、質問５の学生の総合自己評価の数値は、授業態度と言うよりも、授業の理解度を表しているようにも理解できる。質問１８の総合評価が３、５８であることも、「難しい授業だった」という印象や思いからくるのではないかと推測する。

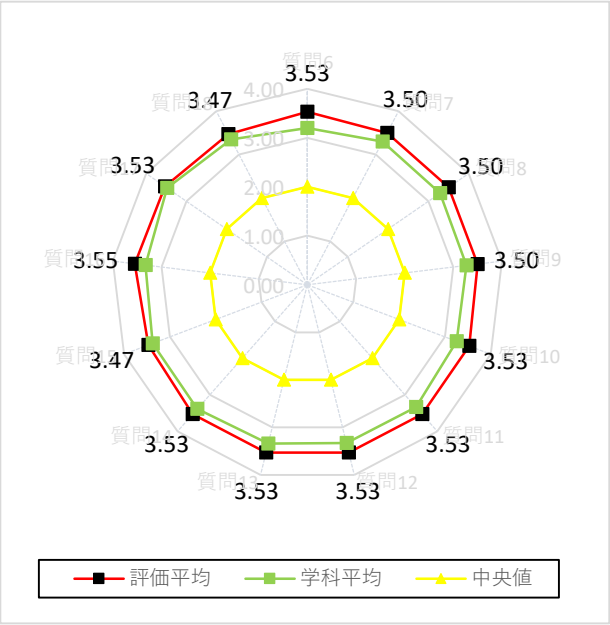
（３）次年度に向けての取り組み

「難しい」ことがそれほど悪いこととは考えないが、それと同等あるいはそれ以上に「よくわかった」「十分理解できた」「おもしろい」というプラスの感情を学生から引き出すことが重要だと考える。まだ、「難しい」という思いしかない学生が多いとするならば、その先の学習方法の工夫が必要である。学生が、どの時点で「難しい」と感じ、どのような教授法だと「わかった」「理解できた」と思えるのか、学生への聞き取りを行い、授業を改善していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護過程Ⅲ	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

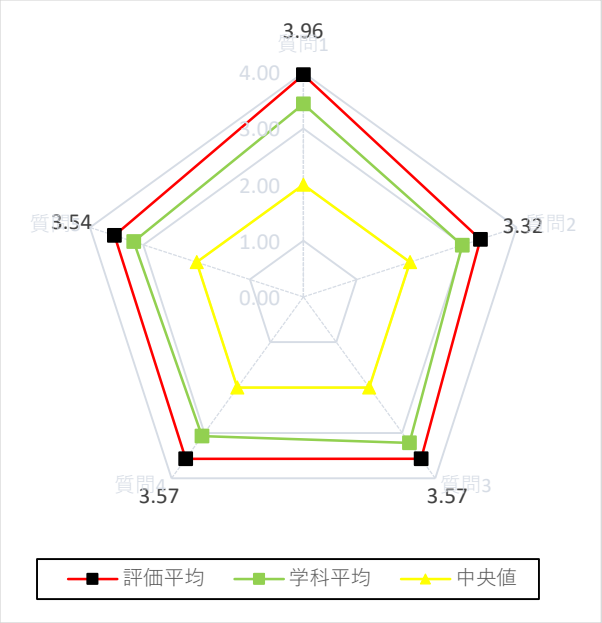
この科目は、2年次通年の科目であり、後期は外部講師（現場職員）による介護過程の実際を学ぶ。学生自身の自己評価は、質問１にあるように本授業においても出席率が高い。質問3「居眠り・私語なく真剣な取り組み」の評価がやや低かったが、目立った居眠りは、なかったため、グループワーク時の私語に対する自己評価を厳しくしたものと察する。授業内容・方法についてと教員の対応について高評価を得た項目は、質問12・13「声の大きさ・明瞭さ・話す速さが適切」と「授業の進む速さが適切」であった。評価がやや低かった項目は、質問7・15「到達目標を明確に」と「公平に学生に対応」であった。公平な対応に関しては、実習先の担当利用者の介護計画を立案するにあたり、理解度・進捗状況にかなりの個人差があったため、公平と感じない学生が出てきたと思われる。今後は、個別指導の方法を改善する必要がある。

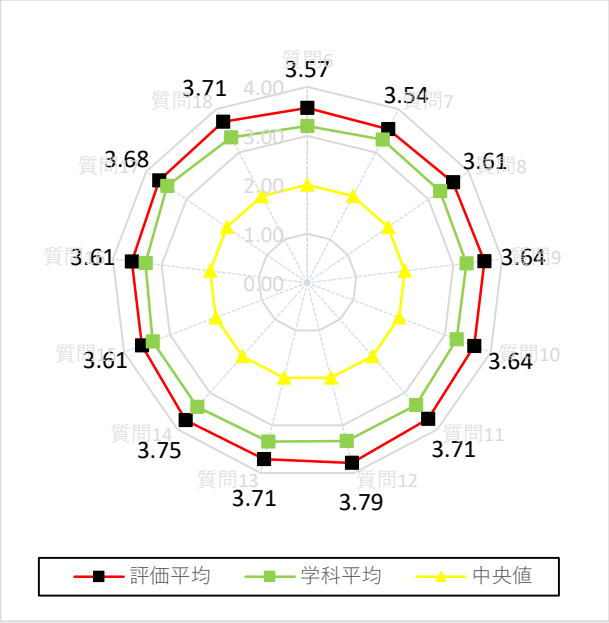
（３）次年度に向けての取り組み

介護計画の作成時に、あまり個人差が出ないよう、基本の理解度を高め、グループワークも効率的に展開できるように工夫していきたい。個別指導に関しては、クラス全体の流れを把握しながら進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護総合演習Ⅰ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

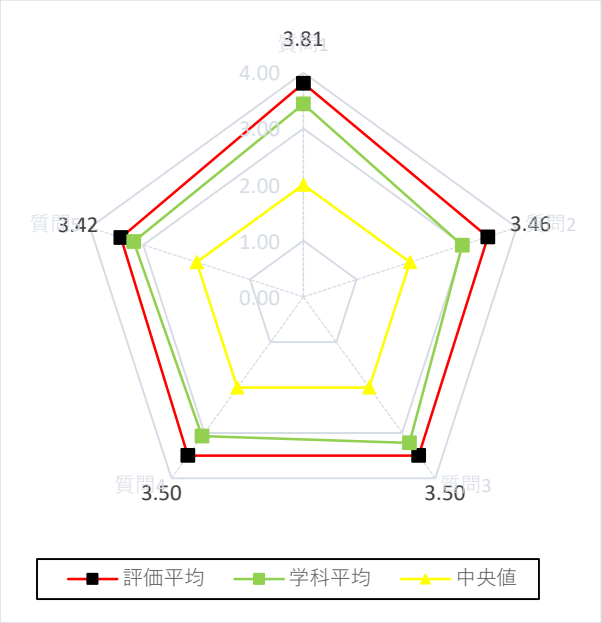
質問１から質問５については、おおむね高評価である。本科目は、介護実習の準備的要素が強く、学生は、初めての介護実習に対する緊張と不安、期待を持って授業に臨んでいたと想像するが、その思いが、学生自身の本科目に対する積極的な受講態度につながり、質問１から質問５の評価になったとと考える。質問６から質問１８は、学科評価平均値より高い評価値である。しかし、質問７教員は、授業の到達度を明確にして授業を展開していたか、質問１５公平に学生に対応したか、質問１６教員は双方的なやり取りをしながら、授業を行っていたか、質問１７教員は熱心に授業に取り組んでいたか、の評価値は、学科評価平均値との差はごくわずかである。本科目の受講性の約半数が留学生であることもあり、留学生への質問に答えることも多く、学生への対応に偏りが生じたことは否めない。また、本科目の特性上、実習に関する指導も多く、双方的なやり取りも他の科目に比べると少なく感じたことも十分理解できる。

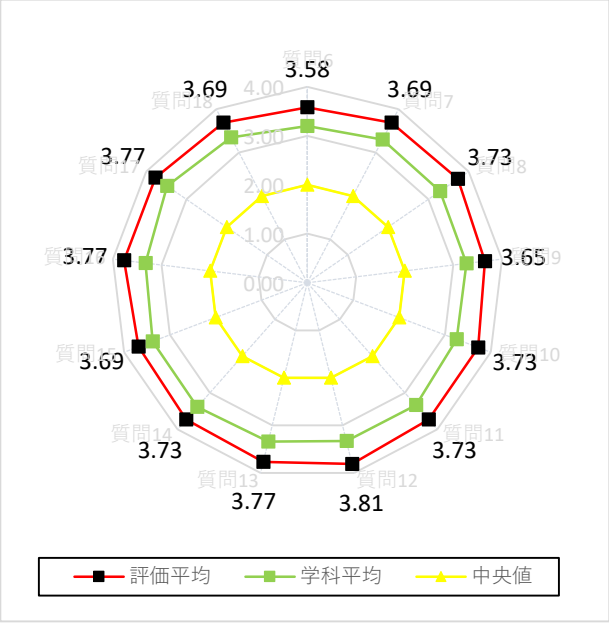
（３）次年度に向けての取り組み

まずは、シラバスの活用について見直しが必要である。介護実習に向けた準備が予定通り進まず、シラバスでの確認や授業の到達目標の明確化が不十分だったことは確かである。今後は、授業の前後にシラバスをや授業の到達目標を確認するなどしたい。また、学生への対応についても、日本人学生と留学生への対応に偏りが生じないよう、留学生用の資料を工夫するなどし、学生への公平な対応を実践する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護総合演習Ⅱ	29名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

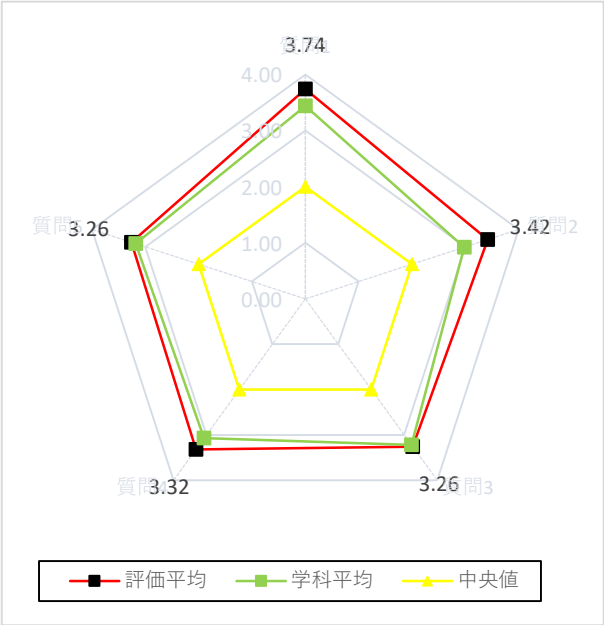
学生の評価は、おおむね高評価であった。しかし、質問２シラバスを活用したか、の評価を２とした学生が３名、質問４授業を理解するために自分で工夫したか、の評価を２とした学生が２名いた。本科目においては、教員自身のシラバスの活用方法、学生へのシラバス活用の促しが不十分だったと認識している。質問６から質問１８の評価値はおおむね高い。本科目は、介護実習後の学生自身の振り返りが中心となる内容だったこともあり、教員の一方向的な授業というイメージよりも、双方向的なやり取りだったというイメージが強いのではないだろうか。また、質問１８の総合評価で評価を４とした学生が全体の７１．４％であったが、これも学生主体の授業であったことが要因ではないかと考える。

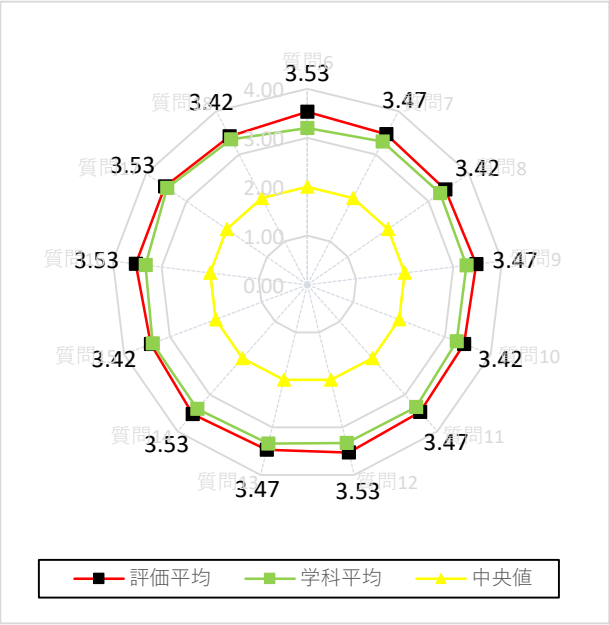
（３）次年度に向けての取り組み

今回の結果から、双方向あるいは学生主体の授業展開をおこなうことが学生の満足度を高めることを再確認した。特に、本科目では、介護実習の振り返りを行うと同時に自分自身の人間的成長過程の確認を行う作業でもある。その効果を高めるためにも、今後も学生主体の授業内容を計画・実践していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護総合演習Ⅲ	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

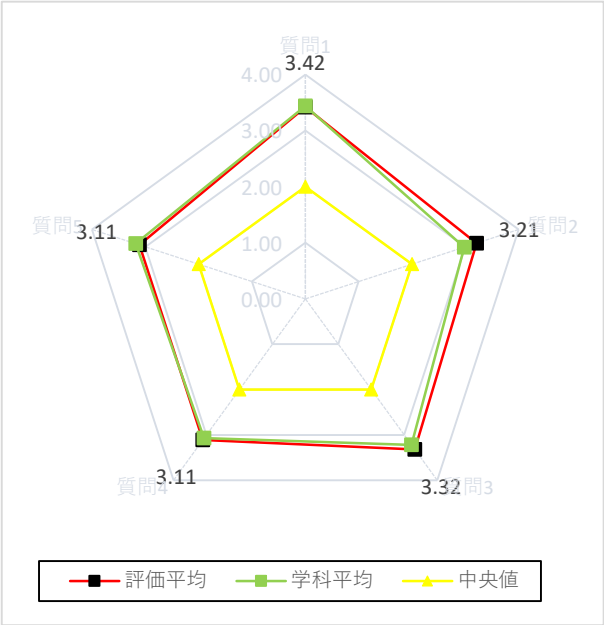
この科目は、最終実習に向けての準備や実習先の担当利用者の介護計画を立案することなどを学ぶ。学生自身の自己評価は、質問１にあるように本授業においても出席率が高い。質問3の評価がやや低かったが、目立った居眠りは、なかったため、グループワーク時の私語に対する自己評価を厳しくしたものと察する。授業内容・方法についてと教員の対応については、4項目において高評価を得た。それらの項目は「シラバス（授業計画）について説明」「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切」「質問等に誠実に対応」「双方向的なやり取り」であった。また、3項目においてやや低く評価された。それらの項目は「興味・関心が持てる工夫」「視聴覚機器や板書の用い方は適切」「公平に学生に対応」であった。介護過程Ⅲの授業と内容が重なるところがあるため、公平さを欠いたように感じた学生は、介護過程Ⅲと同じ理由だと考えられる。実習先の担当利用者の介護計画を立案するにあたり、理解度・進捗状況にかなりの個人差があったため、公平と感じない学生が出てきたと思われる。今後は、個別指導の方法を改善する必要がある。

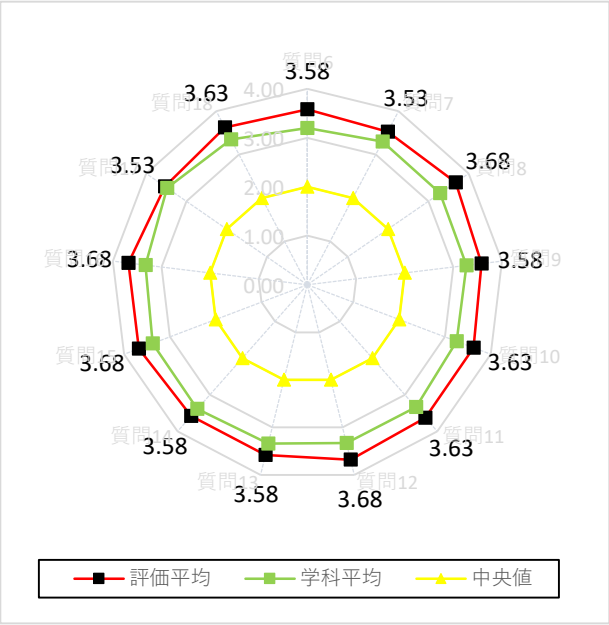
（３）次年度に向けての取り組み

介護計画の作成時に、あまり個人差が出ないよう、基本の理解度を高め、グループワークも効率的に展開できるように工夫していきたい。個別指導に関しては、クラス全体の流れを把握しながら進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護総合演習Ⅳ	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

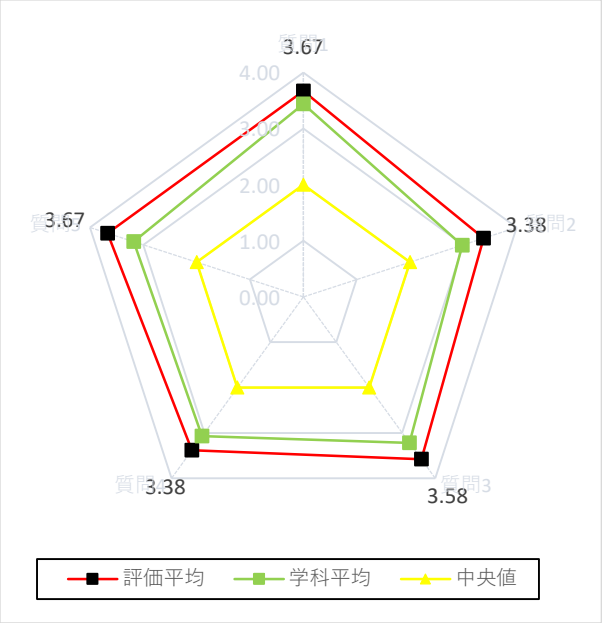
この科目は、主に介護実習のまとめと介護実習事例研究報告（発表会）を行う。学生自身の自己評価は、質問１にあるように本授業においても出席率が高い。評価がやや低かった項目は、質問4「授業を理解するために工夫したか」であった。授業内容が実習のまとめと報告であったことから、他の科目と比較すると「理解するための工夫」は、必要なかったのかもしれない。授業内容・方法についてと教員の対応については、4項目に高評価を得た。それらの項目は「興味・関心が持てる工夫」「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切」「公平に学生に対応」「双方向的なやり取りをしながら、授業」であった。評価が比較的低かったのは「到達目標を明確」「熱心に授業に取り組んで」であった。2年後期の実習のまとめ・仕上げの授業であっても到達目標を明確に出来なかったことは、今後の課題となる。

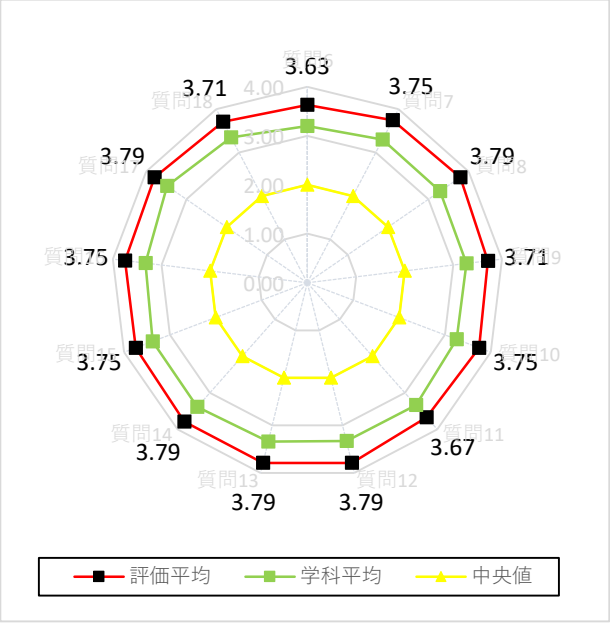
（３）次年度に向けての取り組み

到達目標を明確にし、介護の専門職に就く学生たちにの介護観の形成を促せるよう、また積極的な学びの場となるよう授業を展開したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		日本文化事情Ⅰ（演習含む）	28名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

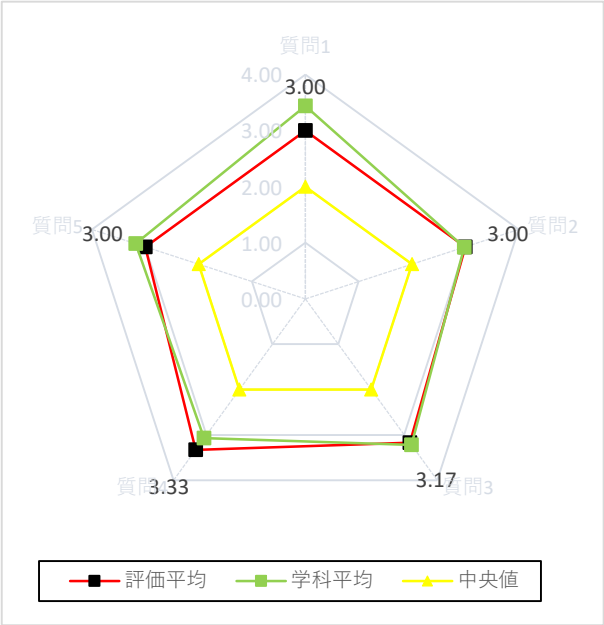
質問１から質問５の学生自身の振り返りは、評価平均が全て3.5以上で高い。また、質問５の総合自己評価も３．６７と高評価である。質問２と質問６、質問７の平均評価から、授業を始める際に教員・学生双方が、シラバスを確認することを意識的に行ったことが良い結果につながったと考える。受講者は留学が多かったが、日本人の学生も受講していた。そのため、日本人にとっても関心が持てる内容の授業にすることを心掛けた。質問８の平均評価から、学生らが、関心を持って受講していたことが理解できる。また、自由記述には、「いつも楽しい」、「校外学習楽しかったです。」、「とても楽しかったです。後期もできたらやりたいです。」などのコメントがあった。授業の中で、神社や古い日本家屋を見学したり、バスで学外授業に出かけて日本の地形や街並み、自然などを見ることで、好奇心を持って積極的に授業に取り組んでくれたのだろう。多くの学生が明るい表情で生き生きと授業に臨んでくれたことは教員にとっても非常にありがたかった。

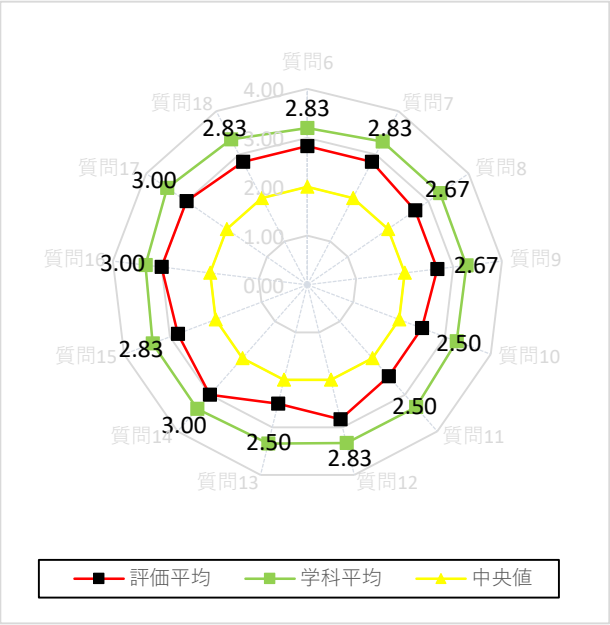
（３）次年度に向けての取り組み

授業の中で、留学生が日本文化に強い関心を示すことや自国の文化に誇りを持っていることが、日本人の学生にとって良い刺激になっていると感じる場面が幾度もあった。また、様々な文化について各自あるいはグループで調べたことをプレゼンテーションし、意見を述べ合うことも多かったが、その過程を通して、日本文化を学ぶことは、留学生のみならず日本人学生にとっても非常に意義深いことを痛感した。留学生と日本人の学生が互いの国の文化を理解し尊重し合うことの重要性を再認識させられた。今後は、日本人の学生にもできるだけ受講してもらうことで、多文化交流を更に深めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		日本文化事情Ⅱ	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

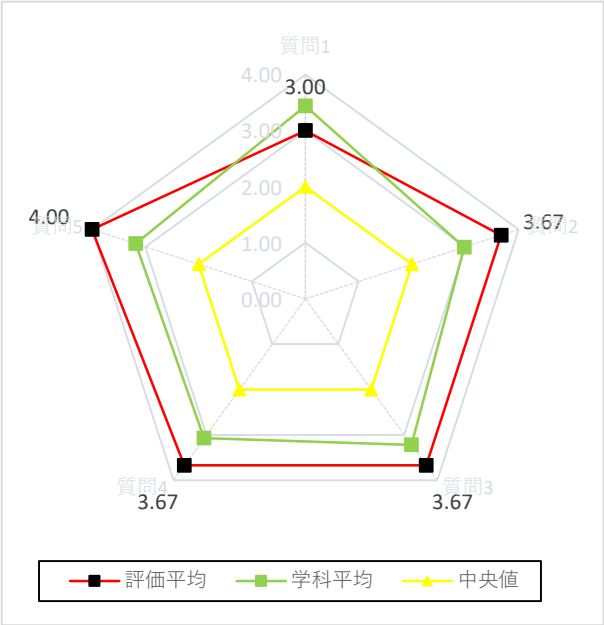
学生の自己評価は、概ね学科平均付近であり肯定的であった。しかし、Q1評価がやや低く出ているように実際の学生の出席に関しては遅刻が目立っていた。
教員授業評価については、学科評価平均より下回っていた。講義内容は、日本文化、歴史的な事項が多く学生にとって難しくわかりにくいものであったと考える。

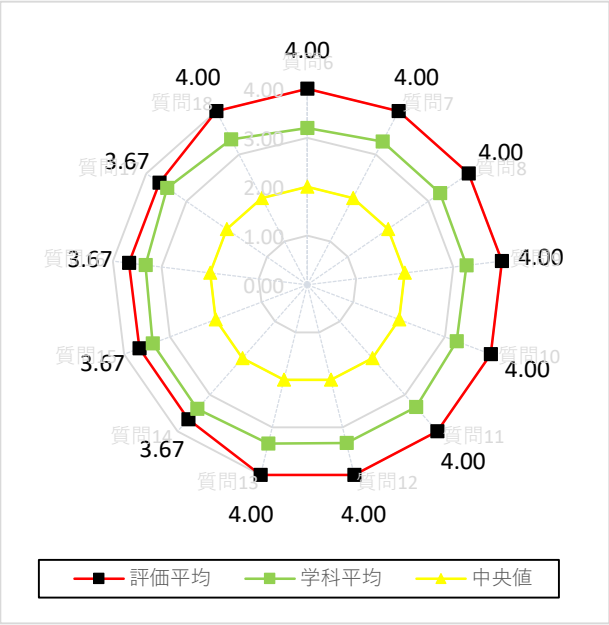
（３）次年度に向けての取り組み

授業者の半数は留学生のため、学生の日本語能力にもよるが配布資料を読まない、持参しない学生などが多く、読ませる工夫が必要であった。今年度は学外研修に時間が取れず1コマのみとなったが、次年度はもう少し学外見学やグループ学習など能動的な活動を増やして学習内容を学生が体感できる時間を取り、興味関心を喚起する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		海外文化事情Ⅱ	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

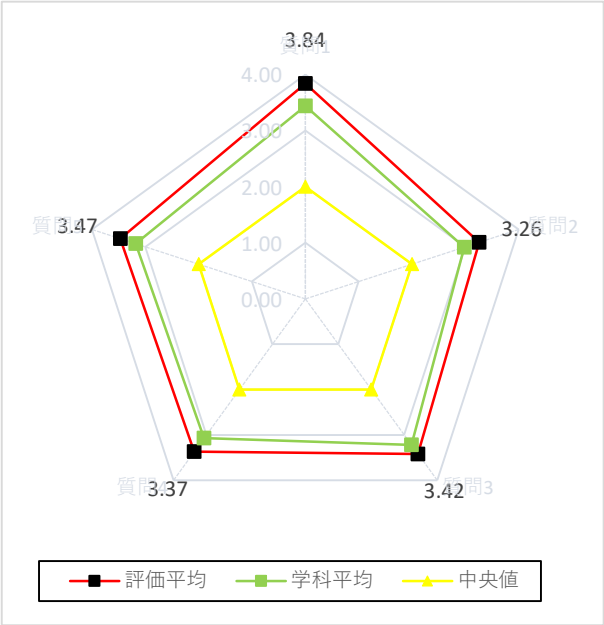
授業では、個人の調査・発表・意見交換を繰り返して、自分と他人の違いをお互いに理解し合い、柔軟に対応できる力を育成するものである。評価は平均より高く、この科目への関心が高いことが分かる。

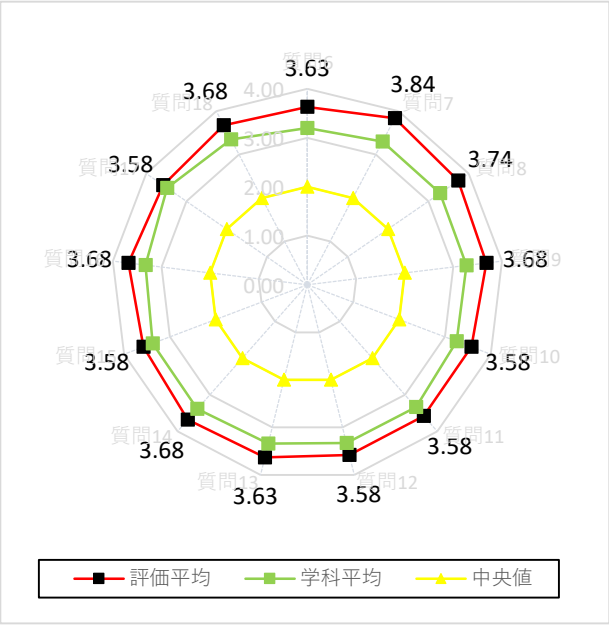
（３）次年度に向けての取り組み

これまでの展開のなかで、学習項目をより明確に示し、意見交換がより深化するようにする。シラバスへの補足を十分に行い、学習目標の指標を作成する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	地域生活支援		介護予防支援学	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

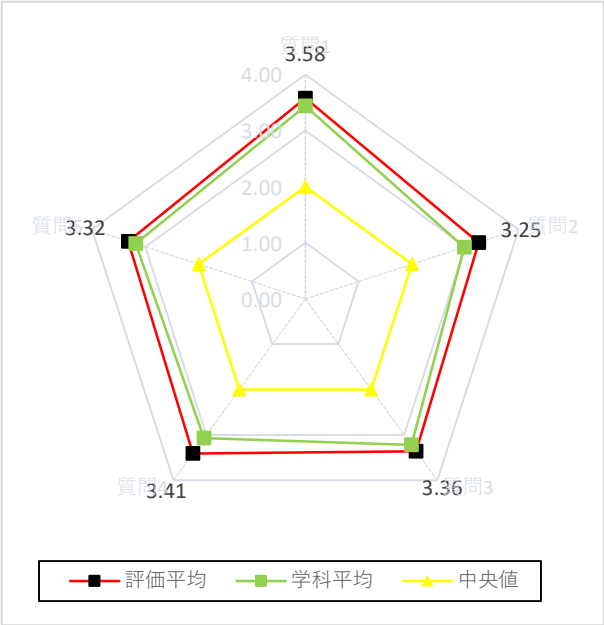
全体的に学科の平均点より高い。1の評価がついているのは学生自身に対する評価のシラバスを活用したかどうかのみである。2についているのは興味関心への工夫。教科書、資料、声の大きさ、授業の速さ、公平さ、熱心さに対してであった。4の評価が多かったのは参加度である。直接資格に関わる教科であることが影響していると考えられる。また、7の到達目標を明確にしているかについてであった。オムニバスであり、それぞれの教員がその回ごとに明確にしていることが考えられる。4の評価が少なかったのは教科書、資料が役に立っているかどうかの項目であったがそれでも57%は4であった。外部の講師が十分にいい授業を展開していただいたことが考えられる。

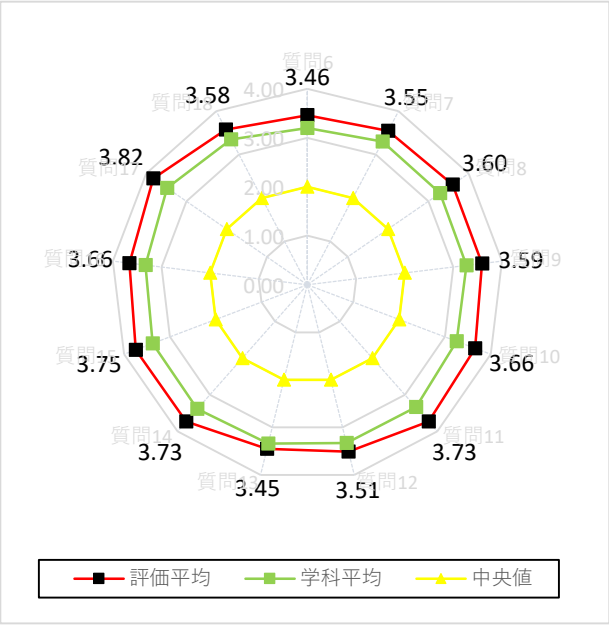
（３）次年度に向けての取り組み

活用しやすいシラバスの作成を検討する。声の高さ、話すスピード、板書等十分に学生側から見てhわかりやすいように工夫を怠らない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		社会福祉	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

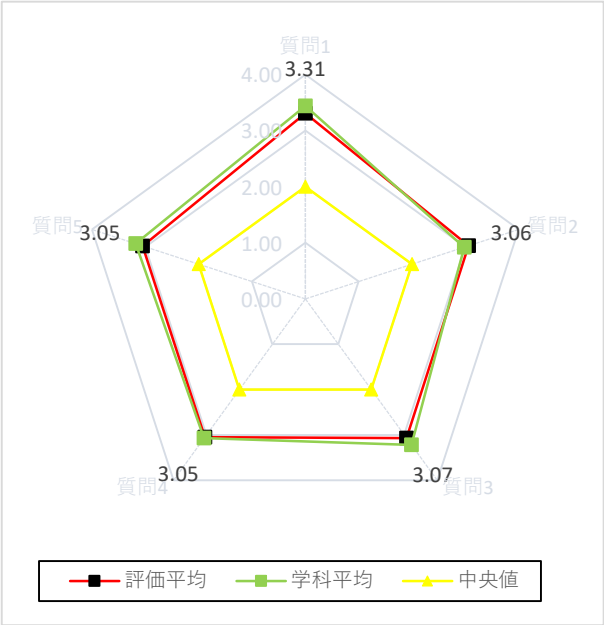
授業アンケート結果の分析と結果として、学科全体と比較しても高い評価を得ていた。具体的には、質問１０「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」、質問１１「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」、質問１４「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」、質問１６「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。」、質問１７「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」の項目も学習の効果として高い数値となっていた。特にこれらの項目は主体的な学習・能動的な取り組みの結果であり、これまでの授業改善が効果的に影響したものと考えられる。

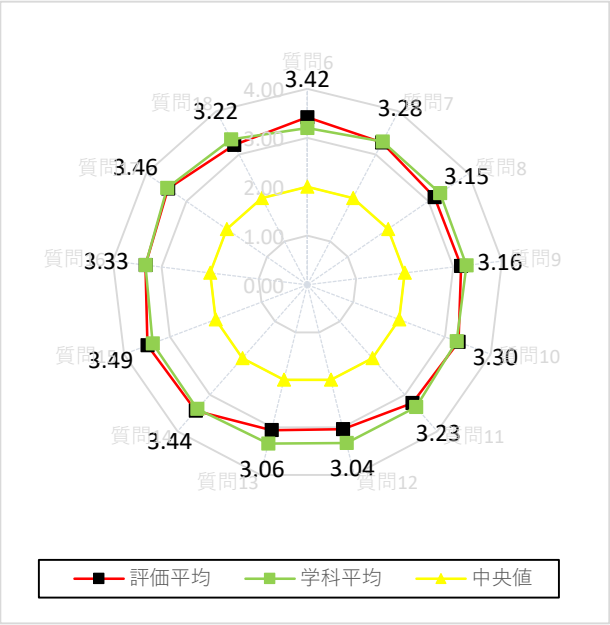
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、これまでの授業改善の流れを踏襲しつつも、新たな取組としてアクティブラーニングの要素を取り入れたグループ学習を積極的に導入したい。また、学習課題を明確にして、実習教育や就職後の保育実践に繋がる内容を検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		相談援助	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

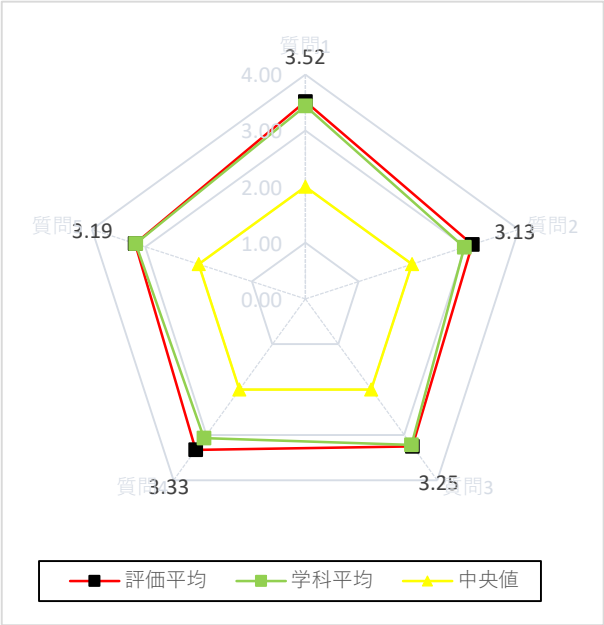
授業アンケート結果の分析・評価については、全体的に学科平均を下回り、改善する必要がみられた。特に質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問３「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問４「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」、質問５「あなた自身の総合自己評価」、質問１２「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」、質問１３「授業の進む速さは適切でしたか。」の評価が低く、教員の働きかけが十分ではなく、授業に対して総体的に取り組むことができていないことがわかる。これらの傾向は若干改善傾向にはあるが、前年度においても同様の状況がみられるため、学習方法・課題の設定と進度との関係性を見直す必要がある。

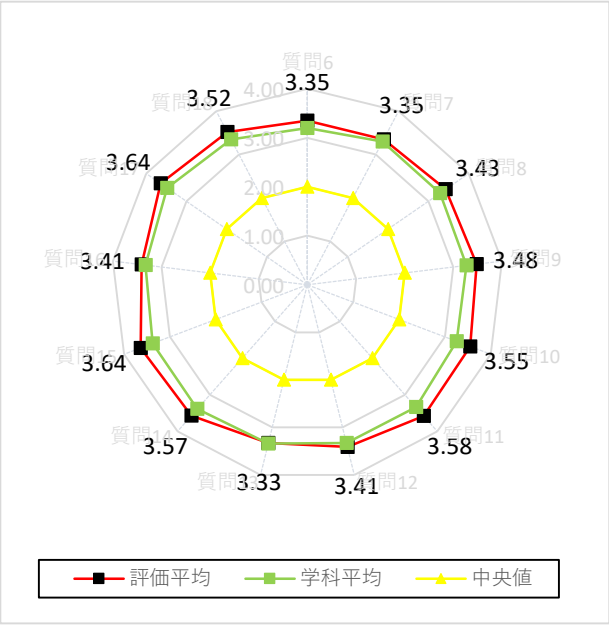
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、シラバスの修正や副教材の活用などにより、先進的な情報を取り入れて主体的な学習の機会を提供していきたい。また、グループ学習の積極的導入を図り、導入-展開-発展といった段階的な学びを自己で構築できるような働きかけを行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		児童家庭福祉	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

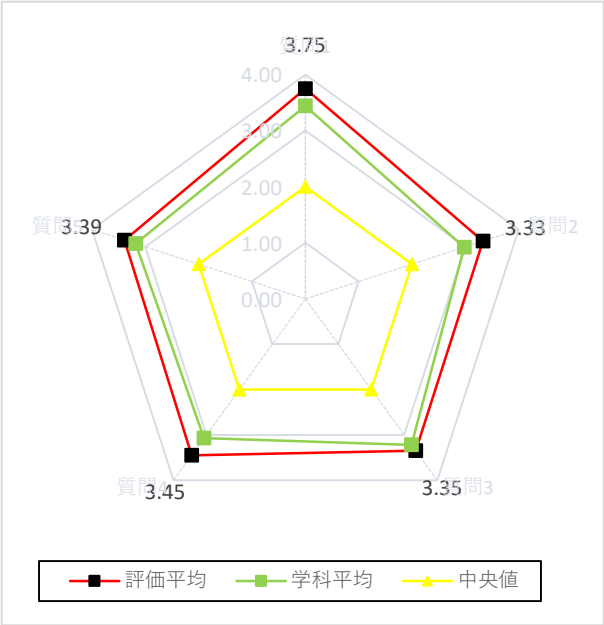
授業アンケート結果の分析・評価として、全体的の学科平均と同程度の評価を得ていた。その中でも、質問１０「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」、質問１１「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」、質問１７「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」については平均よりも高い評価を得ているが、その一方で質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問３「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問５「あなた自身の総合自己評価」、質問６「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」、質問７「教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。」についてはやや低い評価となっていた。本講義においては初回の講義時にシラバスに関する資料の配布とともにパワーポイントを使用して一項目ずつ丁寧な説明を行っているが、評価・結果との乖離がみられるため実施方法の再検討が必要である。

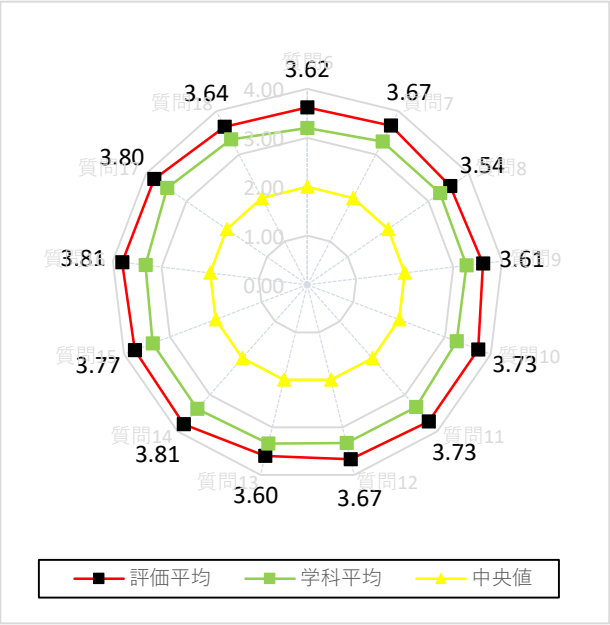
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、これまでの授業改善の流れを踏襲しつつも、新たな取組として時事的な課題要素を取り入れたグループ学習を積極的に導入したい。また、教育課程の変更により、他の科目との連動性や配当年次の調整が行われているため、その影響を考慮した授業展開を心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育原理	95名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。
毎回、授業内での課題（確認テスト、小レポートなど）を中心に評価をおこなっている。
そのため、授業への出席することが高い評価を得る前提となるため、
授業への出席は学科平均より高い結果となっている。

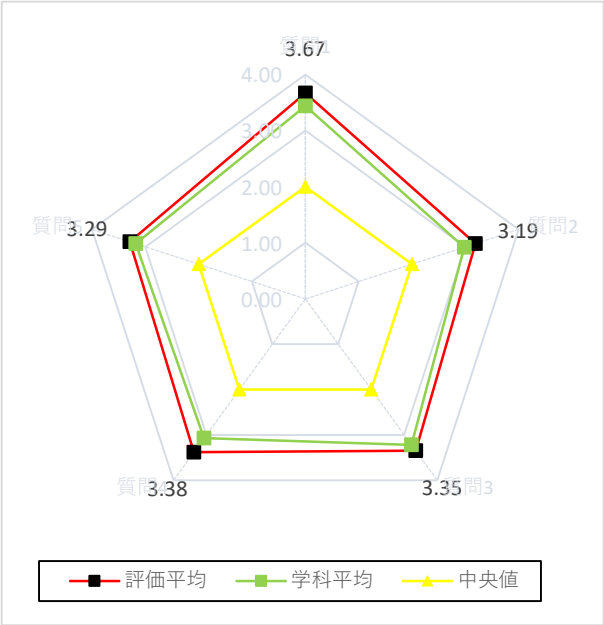
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
全体的に学科平均よりも高い評価結果となっている。
興味・関心を持たせる工夫をすることで、さらに高い評価を得ることができるだろう。
保育に関する法令や制度、保育所保育指針の内容理解など、
あまり学生とって身近ではなく、興味をもちにくい事項をどのように扱っていくのか、
さらなる教材研究と授業方法の改善が必要である。

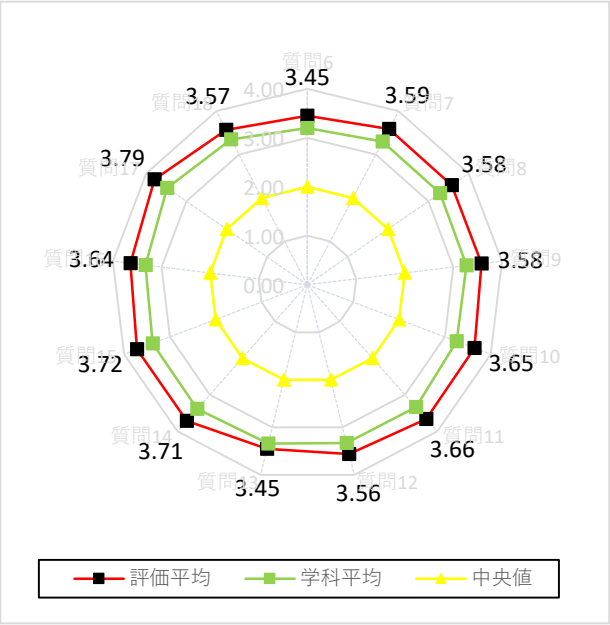
（３）次年度に向けての取り組み

講義型の授業に協同学習の要素を取り入れた結果、授業評価は改善の傾向がみられる。
一方で、授業で扱う内容が多く、教員による講義部分が長くなる時もある。
協同学習の技法をさらに洗練させ、学生間に共に学び合い、教え合う関係を築いていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		社会的養護	95名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

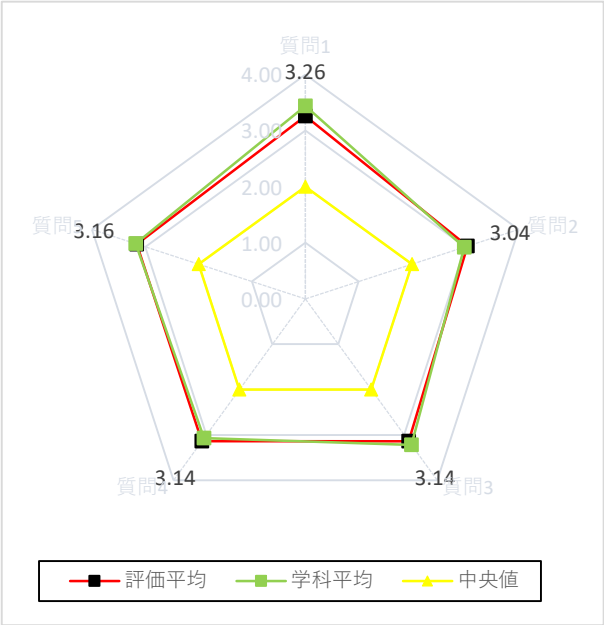
授業アンケート結果の分析と結果として、学科全体と比較しても高い評価を得ていた。具体的には、質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問１０「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」、質問１１「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」、質問１４「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」、質問１６「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。」、質問１７「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」の項目も学習の効果として高い数値となっていた。特にこれらの項目は主体的な学習・能動的な取り組みの結果であり、これまでの授業改善が効果的に影響したものと考えられる。

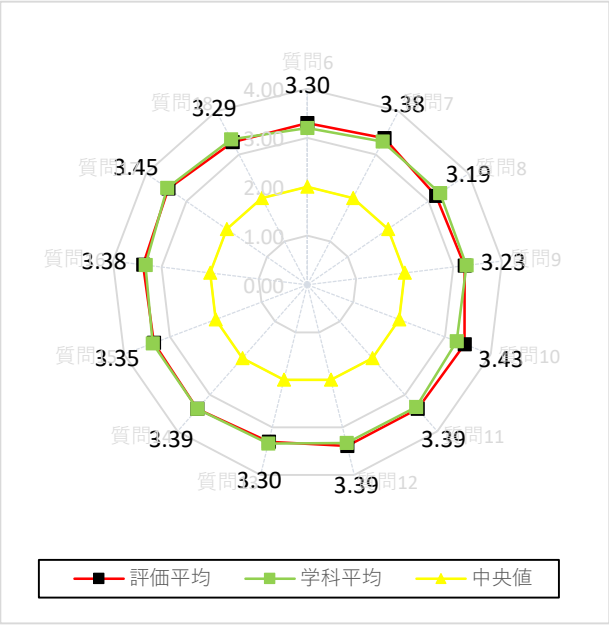
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、これまでの授業改善の流れを踏襲しつつも、新たな取組としてアクティブラーニングの要素を取り入れたグループ学習を積極的に導入したい。また、学習課題を明確にして、実習教育や就職後の保育実践に繋がる内容を検討していきたい。また、教育課程の変更により、配当年次の調整が行われているため、その影響を考慮した授業展開を心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		教育総論	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
　全体的に学科平均にくらべて、やや低い評価となっている。
　中でも欠席回数が多いのが気になる。後期の1限開講ということで、毎回欠席者が多かった印象を持っている。
　授業内容はもちろんだか、出席することが評価につながる仕組みを取り入れるなど、
　学生の出席を促す工夫を検討する必要がある。

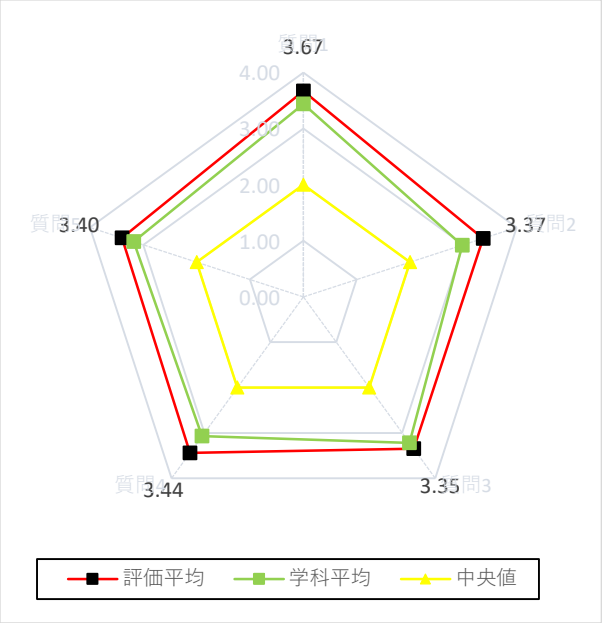
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
　全体的に学科平均よりもやや低い評価結果となっている。
　協同学習の要素を取り入れた講義をおこなったが、
　授業で扱う内容が多く、講義中心の授業スタイルになってしまったことに起因するのではないだろうか。

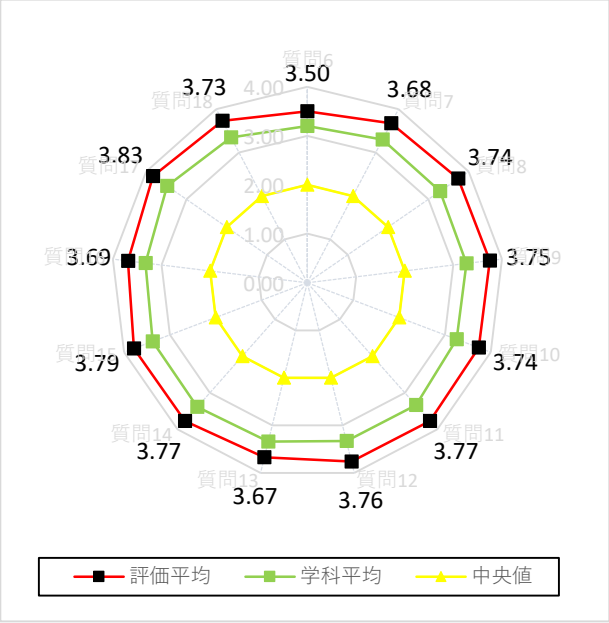
（３）次年度に向けての取り組み

授業内容を精選し、講義型の授業に協同学習の要素を取り入れていく。
前々年度までは、能動的な授業参加を促すために、書くことを中心に置いたBRD方式をおこない、
評価もおおむね良好であった。一方現在は、どちらかというと、話し合い中心に進めることが多い。
次年度は、両者をバランスよくミックスし、学生の能動的な授業参加を促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		発達心理学	95名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

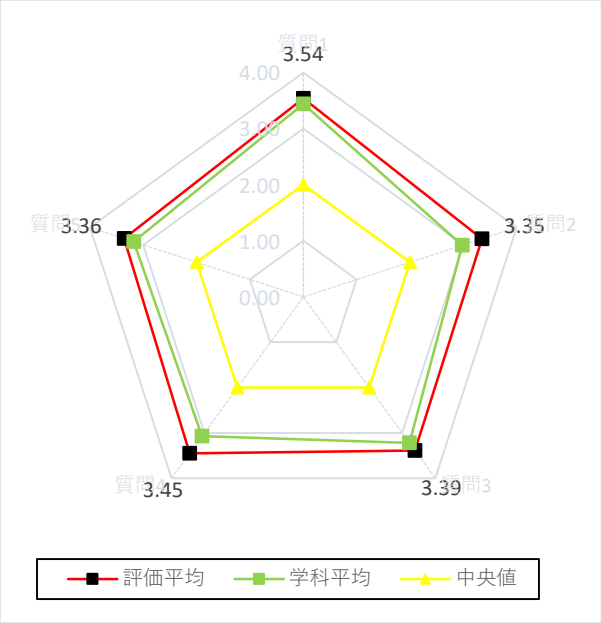
学生の自己評価については、どの項目も学科平均と同程度であった。授業内容や方法についての評価では、概ね学科平均より高い数値となっているが、質問６「シラバスについての説明」では、比較的低い評価であった。1回目の授業において、シラバスを示しながら授業計画について説明を行ったが、予習・復習を促すためにも、各回での確認が必要であると思われた。自由記述では、「視聴覚教材を使用したり、実際に起こったことを話してくれるので想像しやすいし、頭に入りやすかった。」とある。その他、「難しかったけど、面白い内容だった。」というような記述も何件かあった。1年次の前期に開講されることもあり、専門用語などは丁寧に、また、具体的に説明するよう心掛けたこと、学生が実習で体験した子どもの発達を捉えられるようなエピソードを拾い、解説したことなどが、こうした評価につながったと考えられる。

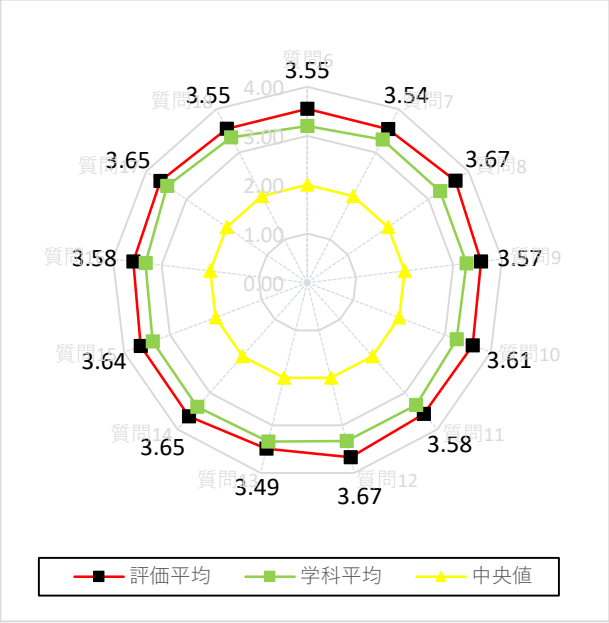
（３）次年度に向けての取り組み

2019年度は、1年次の後期に開講となるため、学生は受講期間中に教育実習Ⅰ（後期）を体験することになる。実習中の体験を知識と結び付けられるよう、具体的なエピソードから発達心理学を学ぶことができる授業方法を工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		教育臨床心理学	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

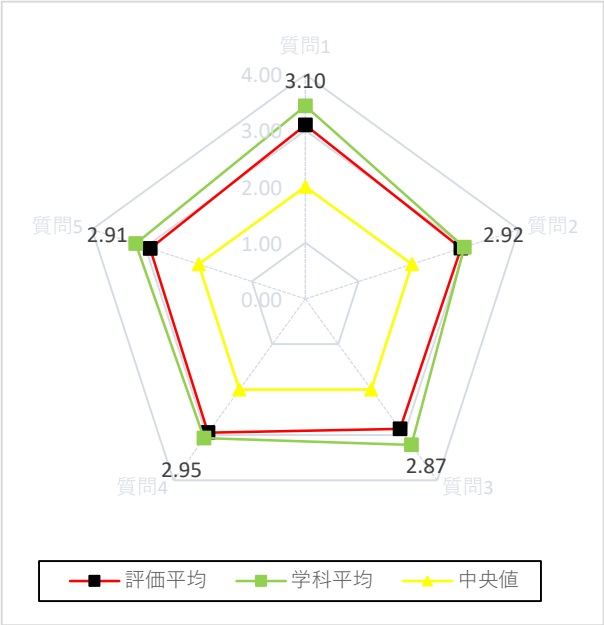
学生の自己評価は、どの項目も学科平均と同程度の値となっている。授業内容や方法に関する評価においては、特に、質問８と質問１２が学科平均より、やや高い結果となった。一昨年度、昨年度の授業評価において、「授業のスピードが速い。」「難しい内容が多い。」などの記述があったため、今年度は、保育者を目指す学生がより心理学を身近に感じられるような工夫を取り入れ、授業内容を精査したうえで授業の進む速さが適切になるよう心掛けた。このような改善が、質問８や質問１２の結果につながったと思われる。自由記述では、「実際の心理療法などを体験できて気づきが多くあった。」というコメントがあった。また、カウンセリングの技法を取り入れたグループワークなどを実施したことで、「楽しみながら心理学を学ぶことができた。」という記述もみられた。体験を通してカウンセリング技法を学ぶということに加え、保育者を目指す学生に必要な「自己理解」の促進にもつながったと思われる。

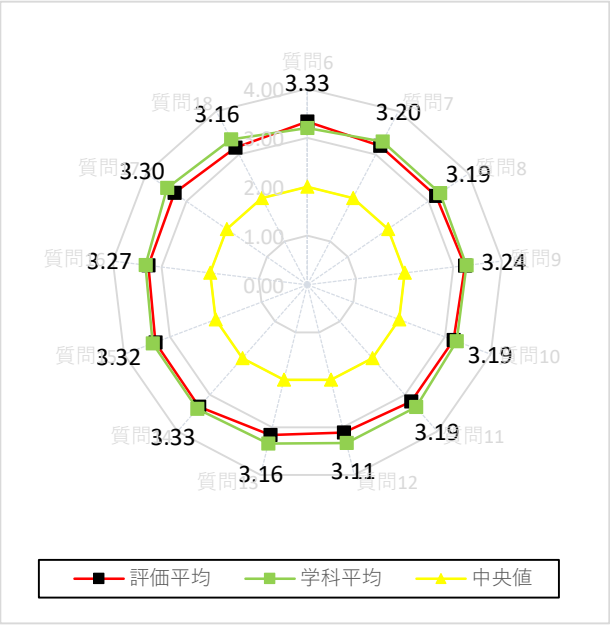
（３）次年度に向けての取り組み

昨年度同様に、「内容が難しい。」という記述が数件みられた。次年度以降は科目名が変わり、授業内容も違ってくるが、これからの保育者に強く求められる保護者支援に必要な「受容」「共感」的態度の基盤となる知識の習得や体験を重ねていけるような授業計画を行っていく。また、これまで以上に学生の理解度を確認しながら、丁寧な授業を心掛けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		家庭支援論	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

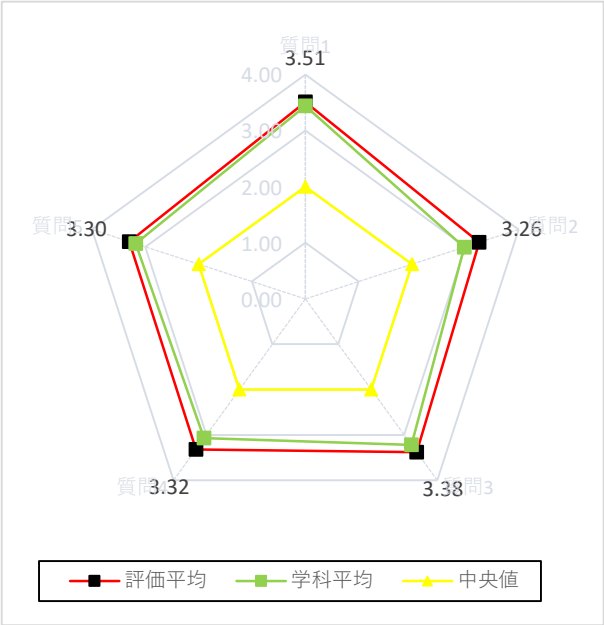
授業アンケート結果の分析・評価については、全体的に学科平均を下回り、改善する必要がみられた。特に質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問３「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問４「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」、質問５「あなた自身の総合自己評価」、質問１２「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」、質問１３「授業の進む速さは適切でしたか。」、質問１８「この授業を総合評価して下さい。」の評価が低く、教員の働きかけが十分ではなく、授業に対して総体的に取り組むことができていないことがわかる。これらの傾向は本科目の担当が初年度ということもあり、今後はこの結果を反映した授業計画の作成と学習内容と進度との関係性を見直す必要がある。

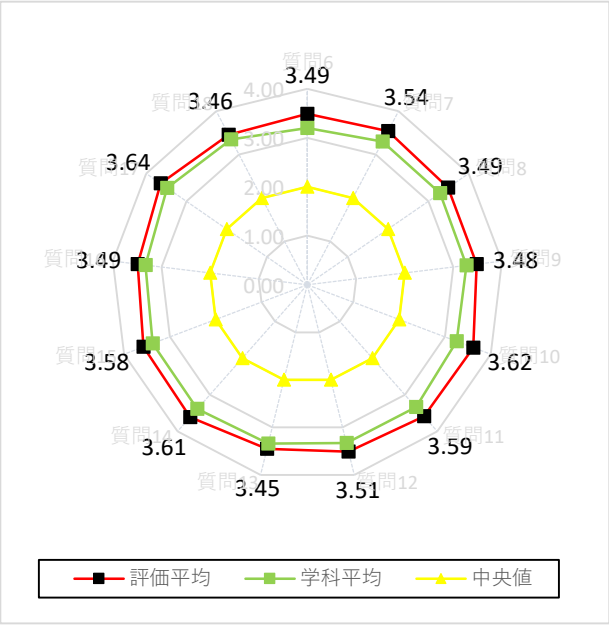
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、学習内容の整理を行い体験的な内容を多く取り入れる。また、主体的に取り組みながら段階的に学習することができるようなシラバス構成を検討していくこととする。さらに、アクティブラーニングの要素を取り入れたグループ学習を積極的に導入したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育内容（健康）の理論と方法	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

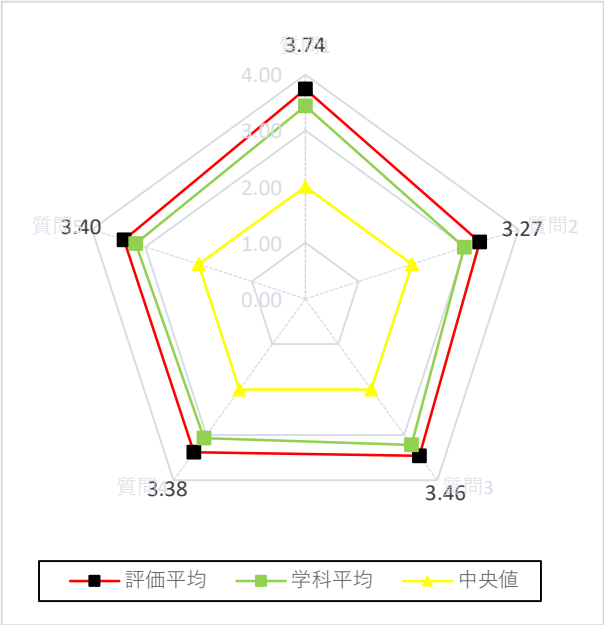
授業は、〈読み解く〉〈考える〉〈話し合う〉〈調べる〉〈まとめる〉の学修行為を基盤としており、「前回授業の振り返り→資料に基づいた解説→課題の提示・探求→発表・文章化（課題提出）」の流れで実施している。「資料に基づいた解説」において幼児教育・保育の最新知見に関する情報が多すぎたため、祖の後の「課題の探求」の時間を十分に確保できない授業回もあった。そのため、事前学習・事後学習の課題内容も含め、教授情報を精査する必要もある。全体的に肯定的な（学科平均よりもやや高い）評価は得られているが、次年度は、資料作成も含め、学生の「学びたさ」と「わかりやすさ」に配慮した授業設計に努めていかなければならない。

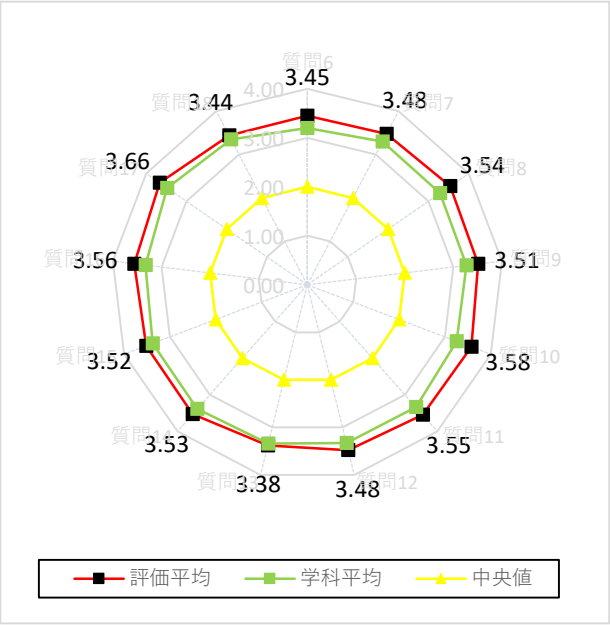
（３）次年度に向けての取り組み

「資料に基づいた学習テーマの解説」では、知識・理論の教授が主であったが、学生の「わかりやすさ」を担保するためにも事例を交えた教授が必要である。具体的な実践を伴った「絵本などを用いた健康教育」「伝承遊び」において、学生が能動的に取り組む姿が見られたので、実践と理論を連動させるような授業展開を考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育内容（人間関係）の理論と方法	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

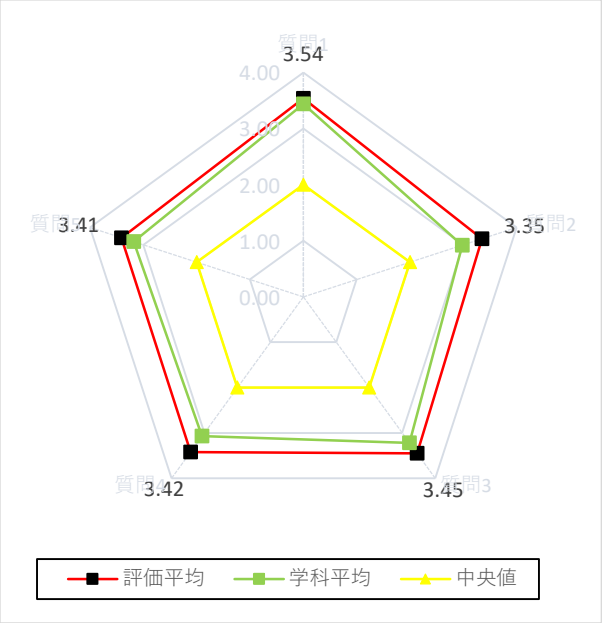
全体的に学科平均値であった。その中で質問８の興味関心の工夫、視聴覚機器・板書の活用、１６の双方のやり取り、１７の熱心さという面で、評価がわずかに高かった。わずかな値だが、分析すると、幼稚園実習期間を挟んでの授業だったので、子どもの姿を交えての内容だったので共有でき、分かりやすかったのではないかと考える。授業方法としては、学生の授業参加を重視し、考えを発表する機会や、手遊びの発表経験を公平に入れていった。また、授業後に感想を書いたラベルを活用していたので、学生の反応は把握できたと思う。ビデオは、特に「人とかかわる力の発達と課題」「支える保育者の役割」という点で、とても良い教材だと思われる保育の実際のドキュメンタリーを編集したものなので、見る視点と捉え方についての説明を丁寧にしていく必要を感じた。

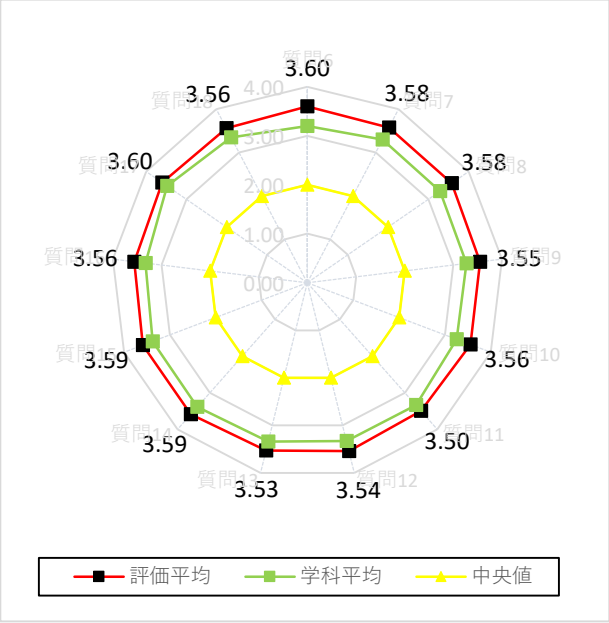
（３）次年度に向けての取り組み

学生自身の高い評価項目は、欠席がなかったこと。内容的には、強いて言えば教科書・配布資料等の活用なので、もっと深める必要があるのだろうと考える。一回一回の授業の目的やねらいは持っているので、伝わるように表現する事を念頭に置きたい。そのためにも、毎回の内容をどうとらえたか、今後とも授業感想のラベルをとりたい。出来るだけ的確な発問と感想を求めるよう努力したいと考える。また、人間関係における実習体験を大事にし、子どもの内面をどう捉え、かかわっていくかデイスカッションが出来ればと思っている。デイスカッションの深まりを実現するには、時間の確保が肝心であり、グループワークの話の進め方にも注意を払う必要がある。学生とコミュニケーションをとりながら、発言しやすい雰囲気を作っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育内容（表現）の理論と方法	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

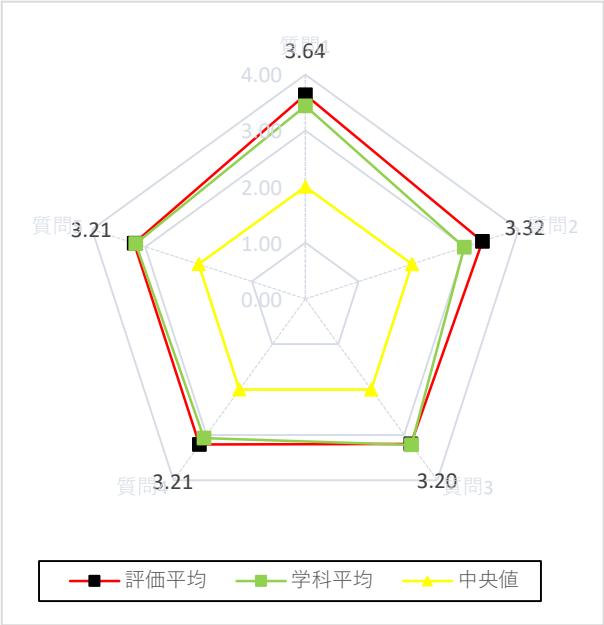
米倉、牛丸二名によるオムニバス形式の授業であり、①領域「表現」のねらいを把握させながら、造形・身体それぞれの表現における発達段階を理解させるとともに、子どもの活動に共感し子どもの表現を受け止めることができる力を身につけること、そして具体的な指導場面を想定した保育を実践できる力を養うことをねらい、授業を展開した。授業では造形表現の領域と音楽表現の領域から保育現場に生かせる題材を設定し、①領域「表現」の意義や目的を理解し、保育の構想につなぐことができる。②領域「表現」における造形活動・身体活動に関する表現技法を総合的に理解し、指導することができる。③発達段階に応じた領域「表現」に関する、造形活動、身体活動の指導案を作成することができる。④領域「表現」に関する保育現場の実践例をもとに、課題を見つけ解決策を提案することができる。⑤造形活動においては模擬保育をとおして、保育におけるＰ－Ｄ－Ｃ－Ａサイクルを構想できる。の５点を到達目標において講義、演習を取り入れた。授業評価結果から期待していた成果は得られたととらえている。今後は学生の自己評価力・課題解決能力を育成することが大きな課題である。

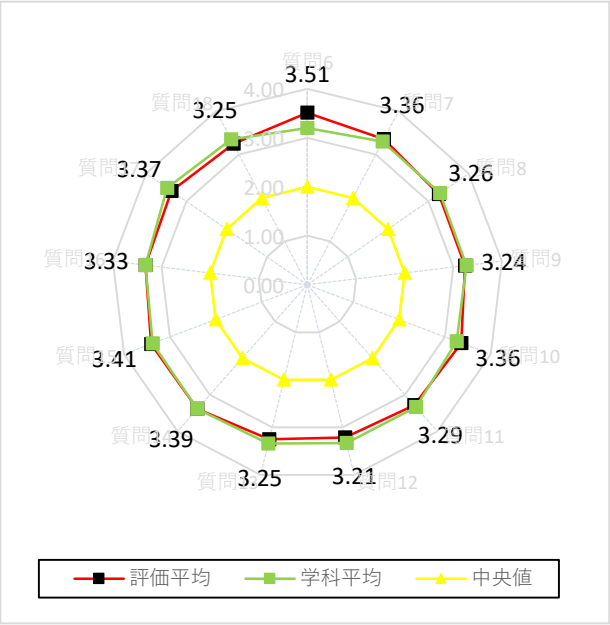
（３）次年度に向けての取り組み

前年度の評価結果に鑑み、米倉、牛丸二名でシラバスの検討を重ねた。次年度の授業のねらいは、前年度と大きく変わらないものの、現在小学校で展開されている「英語活動」が、いずれ保育園、幼稚園、認定子ども園に波及してくることを想定して、具体的な指導場面を想定した保育を実践できる力を養いながら、幼児期における英語活動教材に、造形領域と音楽領域を融合させながら取り組むことにした。授業の到達目標は、次のように設定しなおした。 ①領域「表現」の意義や目的を理解し、保育の構想につなぐことができる。②領域「表現」における造形活動・身体活動に関する表現技法を総合的に理解し、指導することができる。③発達段階に応じた領域「表現」に関する、造形活動、身体活動の指導案を作成することができる。④領域「表現」に関する保育現場の実践例をもとに、課題を見つけ解決策を提案することができる。⑤造形活動においては模擬保育をとおして、保育におけるＰ－Ｄ－Ｃ－Ａサイクルを構想できる。⑥身体表現においては、日常保育や行事で用いられるダンスやわらべ歌の指導や振付ができる。⑦ペープサートを使った「園児が楽しめる英語活動」の実演ができる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		障害児保育	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

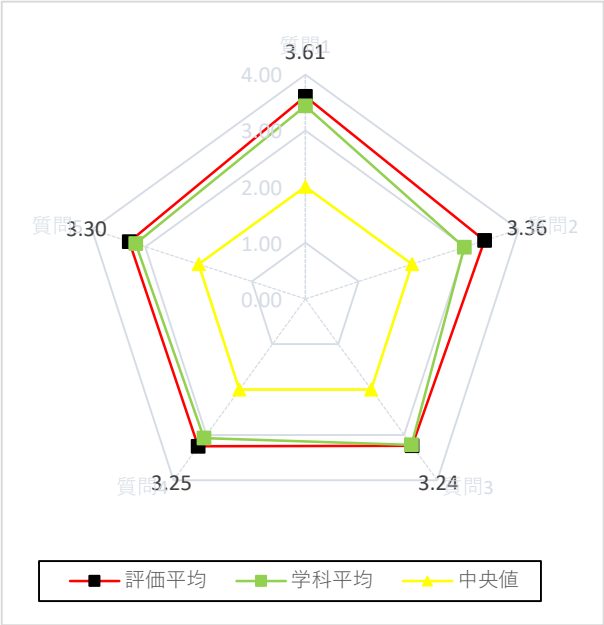
全体的に平均よりも低い評価である。また、ここではなく、自由記述に関して、「教員の自己満足」「障害児を例としてあげることはあまりよくない」「いきなり大声を出す」「生徒を脅すような言い方が多く、不快だ」「生徒を馬鹿にしている」といったアカハラとも取れる記述がみられた。こちらの意図とは別にこのような発言が出たということは真摯に受け止める必要がある。一方で、「障害のことについて学び、どのように対応すべきか知れてよかった」「もっと知識を身に付けたいと思った」「障害を体験したり調べたりすることで理解が深まった」「実習と障害についての授業を行い、前より勉強したくなった」といった意見も多数あり、個人で受け取り方が異なっていると思われた。また、クラスによってずいぶん評価も異なるようであった。

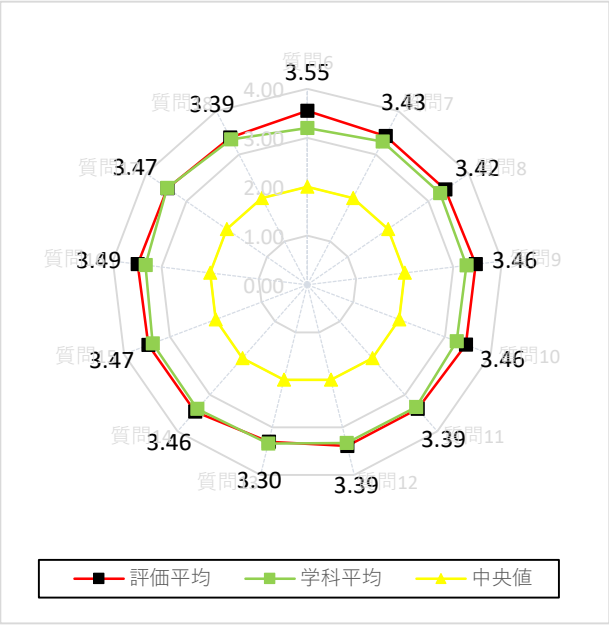
（３）次年度に向けての取り組み

クラスによる評価の違い、個人による評価の違い、また受講中の態度の悪さ（指導力が不足していることも含め）、今後の課題について検討すべき点があると思われる。一方、学生の声をすべて受け止めることはできない面もあるが、今回の指摘については、すべて課題として、特に授業する態度を改める必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育相談支援	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

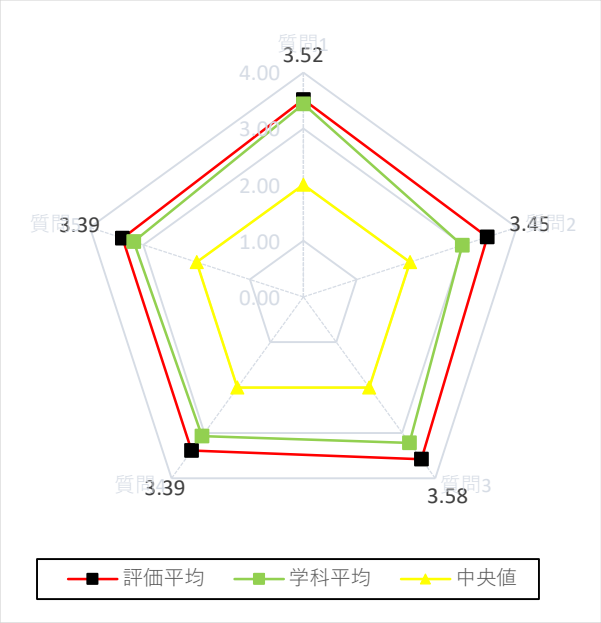
学生の自己評価も、授業内容や方法についての項目も、学科平均と同程度の値となっている。担当教員は2名とも、毎回授業の始まりにシラバスに基づく学習計画や内容の確認を行った。このことが、質問２や質問６の結果に影響していると考えられる。また、自由記述では、各テーマに沿った事例を用いた学習が、受講生の興味・関心を高め、学習意欲につながったことが窺える。

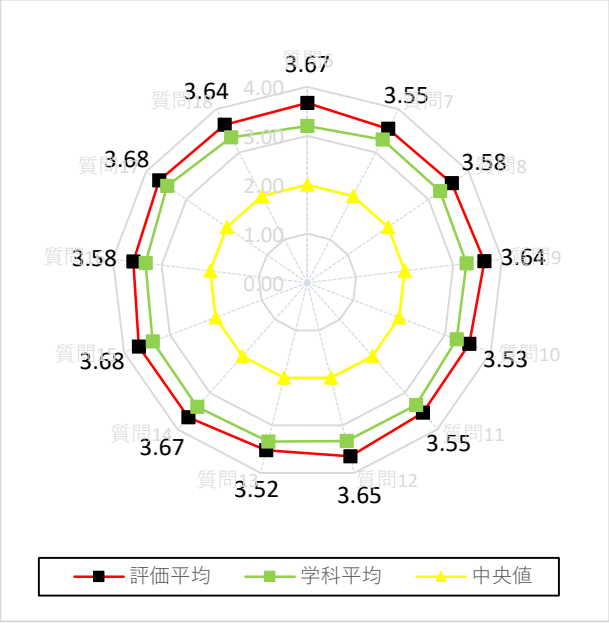
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、実際に現場で出会うであろう事例を適宜取り上げながら、実践的に学べるような工夫を続け、自由記述にみられた「現場で役立つことを学べる。」授業を展開したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育内容（音楽表現）の理論と方法	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

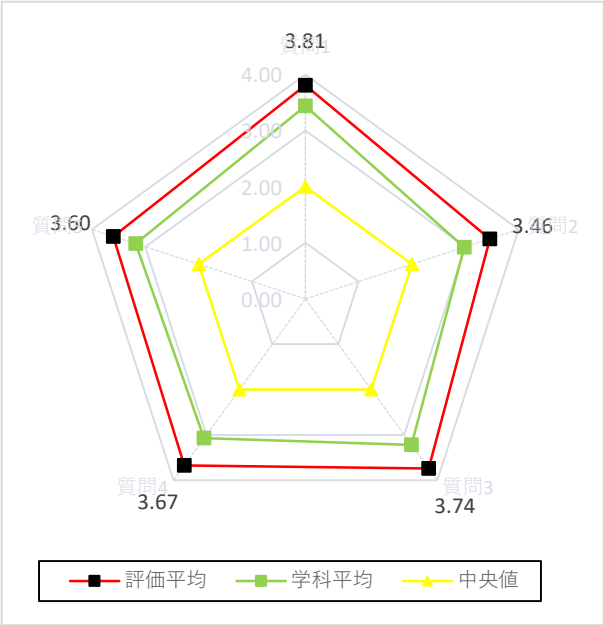
全体としては概ね高評価ではあったが、2クラスの評価に差があり、Aクラス（表現・音楽コース）では総合評価が3.69であったのに対し、Bクラス（心理・環境コース）では3.51であった。同じ内容の授業を同じようにしているが、2つのクラスの性格的な違いについて対応が難しいと思われた。自由記述においては「今後も保育に繋げることができる経験をたくさんすることができ、とてもためになる、前向きに考えられる授業でした」「苦手なピアノ等の活動があったが、苦手な学生に合わせて課題を提供してくださった」などの記述があるのに対し、グルーピングの仕方（学籍番号順）に対する苦情にも近い記述もあり、グループのメンバーによって、負担感を感じる学生がいることが判り、考えさせられた。

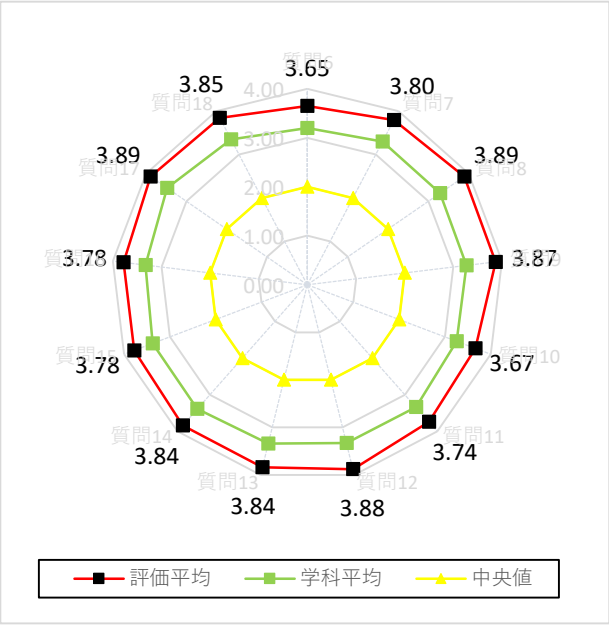
（３）次年度に向けての取り組み

本授業ではグループワークを多く取り入れているため、学生ならではの発想やアイディアによって活動が活性化し、学生同士がお互い刺激し合っている様子も見られるが、一方でそういった活動に消極的な学生と同じグループになってしまった学生は負担感があることが判った。次年度は活動毎にグループを編成しなおすなどの工夫をしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育内容（リズム表現）の理論と方法	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

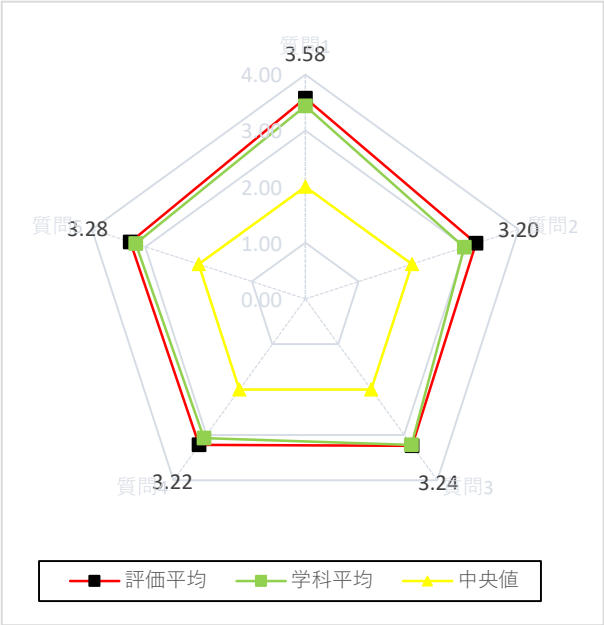
表現音楽コースAクラス：３．８３、心理環境コースBクラス：３．７２という総合評価を得た。これは、ほぼ学生の満足度が高かったといえるであろう。1年生前期の科目なので、まずは学生のこころをひらき、保育者としての意欲を持つ指導法などを研究し計画したたことが表れた結果だと思われる。

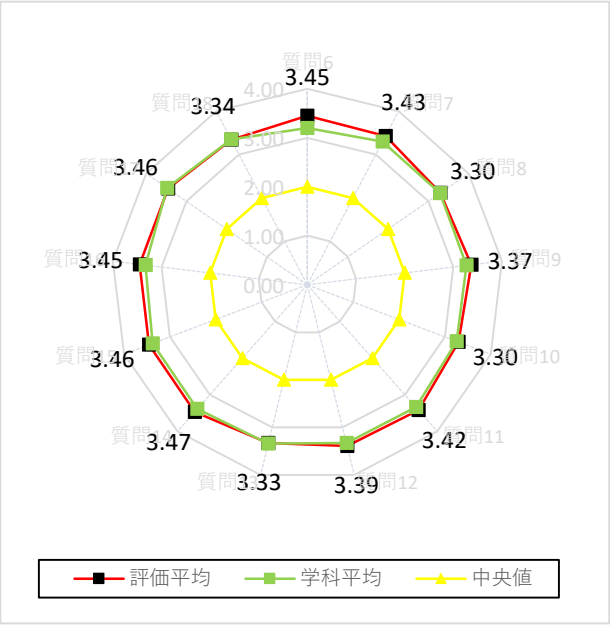
（３）次年度に向けての取り組み

文部科学省の改定によるシラバスの要領を含め、内容研究したことが好結果に繋がったので、次年度もこの計画で進め、学生にこの短大に来てよかったと思われる授業を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育課程論	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

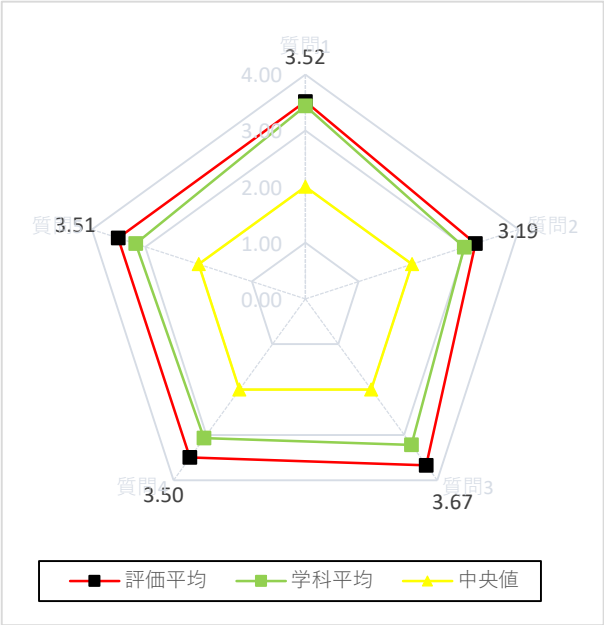
いずれの項目も学科平均と同程度ではあるものの、若干下回る評価となっている。質問8と質問10は特に平均に比して低い点数であった。この授業はテキストに沿って各種計画を実際に作成することで学びを進める方法を採っているため、学生自身で作業を行う時間も多い。計画作成を苦手とする学生も多いため、興味や関心を引き出すより一層の工夫が求められているのではないだろうか。そのためには、視聴覚機器等を効果的に用いるということが必要になるのかもしれない。
一方、自由記述では「指導案、日案の書き方をより詳しく知ることができた」「全日指導案は大変だったが勉強になった」「実際の保育現場を想像しながら考えることが出来た」等、学生自身が授業を通して学びを深めることが出来たという内容が書かれており、この授業の目標は達成できたのではないかと考える。

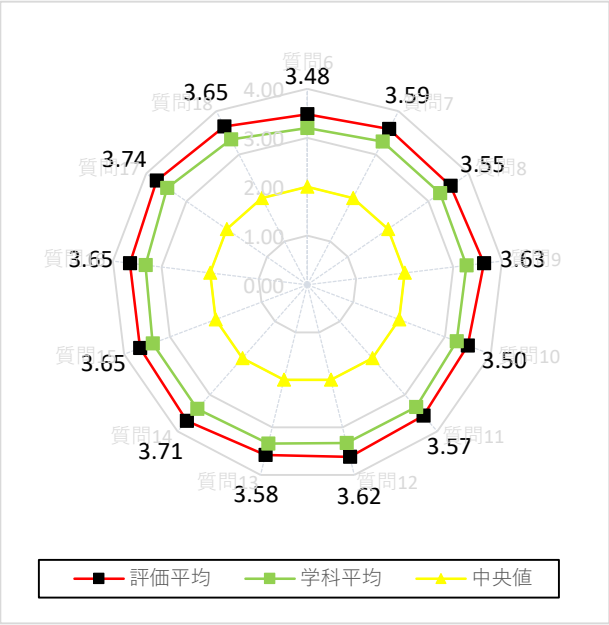
（３）次年度に向けての取り組み

この授業で得た知識や技術を他の場面で生かすことが課題であると考えている。授業中の課題に対してはしっかりと取り組む学生が多く、内容的にも問題が無いように思えたが、実習指導の授業や現場での実習中に作成した指導計画を見ると、基本が分かっていないのではないかとも思えるものが多かった。授業で身につけたスキルを保育現場で生かすことができるよう、知識や技術の定着に向けた取り組みを工夫する必要があると考える。手始めに次年度は、この授業で使用したチェックシートを実習指導の授業でも使用するなど、同じ教材を繰り返し用いて反復学習ができるような仕組みを作りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		ピアノⅠ	199名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本授業はＭＬ教室で非常勤講師の先生方と共に行っている。基本的に個人レッスンの形態ををとっており、学生個人の音楽経験や習熟度により一人ひとり進度も違う。学生の自己評価で質問２の評価が低いのはそのためであろう。 質問6について、授業初回ではWeb上のシラバスとは別に作成した資料を配布し、授業の目的や概要、流れ、計画、教材、試験、配点、注意事項について説明している。担当者としてはこれで「シラバス（授業計画）」について説明しているつもりだが、学生には別資料での説明がこの質問のシラバス説明にあたることが分かりにくいのかもしれない。

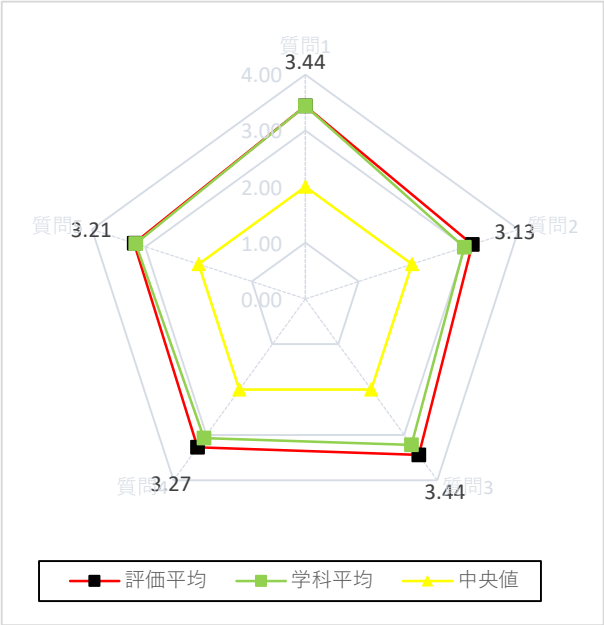
本授業では毎回ワークシートの記入とそれに対する教員からのコメントのやり取りも行っており、ピアノ初心者学生に対しても配慮をもって進めることが比較的やり易い。自由記述において「一人ひとりに真摯に対応してくださいました。グループ分けを行い、一人にかかわる時間を増やしてあるので、効率の良い授業展開だと思いました。」等が見られ、学生の満足度の高さが窺えた。

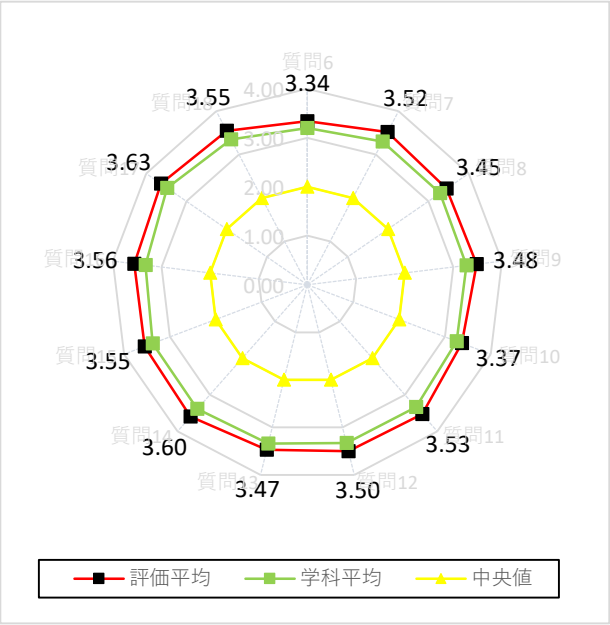
（３）次年度に向けての取り組み

今年度育児休業していた専任教員が来年度は復帰するが、新たな科目を担当することもあり、ピアノ授業では今年度同様「非常勤講師だけで担当する授業」が出てくる。しかし今年度の授業においても非常勤講師の方々がこれまで以上に授業担当者としての責任を持ち、サポートしてくださったことを考えるとそこは心配ない。今年度同様、授業内での学生への伝達事項や授業内容などが偏らないよう、授業と授業の合間の10分間は、その日の授業担当者全員が集合し、簡単な打ち合わせや情報交換をするなど常に連携しながら授業を進めていくよう考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		ピアノⅡ	69名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

１年次のピアノⅠと比較すると学生の自己評価の値が下がっている。１年次は全員に同じ到達目標を示しており、到達しなければ単位取得ができないため、学生は毎日の練習に必死になる。しかし２年次は個人で課題を設定する形をとっており、また実習などで忙しい時期でもあり、１年次ほど練習できていないと感じる学生が多いのではないか。

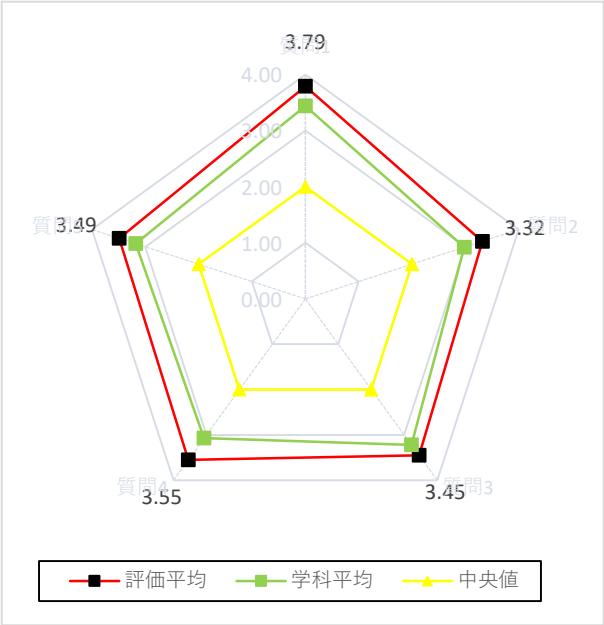
質問6について、授業初回ではWeb上のシラバスとは別に作成した資料を配布し、授業の目的や概要、流れ、計画、教材、試験、配点、注意事項について説明している。担当者としてはこれで「シラバス（授業計画）」について説明しているつもりだが、学生には別資料での説明がこの質問のシラバス説明にあたることが分かりにくいのかもしれない。

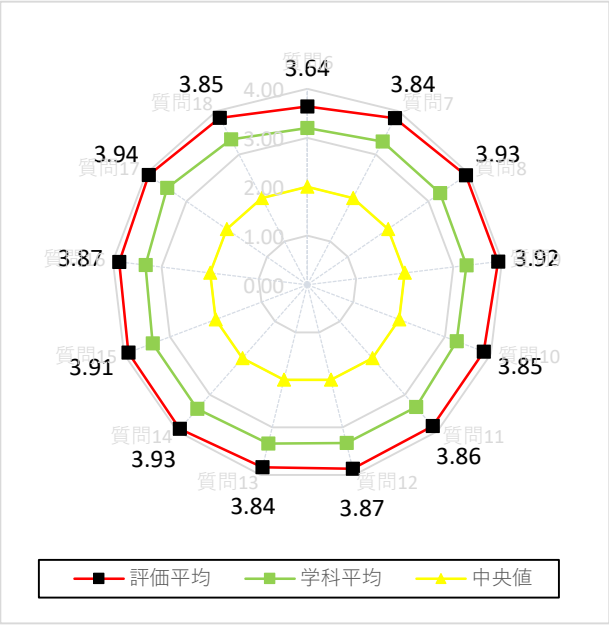
（３）次年度に向けての取り組み

学生自身がレベルに応じた課題を設定し易いよう、本授業で取り扱う曲目リストや試験（2回）のあり方について再検討する、来年度も８名の非常勤講師との連携を密にし、常に情報交換しながら授業を進めていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		図画工作	100名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

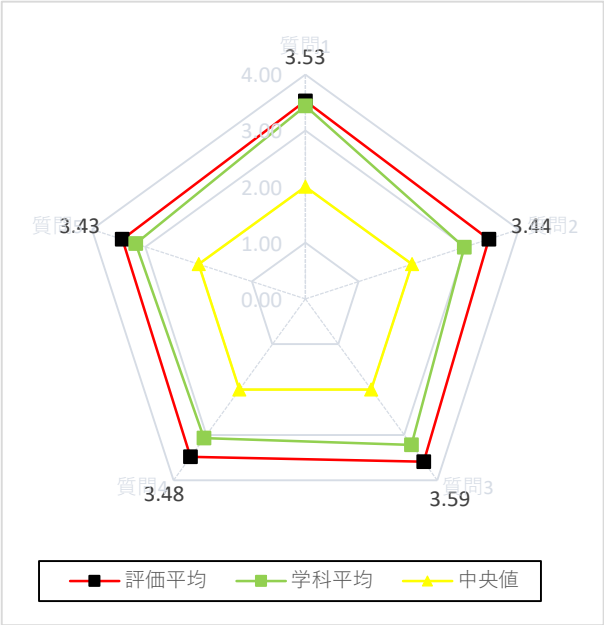
授業のねらいを「表現に関する基礎的な知識・技能を学び、幼児の表現（造形）活動を支援するための技法や、主体的な活動を促すための対話力（コミュニケーションスキル）を身につける。」とし、授業の到達目標を以下のように設定した。（１）幼稚園教育要領のおける図画・工作指導のねらいや内容について理解する。（２）幼児期の造形表現の特徴を理解する。（３）幼児の発達段階に応じた道具や画材を選択できる。（４）基本的な表現技法を身につける。（５）協働的、対話的な活動に積極的に参加できる。（６）ＩＣＴ機器を利活用した保育教材・環境教材等を作成することができる。（７）主体的な活動を促すための適切な対話（言葉かけ）ができる。（８）発達段階に応じた指導案（指導略案）をつくることができる。そして、学習方法 各講義及び実習は、基本的に「Active・Learning（主体的・対話的・深い学び）」型の授業形態を通して学習させるようにした。学生たちの受講態度はAクラス、Bクラス共に極めて望ましいものであり、授業の成果は学生の授業評価に見られるように、予想を大きく上回る成果が見られた。課題は学生の自己肯定感の高まりである。

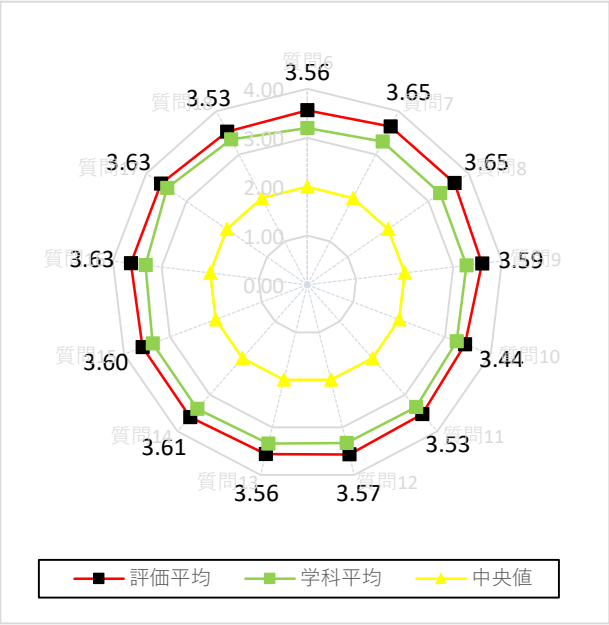
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は使用する教科書を変更し、更に理解し易い授業の工夫改善を目指す。授業のねらいは、前年度同様に子どもへの指導、支援における対話力（コミュニケーションスキル）が高まるような授業を工夫していく。 そのために、授業スタイルは学生の主体的・協働的な学びを促すように、基本的に「Active・Learning（主体的・対話的・深い学び）」型の授業形態を通して学習させる。このことを基本に置きながら、次年度の授業の到達目標は（１）幼稚園教育要領のおける図画・工作指導のねらいや内容について理解する。（２）幼児期の造形表現の特徴を理解する。（３）幼児の発達段階に応じた道具や画材を選択できる。（４）基本的な表現技法を身につける。（５）協働的、対話的な活動に積極的に参加できる。（６）ＩＣＴ機器を利活用した保育教材・環境教材等を作成することができる。（７）主体的な活動を促すための適切な対話（言葉かけ）ができる。（８）発達段階に応じた指導案（指導略案）をつくることができる。であり保育指針や教育要領に基づき設定している。前年度の課題である学生の自己肯定感が高まるような場の設定を随時行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		幼児体育	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

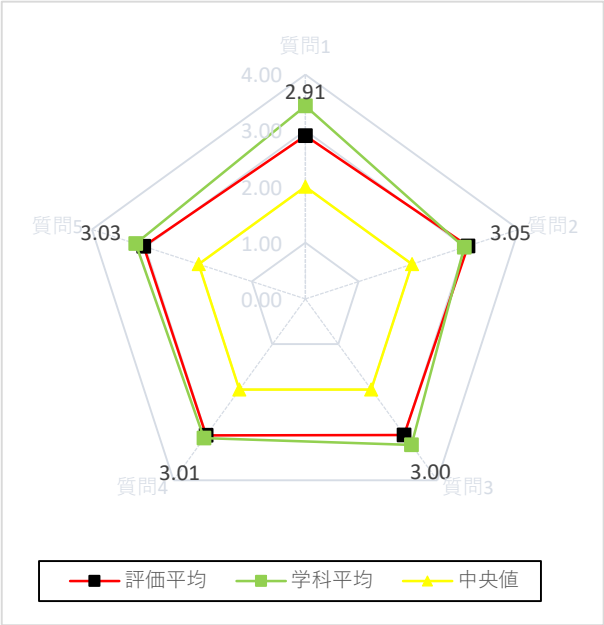
本科目では、①乳幼児期の発育発達に即した運動遊びの内容・実践法の紹介、②子どもの活発な身体活動を引き出す遊び環境の考察の2つをテーマとしている。①では実技、②ではグループワークが学修活動の中心であり、視聴覚機器や板書を用いた授業は実施していない。授業では、学生の先入観や固定観念を打破するために、教材のルールや動作を工夫した多様な実践機会を提供した。また、学生の授業理解度を高めていくため、学生の毎回の振り返りの中から、全体共有したいコメントを選び、そのコメントを活用しながら授業内容の要点を解説した。全体的に肯定的な（学科平均よりもやや高い）評価は得られているが、「課題や作業量が多い」の意見も聞かれため、充実感や課題の有用性を実感できるような授業設計に努めていきたい。

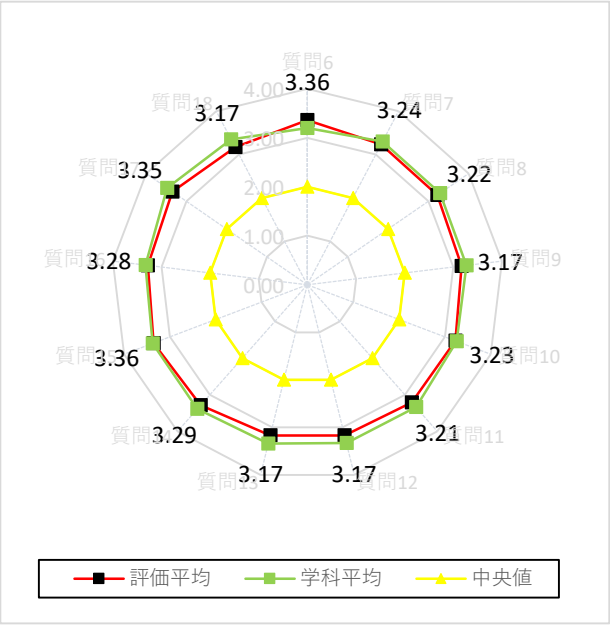
（３）次年度に向けての取り組み

授業で配布しているワークシートを紛失する学生もいることから、次年度からは15回分のワークシートをまとめて提供したい。本科目の学修内容（経験）が保育実践に役立つことを学生が理解できるよう、資料を活用しながら授業の実践と振り返りを重ねていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		教育・保育者論	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
　全体的に学科平均にくらべて、やや低い評価となっている。
　中でも欠席回数が多いのが気になる。後期の1限開講ということで、毎回欠席者が多かった印象を持っている。
　小グループによるワークを多く取り入れたが、欠席者が多くグループ活動がやりづらいようであった。

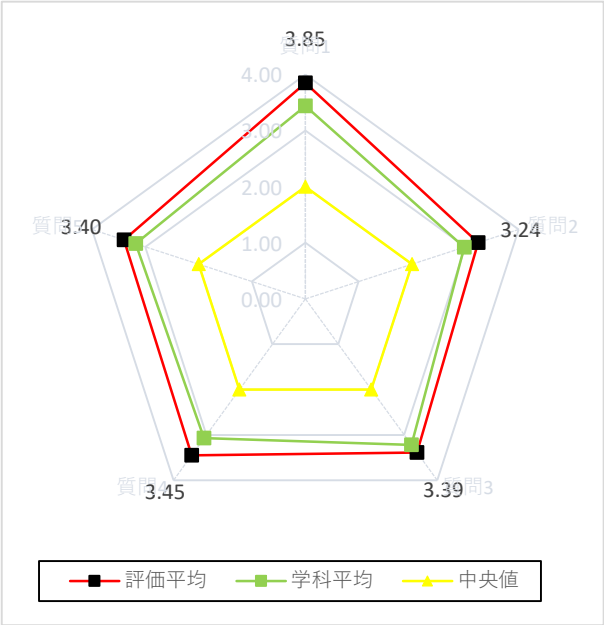
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
　全体的に学科平均よりもやや低い評価結果となっている。
　毎回、小グループで取り組むワークを用意していたが、欠席者の存在やメンバーの手抜きにより、
　グループ活動が停滞することもあった。これではかえって逆効果である。
　改めて、職業的関連性や生活上の有用性など学ぶ価値を持たせ、
　協同を促す課題を用意することで、活動性の高い授業を実現していく必要がある。

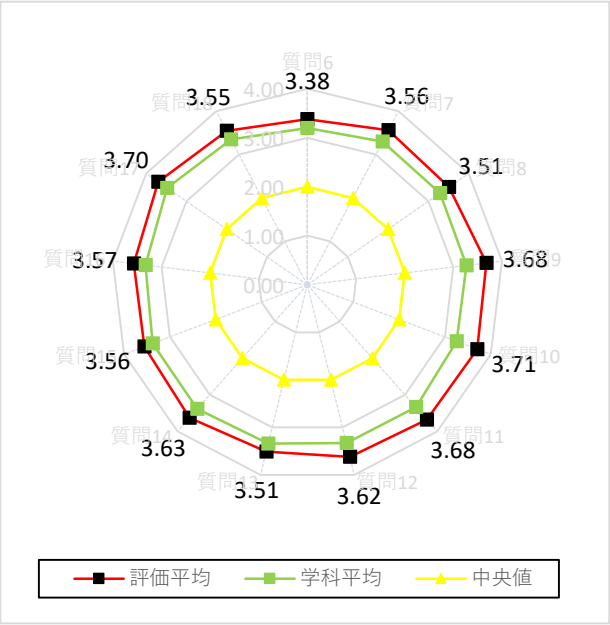
（３）次年度に向けての取り組み

前年度とくらべると、評価がやや下がっていた。
教師・保育者として現場に立った際に直面するさまざまな困難や問題など
学生のめざす職業との関連性の高いテーマを用意するとともに、それらへの対応について、
ディスカッションやロールプレイなどをおこなう機会を用意し、学生の活動性を高めたい。
また、グループ活動が促進されるためには、支持的風土が必要である。
メンバー同士の関係性、グループの学びに対する責任性などが育成できるよう配慮しながら授業を進めるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		楽典	95名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

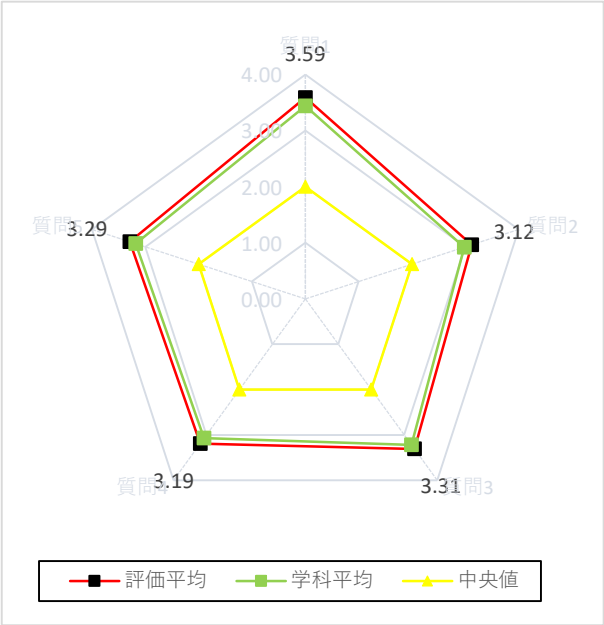
本授業の習熟度別3クラス「初心者クラス」「少し経験があるクラス」「経験者クラス」の内、今年度は「初心者クラス」を担当した。ピアノを弾いたことのない学生にとって「楽典」の内容は非常に難解であると思う。そういった受講生の立場に立つことが本授業の何より大切なポイントであり、できるだけゆっくり丁寧に、また楽しく伝えることを意識した。
その結果全体的に高評価を得ることができ、自由記述においても「教え方が解りやすく楽しかった」「苦手意識が生まれなかった」などの記述を見ることができた。

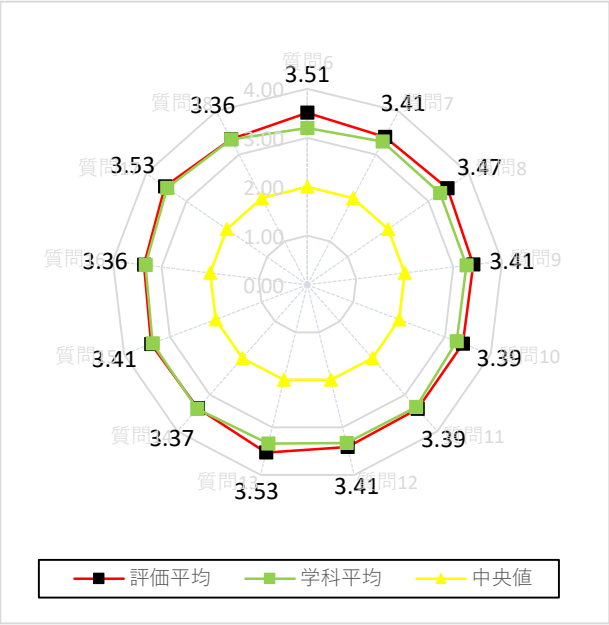
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は3クラス中2クラス「初心者クラス」「初級者クラス」を担当する。特にこの初心者ラスでは、学生が楽典の学びに拒否反応を起こさないよう、音楽に合わせて活動するなどリトミックの手法を取り入れた授業を展開し、学生がリラックスして楽しんで参加できるようにしたい。　3クラスの進度に大きな差がでることが予想されるが、この点については「経験者クラス」を担当する非常勤講師と綿密に打合せを行い、試験等において不公平感が出ないよう配慮する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		こどもの遊び	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

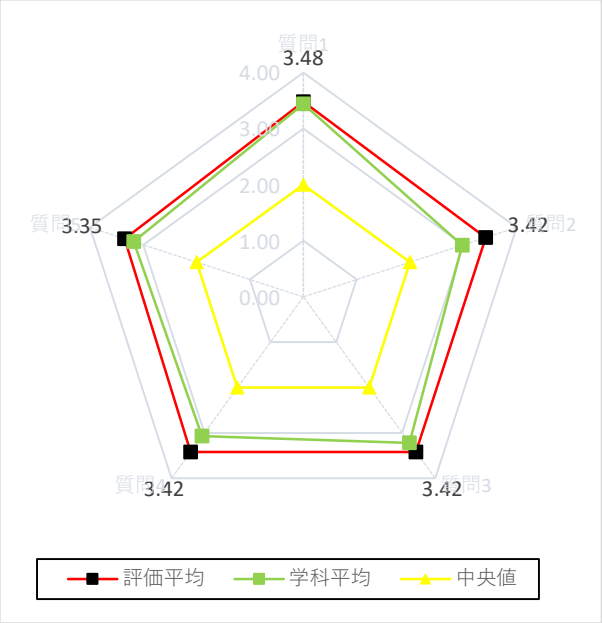
学生の自己評価では、質問４において学科平均を下回っている。この科目は、学内子育て支援活動「親子いきいき広場」の企画・運営にかかわり、体験を通して保育の知識や技術を学んでいく授業であるが、受講生の中には、そこに主体的・積極的にかかわることができたと感じることが難しい学生もいたのではないかと思われる。また、授業内容や方法に関する項目においても、質問１４、１５、１６では学科平均より低い数値となっている。自由記述では「先生方の意図が分かりにくく、意思疎通ができないことがあった。」というコメントがあった。学生が主体となって企画するレクリエーションやパンフレット、季節の壁面製作などの環境構成において、学生に寄り添い、学生の意見を尊重するような指導が十分ではなかったことが示された。

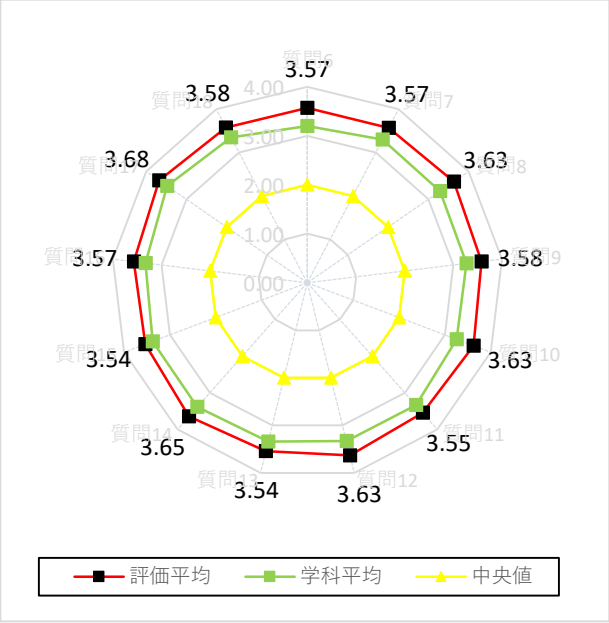
（３）次年度に向けての取り組み

参加者のニーズを考慮し、保育・支援の質をより高められるような助言・指導を行う教員側の意図を、これまで以上に丁寧に伝える必要があると思われる。ただ別の方法を提案するだけでなく、その理由を細やかに、明確に伝えることで、学生のモチベーションを保つことができるのではないかと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育内容（造形表現）の理論と方法	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

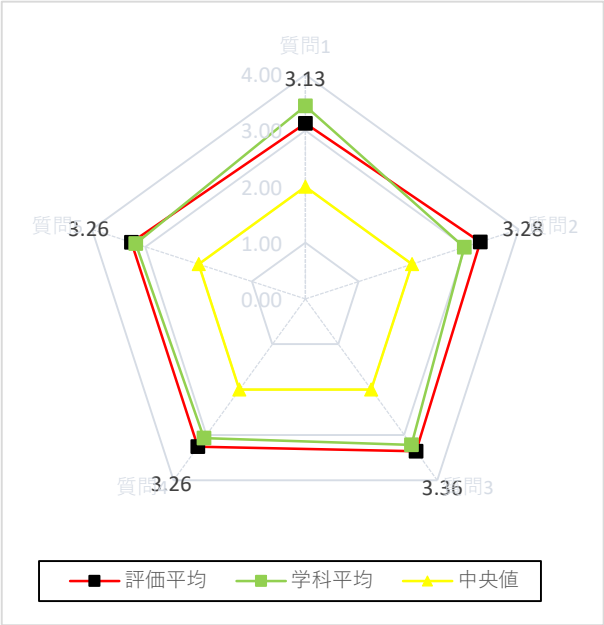
授業のねらいは「幼児期の造形表現に関する理論を学び、幼児の感性や創造性を豊かにするための教材やアートセラピー、壁面構成等について実践的に学び、活動を支援するための知識・技能・表現力・対話力（コミュニケーション能力）を身につける。」とし、授業の到達目標を以下のように設定した。 １）幼児の造形表現に関する基本的な理論や技能を身につけ、教材の作成に生かすことができる。２）領域「表現」（造形）の特性を理解し、体験と関連させながら教材や道具を選択できる。３）具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。４）協働的な学びを通して対話力を高め、チームで課題を解決することができる。５）造形表現に関する保育現場の実情を知り、課題解決に向けた構想を練ることができる。６）ペープサート、アートセラピー、壁面構成等に関する基本的なスキルを身につける。そして、授業スタイルは主体的・対話的・協働的に課題を解決していけるように工夫した。前年度（１年生時）の造形に関する授業内容と、大きく変わったために学生たちに学年当初戸惑いも見られたが、徐々に新しいスタイルの授業に慣れ、期待していた成果は達成できた。

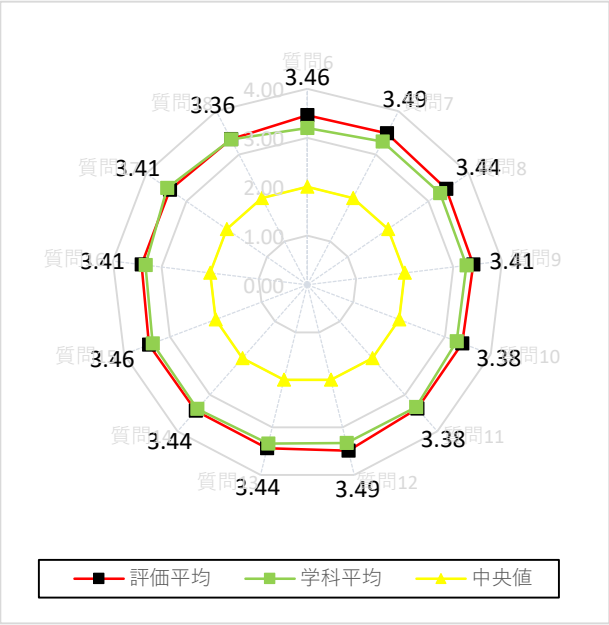
（３）次年度に向けての取り組み

授業のねらいは、前年度に引き続き「幼児期の造形表現に関する理論を学び、幼児の感性や創造性を豊かにするための教材（ペープサート）やアートセラピー、壁面構成等について実践的に学び、活動を支援するための知識・技能・表現力・対話力（コミュニケーション能力）を身につける。」という保育現場で生かせるスキルの習得に重きを置いた。授業の到達目標も１）幼児の造形表現に関する基本的な理論や技能を身につけ、教材の作成に生かすことができる。２）領域「表現」（造形）の特性を理解し、体験と関連させながら教材や道具を選択できる。３）具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。４）協働的な学びを通して対話力を高め、チームで課題を解決することができる。５）造形表現に関する保育現場の実情を知り、課題解決に向けた構想を練ることができる。６）ペープサート、アートセラピー、壁面構成等に関する基本的なスキルを身につける。 とした。授業の展開においては可能な限りアクティブラーニング型授業を取り入れながら協働しながら課題解決するスキルを身につけさせたい。また、ICT機器を有効利活用しながら新しい指導スキルも高めさせたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		幼児ダンス	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

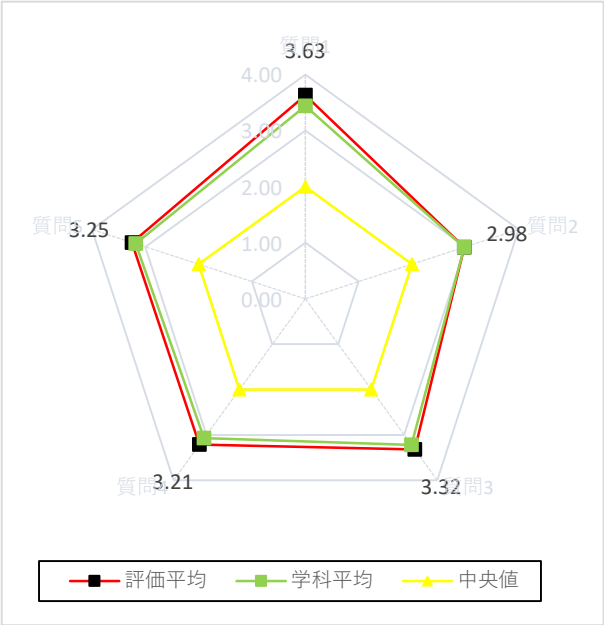
表現　音楽コースのコース科目であり、2年後期の開講科目である。1年次の「リズム表現」とは違い、現場で実践できる創作や模擬保育を重点にした授業内容であるため、アクティブに取り組む学生とそうではない学生が明確になった。創作に於いては苦手意識の学生を払拭させる指導も試みたが、総合評価に表れている結果である。この部分の授業研究が次年度の課題となるであろう。また、創作等学生自身が取り組み考えることが多いので、非常に残念ではあるが教員の熱心な指指導等は伝わらなかったのだろうと思われる。

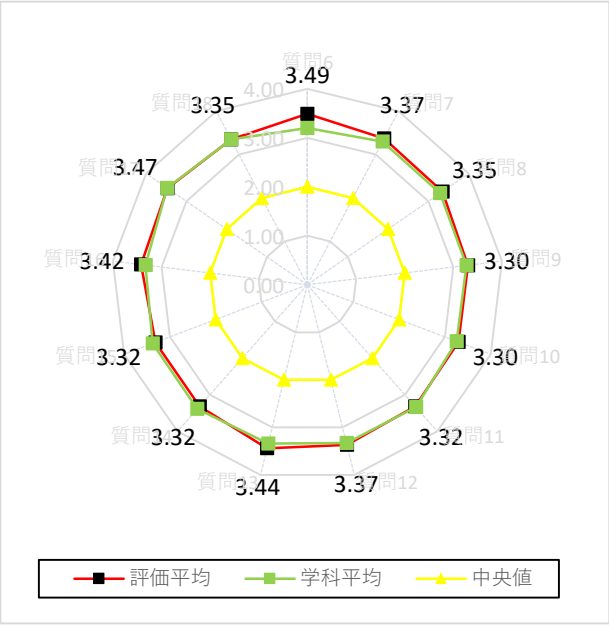
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は上記に述べた課題とともに、新たな気持ちで学生を受け入れ、学生がアクティブに取り組む授業を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育カウンセリング	98名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

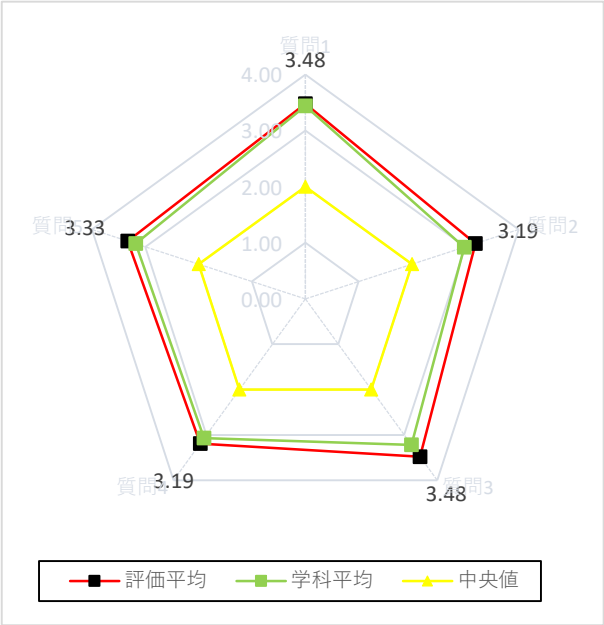
授業内容や方法に関する項目では、いずれも学科平均と同程度か、低い結果となっている。この科目と合わせて「親子いきいき広場」の運営にかかわる「こどもの遊び」の授業評価でも、同じような結果となった。特に、本科目は、子育て支援の実践を通して、子どもとその保護者に対する心理的支援の重要性について学び、「対象を理解しようとする姿勢」を身につけていくことがねらいとなっている。今年度の取り組みにおいては、レクリエーションの企画や環境構成、様々な製作などに時間を要することが多く、「保護者支援」について学生自身のかかわり方を振り返る機会を十分に設けることができなかった。一方、個別の記録ノートには、担当する保護者の様子を毎回丁寧に振り返り、自分がどのような働きかけをすべきか自主的に教員に尋ねたり、子育てについての保護者の悩みを聞き、そこに寄り添いながら一生懸命に声をかけようとする学生の姿もみられた。１年間の振り返りの時間には、「現場で役立つことを学べてよかった。」と発表する学生もおり、準備の過程では保育の難しさや責任の重さを感じながらも、その重要性ややりがいを感じることもできたように思われる。

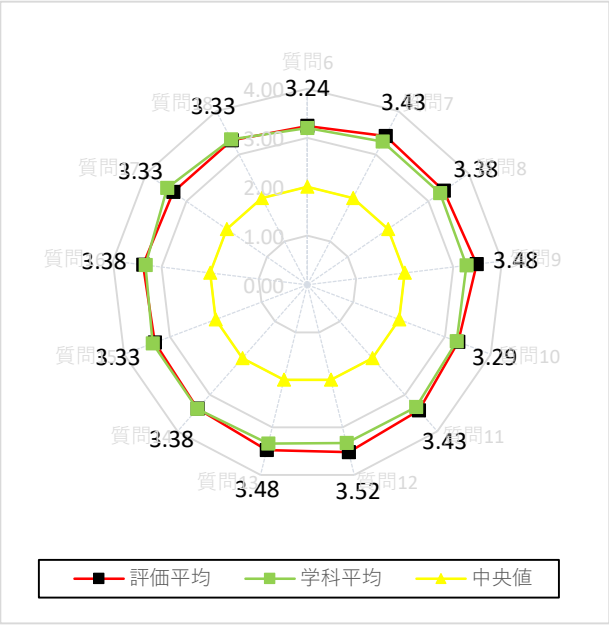
（３）次年度に向けての取り組み

「親子いきいき広場」の準備や当日の運営に加え、今年度以上に「保護者支援」という視点を持ちながら、受講生の指導に当たることが必要と思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		歌唱表現	24名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

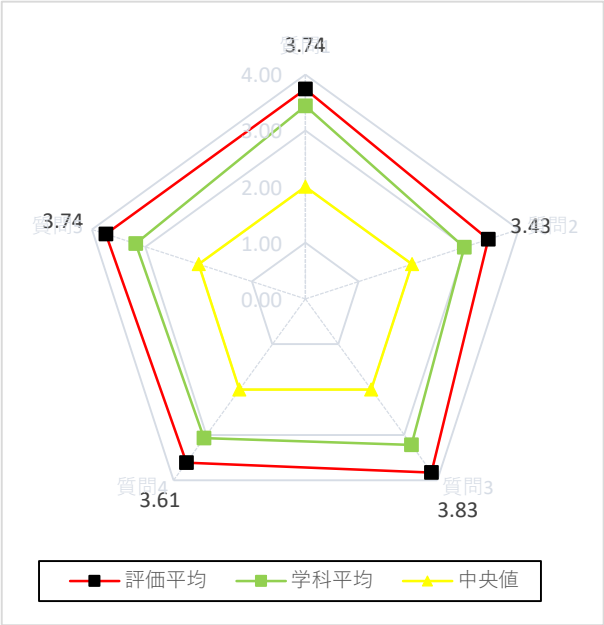
昨年の高評価とは打って変わって残念な評価となってしまった。授業の展開方法としては昨年とほぼ同じであり、90分の中でおよそ30分で1単元とし3つの内容で展開することで、学生を飽きさせないように行ったが、本年は歌唱を得意とする学生がおらず、全体として学生自身が歌唱について自らの向上を意識でき難い状況であったのかもしれない。また表現フェスタに向けて、卒業課題研究とリンクする授業であるため、他の授業と比較し，厳しさがあることも評価に影響していると感じる。また自由記述において「公平性」について言及があり反省点である。

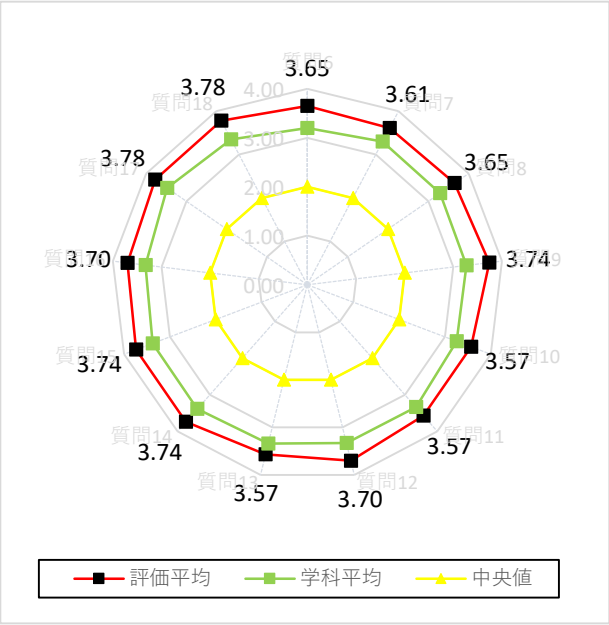
（３）次年度に向けての取り組み

歌唱は目に見えず成果が判り難いが、学生が自身の歌唱力が向上したことを実感できるような声掛けを多くしたい。教材として過去に取組んだミュージカルの楽曲を用い、個人やグループで取り組む。発表後に実際の実技発表会のミュージカルの歌唱部分を視聴し、自己課題や求められる表現を見出し、実技発表会に向け学生一人ひとりが具体的な目標を設定できるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		総合表現	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

2年生と共同で参加する実技発表会という大きな目標に向け取り組む授業である。全ての項目に亘り概ね高評価を得たが、発表会に出演するために表現・音楽コースを選択した学生たちのクラスでもあり、学生自身が本授業に取組む意欲が高いことが要因でもある。自由記述において「実際に発表会に出演し表現することの素晴らしさを十分理解することができた、次は相手にそれを伝えられるようになりたい」など次年度の卒業課題研究に対する意欲的な記述も見られた。

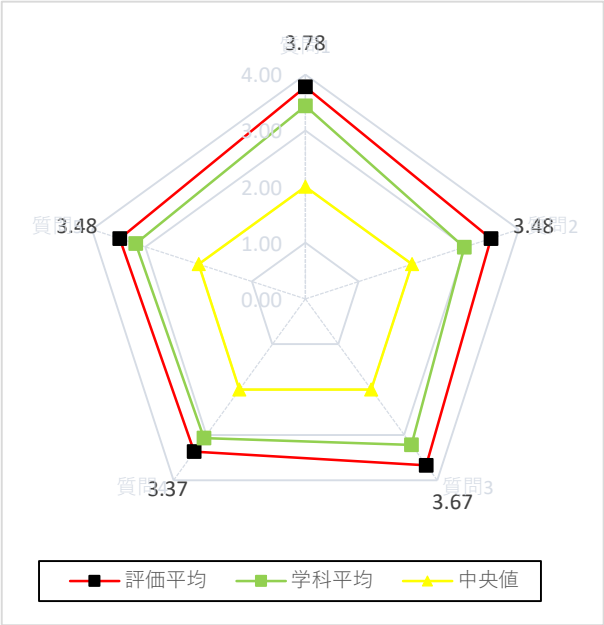
本授業は２年生の卒業課題研究とリンクし学生主体で展開しているため、２年生が前年の経験を踏まえ１年生に指導していく部分が多い。教員は2年生に対し、１年生をどう指導するかも含めて指導していくのだが、１年生からは教員よりも先輩から指導を受けている印象が強いのではないかと思う

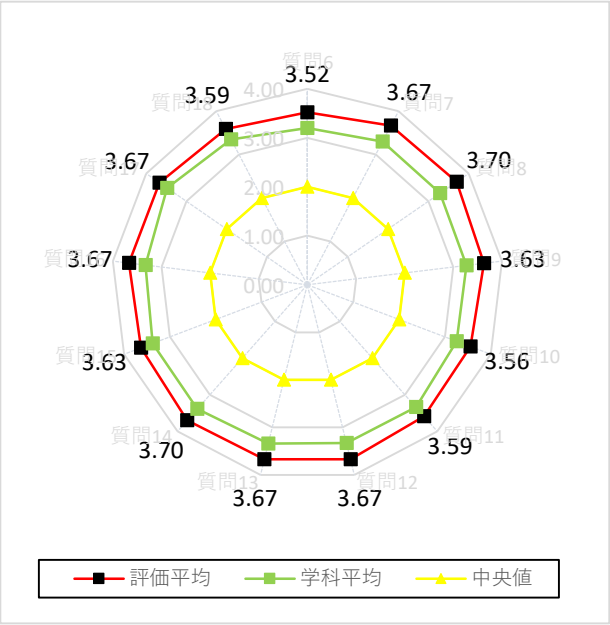
（３）次年度に向けての取り組み

授業の性質上、シラバスの活用は難しいが、学生が授業概要、ねらい、到達目標を理解し、それを踏まえた学習ができるよう検討・工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		リトミック	34名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

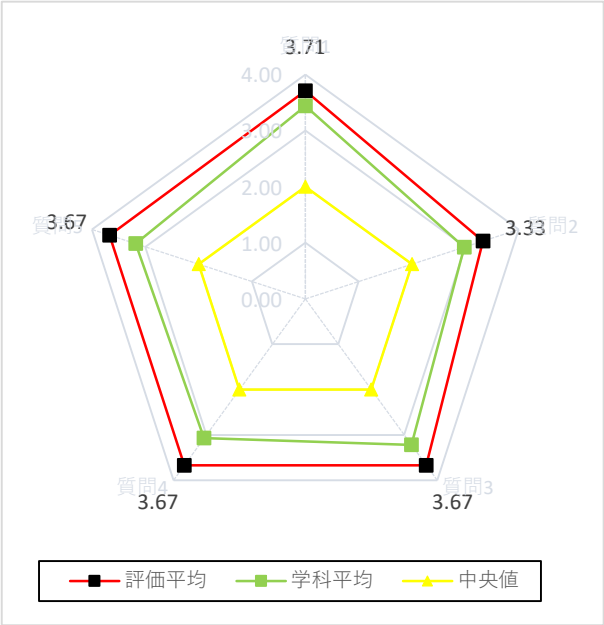
全体に高評価を得ることができた。本授業は「幼稚園・保育園のためのリトミック指導資格2級」取得のための選択科目であるため、履修学生は目的意識を持った意欲的な学生たちである。授業内容は常に音楽やリズムを伴い学生にとって親しみ易く、次々に提示される課題にグループで取り組む内容が多い。一人では難しいものでも、二人またはグループで助け合いながら皆が理解できるようにする進め方が、学生にとって授業への参加のし易さに繋がると考える。

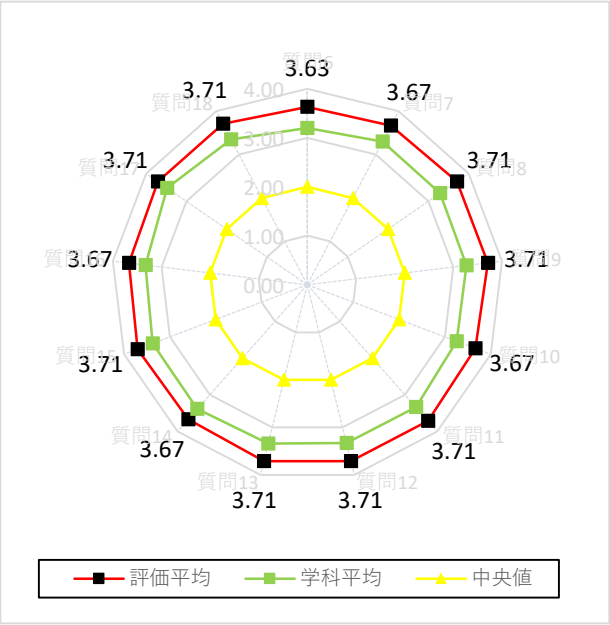
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の履修者は34名で目標の40名に届かなかった。本授業は資格取得のための授業であるため、履修指導時に「1年次にピアノⅠの単位が取得できていることが望ましい」旨を学生に伝えている。そのため履修を尻込みしてしまう学生が多かった。履修した学生はピアノの経験があり、音楽に対する意識が高い学生が多く授業も充実していた。履修者を増やすためには「ピアノⅠの単位を取得済みである」という履修制限を少し緩やかにする必要が考えられるが、そうすることで結果的に資格取得が叶わない学生が出てくる可能性があるため、履修に関する説明を工夫し、履修者増と履修者全員が資格を取得できるよう考えたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		レクリエーション実習	36名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

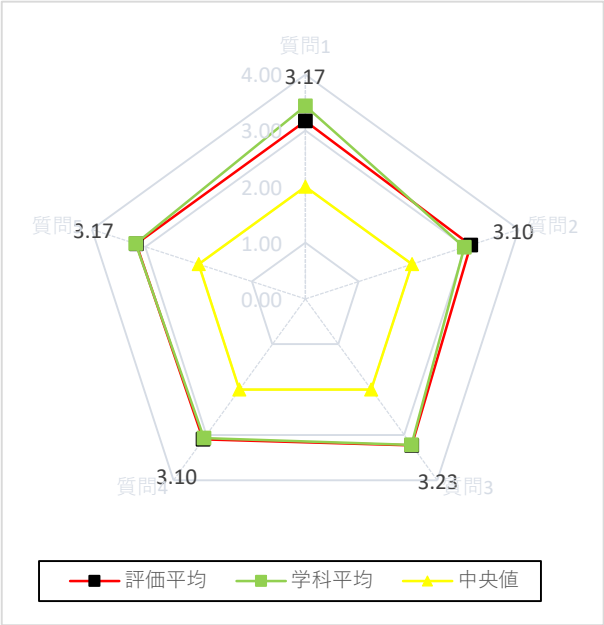
最終的にはレクリエーションの資格取得者は約30%ではあるが、授業はレクリエーションを学びたいと意欲を持つ学生が多い。そのため楽しみながらの授業展開のため、学生の評価は高かったと思われる。

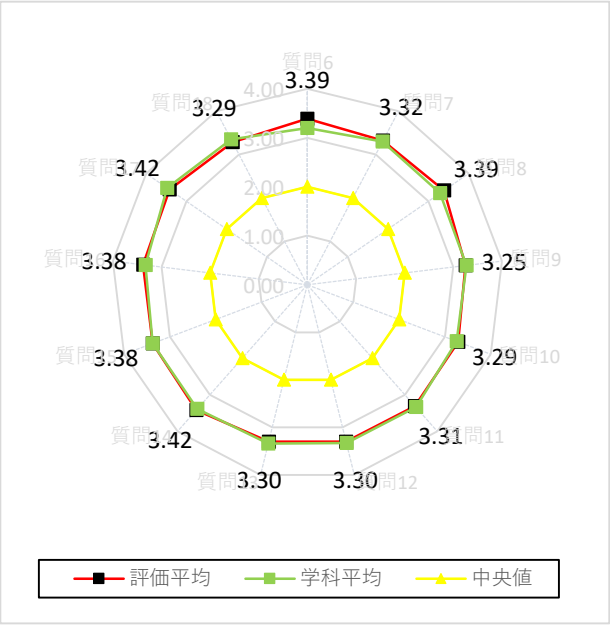
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、新しい内容を入れつつ学生の持っている力にプラスされる授業展開となるであろう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育・教職実践演習（幼）	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。
本授業は、フィールドワークを取り入れているため、変則的なスケジュールで授業が進行していく。
シラバスにくわえ、初回に学生が戸惑わないように詳細な授業計画書を作成・配布しているが、
就職活動等の重なりもあり、公欠を含めた欠席がやや多い傾向がある。

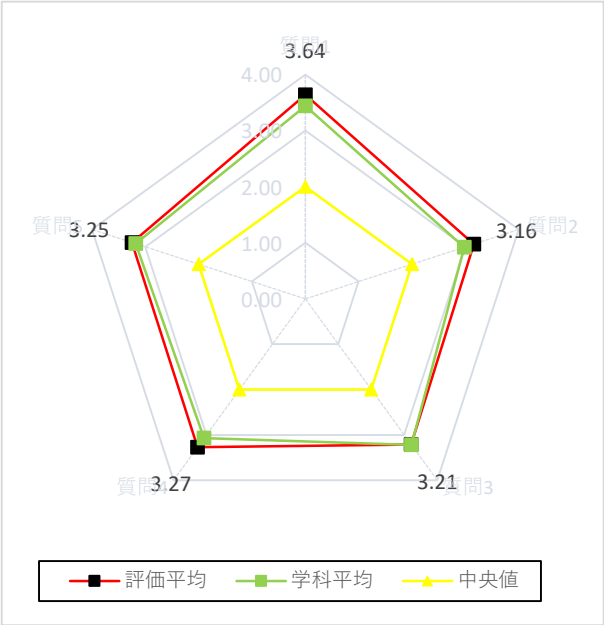
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
おおむね学科平均と同程度の評価結果となっている。
今年は、就職後に直面する課題の一つして、新たに保護者対応をテーマとして取り上げた。
専任教員と現職者による講義と演習に対しては、ワークシートの記述から一定の評価が得られたようだ。

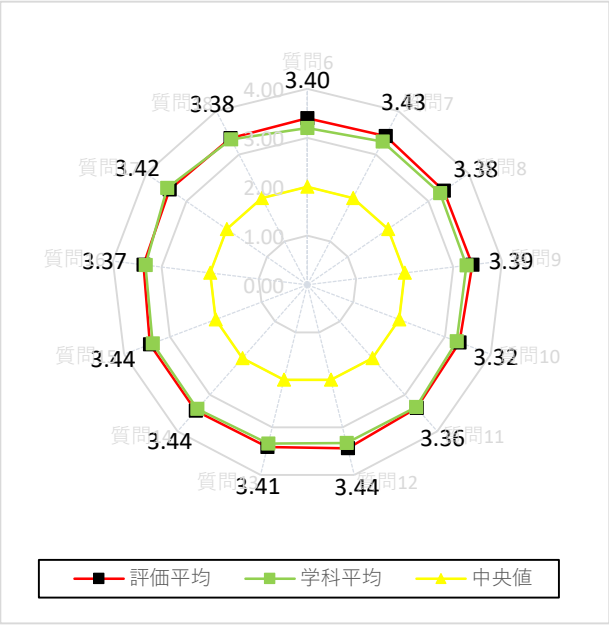
（３）次年度に向けての取り組み

これまで幼稚園・施設でのフィールドワークを中心に、模擬保育、リスクマネジメント、
外部講師による講演などを取り入れ、授業を計画してきた。
次年度から新たな教員養成課程と保育士養成課程がスタートする。これを機に、これまでの内容を点検・評価したい。
継続する内容は継続するとともに、時代に合わせた内容を盛り込み、運営方法も含めて教職実践演習のリニューアルを図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育実習指導Ⅱ	149名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
　おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。
　本授業への出席は、実習参加の基準の1つとなっている。これまでも授業のへの出席に関しては指導をしてきたところである。
　学生に対して、他の授業以上に本授業への参加が重要であることを継続して指導していく。

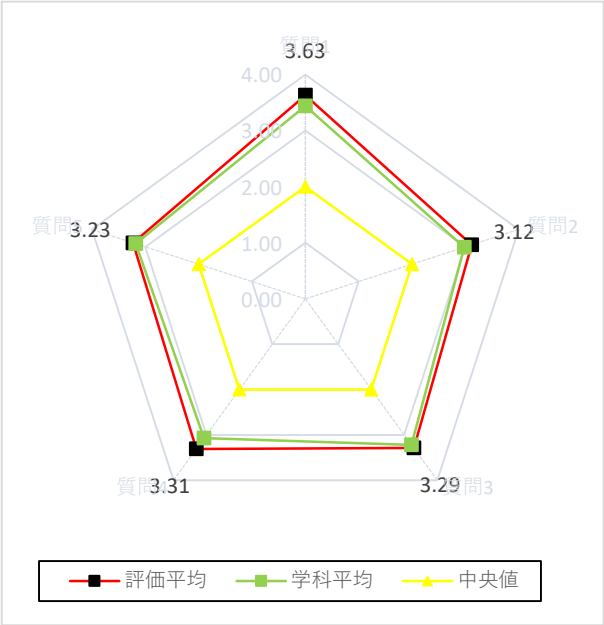
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
　全体的に学科平均と同程度の評価結果となっている。
　実習指導の授業は、実習の意義や記録類の作成方法など多岐にわたっている。
　また、生活指導や生徒指導的側面も強い。この点については、　学科の他の授業も含めて全体な取り組みへと発展させる必要があろう。

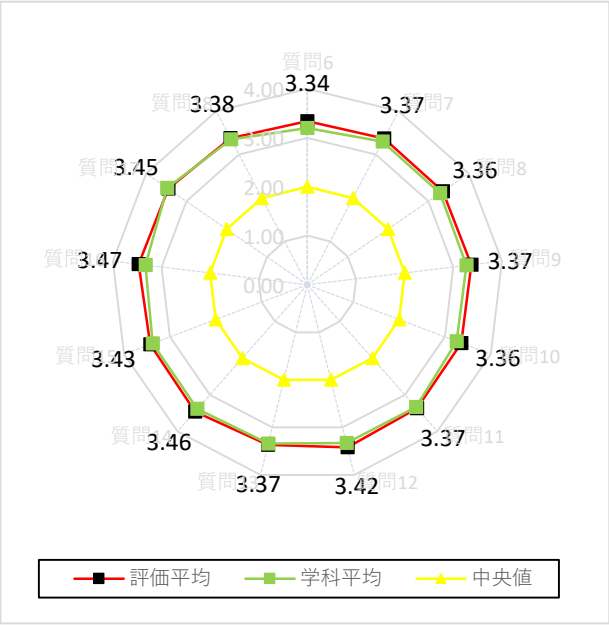
（３）次年度に向けての取り組み

実習指導は実習種別による違いもあるが、諸手続きなどかなり共通する部分が多い。
授業担当者が変わっても、一定の質が保たれるように、本学独自の実習手引きなどがあるとよい。
手引きがあることで、実習指導で取り上げる内容について、学生と教員間での共通理解を図ることができるかもしれない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育実習Ⅱ（保育所）	148名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
　おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。学外保育所での実習であるため、学生の参加度は非常に高い。
　学生の欠席に関する評価項目はさほど悪くはないが、実際は限られた期間の実習にもかかわらず、
　体調不良等で欠席する学生が一定数いるのが現状である。２年間の修学期間の中で、心身の耐性を高めてほしい。

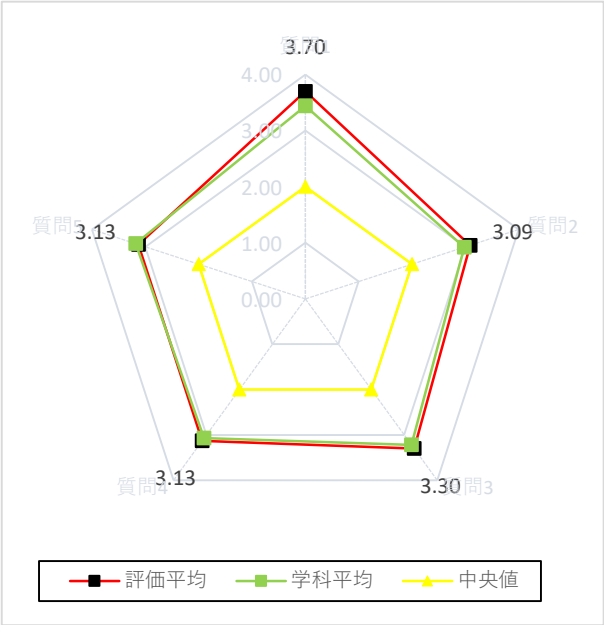
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
　全体的に学科平均と同程度の評価結果となっている。
　園によって指導方法は様々であるが、実習先での指導について学生は概ね満足していると言える。

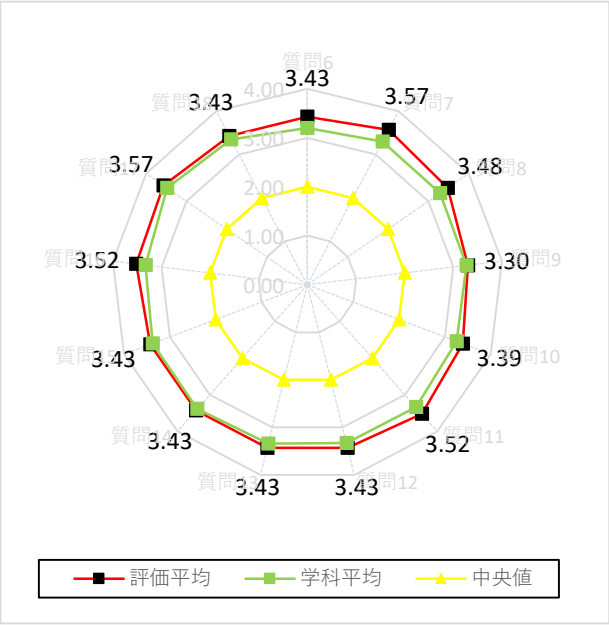
（３）次年度に向けての取り組み

学生たちの実習への参加度や満足度は高いものの、実習園からの評価表等によれば、
マナー、言葉遣い、忘れ物、文章力など毎年同じような内容の指摘があげられている。
それらは実習指導のなかでも指導をしている内容であるがなかなか改善が難しい。
修学期間の中で、社会人としての基本的な態度をいかに高められるかが課題である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育実習指導Ⅲ	36名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

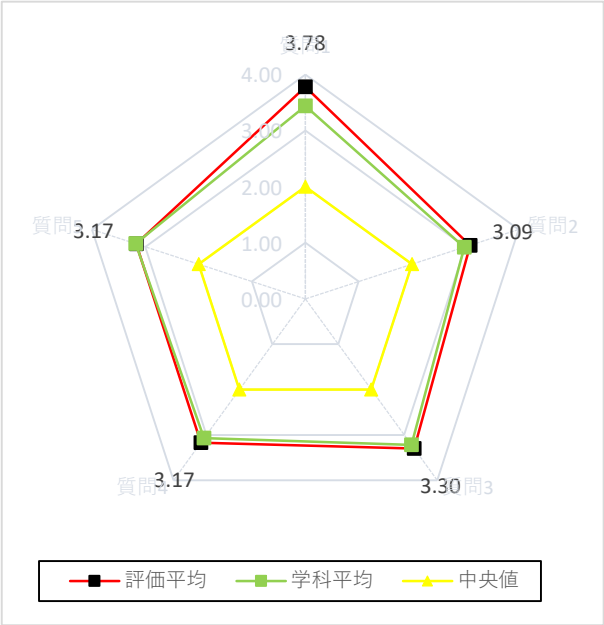
評価は全体的に概ね平均的である。実習指導という授業の特性から教員主導ではなく、学生が自身で調べ学習をする時間が多かった。そのことは自由記述の中に少しだけ触れられている。

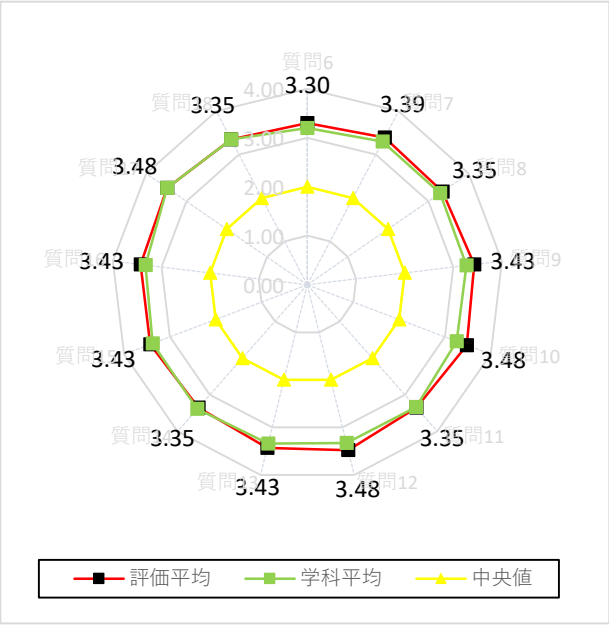
（３）次年度に向けての取り組み

実習種別が異なる場合の指導について、施設種別に関わらない汎用的な知識と施設種別により異なる特別な知識を十分に理解できるように授業の進行や内容に工夫が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		保育実習Ⅲ（施設）	36名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

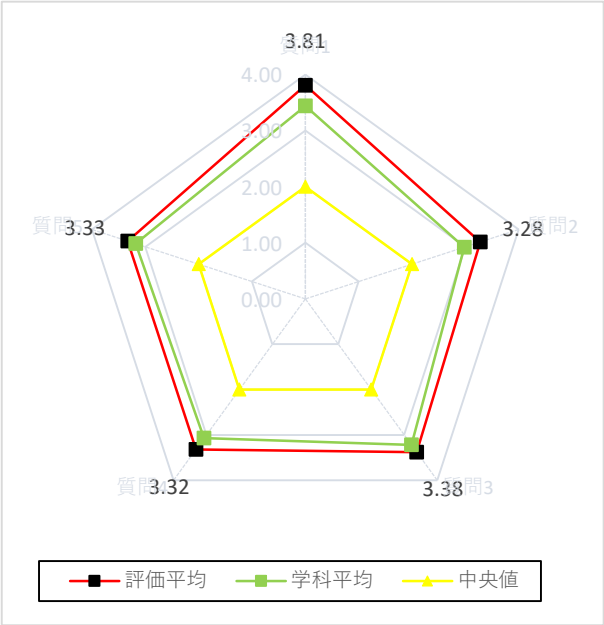
評価は全体的に平均的である。自由記述の中に「泊まり込みは大変だが、子どもに寄り添うことができた」とあった。今回は泊まり込みと通勤のグループに分かれていたが、授業のまとめで感想を聞いていると概ね、施設で充実した実習体験をしてきたことが分かった。

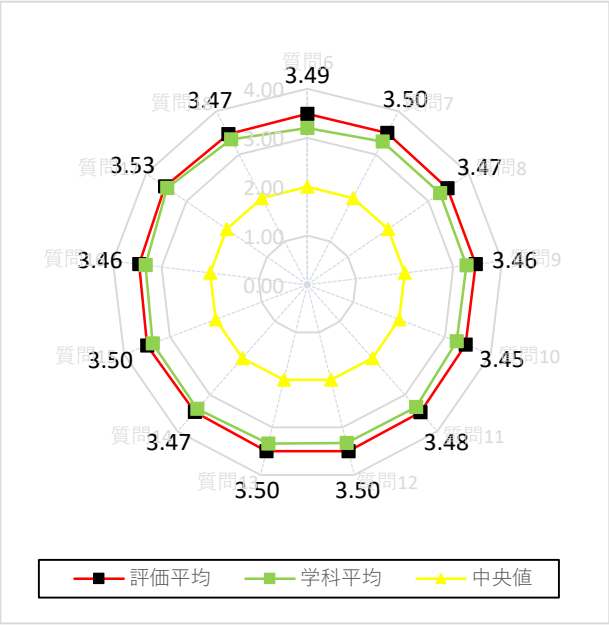
（３）次年度に向けての取り組み

実習種別が異なることで学びの幅が広がることもあるが、一方で知識や体験を共有できる機会は減ってします。今後の実習地について検討すべきである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		教育実習指導	276名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

質問１については、学科平均よりも高い結果となった。年度初めの授業において、実習における心構えなどを丁寧に説明したことが、本授業への取り組む姿勢を考える機会となったと考えられる。

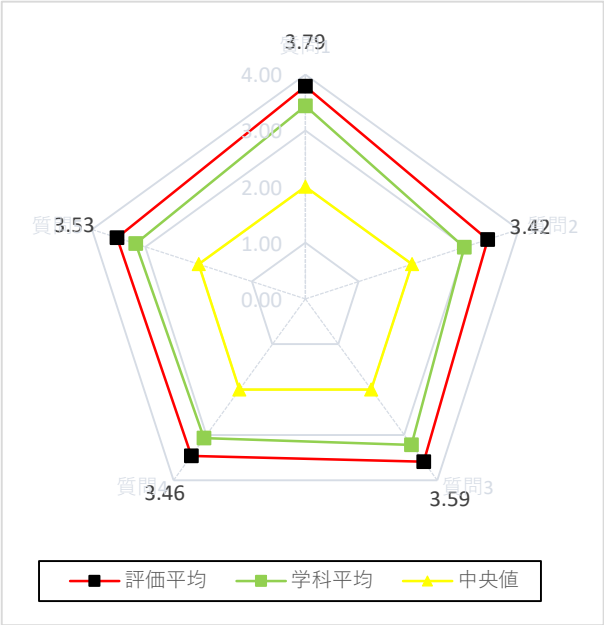
「教育実習」の授業評価において「教育実習指導」に関する記述がみられた。一つは、「授業時に個人で取り組む課題が多く、もったいない。」という内容であった。つまり、個の意見や学びを全員で共有したり、ディスカッションをしたりするような時間を十分に設定することができていないことを指していると思われる。また、「大事な連絡を一度にされるとミスが増えるため、資料を配布するなどしてほしい。」というコメントもあった。これは、実習にかかる諸手続きに関するものと思われる。実習前には、一つ一つ確認を行いながら細やかに説明を行ってきたつもりではあるが、全ての受講生がスムーズに様々な手続きや書類の作成を行えるような配慮が必要であると考える。

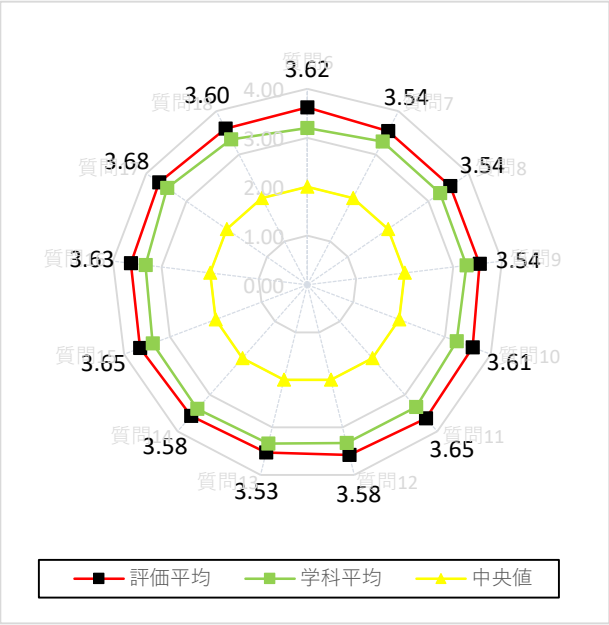
（３）次年度に向けての取り組み

今回の自由記述の内容を担当教員で共有し、授業方法の改善や授業内容の検討を重ねたい。特に、実習にかかる手続きについては、学生が自己チェックできるような確認表を作成し、試行的に使うことにしている。その際、学生の感想や状況を把握しながら、チェック項目の内容などについても検討していく。また、実習の事前指導・事後指導においては、個別課題への取り組みのみではなく、学生同士の学びあいも大切にできるような授業を展開したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		教育実習Ⅰ	187名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

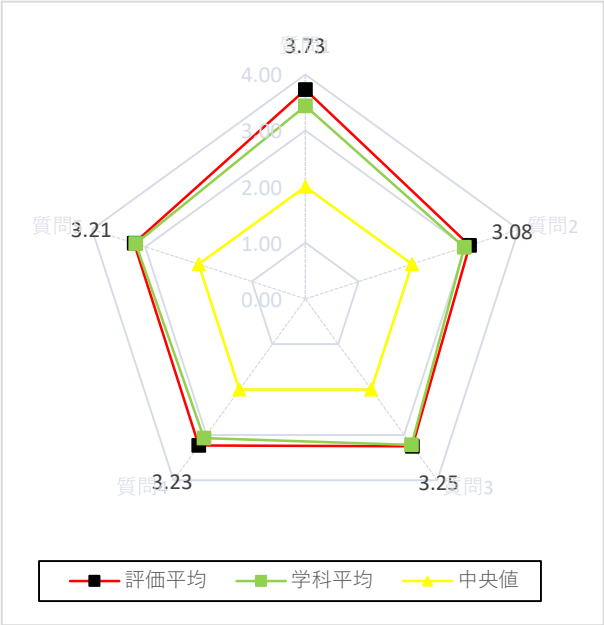
学生の自己評価も、授業内容や方法に関する項目も、学科平均より高い数値となっている。1年生にとっては初めての実習となるため、緊張や不安が高い学生も多い。しかし、実習園での丁寧で細やかなご指導の結果、充実した実習となっているようである。教育実習Ⅰは附属幼稚園で行うため、教員と園の教職員との連携もとりやすく、互いに情報共有を行いながら学生の指導にあたることができた。

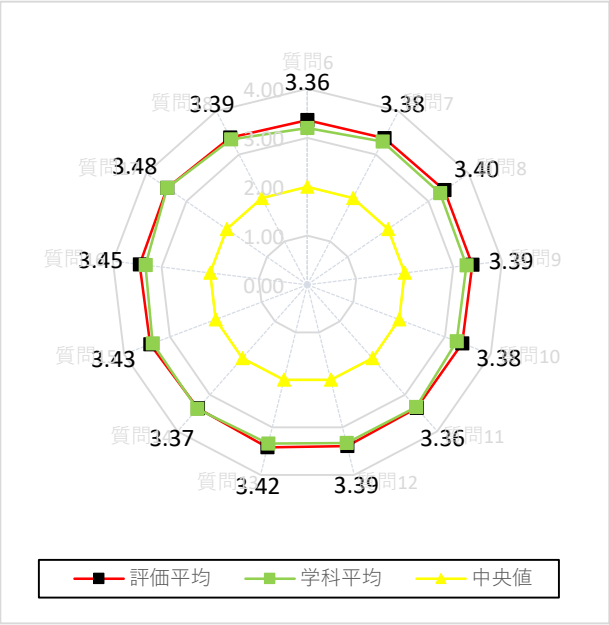
（３）次年度に向けての取り組み

自由記述では、教育実習指導に関するコメントがみられた。それらのコメントについては、「教育実習指導」の考察に記す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		教育実習Ⅱ	185名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。
なかでも学生の出欠席に関する評価項目は高く、実習期間中心身ともにストレスフルな状態にありながら、
実習に頑張って取り組む学生の姿がみてとれる。その一方で、どの実習にも当てはまることであるが、
体調不良等で欠席する学生が一定数いるのが現状である。

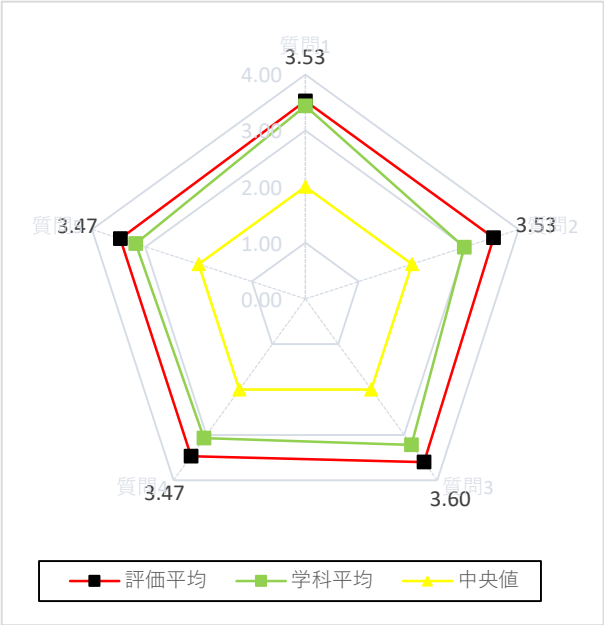
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
全体的に学科平均と同程度の評価結果となっている。
園によって指導方法は様々であるが、実習先での指導について学生は概ね満足していると言える。
学生の質問への対応に関する項目がやや低い評価となっているが、
実習巡回では学生から話を聞いた中では、先生方の対応がそっけなく冷たいという話を聞くこともある。

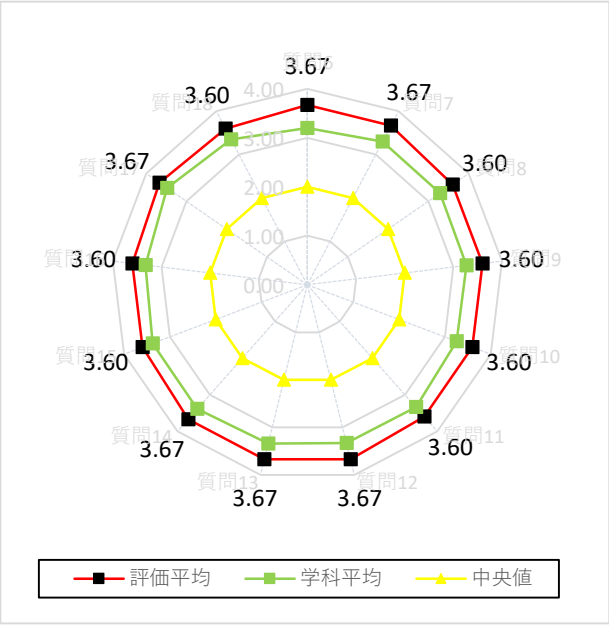
（３）次年度に向けての取り組み

実習先や実習時期によって、学生がおこなう実習内容や園の指導体制はまちまちまである。
それらは実習先の諸事情によるものでしかたないのかもしれないが、
学生の実習内容に大きな差が出ないように大学と実習先との共通理解を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	17名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

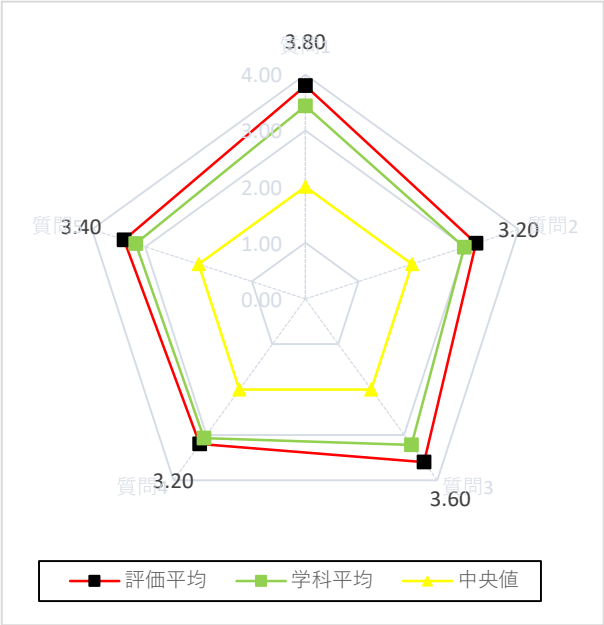
本授業は12月に実施する「表現フェスタ（実技発表会）」に向けての授業であり、目標が明確であることが、学生の意欲的な取り組みに繋がっている。
年により学生の音楽経験の有無が違うが、今年度は音楽経験が豊富な学生と初心者学生の混合チームであったが、その割合によって学生の取組みのモチベーションにも影響があることが経年変化により解ってきた。
自由記述においては「卒研に向けて頑張りたい」「楽しく参加できている」など前向きな記述が見られ、本授業に対する学生の意欲が感じられた。

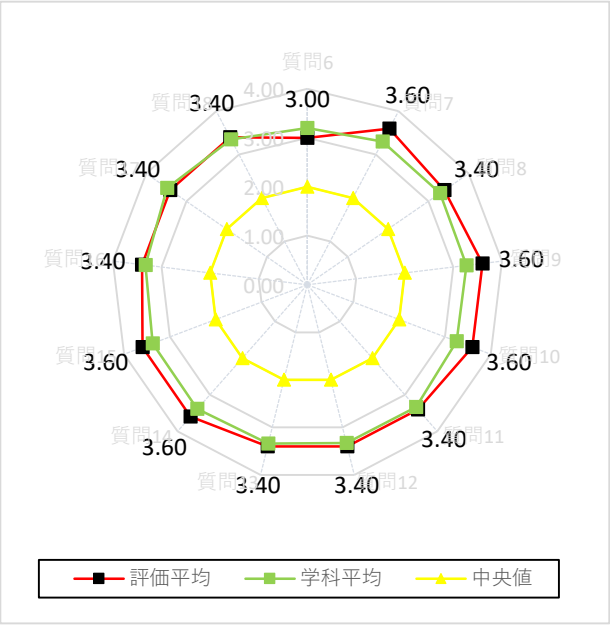
（３）次年度に向けての取り組み

教員が「ミュージカルチーム」と「ミュージカル器楽チーム」2チームの指導を担当しているため、「ミュージカルチーム」に時間を取られがちで「ミュージカル器楽チーム」に対してじっくり時間をかけることが難しく、学生には大変申し訳ないと感じる。なるべく空き時間や夏休み期間の練習で対応するなどの工夫をしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

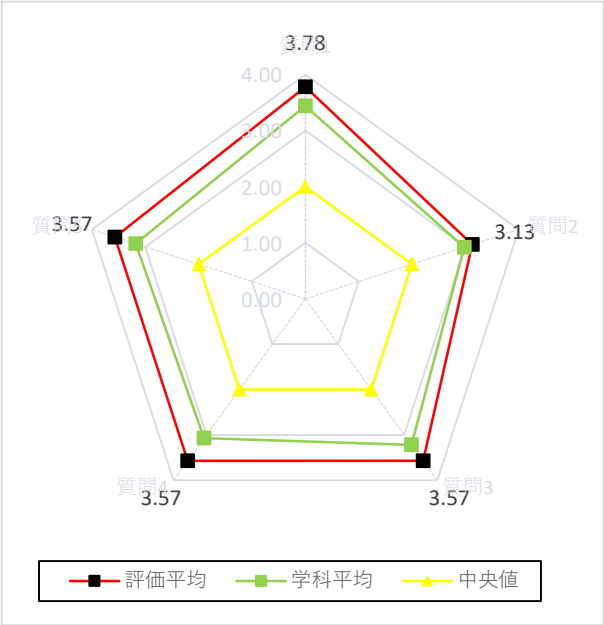
本科目では、プロジェクト型学習に取り組むようにしている。グループでひとつのテーマに取り組むため、各々の学生の取り組みたいテーマの把握、全体で取り組む学習テーマの設定に時間を要した。各々の学生の学習ニーズに耳を傾けるとともに、学生の学習意欲、課題意識等に鑑みて、様々な見学、体験学習を実施した。今年度は、幼児期の健康教育に着目することとし、「朝食摂取」に関する内容を学習テーマにすることとなった。

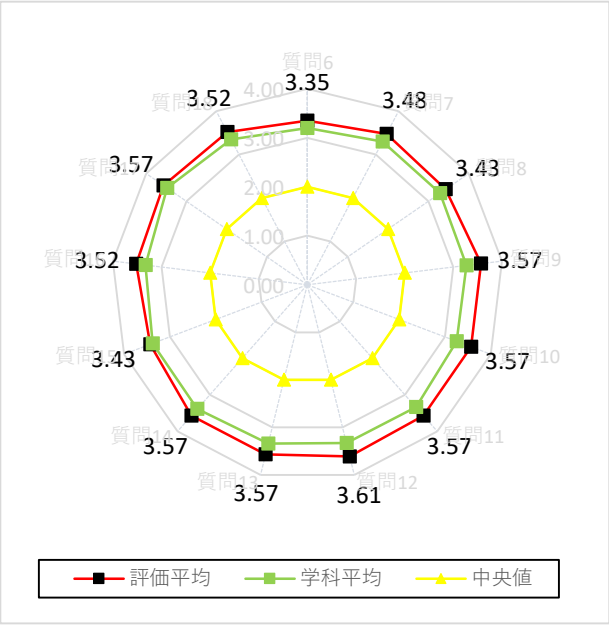
（３）次年度に向けての取り組み

学習テーマを設定する際は、2018年度と同様、学生のニーズを丁寧に聞き取りたい。設定した学習テーマに関する資料（書籍や文献）の提示、理解を深めるための具体的な経験を授業に組み入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	26名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

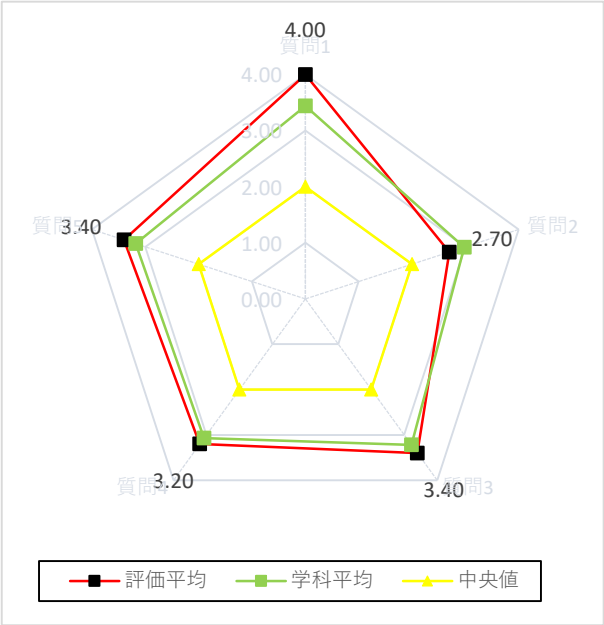
卒業課題研究Ⅰミュージカル「白雪姫」は、前年度の1月より始まり4月の段階では脚本も出来上がり、オーディションに向け自己の表現を磨く時期である。表現することの意識が高い学生は意欲を持ち続けるが、そうでない学生も存在する。その中で、何のために舞台で表現するのかを自覚させていく過程での総合評価であるため、素直に受け止めたい。

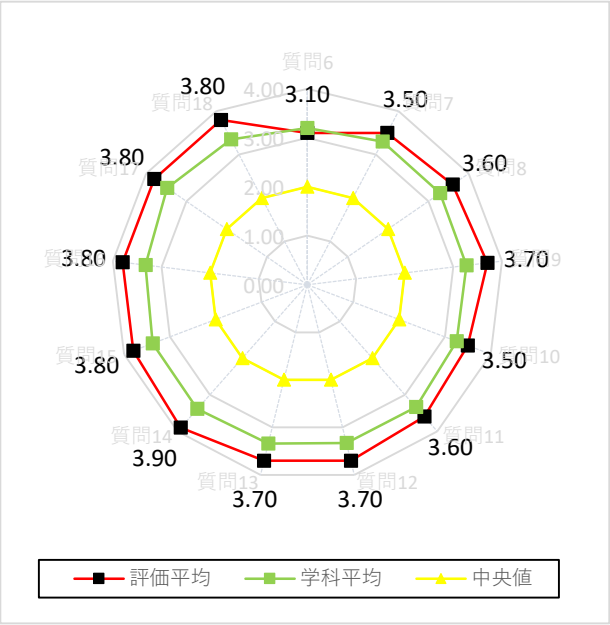
（３）次年度に向けての取り組み

現在の指導法に大幅な変更はないが、学生のモチベーションを上げる努力は続ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

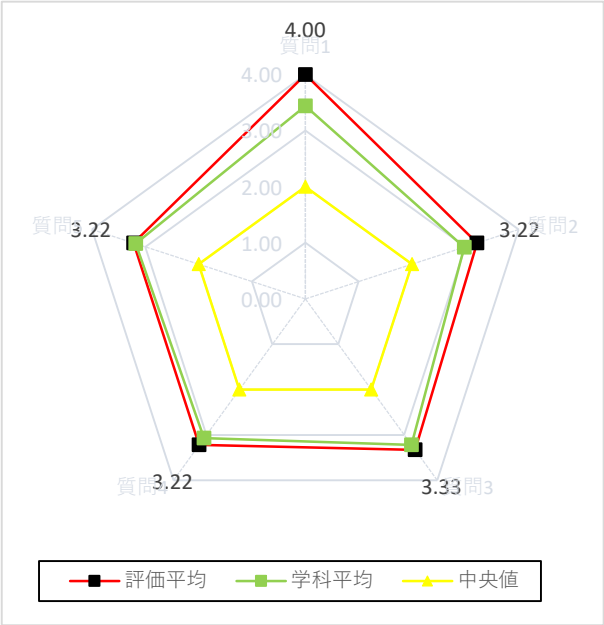
評価は平均値より全体的にやや高い。自由記述には、「後期も熱心に取り組みたいと思います。」「まだ、後期を終えてみないと分かりません。」「今後に生かすことのできるゼミだと思い、やりがいを感じます。」といったコメントがあった。多くは実践的な内容であり、学生にとって体験学習の機会になっていると思われる。

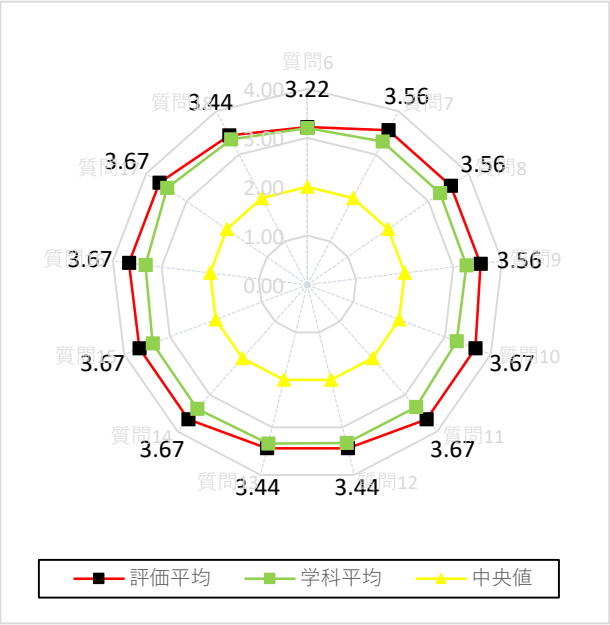
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も同様に実施していく予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
おおむね学科平均と同程度の評価を得ている。
そのなかでも、授業への出席状況が極めて高いのが特徴的である。
テーマや活動内容の選定から運営はもちろん、あらゆる面において学生主体のゼミを目指した。
学生個々人がゼミ運営に責任をもち参加することができた結果だと考える。

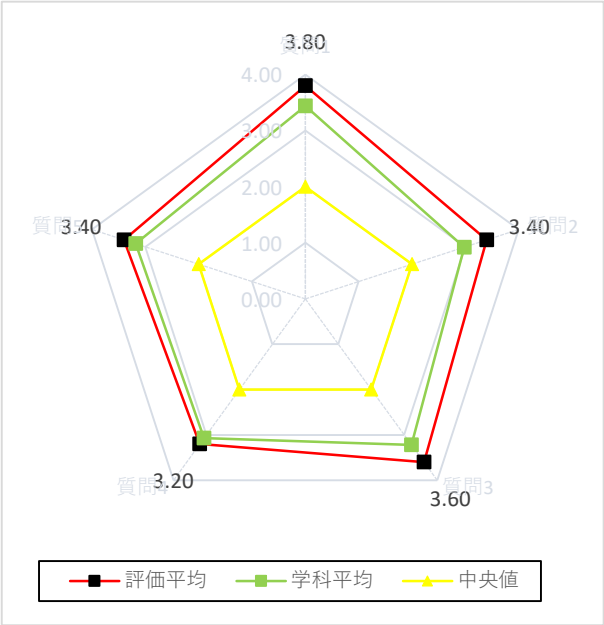
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
全体的に学科平均と同程度の評価結果となっている。
学生への対応では、質問と公平さについておおむねよい評価となっっているが、
シラバス（授業計画）の説明に関する評価項目はやや低かった。
教員主導にならないよう配慮しながら、学生たちにもう少し詳細な活動計画の立案と
進捗管理を行うようサポートする必要がある。

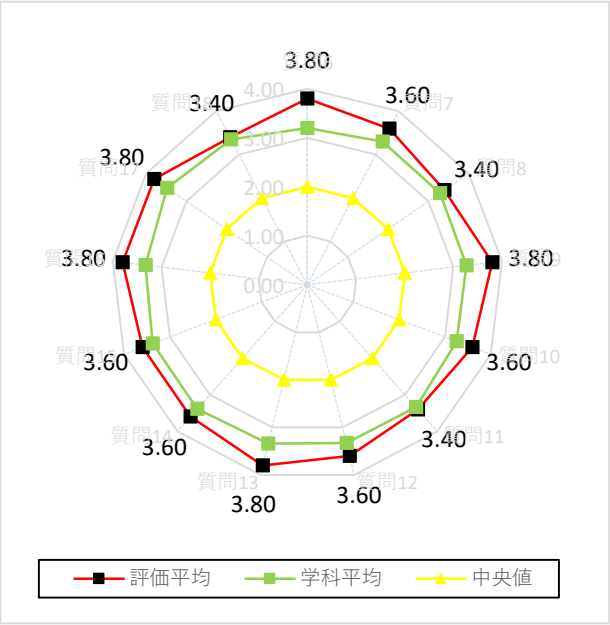
（３）次年度に向けての取り組み

学生たちの興味・関心にもとづいて、様々な活動に取り組むことができた。
この点については、学生からの評価は高い。
このように体験型の学びを中心におきながら、学生が主体的にゼミ運営を行うことで学習意欲が高まり、
さらに組織運営を肌で学び取れるようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

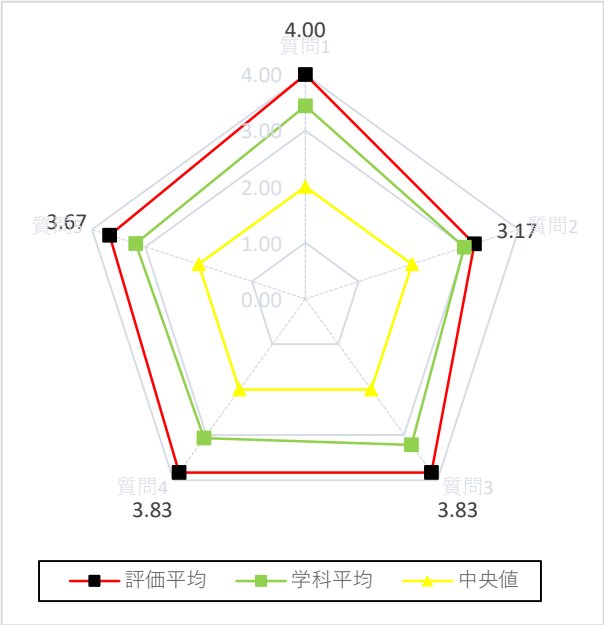
学生の自己評価では、質問4が学科平均より低い値となっている。この科目ではフィールドワークを中心に行ったが、その準備段階における学生自身の取り組みについて振り返りを行った結果であると捉えることもできる。授業時間外にも集まり、学生同士で協力し合いながら準備を進めていたが、自主性や積極性という点では課題が残った。その点について、担当教員も継続的に指導を行い、後期開講の「卒業課題研究Ⅱ」に向けて、ゼミに取り組む姿勢や学生自身の意識などに変化がみられたように思われる。また、授業方法や内容についての項目では、質問16、17が高い値となっている。1年間のテーマについては、担当教員から提案する形をとったが、具体的な内容や方法については受講生の意思を尊重しながら検討を重ねたことが要因であると考えられる。

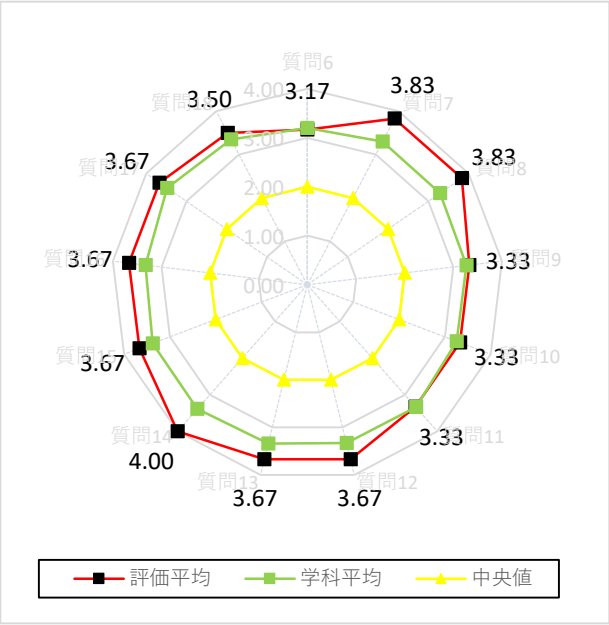
（３）次年度に向けての取り組み

フィールドワークに向けた準備の時間が限られていたため、研究テーマについての文献レビューやディスカッションなどを十分に行う時間を確保することが難しかった。そのことが、受講生一人一人の意欲や取り組み方に大きな差が生じた要因であるとも考えられる。次年度は、前期から学生が主体的に取り組むことができるよう、ゼミ活動の導入部分をより丁寧に行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅰ	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

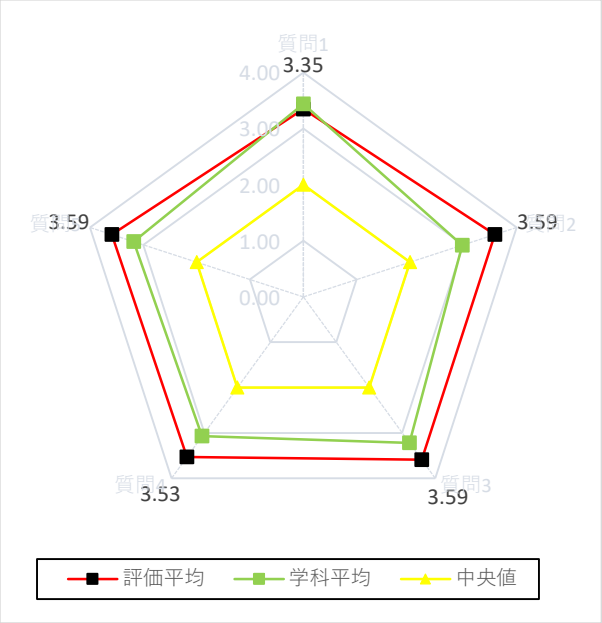
授業アンケート結果の分析・結果として、学科全体と比較しても高い評価を得ていた。具体的には、質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問３「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問４「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」、質問７「教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。」、質問８「授業は分かりやすくする工夫がされていましたか。」、質問１４「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」の項目が学習の効果として特に高い数値となっていた。しかしながら、質問６「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」については特に低く、その他にも質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問９「授業は分かりやすくする工夫がされていましたか。」、質問１０「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」、質問１１「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」の評価はやや低い傾向にあった。これらの傾向は本科目の担当が初年度ということもあり、今後はこの結果を反映した授業計画の作成と学習内容と進度との関係性を見直す必要がある。

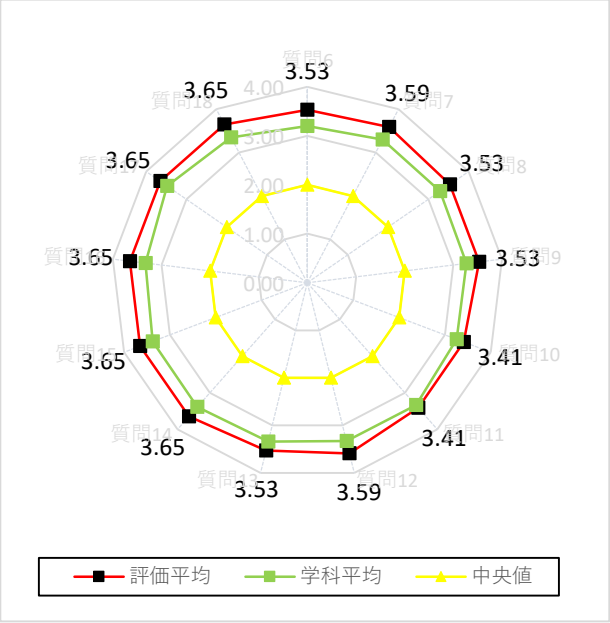
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、シラバスの内容の整理と配布資料など教材の見直し、さらには他の教員との比較を行うことで、特徴を活かした内容にすることが検討される。さらに、グループ活動におけるルールの設定と実践的な取り組みへの導入的な位置づけをさらに高めていく活動を行っていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

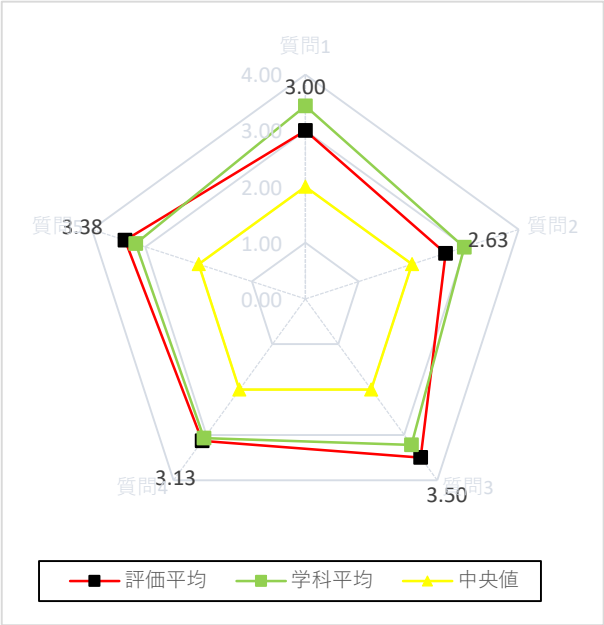
本授業は前期の卒業課題研究Ⅰに引き続き、表現フェスタ（実技発表会）に向けて劇中で使用する音楽20曲程度の合奏を仕上げ、ミュージカル全体として合わせ稽古を行いながら、舞台での発表に向かってチーム一丸となって準備を積み重ねる過程である。学生一人ひとりが自分の担当する楽器とその楽譜に向き合い技術を向上させながら、合奏としてまとめ、ミュージカルの伴奏として効果的であるように仕上げていく。そういった性質上、質問11の「教科書、資料」と呼べるものが楽譜以外にはない。また質問10の「視聴覚機器の活用や板書」についても本授業にはそぐわないものであるため評価が低くなっている。

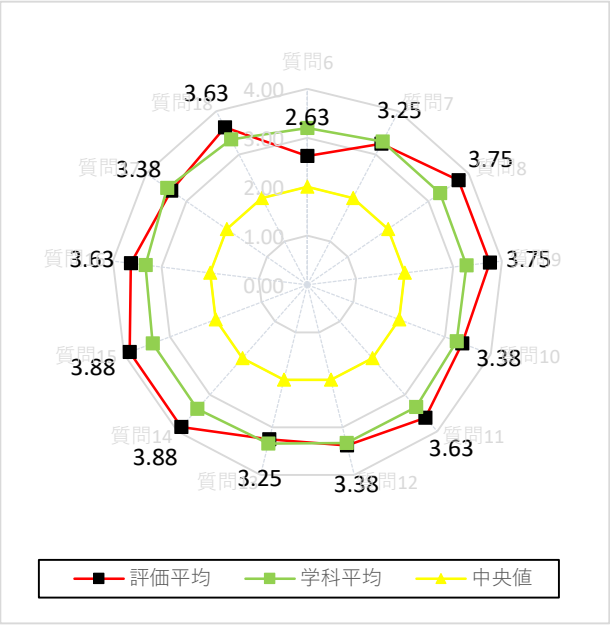
（３）次年度に向けての取り組み

表現フェスタまでの到達目標や毎回の計画はリーダーと一緒に立て明確な目標を提示できるようにする。「ミュージカルチーム」「ミュージカル器楽チーム」両チームの指導のバランスについては、現在の発表会のあり方が変わるか指導教員の増員がない限り、学生には大変申し訳ないが今のスタイルで行うしかなく、空き時間などに細やかに対応していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

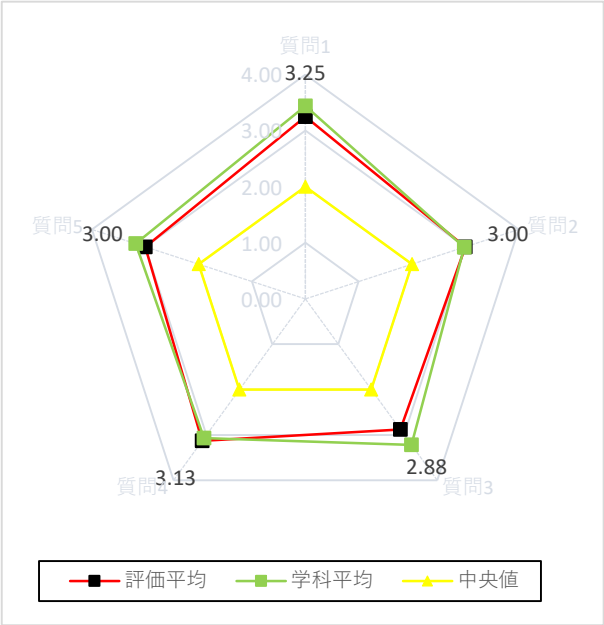
授業アンケート結果の分析・評価として、全体的の学科平均と同程度の評価を得ていた。その中でも、質問３「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問８「授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。」、質問９「授業は分かりやすくする工夫がされていましたか。」、質問１４「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」、質問１５「公平に学生に対応しましたか。」については平均よりも高い評価を得ているが、その一方で質問１「授業は何回欠席しましたか。」、質問２「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問６「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」については低い評価となっていた。これらの傾向は本科目の担当が初年度ということもあり、今後はこの結果を反映した授業計画の作成と学習内容と進度との関係性を見直す必要がある。

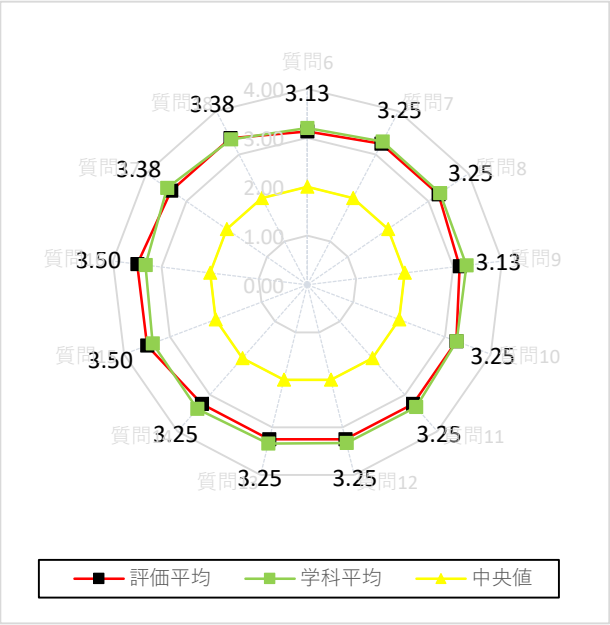
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、シラバスの内容の整理と配布資料など教材の見直し、さらには他の教員との比較を行うことで、特徴を活かした内容にすることが検討される。さらに、グループ活動におけるルールの設定と実践的な取り組みへの導入的な位置づけをさらに高めていく活動を行っていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

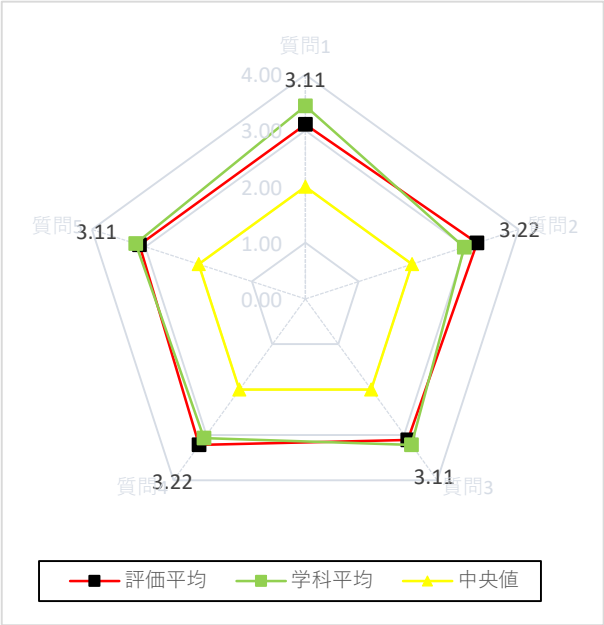
前期の卒業課題研究Ⅰと比較すると評価は平均値よりも下がっている。自由記述には「子どもとの関わりを通しての学びが参考になった。」「取り組みたいことを研究できた。」とあるものの、後半は論文としてまとめる作業が主となったことが影響した可能性がある。

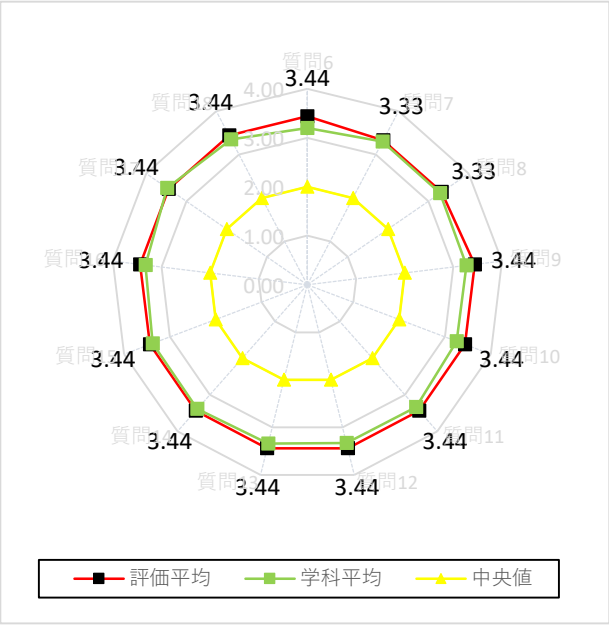
（３）次年度に向けての取り組み

発表会に向けた準備等を無理のない程度に進める必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

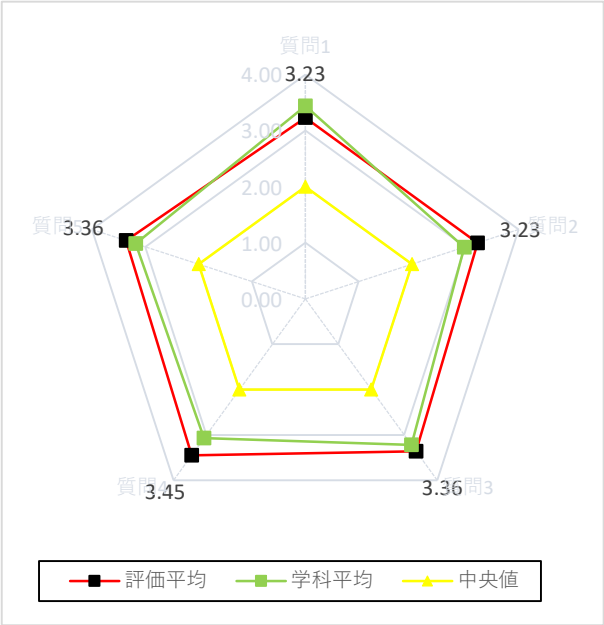
本科目では、前期開講の「卒業課題研究Ⅰ」で実践した取り組みの結果をまとめ、考察を深めていく作業を中心に行った。授業内容や方法に関する項目では、概ね学科平均と同程度の数値である。受講生が複数のグループに分かれ作業を進めていったため、受講生との個別的なやり取りの時間を確保することもできたが、一方で、全体での取り組みやディスカッションの機会は少なく、そのことが質問16の結果とも関連しているように思われる。

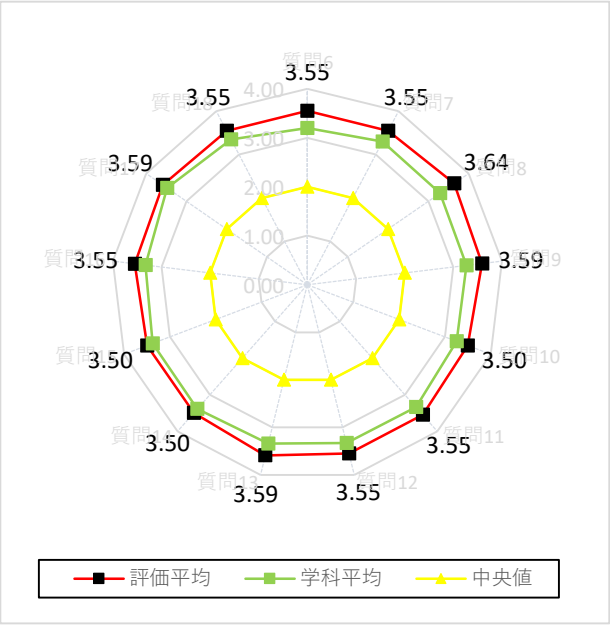
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の受講生の様子から、「卒業課題研究Ⅰ」（前期）での取り組みと夏の保育実践後に、学生はある程度の満足感や達成感を味わい、後期までモチベーションを保つことが難しいように感じられた。次年度は、1年間を通して興味・関心を持ちながら主体的に取り組めるような授業展開を工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	24名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

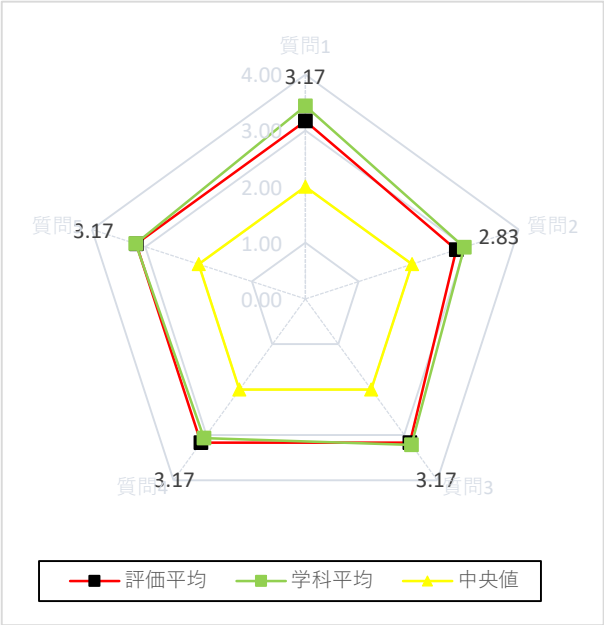
学生は12月の舞台発表で達成感を口に出して感動していたが、総合評価をみると前期とほぼ変わらない総合評価である。自分たちだけで創り上げた舞台という思い込みもあるのかと思われる評価である。しかし、それは、逆に表現に自信をもったと受け止められるのではないだろうか。

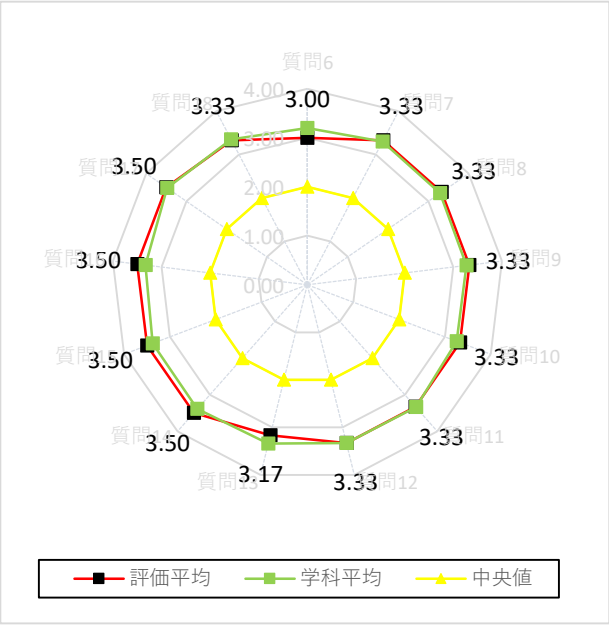
（３）次年度に向けての取り組み

演技、歌唱、ダンス、衣装、小道具、大道具の指導について、音楽教員、美術教員と更なる連携を取り、学生の表現力向上に尽力する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

1. 学生自身の授業参加度・総合評価（Q1～Q5）について
全体的に学科平均にくらべて、やや低い評価となっている。
前期にくらべやや欠席の傾向みられる。
前期にはさまざまな活動に取り組み、その中から研究テーマを絞ることができた。
後期は研究活動が中心となり、文献調査やインタビュー、それらの結果のまとめることが中心であった。
一つのテーマを11人で分担して取り組む過程で、個々人の責任の所在が薄れたことが、
欠席につながったのではないだろうか。

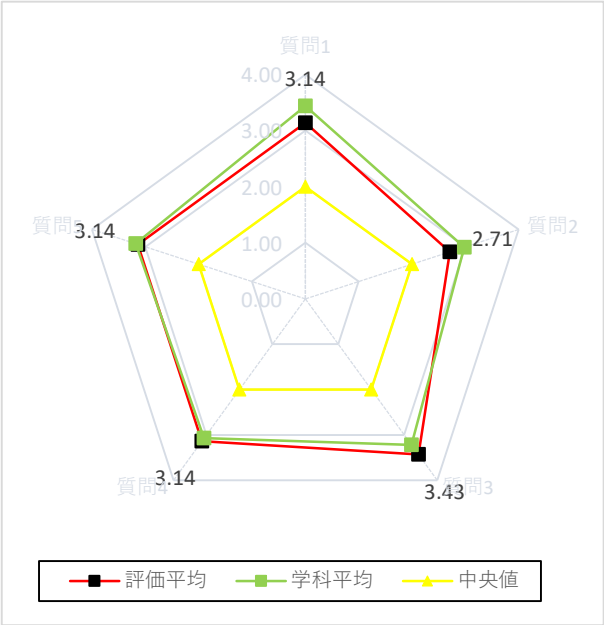
2. 授業内容・教授方法等（Q6～Q18）について
おおむね学科平均と同程度の評価結果となっている。
そのなかで、シラバス（授業計画）の説明と授業進度の適切性に関する項目の評価がやや低かった。
調査インタビューの計画と実施、その結果をまとめ、抄録原稿を作成する過程で、ゼミ活動の停滞がみられた。
これまで研究活動を経験したことない学生にとっては、かなり負担となるのだろう。
教員主導にならないよう配慮しながら、学生たちにもう少し詳細な活動計画の立案と
進捗管理を行うようサポートする必要がある。

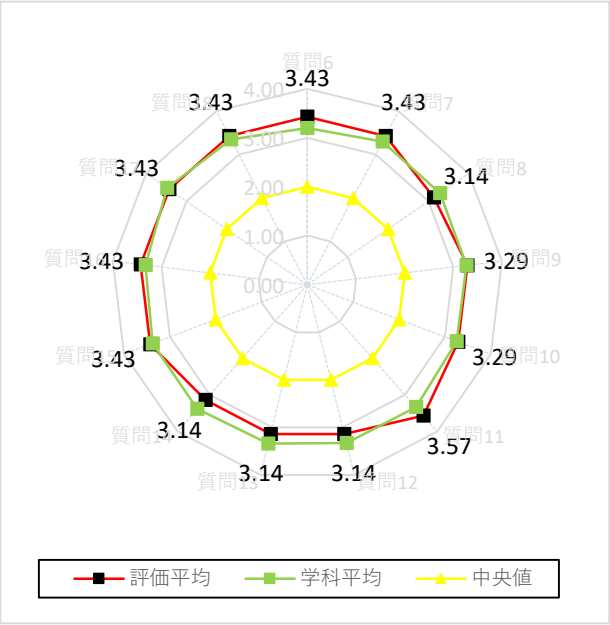
（３）次年度に向けての取り組み

前年度までは4人程度のグループごとにテーマを設定し研究活動を行ってきたが、
今年度は11人全員で1つのテーマに取り組むことにチャレンジした。
実際におこなってみて、やはり小グループを活用した研究活動の方が指導しやすいというのが実感である。
次年度は前年度までと同じスタイルで研究活動に取り組みたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		卒業課題研究Ⅱ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

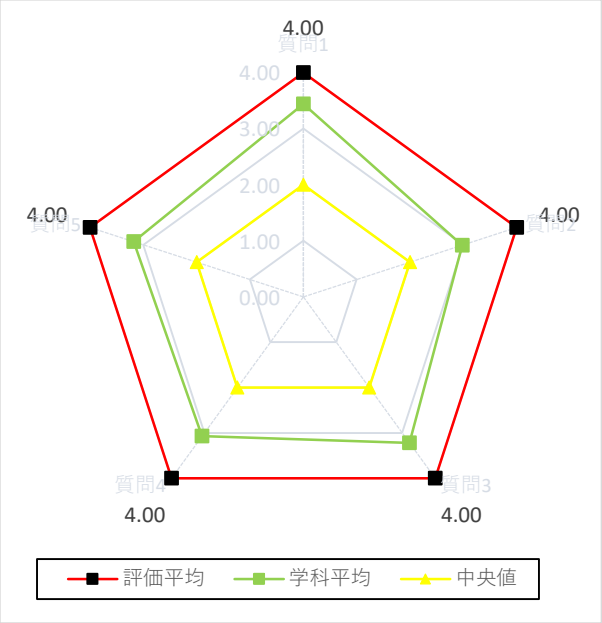
当該授業では、プロジェクト型学習を実施している。今年度は、学生のニーズに応じ、「習慣的な朝食摂取につながる保育教材の作成」を学習テーマに設定した。後期の授業では、絵本や文献を参考にしながら、保育現場における食育活動の推進に役立つような【あそびうた】を作成した。作詞、作曲、振付など、創造的な学修であり、苦労の多い作業が続いたため、学生の負担感も高かったと考えられる。学生のモチベーションと学修内容のバランスが上手く釣り合わなかった授業回もあったと思われるが、最終的には、学修成果の質は担保できていた。

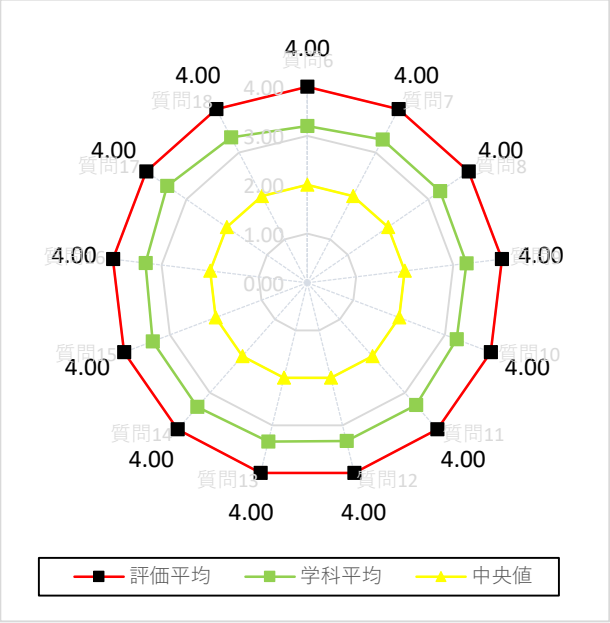
（３）次年度に向けての取り組み

学習テーマを設定する際は、2018年度と同様、学生のニーズを丁寧に聞き取りたい。また、各授業回の学修内容・方法については、学生の志向性や力量等に鑑みて柔軟に調整する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
短期大学部	幼児保育		子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）	1名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本科目は2019年度より正式に幼児保育学科の専門科目となる。そのために、受講生27名のうち1名のみが回答しているために、データとしての信頼性はない。

（３）次年度に向けての取り組み

2019年度からは正規の科目となるが、評価については、大学コンソーシアム佐賀が設定している評価観点にそって行う予定である。

平成30年度授業評価アンケートの総括

西九州大学短期大学部

平成30年度　前期・後期：全科目Web調査

質問事項

1	授業は何回欠席しましたか。 【評価4⇒0回、3⇒1回、2⇒2～3回、1⇒4回以上】
2	シラバス（授業計画）を活用しましたか。
3	授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。
4	あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。 【評価4⇒そう思う、3⇒だいたいそう思う、2⇒あまりそう思わない、1⇒そう思わない】
5	あなた自身の総合自己評価 【評価4⇒良い、3⇒やや良い、2⇒やや悪い、1⇒悪い】
6	シラバス（授業計画）について説明がありましたか。
7	教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。
8	授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。
9	授業は分かりやすくする工夫がされていましたか。
10	視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。
11	教科書・配布資料等は役に立ちましたか。
12	声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。
13	授業の進む速さは適切でしたか。 【評価4⇒十分、3⇒だいたい十分、2⇒やや不十分、1⇒不十分】
14	学生の質問等に誠実に対応しましたか。
15	公平に学生に対応しましたか。
16	教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。
17	教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。 【評価4⇒そう思う、3⇒だいたいそう思う、2⇒あまりそう思わない、1⇒そう思わない】
18	この授業を総合評価して下さい。 【評価4⇒良い、3⇒やや良い、2⇒やや悪い、1⇒悪い】

1～4	自身の振返り
5	総合自己評価
6～11	授業計画・教材・教授法・展開方法等
12～17	科目担当者のパフォーマンス
18	授業総合評価

平成30(2018)年度
時間割コード別 授業評価アンケート回答結果

学期	開講科目数	回答科目数	回答科目率	回答率(回答者数／履修者数)
前期(通年含む)	215	205	95.3%	78.0% (4,811/6,164)
後期	145	140	96.5%	79.8% (2,892/3,624)

※回答科目及び回答者数については、質問番号1の数値で算出

学生回答率（共通教育科目・学科専門科目別）※質問番号別評価平均値

平成30(2018)年度 前期

質問番号	共通教育科目		地域生活支援学科		幼児保育学科	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.59	0.72	3.47	0.77	3.66	0.65
2	3.04	0.86	3.18	0.75	3.28	0.78
3	3.28	0.7	3.29	0.69	3.39	0.64
4	3.15	0.74	3.25	0.7	3.38	0.64
5	3.23	0.59	3.25	0.61	3.36	0.59
6	3.24	0.83	3.35	0.7	3.49	0.69
7	3.35	0.72	3.4	0.66	3.53	0.59
8	3.36	0.73	3.37	0.69	3.5	0.62
9	3.34	0.74	3.39	0.69	3.5	0.62
10	3.31	0.76	3.42	0.66	3.5	0.63
11	3.44	0.68	3.43	0.69	3.53	0.6
12	3.39	0.74	3.44	0.66	3.49	0.65
13	3.4	0.7	3.41	0.66	3.44	0.67
14	3.47	0.71	3.49	0.65	3.59	0.57
15	3.45	0.74	3.46	0.65	3.58	0.59
16	3.39	0.72	3.44	0.65	3.56	0.59
17	3.57	0.62	3.52	0.62	3.63	0.55
18	3.39	0.67	3.4	0.64	3.5	0.59

2

学生回答率（共通教育科目・学科専門科目別）※質問番号別評価平均値

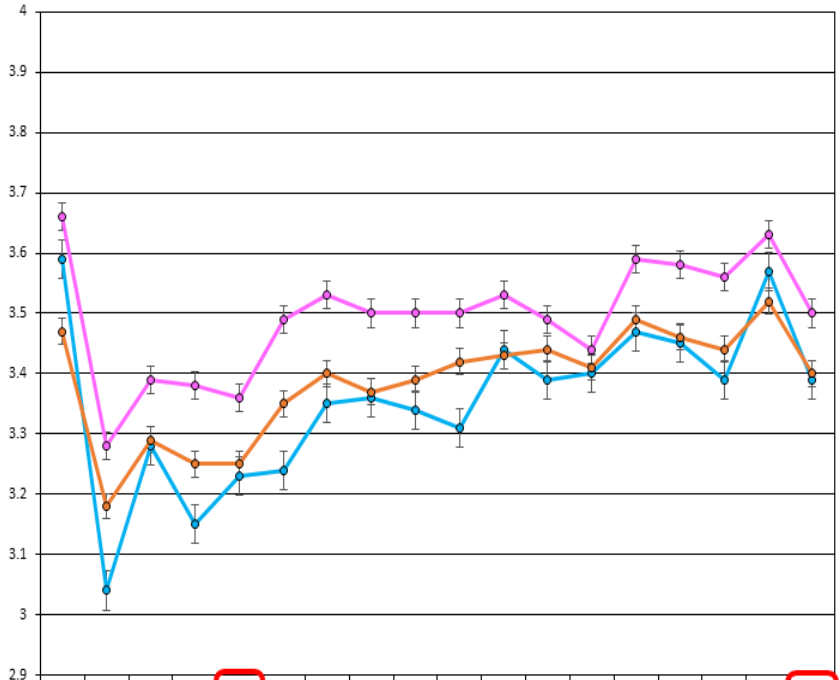
平成30(2018)年度 後期

質問番号	共通教育科目		地域生活支援学科		幼児保育学科	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.46	0.82	3.39	0.85	3.56	0.75
2	2.98	0.86	3.17	0.76	3.22	0.78
3	3.23	0.72	3.26	0.7	3.34	0.64
4	3.09	0.75	3.23	0.71	3.32	0.65
5	3.18	0.63	3.23	0.64	3.31	0.59
6	3.2	0.83	3.36	0.69	3.46	0.69
7	3.3	0.73	3.4	0.65	3.46	0.61
8	3.3	0.75	3.38	0.68	3.44	0.63
9	3.28	0.76	3.39	0.67	3.43	0.64
10	3.26	0.76	3.42	0.66	3.44	0.64
11	3.34	0.74	3.42	0.67	3.47	0.64
12	3.33	0.76	3.42	0.66	3.44	0.66
13	3.34	0.72	3.41	0.66	3.4	0.66
14	3.4	0.75	3.47	0.65	3.52	0.61
15	3.39	0.77	3.45	0.65	3.52	0.63
16	3.34	0.75	3.44	0.65	3.49	0.62
17	3.5	0.67	3.5	0.63	3.57	0.58
18	3.35	0.7	3.41	0.65	3.44	0.6

3

学生回答率（共通教育科目・学科専門科目別） ※質問項目別評価平均値

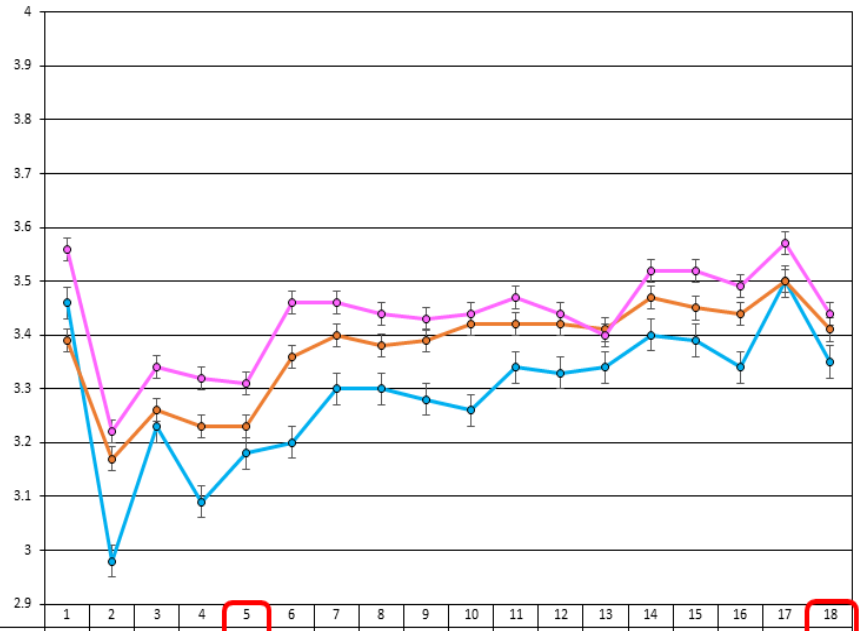
平成30(2018)年度前期



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
共通教育科目 平均値	3.59	3.04	3.28	3.15	3.23	3.24	3.35	3.36	3.34	3.31	3.44	3.39	3.4	3.47	3.45	3.39	3.57	3.39
地域生活支援学科 平均値	3.47	3.18	3.29	3.25	3.25	3.35	3.4	3.37	3.39	3.42	3.43	3.44	3.41	3.49	3.46	3.44	3.52	3.4
幼児保育学科 平均値	3.66	3.28	3.39	3.38	3.36	3.49	3.53	3.5	3.5	3.5	3.53	3.49	3.44	3.59	3.58	3.56	3.63	3.5

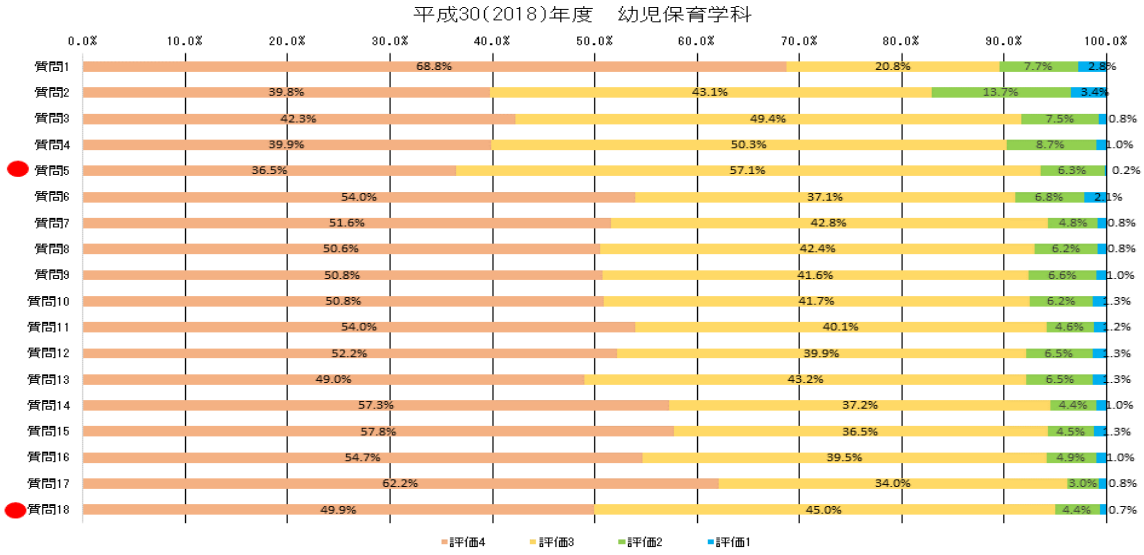
学生回答率（共通教育科目・学科専門科目別） ※質問項目別評価平均値

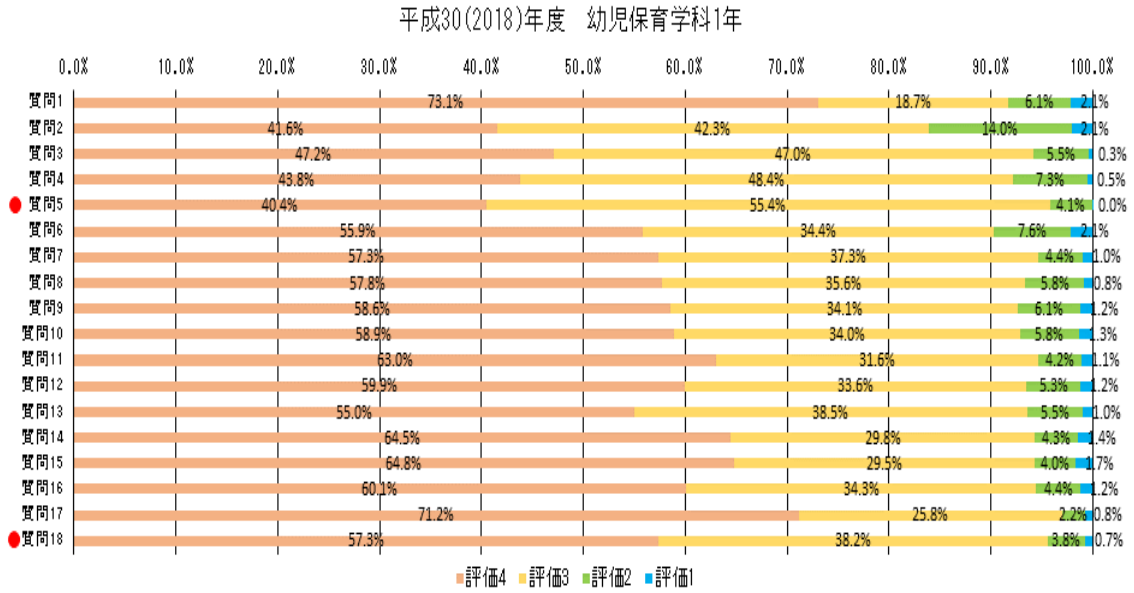
平成30(2018)年度後期

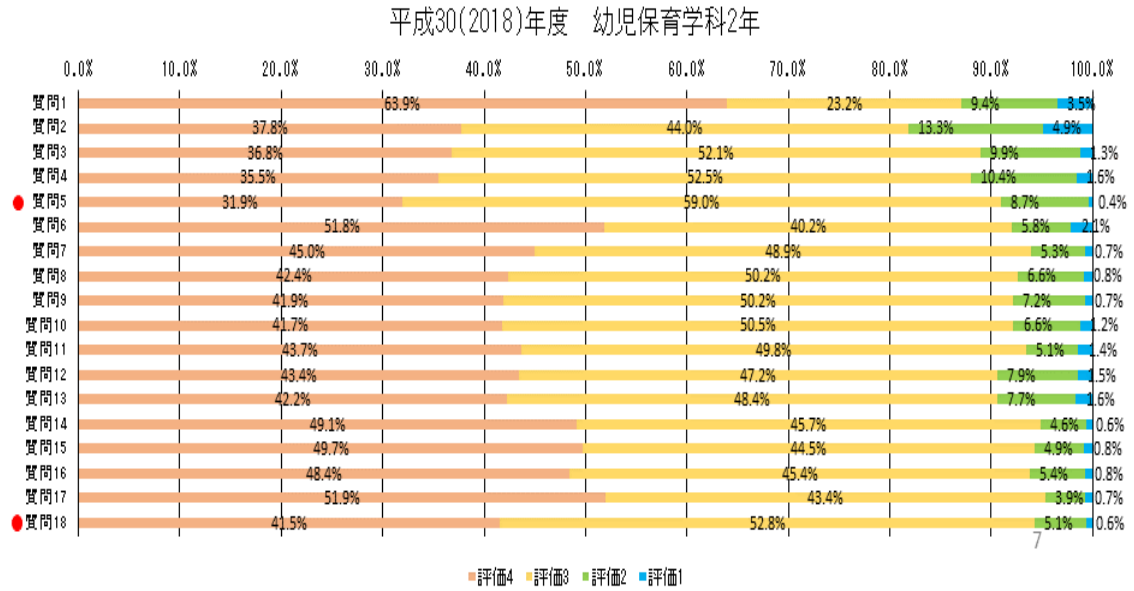


	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
共通教育科目 平均値	3.46	2.98	3.23	3.09	3.18	3.2	3.3	3.3	3.28	3.26	3.34	3.33	3.34	3.4	3.39	3.34	3.5	3.35
地域生活支援学科 平均値	3.39	3.17	3.26	3.23	3.23	3.36	3.4	3.38	3.39	3.42	3.42	3.42	3.41	3.47	3.45	3.44	3.5	3.41
幼児保育学科 平均値	3.56	3.22	3.34	3.32	3.31	3.46	3.46	3.44	3.43	3.44	3.47	3.44	3.4	3.52	3.52	3.49	3.57	3.44

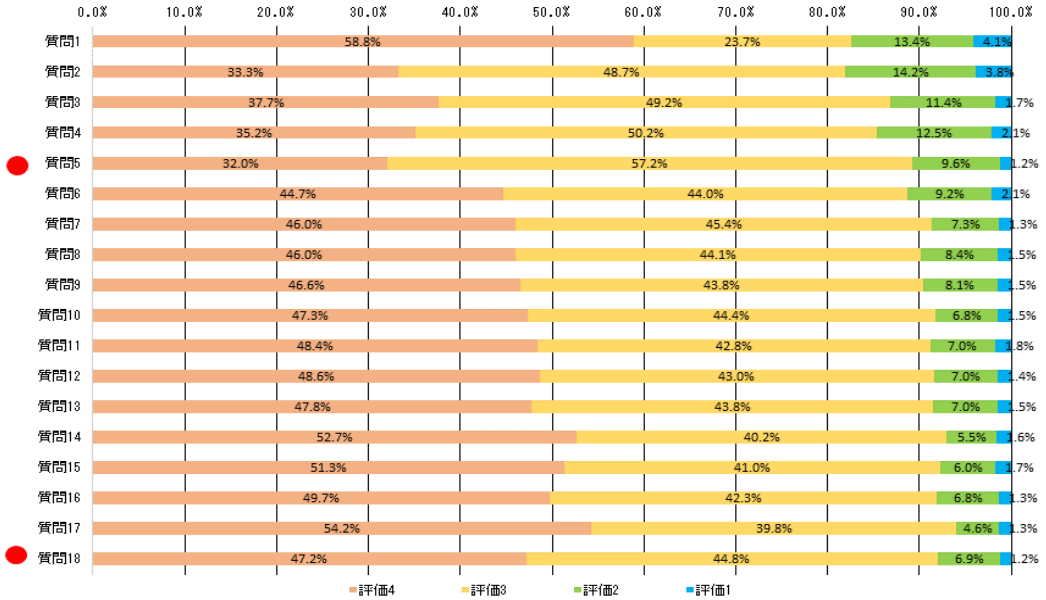
学科別　学生回答率平均（共通教育科目含）





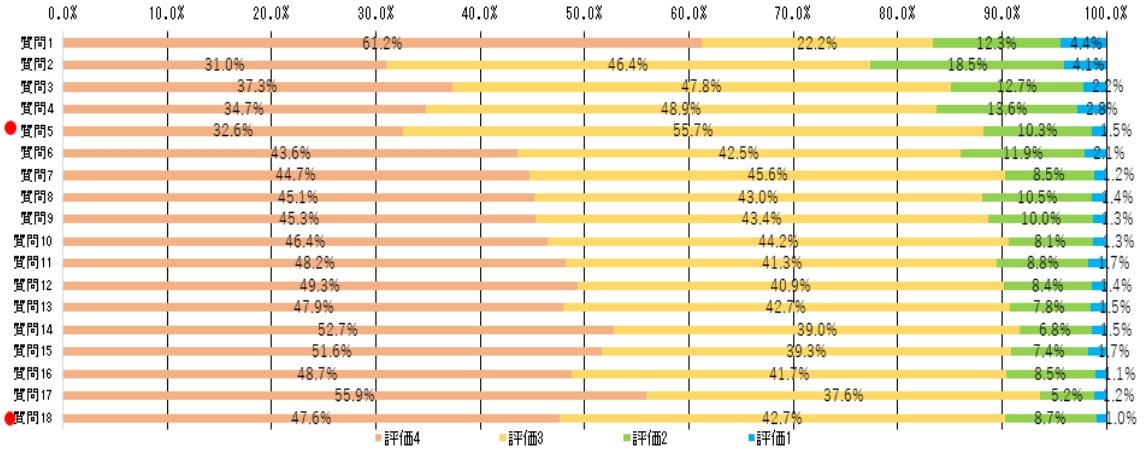


平成30(2018)年度　地域生活支援学科

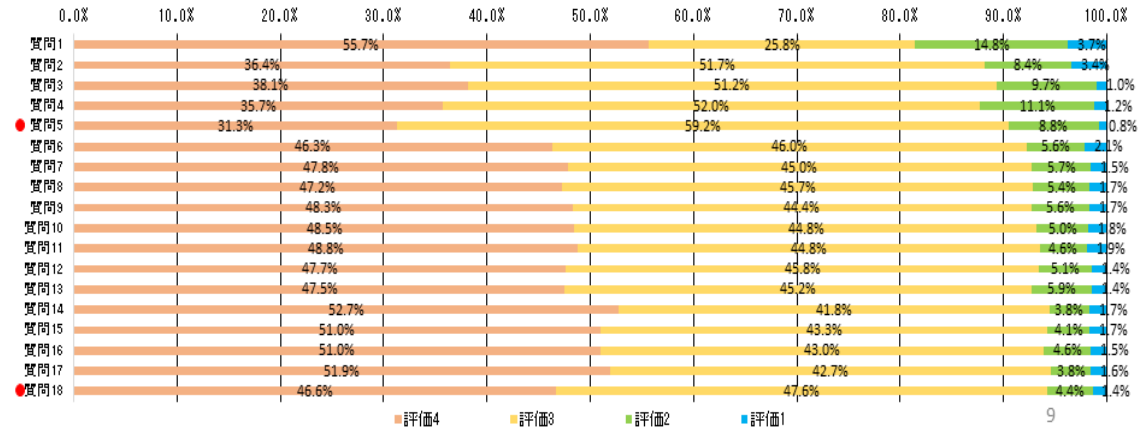


8

平成30(2018)年度　地域生活支援学科1年

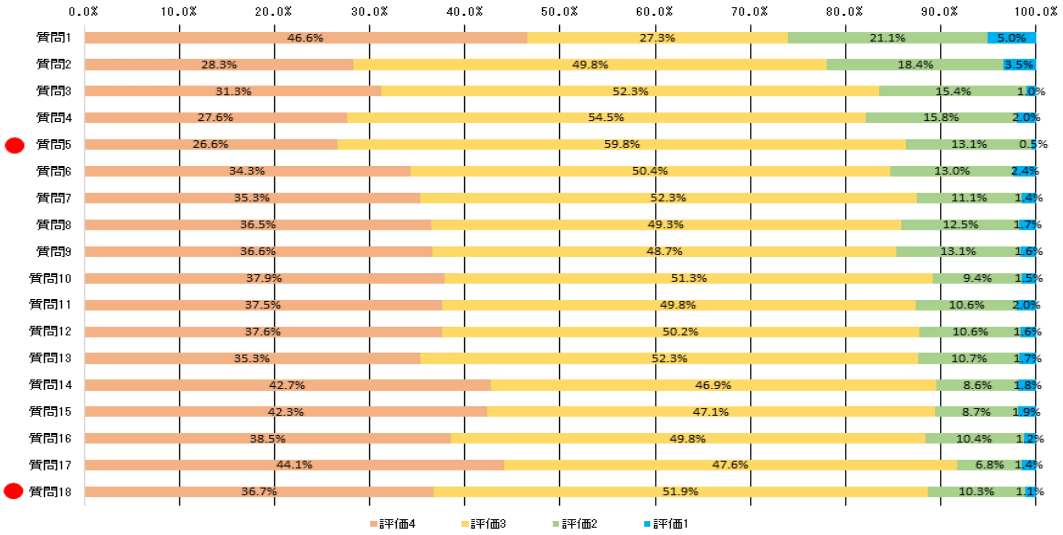


平成30(2018)年度　地域生活支援学科2年



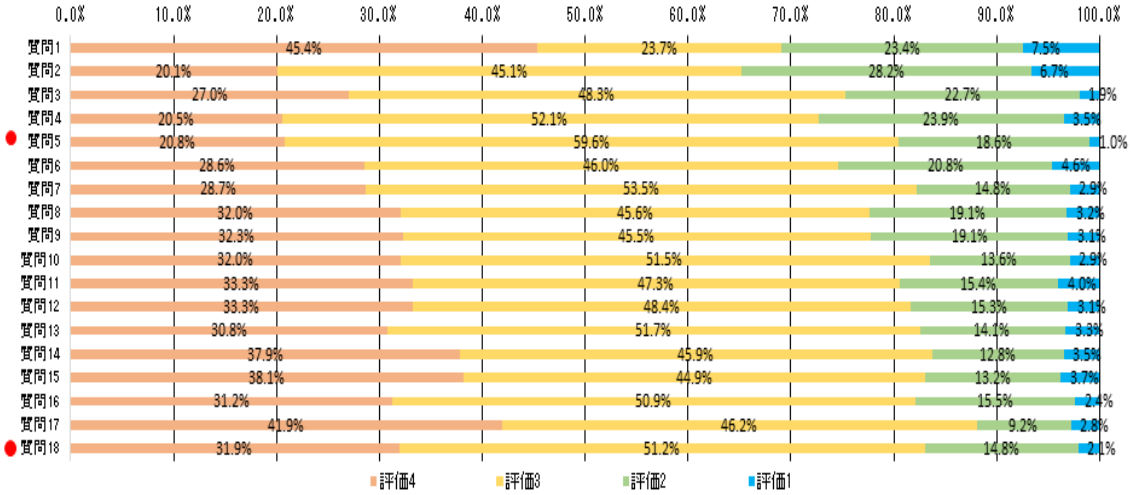
9

平成30(2018)年度　地域生活支援学科　食生活支援コース

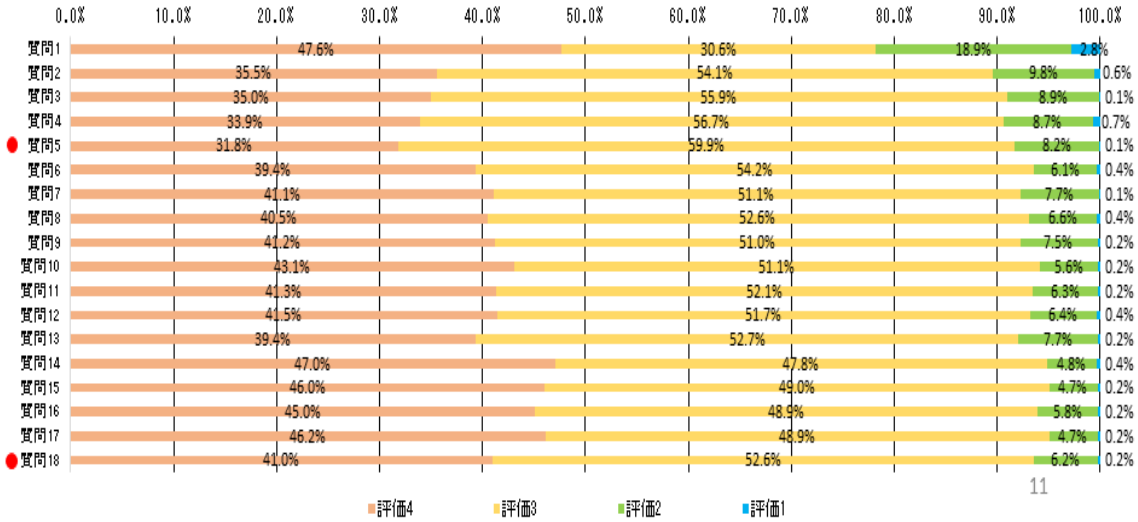


10

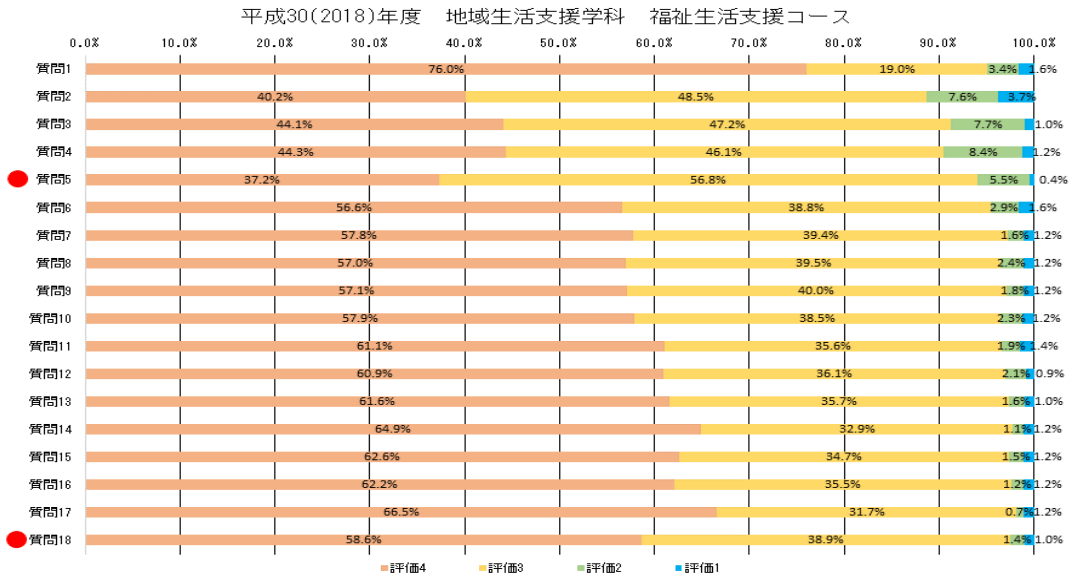
平成30(2018)年度　地域生活支援学科　食生活支援コース1年

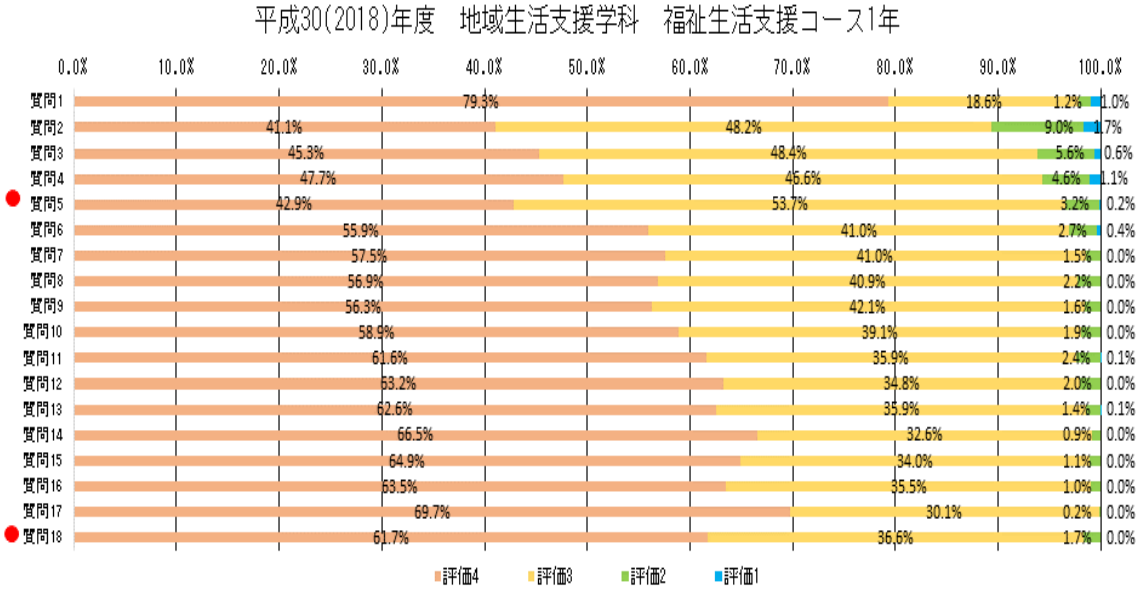


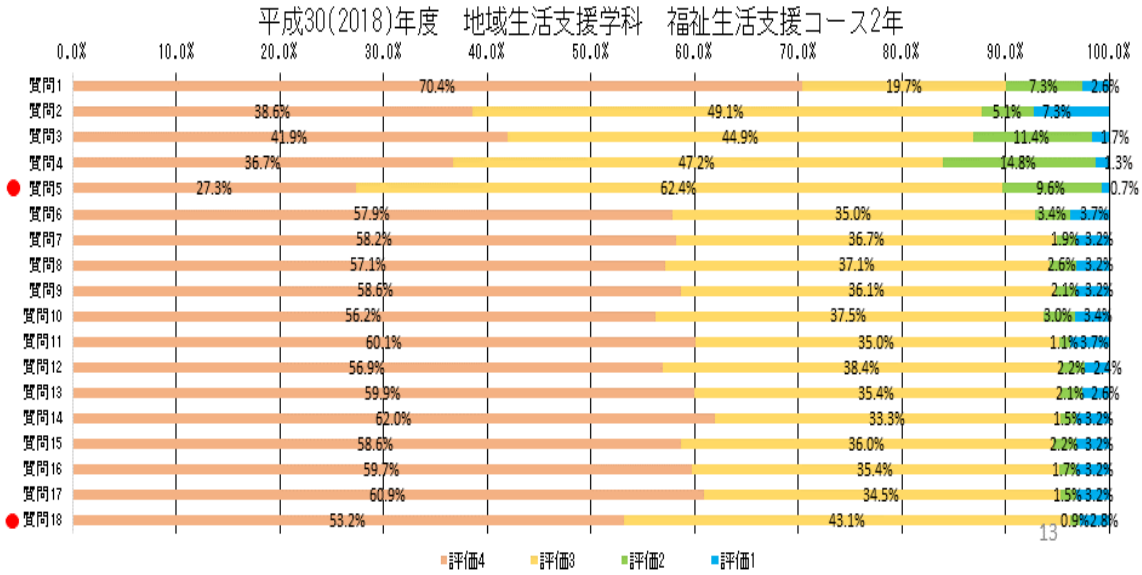
平成30(2018)年度　地域生活支援学科　食生活支援コース2年



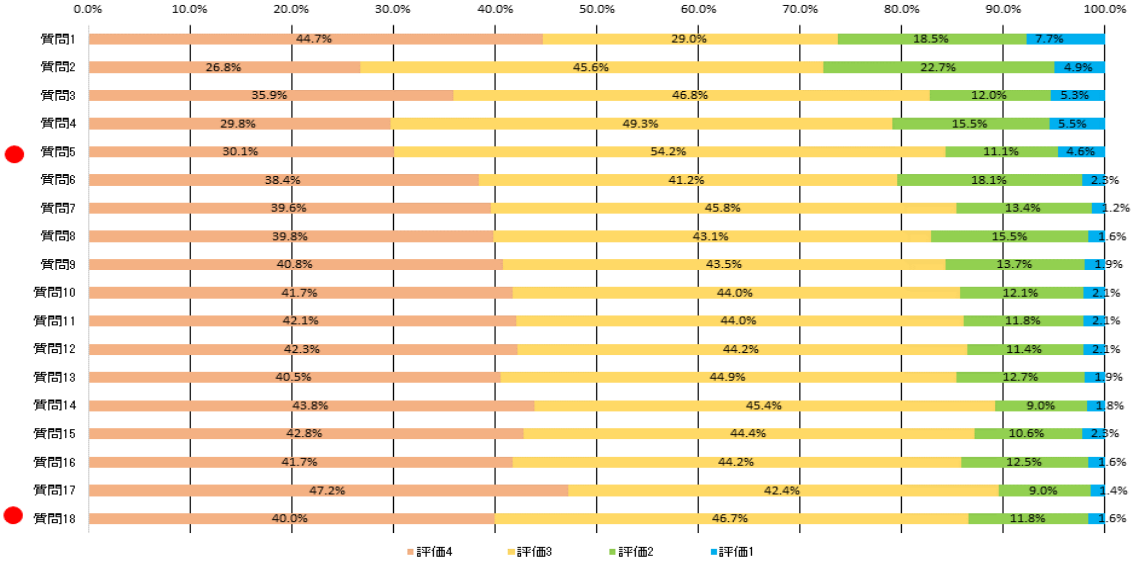
11


平成30(2018)年度　地域生活支援学科　福祉生活支援コース
0.0% 10.0% 20.0% 30.0% 40.0% 50.0% 60.0% 70.0% 80.0% 90.0% 100.0%
質問1 76.0% 19.0% 3.4% 1.6%
質問2 40.2% 48.5% 7.6% 3.7%
質問3 44.1% 47.2% 7.7% 1.0%
質問4 44.3% 46.1% 8.4% 1.2%
質問5 37.2% 56.8% 5.5% 0.4%
質問6 56.6% 38.8% 2.9% 1.6%
質問7 57.8% 39.4% 1.6% 1.2%
質問8 57.0% 39.5% 2.4% 1.2%
質問9 57.1% 40.0% 1.8% 1.2%
質問10 57.9% 38.5% 2.3% 1.2%
質問11 61.1% 35.6% 1.9% 1.4%
質問12 60.9% 36.1% 2.1% 0.9%
質問13 61.6% 35.7% 1.6% 1.0%
質問14 64.9% 32.9% 1.1% 1.2%
質問15 62.6% 34.7% 1.5% 1.2%
質問16 62.2% 35.5% 1.2% 1.2%
質問17 66.5% 31.7% 0.7% 1.2%
質問18 58.6% 38.9% 1.4% 1.0%
評価4 評価3 評価2 評価1
12

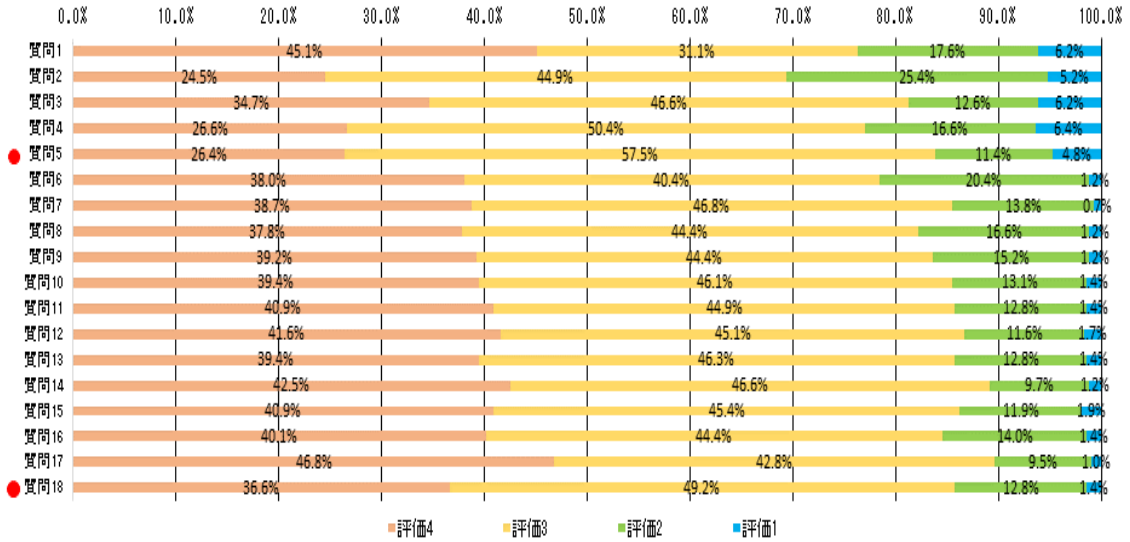

平成30(2018)年度　地域生活支援学科　福祉生活支援コース1年
0.0% 10.0% 20.0% 30.0% 40.0% 50.0% 60.0% 70.0% 80.0% 90.0% 100.0%
質問1 79.3% 18.6% 1.2% 1.0%
質問2 41.1% 48.2% 9.0% 1.7%
質問3 45.3% 48.4% 5.6% 0.6%
質問4 47.7% 45.6% 4.6% 1.1%
質問5 42.9% 53.7% 3.2% 0.2%
質問6 55.9% 41.0% 2.7% 0.4%
質問7 57.5% 41.0% 1.5% 0.0%
質問8 56.9% 40.9% 2.2% 0.0%
質問9 56.3% 42.1% 1.6% 0.0%
質問10 58.5% 39.1% 1.9% 0.0%
質問11 61.6% 35.9% 2.4% 0.1%
質問12 63.2% 34.8% 2.0% 0.0%
質問13 62.6% 35.9% 1.4% 0.1%
質問14 66.5% 32.6% 0.9% 0.0%
質問15 64.9% 34.0% 1.1% 0.0%
質問16 63.5% 35.5% 1.0% 0.0%
質問17 69.7% 30.1% 0.2% 0.0%
質問18 61.7% 36.6% 1.7% 0.0%
評価4 評価3 評価2 評価1


平成30(2018)年度　地域生活支援学科　福祉生活支援コース2年
0.0% 10.0% 20.0% 30.0% 40.0% 50.0% 60.0% 70.0% 80.0% 90.0% 100.0%
質問1 70.4% 19.7% 7.3% 2.6%
質問2 38.6% 49.1% 5.1% 7.3%
質問3 41.9% 44.9% 11.4% 1.7%
質問4 36.7% 47.2% 14.8% 1.3%
質問5 27.3% 62.4% 9.6% 0.7%
質問6 57.9% 35.0% 3.4% 3.7%
質問7 58.2% 36.7% 1.9% 3.2%
質問8 57.1% 37.1% 2.6% 3.2%
質問9 58.6% 36.1% 2.1% 3.2%
質問10 56.2% 37.5% 3.0% 3.4%
質問11 60.1% 35.0% 1.1% 3.7%
質問12 56.9% 38.4% 2.2% 2.4%
質問13 59.9% 35.4% 2.1% 2.6%
質問14 62.0% 33.3% 1.5% 3.2%
質問15 58.6% 36.0% 2.2% 3.2%
質問16 59.7% 35.4% 1.7% 3.2%
質問17 60.9% 34.5% 1.5% 3.2%
質問18 53.2% 43.1% 0.9% 2.8%
13
評価4 評価3 評価2 評価1

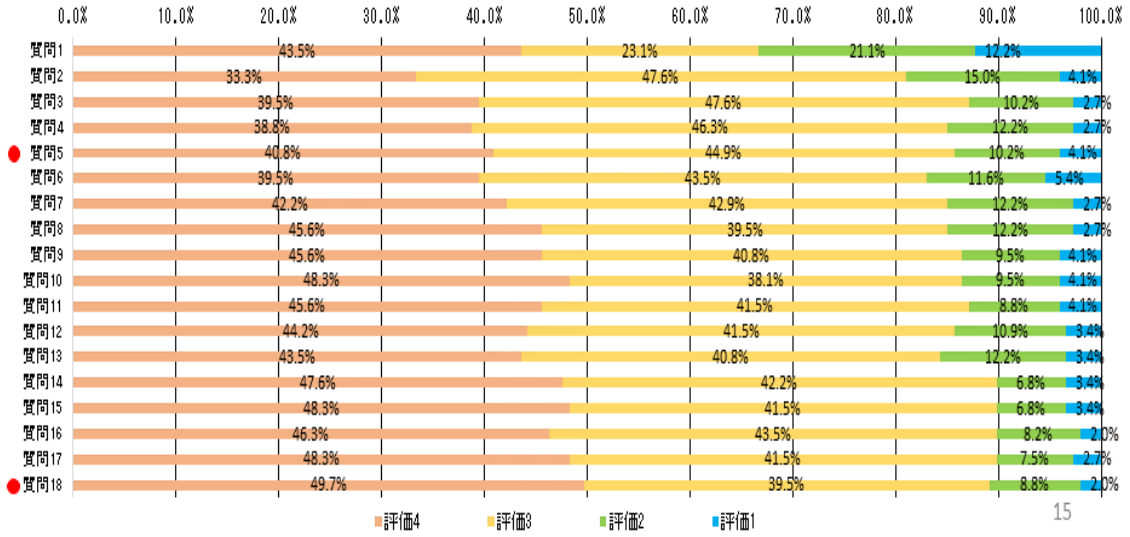
平成30(2018)年度　地域生活支援学科　多文化生活支援コース



平成30(2018)年度　地域生活支援学科　多文化生活支援コース1年



平成30(2018)年度　地域生活支援学科　多文化生活支援コース2年



地域生活支援学科　授業評価結果の分析と評価

【評価・成果等】

・総じて、自身の評価、授業の評価いずれも評価平均は3以上あって、授業が学生の学習状況に配慮して実施されているものと判断される。一方で、幼児保育学科との比較においては、いずれも評価平均は下回っており、否定的な評価を与えている。自身の総合評価は、授業の総合評価よりも低いことから、学習に対する意欲が低いことが考えられる。

【課題・問題点等】

・学習意欲の向上には、教員の授業外での関与が大きな影響を与えることが知れられている。学習意欲を高めるために、各教員の空き時間やオフィスアワーを如何に活用するか、そしてそれを組織的に運用するかが課題と言える。

【今後実行可能な改善事項等】

・教員一同の認識のもとで、授業での学習の取組み意欲を駆り立てるような内容や教材、学習方法を取り入れる工夫をする。
・クラスミーティングなどの授業外活動で、担任教員だけでなく教職員からの指導を充足させていく。

食生活支援コース　授業評価結果の分析と評価

【評価・成果等】

平成30年度の授業評価は概ね良好であった。2年次と1年次を比較すると2年次の方が授業のあり方を理解しておりシラバスの有効的活用とともに授業理解のための工夫がなされていた。授業の総合評価も2年次が高い値であった。一方授業の欠席状況は2回以上が1年次約31％、2年次約22％見受けられた。

【課題・問題点等】

課題・問題点として1年次の約35％が十分なシラバスの活用ができておらず、授業に大きく影響を及ぼすことが懸念される。また、欠席回数は2回以上が2年生で約22％、1年次生で約26％おり欠席理由を究明し改善策を講じる必要がある。

【今後実行可能な改善事項等】

今後はシラバスの活用率を高め、予習・復習を習慣化させ学力向上を図る。授業欠席者と学力不足の学生についてはコース会議等で個々人の情報を共有し学習能力にあわせて個別に対応し授業出席とあわせて参加度も高め、学力向上に繋がるように支援していく。

福祉生活支援コース　授業評価結果の分析と評価

【評価・成果等】

平成30年度の授業評価は、1年生、2年生ともに、他の学科・コースと比べほぼすべての項目において評価が高く、特に2年生においては他の学科、コースと比べて評価4をつけている率は10％ほど上まっている。その中で評価4が少ないのは、質問2の学生自身のシラバスの活用、学生自身の自己評価である。今まで極端に低かったシラバスについての説明は、他とさほど変わらない状況になっている。2年生に、評価1の学生が各項目に存在する。この内容を分析していく必要がある。

【課題・問題点等】

シラバスを、学生が活用しやすいものにしていく必要がある。また、学生自身が授業に向けて頑張ったととらえることができるような教育の方法について検討する必要がある。評価1が存在することに関して、内容を分析していく必要がある。

【今後実行可能な改善事項等】

ホームカミングデイで授業について再度アンケートを取ってみる。
留学生には個別対応を増やし、授業での留学生の影響を減らす。授業はできるだけ標準語を使う。資料は今まで以上に書き込めるスペースを取る。
授業の最初に、語句の説明等を増やし、理解につなげる。
シラバスについて他の学科、コース、学校の内容を参考に学生が活用できるものに変えていく

多文化生活支援コース　授業評価結果の分析と評価

【評価・成果等】

全体評価として、概ね良好な結果である。
学生自身の取り組みについては、総合評価は、肯定評価84.3%と高かった。学年別で1年生 83.9%、2年生85.7%となり、2年生の自己評価がやや高い結果となった。
授業の総合評価は、肯定評価86.7%と高かった。学年別で1年生85.8%、2年生89.2%となり、2年生の評価がより高い結果となった。これは、コースカリキュラムにおいて2年次に専門科目が展開され、学生の授業への関心度が高まったことが一つの要因と考えている。

【課題・問題点等】

H31 (R01)年度入学生よりコースカリキュラムの変更を行い、専門科目を1年次より順次展開するよう工夫を行った。しかし、コース横断科目、コース外科目など他コースとの共通授業の展開、非常勤講師の授業時間の調整などの関係上、時間割のバランスが不均衡である。特に2年生の実際の時間割は極端にバランスが悪い。この状況は、学生の学びにも影響すると考えらえる。今後の授業評価の結果を参考に改善を図る必要がある。

【今後実行可能な改善事項等】

時間割のバランス化を図る。
空きゴマを利用した学びの強化
（日本人学生、留学生のキャリア教育と語学教育などの補習授業の展開などを検討する。）
学生の学びの状況を考慮した特色あるカリキュラムの更なる検討。

幼児保育学科　授業評価結果の分析と評価

【評価・成果等】

・前後期ともにおおむね良好な結果となっている。
・学生自身の取り組みについては、前期にくらべ、後期のほうが高い評価となっている。
・教員の授業方法等についても、前期にくらべ、後期のほうが高い評価となっている。とくに、学生対応の誠実さ・公平さ、双方的な授業方法、教員の熱意は、共通教育科目および地域生活支援学科にくらべて、高い評価を得ている。

【課題・問題点等】

・教職課程ならび保育士養成課程の改正にともない、次年度より新設科目が配置され、既存科目においても教授内容が一部変更となる。国の示したガイドライン等に従い、教授内容やその方法を見直していくことが必要である。

【今後実行可能な改善事項等】

・教職課程および保育士養成課程の変更申請を済ませているが、各授業担当者において教職課程コアカリキュラム、指定保育士養成施設の指定及び運営の基準にもとづいた授業内容になっているかを点検をする。
・学生対応の誠実さ・公平さ、双方的な授業方法など、学生から高い評価を得ている項目を学科の強みにしていけるようFD活動をおこなっていく。

編集者一覧

平成30年度　FD委員会

地域生活支援学科・教務部副部長	平田　孝治	教授
地域生活支援学科・副学長	西河　貞捷	教授
地域生活支援学科・学科長	桑原　雅臣	教授
幼児保育学科・学科長	米倉　慶子	教授
地域生活支援学科	吉村　浩美	准教授
幼児保育学科	春原　淑雄	講師
事務局・次長	大石　妙子	

平成30年度　FD専門委員会

地域生活支援学科・教務部副部長	平田　孝治	教授
地域生活支援学科	田中　知恵	准教授
地域生活支援学科	吉村　浩美	准教授
幼児保育学科	牛丸　和人	教授
幼児保育学科	春原　淑雄	講師

西九州大学短期大学部
平成30年度　学生による授業改善のための授業評価結果に関する報告書

編集日　令和元年8月23日（金）
編集・発行
西九州大学短期大学部
〒　840-0806　佐賀県佐賀市神園三丁目18-15
電話　0952-31-3001
FAX　0952-31-3003
URL　https://www.nisikyu-u.ac.jp/junior_college/